東京地學協會藏書

915

中支那及南支那

福建省厦門全景及閩浙沿岸の地形

厦門内港の水道　共同租界　鼓浪嶼　厦門島　日本租界選定地　厦門内港　厦門市街　厦門稅關　厦門内港　鼓浪嶼共同租界

湖北省武漢全景及湖廣低地の地形

武昌城　蛇山　揚子江　黃鶴樓　晴川閣　大別山　郭鄭湖　揚子江　沙後湖　漢陽城外の市街　天興洲　揚子江　漢江　漢口市街　磨湖　後湖　漢江　漢江　漢江畔の民船　漢陽製鐵所

支那ハ疆域本邦ニ隣接シテ地學上最モ重要ナル關係ヲ有シ之カ研究ノ忽ニスヘカラサル論ヲ俟タス本會ハ明治四十三年以降或ハ專門ノ學士ヲ特派シ或ハ之ヲ囑托シテ其調査ニ從事シ曩ニ大正二年揚子江流域ヲ公ニシタリ爾後理學士野田勢次郎氏ヲ派遣シテ調査ニ從事セシメ大正四年該調査ヲ終ヘ今ヤ其結果ニ基ケル中支那及南支那ノ稿成ルヲ告ク卽チ茲ニ之ヲ刊行シテ世ニ公ニス固ヨリ誤謬遺漏ナキヲ

保セスト雖モ揚子江流域ト相俟チテ支那ニ於ケル地學研究ノ階梯タルヲ得ハ獨リ本會ノ幸ノミニアラサルヘシ一言以テ序トナス

東京地學協會

會長侯爵　鍋島直大

中支那及南支那　目次

頁數

第一章　位置及區劃……一

一　位置……一

二　地理的區劃……二

三　行政區劃……三

第二章　地形……二九

一　山系……三〇

(甲)　印度支那山系……三〇

(乙)　西部高原地帶……三一

(イ)　秦嶺山脈……三一

(ロ)　漢中盆地……三二

(ハ)　大巴山脈……三三

(ニ)　楚西山地……三四

(ホ)　巴蜀盆地……三四

（ハ）雲貴高原及桂湘山地……三七
（丙）中央地溝帶……三八
（イ）湖廣低地……三八
（ロ）瀟湘溪谷……三九
（丁）東部地壘帶……四一
（イ）淮山脈……四一
（ロ）贛西山地……四二
（ハ）五嶺山地……四三
（戊）沿海山地帶……四五
（イ）閩浙山地……四六
（ロ）江東山地……四八
（ハ）皖南低地……五〇
（ニ）吳平野……五〇
二　水系……五〇
（甲）河流……五一
（一）揚子江水系……五一

(イ) 源流及上流……五一
(ロ) 中流……五五
(ハ) 下流……六三
(二) 閩浙水系……六八
(イ) 錢塘江……六八
(ロ) 甌江……七〇
(ハ) 其他の浙江諸水……七〇
(ニ) 閩江……七一
(ホ) 韓江……七二
(ヘ) 其他の福建諸水……七三
(三) 嶺南水系……七三
(イ) 西江……七三
(ロ) 北江……七六
(ハ) 東江……七八
(ニ) 其他の嶺南諸水……七九
附 淮河……七九

(乙) 湖沼……八〇
(丙) 海岸及島嶼……八四
第三章　氣候……九三
一　氣溫雨量及風位……九三
二　雨期及增水期……九九
三　支那海の颱風……一〇七
第四章　住民……一〇九
一　住民の分布……一〇九
(一) 蠻族……一〇九
(二) 漢族……一一三
(三) 滿族……一一四
(四) 外國人……一一五
(五) 支那移民即ち華僑……一二二
(六) 渡航地に於ける支那移民……一二五
二　地方語及風俗……一三一

(一) 地方語……一三一
(二) 風俗……一三七
(イ) 服裝……一三七
(ロ) 結髮及纏足……一四一
(ハ) 食……一四五
(ニ) 住居……一四八
(ホ) 械鬪及匪徒……一五〇
第五章 人口及都邑……一五八
一 人口の密度及其密集地……一五八
二 都邑……一六三
(一) 城所在地即ち城邑……一六三
(二) 城所在地以外の都邑……一七〇
(三) 重要都邑の分布……一七三
(A) 揚子江上流地及貴州雲南省の都邑……一七三
(B) 揚子江中流地の都邑……一七六

(C) 揚子江下流地の都邑……一八〇
(D) 錢塘江流域の都邑……一八三
(E) 閩浙の都邑……一八四
(F) 嶺南の都邑……一八八

第六章　交　通……一九二

一　陸路……一九二
(一) 官路……一九二
(二) 大路……一九七
(三) 陸路の設備……二〇八
(四) 陸路の交通機關……二一一
二　鐵道……二一二
(一) 南北幹線……二一三
(二) 東西幹線……二一九
(三) 支線及其他の鐵道線……二二二
三　水路……二二八

(一) 大汽船航路……二二九
(二) 小蒸氣船航路……二四〇
(三) 民船航路……二五六

第七章 產 業……二七二

一 商業……二七二
(甲) 內地商業……二七二
(乙) 外國貿易……二七八
(一) 海上貿易……二七八
(イ) 開港場……二八〇
(ロ) 海關……二八〇
(ハ) 外國貿易の變遷……二八二
(ニ) 重要輸入品……二八四
(ホ) 重要輸出品……二八六
(ヘ) 開港場に於ける貿易額……二八八
(ト) 外國との貿易關係……二九七

(二) 陸路貿易……二〇〇
二　通貨……二〇一
(一) 通貨の種類……二〇三
(イ) 銅錢……二〇三
(ロ) 銅元……二〇四
(ハ) 銀兩……二〇四
(ニ) 銀元……二〇七
(ホ) 小洋……二〇八
(ヘ) 兌換券……二〇九
(二) 金融機關……二一〇
(イ) 支那從來の金融機關……二一〇
(ロ) 外國銀行……二一二
(三) 通貨の流布區域……二一三
三　農業……二一一
(甲) 食料品……二一一
(一) 米……二一一

(二) 麥類及麥……三二六
(三) 荳類……三二七
(乙) 嗜好品……三二八
(一) 茶……三二八
(二) 煙草……三三七
(三) 砂糖……三四〇
(四) 果實及西瓜子……三四二
(丙) 工業用原料品……三四四
(一) 棉花……三四四
(二) 蘇……三四六
(三) 繭絲……三四九
(丁) 搾油用農產物……三五四
(一) 落花生……三五四
(二) 芝蘇……三五五
(三) 菜種……三五五
(四) 茶油……三五六

(五) 桐油……二五七
(六) 樹蠟……二五七
(七) 漆及漆油……二五八
(四) 林業……二五九
(一) 木材……二五九
(二) 竹……二六二
(三) 棹樹……二六三
(五) 畜産業……二六四
(六) 水産業……二六七
(一) 漁業……二六八
(二) 製鹽業……二七〇
(七) 工業……二七三
(一) 上海の工業……二七四
(二) 武漢の工業……二七七
(三) 香港の工業……二八〇
(四) 廣東の工業……二八三
(五) 主要の工業……二八五

(イ) 機業……三八五
(ロ) 製粉業……三八六
(ハ) 茶、煙草及砂糖業……三八七
(ニ) 搾油業……三八七
(ホ) 燐寸、製紙硝子業……三八八
(ヘ) 船渠業……三八八
(ト) 電氣業……三八八
(チ) 窯業……三九二
八 鑛業……三九七
(甲) 石炭……四〇〇
(イ) 石炭の分布……四〇〇
(ロ) 石炭の需用供給……四〇四
(ハ) 產出額及消費額……四〇八
(乙) 鐵鑛……四一五
(イ) 鐵鑛の分布……四一五
(ロ) 鐵鑛の種類……四一六
(ハ) 鐵の需用供給……四一六

(丙) 錻鑛……四一九
(イ) 錻鑛の分布……四一九
(ロ) 錻鑛床の種類……四一九
(ハ) 錻の需用供給……四二〇
(丁) 錫鑛……四二六
(イ) 錫鑛の分布……四二六
(ロ) 錫鑛床の種類……四二六
(ハ) 錫の需用供給……四二七
(戊) 其他の金屬鑛物……四三三
(一) 金鑛……四三三
(二) 銀、鉛、亞鉛鑛……四三五
(三) 銅鑛……四三六
(四) 水銀鑛……四三八
(己) 其他の非金屬鑛物……四三九
(一) 明礬……四三九
(二) 砒鑛……四四〇
(三) 岩鹽石膏石油……四四〇

圖版目次

口繪　湖北省武漢全景及湖廣低地の地形、福建省厦門全景及閩浙沿岸の地形　頁數

第一版　行政區劃圖……一二

第二版　山勢圖……三〇

第三版　高原地帶……三六

甲、秦嶺山脈の天沙嶺及秦棧道　乙、大巴山脈の蜀棧道　丙、楚西山地の石灰岩高原

第四版　高原地帶及地溝帶……三八

甲、桂湘山地の石灰岩山列　乙、瀟湘溪谷に於ける赭色砂岩層の臺地及其中の地塊

第五版　東部地壘帶……四二

甲、淮山脈の鷄公山　乙、贛西山地の廬山　丙、大庾嶺山脈の梅嶺

第六版　沿海山地帶……四六

甲、安徽省黃山々脈の黃山　乙、福建省厦門南普陀

第七版　水系圖……五二
第八版　揚子江上流……五四
甲、瞿唐峽　乙、新灘　丙、獺洞灘及蜀通號
第九版　揚子江中流……五八
甲、桂江湘江分水地　乙、中流下流間の峽
第十版　揚子江下流……六四
甲、江蘇省鎭江焦山附近　乙、江蘇省通州狼山附近
丙、江西省贛江の下流
第十一版　閩浙水系……七〇
甲、浙江省處州の閩江中流　乙、浙江省淳安の錢塘江上流新安江
丙、福建省安溪の晉江中流
第十二版　嶺南水系……七四
甲、西江下流の峽　乙、北江及西江合流地
第十三版　湖沼……八二
甲、增水期の洞庭湖　乙、洞庭湖畔の岳陽樓
丙、岳陽樓上より湘江を隔て、減水期の洞庭湖を望む

第十四版　杭州海嘯……八六
甲、海嘯の來襲　乙、海嘯の前面　丙、海嘯の通過
第十五版　洪水……一〇六
甲、湖南省長沙城內の洪水　乙、湖南省盧林潭の洪水
丙、湖南省衡州の洪水
第十六版　地方語及住民分布圖……一一〇
第十七版　蠻族……一一二
甲、苗族　乙、猺族　丙、畬族
第十八版　服裝……一三八
甲、男子夏服裝及僧侶の服裝　乙、男子各種服裝
丙、福建省及浙江省田舍婦人の服裝　丁、辮髮
第十九版　結髮……一四二
甲、最も普通の結髮　乙、福建省福州田舍の婦人及結髮
丙、福建省龍岩縣婦人の結髮
第二十版　纏足……一四四
甲、江西省贛州婦人の纏足　乙、盛裝せる纏足
丙、跣足の纏足　丁、X光線を以て見たる纏足

第二十一版　住　家……一四八
甲、湖南省汝城縣猺族住家　乙、江西省九江附近の農家
丙、江西省萍鄉縣峽山口の豪家　丁、福建省南靖縣下豪族の住家
第二十二版　公　館……一五〇
甲、福建省泉州開元寺　乙、福建省福州巡按使署
丙、福建省福州三山會館
第二十三版　樓　閣……一五〇
甲、福建省泉州魁星樓　乙、福建省福州鎭海樓　丙、湖南省長沙天心閣　丁、浙江省温州の牌樓　戊、江蘇省上海城隍廟の湖心亭
第二十四版　寶　塔……一五〇
甲、安徽省安慶迎江寺の塔　乙、江蘇省蘇州北寺塔
丙、福建省福州白塔　丁、浙江省甯波天封塔
第二十五版　人口密度及主要都邑分布圖……一六〇
第二十六版　都　邑……一六四
甲、廣東省惠州府城　乙、浙江省甯波東門街の店舖
丙、福建省厦門の市街
第二十七版　水陸交通圖……一九六

第二十八版　關　門……二〇二
甲、廣東省仁化縣臘嶺の關門　乙、廣東省梅嶺關
第二十九版　路上の設備……二〇八
甲、橋畔の亭　乙、敷石道及亭　丙、城外に於ける大路畔の村落及寶塔
第三十版　橋　梁……二一〇
甲、浙江省甯波の浮橋　乙、福建省福州の石橋　丙、浙江省温州の穹窿狀の石橋　丁、湖南省永興縣棲鳳渡の橋　戊、湖南省衡陽縣洪雞廟の橋
第三十一版　乘　物……二一二
甲、轎　乙、一輪車
第三十二版　船……二五六
甲、廣東梧州間航行の小蒸氣船　乙、浙江省甯波の戎克
丙、浙江省西興運河の壩及民船
第三十三版　貨幣流布區域圖……三一四
第三十四版　主要移出農產物分布圖……三二二

第三十五版　農產物……三四二
甲、湖南省安化縣新開嶺の米田　乙、廣西省懷集縣良村の荔枝林
丙、福建省福州の荔枝　丁、浙江省錢塘江下流の桑樹及楮樹
第三十六版　林產物……三六〇
甲、福建省閩江下流の杉筏　乙、浙江省甯波の木材船
丙、廣東省廣甯縣綏江上流の竹密林
第三十七版　炭田分布圖……四〇〇
第三十八版　炭　坑……四〇八
甲、湖南省甯鄉縣谷塘坡炭坑　乙、江西省萍鄉縣安源萍鄉炭坑
丙、萍鄉炭坑骸炭爐
第三十九版　鑛　山……四〇三
甲、福建省龍岩縣三坑の鐵爐　乙、湖南省新化縣鑛山の安質母尼鑛
採掘地　丙、湖南省江華縣江華砂錫採掘地

附圖目次

頁數

第一圖　巴蜀盆地蜀の地方……三五
第二圖　湖廣低地……四〇
第三圖　吳平野……四九
第四圖　三峽……五四
第五圖　贛江下流……六六
第六圖　西江下流及廣東三角洲……七七
第七圖　支那海岸線……八五
第八圖　揚子江河水高低表……一〇二
第九圖　四川貴州二省人口密度圖……一六一
第十圖　外國貿易累年比較表……二八三
第十一圖　中支那及南支那各開港場貿易額……二九一
第十二圖　中支那及南支那開港場直接及純輸入額比較表……二九五

中支那及南支那

理學士　野田勢次郎

第一章　位置及區劃

一　位置

支那本部十八省を觀察するに東方、南方の二面は海に瀕し西方は西藏高原の天險を控へ其分界甚だ顯著なりと雖も、北方は蒙古及滿洲に對し南方は東京、緬甸に對し共に高原又は平野を以て連續し其間に重要なる分界を有せず、是れ古來漢族の安南を征服するを得たる、又滿族及蒙古族の常に南下して中原に覇を爭ひたる所以にして、曠世の事業たる萬里長城は直隸平原の要塞たらんも遂に長安、洛陽の保障たる能はざりしもの蓋し故あるなり、翻て其內部に於ける地勢を見るに之を東西二大縱列に分つことを得べし、即ち高原地帶及山嶽地帶とす、山西、陝西、甘肅、四川、貴州、雲南の全部並に直隸、河南、湖北、湖南、廣西の西部は高原地帶に、其他東方の諸省は山嶽地帶に

屬す、更に之を水系によりて觀察する時は之を北支那、中支那、南支那の三部に分轄することを得べし、而して其三部分の分界を北嶺及南嶺と稱す、北支那は黃河流域其主なるものにして尙白河及淮河の流域を包擁し、中支那は揚子江流域之を代表し尙ほ錢塘江流域を含み、南支那は支那東海、臺灣海峽及支那南海に面する閩、浙、粵の地域にして西江、北江、東江、韓江、閩江等の流域を包含す。

二　地理的區劃

中支那及南支那に於ける地理的區劃を見るに中支那にありては揚子江支流の流域明に之を示し、南支那にありては數多の河流各其區劃を形成す。（第二版及第三版參照）

中支那の西部は漢中盆地並に揚子江上流の巴蜀盆地及雲貴高原の三地理的區劃に分る、漢中盆地は漢江の上流地にして秦嶺、大巴山二山脈の間に介在す、巴蜀盆地は岷江、沱江、嘉陵江の流域に屬し、雲貴高原の中支那に屬する區域は涪陵江其他揚子江支流の斜面なり、中支那の東部は湖廣低地、瀟湘流域、贛江流域、皖南流域、吳平野、錢塘江流域の六地理的區劃に分る、湖廣低地は漢江及揚子江本流の流域にして主に湖北省東部を領し古の雲夢澤其南部を占む、瀟湘流域は湘江、資江沅江及澧江の流域にして主に湖南省を領す。

贛江流域は江西省一圓を領し、皖南流域は揚子江を夾みて安徽省の南部及江蘇省一小部を含み淮山脈及黃山山脈に發源する小支流の流域なり、吳平野は揚子江河口の平地にして江蘇省の

南部を占め、錢塘江流域は所謂浙西の地にして主に浙江省北部を領す。

南支那の西部は雲貴高原の一部にして主として西江上流の流域なり、南支那の東部は沿岸地域にして嶺南水系及閩浙水系の二大區劃に分る、嶺南水系區域は西江の支流桂江、北江及東江の流域なり、閩浙水系區域は我臺灣と一葦帶水の沿岸地にして浙江省の南部、福建省の全部及廣東省の東部を包括し之を韓江、九龍江、晉江、閩江、甌江、椒江等の諸流域に區分す。

三　行政區劃

沿革　支那に於ける漢族の文明は黃河の谷に發芽し漸次開明の域に達し黃帝の時既に九州の制を設け其版圖を定めたるが如し、蓋し其版圖は東は山東省の沿岸より西は陝西、甘肅の省界に達し北は山西省の北部より南は湖南省の南部に亙れるが如し、虞舜は十二州を肇めたるも夏禹は之を九州に復せり、禹域の九州と稱するは冀州、兗州、青州、徐州、揚州、荊州、豫州、梁州、雍州にして、梁州（四川省の東北部及陝西省の南部にして巴蜀盆地及漢中盆地）、荊州（湖北省及湖南省にして湖廣低地及瀟湘流域）、揚州（江西、安徽、江蘇、浙江の四省にして、贛江流域、皖南流域、吳平野、錢塘江流域等）の三州は主に中支那に、其他の諸州は主に北支那に屬す、南支那は未だ其版圖たらざりしなり。

周は九州を建て、其九州の中揚、荊二州のみ中支那に屬す、周末に於ける戰國七國は燕、齊、韓、魏、趙、楚、秦にして楚は其幅員最も廣く湖北、湖南、安徽、江西、江蘇、浙江の六省を占む、秦は其幅員楚に匹敵

し其中支那に屬する區域は四川省の東部及陝西省の南部なり、其他の諸國は皆北支那にあり、而して南支那は越と稱する蕃地たりしなり、秦は天下を統一し之を三十六郡に分てり、中支那に屬するものを擧ぐれば巴及蜀(四川省東部にして揚子江以北の地)、漢中(陝西省の南部にして漢江の上流)、南陽及南郡(湖北省漢江の中流及下流)、長沙及黔中(湖南省及貴州省の東部)、鄣(安徽省の南部及江西省)、會稽(江蘇省の南部及浙江省)なり、秦末に至りて閩中(福建省)、南海(廣東省)、桂林(廣西省)、象郡(安南)の四郡を置き南支那の大部分及安南は秦の管轄に屬したるも貴州省の大部分及雲南省は未だ其管内に入るに至らず。

兩漢に至り滿洲、蒙古、朝鮮、新疆新に其版圖に入り、中支那及南支那の貴州、雲南二省も亦全く其管下に屬するに至れり、而して其管内を司隷、冀州、幽州、幷州、兗州、徐州、青州、揚州、荊州、豫州、益州、涼州、交州の十三州に分てり、其中支那及南支那に屬するものは揚州(江蘇省の一部及江西、安徽、浙江、福建四省)、徐州(江蘇及安徽二省北部)、荊州(湖北、湖南二省及貴州省の一部)、益州(四川、雲南二省、貴州省大部及陝西省南部)、交州(廣東、廣西二省及交趾)の五州なりとす、三國即ち蜀、魏、吳は後漢の後を承けて鼎立す、魏は主に北支那を領し更に南下して揚子江畔に達せり、其領する所、司隷、荊州、豫州、青州、兗州、揚州、徐州、涼州、秦州、冀州、幽州、幷州、雍州の十三州にして中支那に屬するものは、揚州(安徽省北部)及荊州(陝西省南部及湖北省の二州なり、蜀は中支那の西方に位し益州(四川省西部及貴州雲南二省の北部)及梁州(四川省東部及陝西省南部)の二州を領す、吳は其版圖中支那の東部及南支那にあ

りて五州を領す、揚州(江蘇、安徽二省の南半、江西省の大部、浙江、福建二省)、郢州(江西、湖北、湖南三省界地)、荊州(湖北省の南部、湖南省、併に廣東、廣西二省の北部)、廣州(廣東省大部、廣西省大部)及交州(廣東省南西部及交趾)是れなり。

兩晉は二十一州を置けり、中支那及南支那に屬するは、徐州、揚州、荊州、益州、梁州、甯州、湘州、江州、廣州、交趾の十州なり、南北朝に於ては宋は主として中支那及南支那の地を、魏は主として北支那の地を領す、隋に至り支那を統一したりと雖も、貴州、雲南の二省及廣西省の西部は其版圖に屬するに至らず、而して州制を廢して之を郡縣制に改めたり。

唐は郡縣制を廢して再び州制に復し後更に關南道、河南道、河東道、河北道、山南道、隴右道、淮南道、江南道、劍南道、廣南道又は嶺南道の十道を置けり、中支那及ひ南支那に屬するは淮南、江南、嶺南、山南、劍南の五道なり。

淮南道　(江蘇、安徽二省の北部、湖北省東部)

江南道

江南東道　(江蘇省南部、浙江、福建の二省)

江南西道　(安徽省南部、江西、湖南の二省)

黔　中　(湖南、四川、貴州の三省界地)

山南道

山南東道（湖北省）
山南西道（四川省東部、陝西省南部
劍南道（四川省西部）
嶺南道（廣東省、廣西省及交趾）

五代十國の時代に於て中支那及南支那に屬する國は吳（江蘇、安徽、江西の三省）、楚（湖南、湖北二省）、蜀（四川省）、吳越（浙江省）、閩（福建省）、南漢（廣西省の南部及廣東省）なりとす、宋遼の時代に於て宋は支那本部の大部を領し遼は東三省を、夏は甘肅の西部を占む。

宋は二十三路の行政區劃の制を布き、更に府、州、軍、監を置く、中支那及南支那に屬するは淮南西、淮南東、江南東、江南西、荆湖北、荆湖南、夔州、利州、成都、潼川、福建、廣南東、廣南西の十四路にして貴州、雲南の二省及交趾の地は其版圖たらず。

淮南東路（安徽省北部）
江南東路（安徽省南部）
江南西路（江西省）
荆湖北路（湖北省南部）
荆湖南路（湖南省大部）
夔州路（四川省東部）

利州路（四川省北部、陝西省南部）
成都路（四川省西部）
潼川路（四川省南部）
兩浙路（江蘇省南部、浙江省）
福建路（福建省）
廣南東路（廣東省大部）
廣南西路（廣東省南西部、廣西省）

南宋及金の時に於ては南宋は中支那及南支那を、金は東三省及沿海州を、夏は甘肅、新疆を領せり、而して南宋の行政區劃は左の如し。

淮南東路（江蘇省北部）
淮南西路（安徽省北部）
江南東路（安徽省南部、江西省東部）
江南西路（江西省大部）
荆湖北路（湖北省南部）
荆湖南路（湖南省）
夔州路（四川省東部、湖北省一部）

利州路（四川省北部、陝西省南部）
成都路（四川省西部）
潼川路（四川省南部）
浙西路（江蘇省南部、浙江省北部）
浙東路（浙江省南部）
福建路（福建省）
廣南東路（廣東省大部）
廣南西路（廣東省南西一部、廣西省）

元は蒙古に起りて支那を統一し北は滿洲、蒙古、朝鮮を統べ南は安南、緬甸を從へ、之を中書省及行中書の十二省に分ち更に路、府、州、縣の四等に區劃す、而して其版圖は中央亞細亞より遠く歐洲の東部に及べり、十二省は中書省、嶺北省、遼西省、河南省、陝西省、四川省、甘肅省、雲南省、江浙省、江西省、湖廣省、征東省にして中支那及南支那に屬するは江浙、河南、湖廣、江西、陝西、雲南、四川、の七省なり。

江浙省（江蘇、安徽二省の南部、浙江省、福建省）
河南省（江蘇、安徽二省の北部、河南省）
湖廣省（湖北、湖南、廣西の三省）
江西省（江西、廣東の二省）

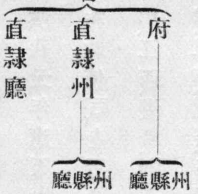
陝西省（陝西省）
雲南省（雲南、貴州の二省）
四川省（四川省）

明の太祖洪武元年應天府（南京）に即位し永樂十八年順天府（北京）に遷れり、兩地に二直隸を設け其他に十三布政使司を置き全國を十五行政區劃に分てり、即ち京師、南京の二直隸并に山東、山西、河南、陝西、四川、江西、湖廣、浙江、福建、廣東、廣西、雲南、貴州の十三布政使司是なり、中支那及南支那に屬するは南直隸、江西、湖廣、陝西、四川、浙江、福建、廣東、廣西、貴州、雲南こす、省は之を府、直隸州に分ち更に州、縣に分てり。

南直隸（江蘇、安徽の二省）
江西（江西省）
湖廣（湖北、湖南の二省）
陝西（陝西、甘肅の二省）
四川（四川省）
浙江（浙江省）
福建（福建省）

廣東（廣東省）
廣西（廣西省）
貴州（貴州省）
雲南（雲南省）

清は其行政區劃を明制に則りたるも南直隸を廢して江南省を置けり、後陝西省を分ちて甘肅省を置き江南省を分ちて江蘇、安徽の二省となし又湖廣省を湖北、湖南の二省に分てり、是に至りて支那本部十八省の制を定め東三省、新疆を加へて二十二省となせり、而して省の下には府、直隸州、直隸廳を、府及直隸州の下に州、縣、廳を置けり、即ち左の如し。



中支那及南支那に屬するは江蘇、安徽、江西、湖北、湖南、四川、貴州、雲南、浙江、福建、廣東、廣西の十二省及陝西省の一部とす、清末に於ける行政區劃左の如し。

省名	省城名	府	直隸州	直隸廳	縣	州	廳
江蘇省	江甯府	八	三	一	六二	三	一
安徽省	安慶府	八	五	｜	五一	四	｜
江西省	南昌府	一三	一	｜	七五	一	五
湖北省	武昌府	一〇	一	一	六〇	六	一
湖南省	長沙府	九	四	五	六四	三	一
陝西省	西安府	七	五	｜	七六	六	七
四川省	成都府	一二	八	四	一一二	一一	七
貴州省	貴陽府	一二	一	三	三四	一三	三
雲南省	雲南府	一四	五	三	三九	二五	九
浙江省	杭州府	一一	｜	一	七五	一	一
福建省	福州府	九	二	｜	五七	｜	三
廣東省	廣州府	九	七	三	五九	四	一
廣西省	桂林府	一二	二	二	五〇	一五	一

現制　中華民國は清朝と同じく支那本部十八省、東三省及新疆省を置けるも其他の行政區劃は大に異る所あり、即ち省を分ちて道となし清朝に於ける府、直隸州及直隸廳の制を廢して之を縣となし道の管下に屬せしめたり、此外直隸、山西、四川の三省には特別行政區を設け而して省に

は都督を、最近に省長を置く、道には道尹を、縣には縣知事を置き地方行政を司らしむ、中支那及南支那に屬するは四川、貴州、雲南、湖北、湖南、江西、安徽、江蘇、浙江、福建、廣東、廣西の十二省及陝西省の一部なり、此等の省に於ける道及縣名は左の如し、(第一版參照)

清制の府、直隷州、直隷廳名は〔〕中に之を示し、清制の縣、州、廳名にして改稱せられたるものは其舊名を(　)中に示せり、而して新設の縣には其右側に○○を附せり。

四川省　五道百四十六縣

西川道

〔成都府〕成都、華陽、簡陽(簡州)、廣漢(漢川)、崇慶(崇慶州)、什邡、雙流、新都、溫江、新繁、金堂、郫、灌、彭、崇寧、新津

〔龍安府〕平武、北川(石泉)、江油、彭明

〔茂　州〕茂(茂州)、汶川、理番(理番廳)

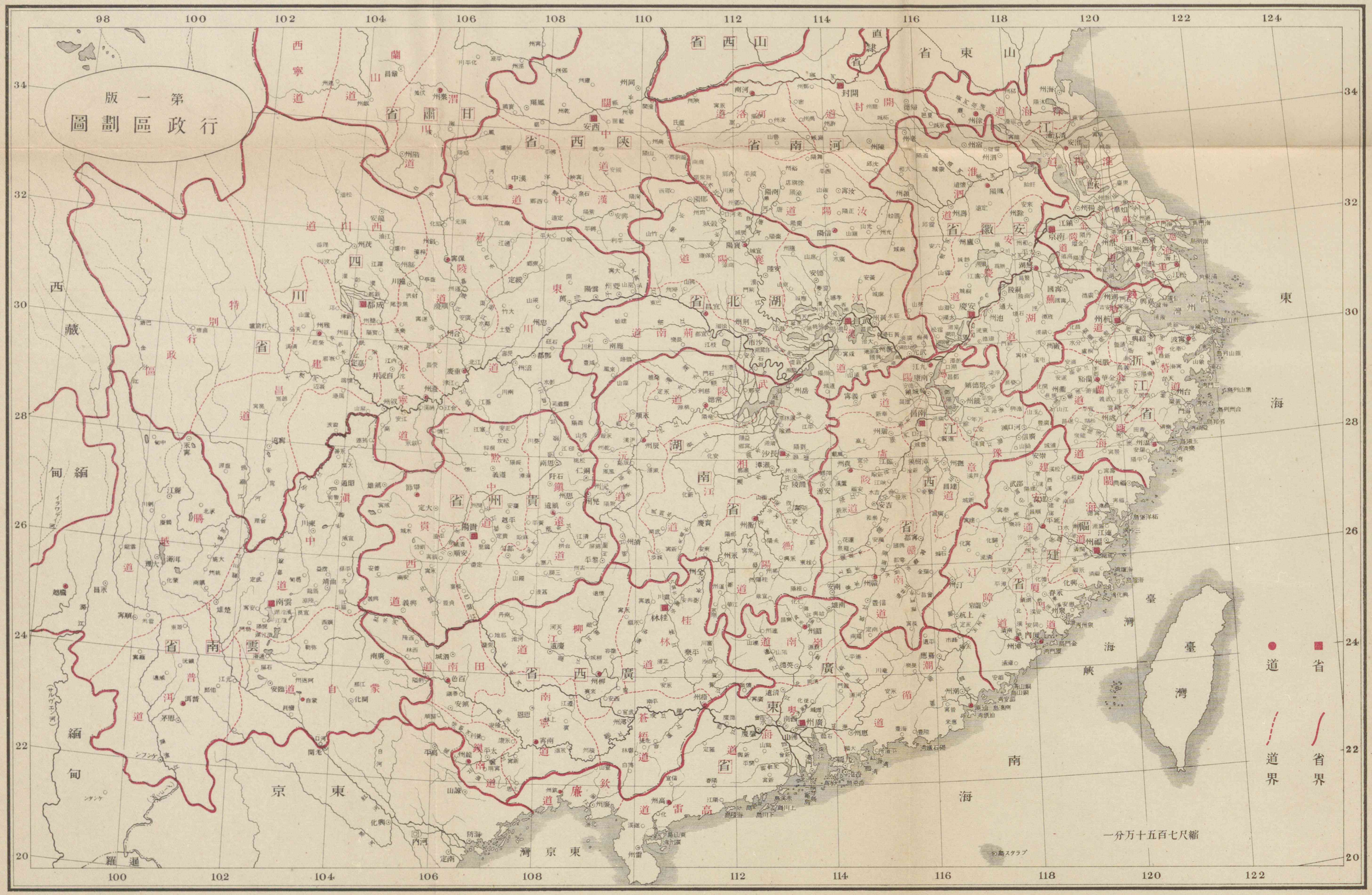
〔綿　州〕綿陽(綿州)、德陽、安綿竹、梓潼、羅江、懋功(懋功廳)、松潘(松潘廳)

東川道

〔重慶府〕巴、江津、長壽、永川、榮昌、綦江、南川、銅梁、大足、璧山、涪陵(涪州)、合川(合州)、江北(江北廳)、武勝(定遠)

〔夔州府〕奉節、巫山、雲陽、萬、開、巫溪(大寧)

〔綏定府〕達、開江(新寧)、渠、大竹、宣漢(東鄉)、萬源(太平)、城口(城口廳)


第一版
行政區劃圖
道
省
道界
省界
縮尺七百五十万分一
東海
臺灣
南海
京東
西藏
緬甸
山東省
直隸省
河南省
陝西省
甘肅省
四川省
湖北省
湖南省
廣東省
廣西省
雲南省
貴州省
江西省
安徽省
江蘇省
浙江省
福建省
臺灣
臺灣海峽
南海
京東
東京灣
羅暹
緬甸

〔忠　州〕忠(忠州)、鄧都、墊江、梁山

〔酉陽州〕酉陽(酉陽州)、秀山、黔江、彭水、石砫(石砫廳)

建昌道

〔雅州府〕雅安、名山、榮經、蘆山、漢源(清溪)

〔寧遠府〕西昌、冕寧、鹽源、昭覺、天全、會理(會理州)、鹽邊(鹽邊廳)、越嶲(越嶲廳)

〔嘉定府〕樂山、峨眉、洪雅、峨邊(峨邊廳)、夾江、犍爲、榮、威遠

〔眉　州〕眉山、丹稜、彭山、青神

〔邛　州〕邛峽(邛州)、大邑、蒲江

永寧道

〔叙州府〕宜賓、慶符、富順、南溪、長寧、高、筠連、珙、興文、隆昌、屏山、馬邊(馬邊廳)

〔瀘　州〕瀘(瀘州)、合江、納谿、江安

〔資　州〕資中(資州)、仁壽、資陽、井研、內江

〔叙永廳〕叙永(永寧)、雷波(雷波廳)、古宋、古藺

嘉陵道

〔順慶府〕南充、西充、營山、儀隴(宜隴)、鄰水、岳地

〔保寧府〕閬中、蒼溪、南部、廣元、昭化、通江、南江、巴中(巴州)、劍閣(劍州)、蓬安(蓬州)、廣安(廣安州)

〔潼川府〕三臺、射洪、鹽亭、中江、潼南(東安)、遂寧、蓬溪、樂至、安岳

湖北省　三道六十九縣

江漢道

〔武昌府〕武昌(江夏)、鄂城(武昌)、嘉魚、蒲圻、咸寧、崇陽、通山、通城、大冶、陽新(興國州)

〔漢陽府〕漢陽、夏口(夏口廳)、漢川、黃陂、孝感、沔陽(沔陽州)

〔黃州府〕黃岡、黃安、黃梅、蘄春(蘄州)、蘄水、麻城、羅田、廣濟

〔德安府〕安陸、隨(隨州)、雲夢、應山、應城

襄陽道

〔安陸府〕鍾祥、京山、潛江、天門

〔荊門州〕荊門(荊門州)當陽、遠安

〔襄陽府〕襄陽、宜城、南漳、棗陽、穀城、光化、均(均州)

〔鄖陽府〕鄖陽、房、竹谿、竹山、保康、鄖西

荊南道

〔荊州府〕江陵、公安、石首、監利、松滋、枝江、宜都

〔宜昌府〕宜昌(東湖)、長陽、興山、巴東、五峯長樂、秭歸(歸州)

〔施南府〕恩施、宣恩、建始、利川、來鳳、咸豐

〔鶴峯廳〕鶴峯(鶴峯廳)

湖南省　四道七十五縣

湘江道

〔長沙府〕長沙、湘陰、瀏陽、醴陵、湘潭、寧鄉、益陽、湘鄉、攸、安化、茶陵(茶陵州)

〔寶慶府〕寶慶(邵陽)、新化、武岡(武岡州)、新寧、城步

衡陽道

〔衡州府〕衡陽(清泉)、衡山、安仁、耒陽、常寧、酃

〔永州府〕零陵、祁陽、東安、道(道州)、寧遠、永明、江華、新田

〔郴　州〕郴(郴州)、永興、資興(興寧)、宜章、汝城、桂陽(桂東)

〔桂陽州〕桂陽(桂陽州)、臨武、藍山、嘉禾

武陵道

〔岳州府〕岳陽(巴陵)、平江、臨湘、華容

〔常德府〕常德(武陵)、桃源、漢壽(龍陽)、沅江

〔澧　州〕澧(澧州)、石門、慈利、安鄉、臨澧(安福)、大庸(永定)

〔南州廳〕南(南州廳)

辰沅道

〔辰州府〕沅陵、瀘溪、辰谿、溆浦

〔沅州府〕芷江、黔陽、麻陽

〔永順府〕永順、保靖、龍山、桑植、古丈(古丈廳)

〔靖　州〕靖(靖州)、綏寧、會同、通道

〔乾州廳〕乾城(乾州廳)

〔鳳凰廳〕鳳凰(鳳凰廳)

〔永綏廳〕永綏(永綏廳)

〔晃州廳〕晃(晃州廳)

江西省　四道八十一縣

豫章道

〔南昌府〕南昌、新建、豐城、進賢

〔建昌府〕建昌(南城)、黎川(新城)、南豐、廣昌、資溪(瀘溪)

〔撫州府〕臨川、金谿、崇仁、宜黃、樂安、東鄉、餘江(安仁)

〔廣信府〕上饒、玉山、弋陽、貴溪、鉛山、廣豐、橫峰(興安)

廬陵道

〔吉安府〕廬陵、泰和、吉水、永豐、安福、遂川、龍泉(萬安)、永新、寧岡(永寧)、蓮花(蓮花廳)

〔臨江府〕清江、新淦、新喻、峽江

〔袁州府〕宜春、分宜、萍鄉、萬載

〔瑞州府〕高安、上高、宜豐、新昌）

贛南道

〔贛州府〕贛（贛州）、雩都、信豐、興國、會昌、安遠、尋鄔（長寧）、龍南、定南（定南廳）、虔南（虔南廳）

〔南安府〕大庾、南康、上猶、崇義

〔寧都州〕寧都（寧都州）瑞金、石城

潯陽道

〔九江府〕九江（德化）、德安、瑞昌、湖口、彭澤

〔南康府〕星子、都昌、永修（建昌）、安義

〔饒州府〕鄱陽、餘干、樂平、浮梁、德興、萬年

〔南昌府〕餘江（安仁）、奉新、靖安、武寧、修水（義寧州）、銅鼓（銅鼓廳）

安徽省　三道六十縣

安慶道

〔安慶府〕安慶（懷寧）、桐城、宿松、太湖、潛山、望江

〔盧州府〕合肥、盧江、舒城、巢、無爲（無爲州）

〔六安州〕六安(六安州)、英山、霍山

〔和　州〕和(和州)、含山

蕪湖道

〔太平府〕蕪湖、繁昌、當塗

〔廣德州〕廣德(廣德州)、郎溪(建平)

〔徽州府〕歙縣、休寧、婺源、祁門、績溪

〔寧國府〕宣城、南陵、涇、太平、旌德、寧國

〔池州府〕貴池、銅陵、石埭、東流、秋浦(建德)、青陽

淮泗道

〔鳳陽府〕鳳陽、定遠、鳳台、懷遠、靈璧、壽(壽州)、宿(宿州)

〔潁州府〕阜陽、潁上、太和、霍邱、蒙城、渦陽、亳(亳州)

〔滁　州〕滁(滁州)、全椒、來安

〔泗　州〕泗(泗州)、五河、盱眙、天長

江蘇省　五道六十縣

金陵道

〔江寧府〕江寧(上元、江寧)、包容溧水、高淳、江浦、六合

〔鎮江府〕　丹徒、丹陽、金壇、溧陽、揚中(太平)

滬海道

〔松江府〕　上海、松江(華亭、婁)、南滙、青浦、奉賢、金山、川沙(川沙廳)

〔大倉州〕　太倉(鎮洋)、嘉定、寶山、崇明

〔海門廳〕　海門(海門廳)

蘇常道

〔蘇州府〕　吳(吳、長洲、元和)、常熟、昭文、常熟、崑山(新陽、崑山)、吳江(震澤、吳江)

〔常州府〕　武進(武進、陽湖)、無錫(無錫、金匱)、宜興(宜興、荆溪)、江陰、靖江

〔通　州〕　南通、如皐、泰興

淮揚道

〔淮安府〕　淮安(山陽)、淮陰(清河)、泗陽(桃源)、漣水(安東)、阜甯、鹽城

〔揚州府〕　江都(甘泉、江都)、儀徵、東臺、興化、泰(泰州)、高郵(高郵州)、寶應

徐海道

〔徐州府〕　銅山、豐、沛、蕭、碭山、邳(邳州)、宿遷、睢甯

〔海　州〕　東海、灌雲、涟陽、贛榆

浙江省　四道七十五縣

錢塘道

〔杭州府〕杭錢塘、仁和、海寧(海寧州)、富陽、餘杭、臨安、於潛、新登(新城)、昌化

〔嘉興府〕嘉興、嘉興、秀水、嘉善、海鹽、崇德(石門)、平湖、桐鄉

〔湖州府〕吳興(烏程、歸安)、長興、德清、武康、安吉、孝豐

會稽道

〔寧波府〕鄞、慈谿、奉化、鎮海、象山、南田(石浦廳、南田廳)

〔定海廳〕定海(定海廳)

〔紹興府〕紹興(山陰、會稽)、蕭山、諸暨、餘姚、上虞、嵊、新昌

〔臺州府〕臨海、黃巖、天臺、仙居、寧海、溫嶺(太平)

金華道

〔金華府〕金華、蘭谿、東陽、義烏、永康、武義、浦江、湯溪

〔衢州府〕衢(西安)、龍游、江山、常山、開化

〔嚴州府〕建德、淳安、桐廬、遂安、壽昌、分水

甌海道

〔處州府〕麗水、青田、縉雲、松陽、遂昌、龍泉、慶元、雲和、宣平、景寧

〔溫州府〕永嘉、瑞安、樂清、平陽、泰順、玉環

閩海道

〔福州府〕閩侯、閩、侯官、古田、屏南、閩清、長樂、連江、羅源、永泰（永福）、福清

〔福寧府〕霞浦、福鼎、寧德、壽寧、福安、平潭（平潭廳）

廈門道

〔興化府〕莆田、仙游、思明、金門

〔泉州府〕晉江、南安、惠安、安溪、同安

〔永春州〕永春（永春州）、德化、大田

汀漳道

〔汀州府〕長汀、寧化、上杭、武平、清流、連城、歸化、永定、雲霄（雲霄廳）

〔漳州府〕龍溪、漳浦、南靖、長泰、平和、詔安、海澄

〔龍巖州〕龍巖（龍巖州）、漳平、寧洋

建安道

〔延平府〕南平、將樂、沙、尤溪、順昌、永安

〔建寧府〕建甌（建安、甌寧）、建陽、崇安、浦城、政和、松溪

〔邵武府〕邵武、光澤、泰寧、建寧

廣東省　六道九十四縣

粵海道

〔廣州府〕番禺、南海、順德、東莞、從化、龍門、臺山(新寧)、增城、香山、新會、三水、清遠、寶安(新安)花

〔佛崗廳〕佛崗(佛崗廳)

〔赤溪廳〕赤溪(赤溪廳)

〔肇慶府〕高要、四會、新興、高明、廣寧、開平、鶴山、德慶(德慶州)、封川、開建、恩平

〔羅定府〕羅定(羅定州)、雲浮(東安)、鬱南(西寧)

嶺南道

〔南雄州〕南雄(南雄州)、始興

〔韶州府〕曲江、樂昌、仁化、乳源、英德、翁源

〔連　州〕連(連州)、陽山

〔連山廳〕連山(連山廳)

潮循道

〔惠州府〕惠陽(歸善、惠陽)、博羅、新豐(長寧)、紫金(永安)、海豐、陸豐、龍川、河源、和平、連平(連平州)

〔潮州府〕潮安(海陽)、豐順、潮陽、揭陽、饒平、惠來、大埔、澄海、普寧、南澳(南澳廳)

〔嘉應州〕梅、五華(長樂)、興寧、平遠、蕉嶺(鎮平)

高雷道

〔高州府〕茂民、電白、信宜、化(化州)、吳川、廉江(石城)

〔雷州府〕海康、遂溪、徐聞

〔陽江州〕陽江、陽春

瓊崖道

〔瓊州府〕瓊山、澄邁、定安、文昌、瓊東(會同)、樂會、臨高、儋、儋州)

〔崖　州〕崖(崖州)、萬寧(萬)、陵水、感恩、昌江(昌化)

欽廉道

〔欽　州〕欽(欽州)、防城

〔廉州府〕合浦、靈山

廣西省　六道七十七縣

南甯道

〔思恩府〕武鳴、武緣、賓陽(賓州)、上林、那馬(那馬廳)

〔南甯府〕邕甯(宣化)、扶南(新甯州)、隆安、永淳、橫(橫州)

(上思廳)　上思(上思廳)

蒼梧道

〔梧州府〕蒼梧、藤、容、岑溪、懷集、信都(信都廳)

〔潯州府〕桂平、平南、貴、武宣

〔鬱林州〕鬱林(鬱林州)、博白、北流、陸川、興業

桂林道

〔桂林府〕桂林(臨桂)、興安、靈川、陽朔、古化(永寧)、永福、義寧、全(全州)、灌陽、龍勝(龍勝廳)

〔平樂府〕平樂、恭城、富川、賀、荔浦、修仁、昭平、蒙山(永安州)、中渡(中渡廳)

柳江道

〔柳州府〕馬平、雒容、融、羅城、柳城、三江(懷遠)、來賓、象(象州)

〔慶遠府〕宜山、天河、思恩、河池、宜北(安化廳)、遷江(思恩府所管)

田南道

〔百色廳〕百色(百色廳)、恩隆、恩陽

〔泗城府〕凌雲、西林、西隆(西隆州)

〔鎭安府〕東蘭(東蘭州)、天保、奉議(奉議州)

鎭南道

〔太平府〕龍州(龍州廳)、崇善、養利(養利州左、左州)、同正(永康州)

〔上思廳〕憑祥(憑祥廳)、寧明(寧明州)、明江(明江廳)

〔歸順州〕 靖西、鎮邊

貴州省 三道八十縣

黔中道

〔貴陽府〕 貴陽(貴筑)、息烽、修文、龍里、貴定、紫江(開州)、定番(定番州)、大塘、廣順(順州)、長寨、羅斛(羅斛廳)

〔平越州〕 平越(平越州)、甕安、湄潭、餘慶

〔遵義府〕 遵義、綏陽、桐梓、仁懷、正安(正安州)

〔都匀府〕 都匀、平舟、鑪山(清平)、荔波、麻哈(麻哈州)、獨山(獨山州)、三合(三脚)、八寨(八寨廳)、都江(都江廳)、丹江

鎮遠道

〔鎮遠府〕 鎮遠、天柱、施秉、邛水、黄平、臺拱(臺拱廳)、劍河(清江廳)

〔黎平府〕 黎平(開泰)、錦屏、永從、榕江(古州廳)、下江(下江廳)

〔銅仁府〕 銅仁、江口、省溪

〔思州府〕 思(思州)、清溪、玉屏

〔思南府〕 思南、德化(安化)、沿河、印江、婺川、后坪

〔松桃廳〕 松桃(松桃廳)

〔石阡府〕 石阡(鳳泉(龍泉))

貴西道

〔安順府〕安順、普定、清鎮、鎮寧(鎮寧州)、郎岱(郎岱廳)、平壩(安平)、紫雲歸化廳)

〔興義府〕興義、興仁(新城)、關嶺(永寧州)、安南、貞豐(貞豐州)、册亨、南籠(興義)、普安、盤盤州廳)

〔大定府〕大定、畢節、威寧(威寧州)、黔西(黔西州)、織金(平遠州)、水城(水城廳)、赤水(赤水廳)

雲南省　四道九十六縣

滇中道

〔雲南府〕昆明、富民、宜良、呈貢、羅次、祿豐、易門、嵩明(嵩明州)、晉寧(晉寧州)、安寧(安寧州)、昆陽(昆陽州)

〔武定州〕武定(武定州)、元謀、祿勸

〔曲靖府〕曲靖(南寧)、平彝、宣威(宣威州)、霑益(霑益州)、馬龍(馬龍州)、陸良(陸涼州)、羅平(羅平州)、尋甸(尋甸州)

〔東川府〕東川(會澤)、巧家(巧家廳)

〔昭通府〕昭通(恩安)、永善、綏江(靖江)、魯甸(魯甸廳)、大關(大關廳)

〔澂江府〕河陽(澂江)、新興(新興州)、江川、路南(路南州)、

〔鎮雄州〕鎮雄(鎮雄州)、彝良

〔楚雄府〕楚雄、廣通、摩劒(南安州)、牟定(定遠)、鹽興

蒙自道

〔臨安府〕建水、蒙自、通海、河西、嶍峨、石屏(石屏州)、阿迷(阿迷州)、黎寧州)、箇舊(箇舊廳)

〔開化府〕文山、馬關(安平廳)

〔廣南府〕廣南(賓寧)、富州(富州廳)

〔廣西州〕廣西(廣西州)、彌勒(師宗、邱北

普洱道

〔普洱府〕思茅(思茅廳)、寧洱、他郎(他郎廳)、景谷(威遠廳)

〔元江州〕元江、新平

〔鎮邊撫彝廳〕瀾滄(鎮邊廳)

〔鎮沅廳〕鎮沅(鎮沅廳)

〔景東廳〕景東(景東廳)、緬寧(緬寧廳)

騰越道

〔永昌府〕保山、騰衝、騰越廳、永平、鎮康(鎮康州)

〔大理府〕龍陵、大理、雲南、洱源、浪穹、鳳儀(趙州)、鄧川(鄧川州)、賓川(賓川州)、雲龍(雲龍州)、彌渡(彌渡廳)

〔麗江府〕麗江、蘭坪、鶴慶(鶴慶州)、劍川(劍川州)、維西(維西廳)、中甸(中甸廳)

〔蒙化廳〕蒙化(蒙化廳)、漾濞

〔永北廳〕永北(永北廳)、華坪

〔楚雄府〕姚安(姚州)、鎮南、大姚、鹽豐

〔順寧府〕順寧、雲(雲州)

陝西省　三道九十縣

關中道

〔西安府〕長安(長安、咸寧)、咸陽、興平、臨潼、高陵、鄠、藍田、涇陽、三原、盩厔、渭南、富平、醴泉、同官、耀(耀州)

〔同州府〕大荔、朝邑、郃陽、澄城、白水、韓城、華陰、潼關(潼關廳)、華(華州)、蒲城、柞水(孝義廳)

〔商　州〕商(商州)、雒南

〔鳳翔府〕鳳翔、岐山、寶鷄、扶風、郿、麟遊、汧陽、隴(隴州)

〔邠州廳〕邠(邠州)、栒邑(三水)、淳化、長武

〔乾州廳〕乾(乾州)、武功、永壽

漢中道

〔漢中府〕南鄭、褒城、城固、洋、西鄉、寧羌、沔、略陽、佛坪、鎮巴(定遠廳)、留壩、鳳

〔興安府〕漢陰(漢陰廳)、磚坪(磚坪廳)、安康、平利、洵陽、白河、紫陽、石泉

〔西安府〕寧峽(寧峽廳)

〔商　州〕山陽、鎮安、商南

榆林道

〔榆林府〕榆林、神木、府谷、葭(葭州)、橫山(懷遠)

〔延安府〕膚施(延安)、安塞、甘泉、保安、安定、宜川、延長、延川、定邊、靖邊

〔鄜　州〕鄜(鄜州)、洛川、中部、宜君

〔綏德州〕綏德(綏德州)、米脂、清澗、吳堡

第二章　地形

支那には古來山海經、水經注の如き、漢書地理志、大明一統誌、大清一統誌の如き、省府縣志の如き、山河の地形を記述せるもの甚だ多く、是等に附屬せる地圖亦多しとす、近來歐米の地學者中支那内地を踏査するもの漸次に多く、其研究せる結果は吾人を裨益するもの少からず、茲に予の踏査せる結果と以上の資料とに基づきて中支那、南支那の地形を通覽するに南北地裂線即ち斷層線によりて之を印度支那山系、西部高原地帶、中央地溝帶、東部地壘帶、沿海山地帶に區別するを得べし、(第二版參照)而して是等の地帶中概して西方のもの高く順次東方のもの低し、更に各地帶に於ける山脈、山列等を列擧すれば印度支那山系には大雪山脈及雪嶺山脈あり、西部高原地帶には秦嶺山脈、漢中盆地、大巴山脈、巴蜀盆地、楚西山地、雲貴高原及桂湘山地あり、中央地溝帶には湖廣低地、瀟湘溪谷あり、東部地壘帶には淮山脈、贛西山地、五嶺山地あり、沿海山地帶には吳平野、皖南低地、江東山地、閩浙山地あり、而して秦嶺、淮の二山脈は所謂北嶺にして、雲貴高原の苗嶺、五嶺山地の主脈たる大庾嶺、閩浙山地の主脈たる仙霞嶺の三山脈は所謂南嶺なりとし、黃河と揚子江及揚子江と西江との兩分水界を形成す。

揚子江は北嶺と南嶺との間を西方より東方に流下す、其流域を源流、上流、中流、下流に分つことを得べし、錢塘江は沿海山地帶に屬する江東山地と仙霞嶺山脈との間を流る、西江、北江、東江は雲

貴高原並に五嶺山地に發源し、韓江、閩江、甌江等は閩浙山地に發源し、多くは横谷をなす。

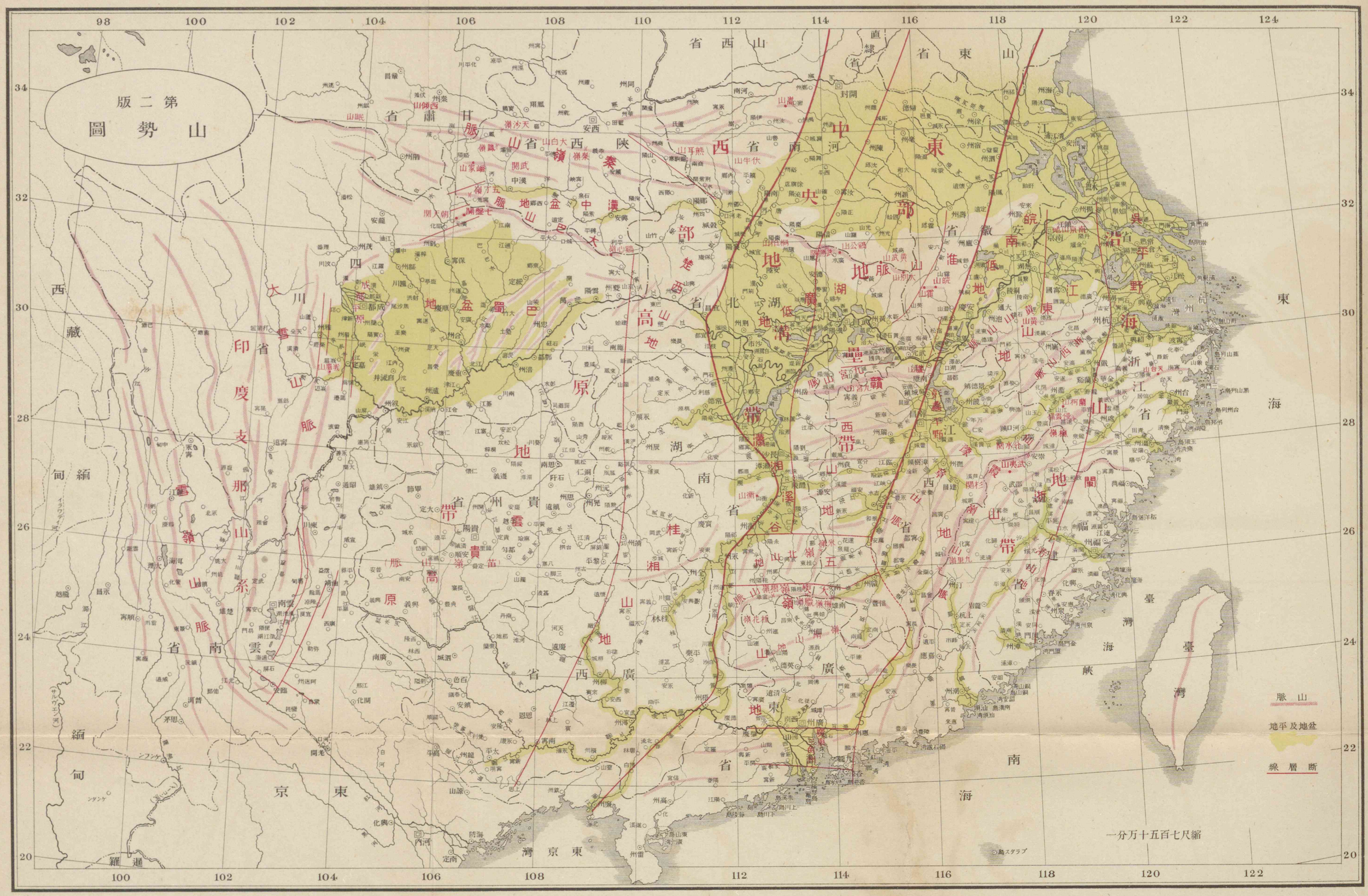
海岸線は揚子江口附近に於ては凹凸少なく、平地を以て海に臨むも、之より南方浙江省に於ては大小の彎入甚だ多く、福建省及廣東省に於ても亦大小の彎入ありと雖も、大なる彎入は主に小なる數多の彎入に分れ其狀甚だ複雜なり、其海岸は斷崖絶壁をなし沙濱稀なりとす、而して支那東海及南海の海底は甚だ淺く其百尋線は遠く海岸を離る。

一　山　系

(甲)　印度支那山系

印度支那山系は西藏及緬甸の國境より四川及雲南二省の西部に亙れる大山系にして、約南北に走れる數多の山脈より成り深谷其山脈間を縦走す、就中揚子江の上流金沙江と其西方の瀾滄江、潞江並にイラワヂ河の間を走れる山脈は、遠く南方印度支那半島に連亙するものにして之を雪嶺山脈と稱す、是れ印度支那山系の主要部なり。

金沙江と其東方の支流との間を走れる數多の山脈は之を總稱して大雪山脈又は雪嶺山脈と云ふ、本山脈は麗江、叙州間を流るゝ金沙江に横斷せられて南北に分たる、其北部は南部に比して著しく高峻なり、殊に大渡河以西、鴉礱江又は金沙江との間に於ては海抜四五千米、時に六千米に達し、該山脈を貫ける西藏街道の打箭爐、裏塘、巴塘等深谷中の都會に於ても尚海抜二千五百米乃


第二版
山勢圖
山脈
地平及地盆
斷層線
縮尺七百五十万分一

至四千米あり、大渡河以東岷江に至る間は斷層の爲に階段狀をなして東方に落下すと雖も、其高さ尙三千米乃至三千五百米あり、更に之より東方岷江の斷層谷に面する所は急傾斜の斷層崖をなし以て巴蜀盆地の西側を劃せり、嘉定の西方に崛起する峩眉山(海拔三千三百八十米)は此の如き斷層崖に聳ゆる靈山なり。

金沙江の横谷以南に於て本山脈は以北の如く高峻ならず漸次高原性を帶ぶるに至ると雖も其高さ海拔二千米に達し、之を東方の所謂雲貴高原に比するに著しく高し、且つ玆にも北方と同樣に南北に走れる山脈並に其間を走れる縱谷多し、牛蘭江、普渡河、龍川江、大姚河、九渡河は其中主なる縱谷にして大理の洱海並に雲南、臨安間の滇池湖、澂江湖其他數多の湖沼も亦縱谷中に生ぜるものとす。

(乙) 西部高原地帶

(イ) 秦嶺山脈

秦嶺山脈は崑崙山系より分派し約東西に亙れる大山脈にして黄河、揚子江間の分水山脈を形成し北方黄河の支流渭水に向ひては急斜し南方揚子江の支流漢江に向ひては稍緩斜す、秦の棧道と稱するは陝西省西安の西方寶鷄より漢中の西方沔に至る通路にして秦嶺山脈を横斷する所を云ふ、該通路に於て秦嶺山脈と寶鷄鳳間の天沙嶺、鳳、留壩間の鳳嶺留壩、沔間の武關を通ずる三山列より成り之を北列、中列、南列とす、就中北列(第三版甲參照)は甚しく北に偏するも本山脈の

主脈にして渭水の南方を走れる分水嶺を形成し西方甘肅省秦州の西傾山に至り東方西安の南方に亙る、其高さは天沙嶺に於ては鳳嶺(海拔二千二百四十米と云ひ或は千八百八十七米と云ふ)より約三百米低きも之より東方に崛起する大白山(海拔三千三百五十米)及秦嶺は本山脈中最も嶮峻の地なり、中列は鳳嶺と其西方徽との間に於て、南列は沔及褒城の北方に於て嶮峻にして其高さ海拔二千米乃至二千五百米に達し就中南列は沔の北西方に於て漢江の水源地たる嶓冢山を興すこと雖も、是等を北列に比すれば概して低く且つ嘉陵江及漢江の支流に貫かるゝ所多きを以て北列の如く連綿として連續せず。

本山脈は西方に於ては甘肅省岷州に至りて黄河の支流姚河並に嘉陵江の支流白水の溪谷に斷たれ以て崑崙山系の岷山より分たれ、東方に於ては西安の南東方商州より湖北省襄陽に通ずる丹江の溪谷に斷たる、丹江の斷層谷の東方に於ては熊耳山及伏牛山(海拔二千四百米)を興起し伏牛山の北方には五山の一たる嵩山(海拔二千四百四十米)崛起するも其東方は地溝帶に至りて斷絶し河南平野となる。

(ロ)　漢中盆地

漢中盆地は秦嶺山脈と大巴山脈との間に介在する狹長なる盆地にして兩山脈の間を縱走する漢江に沿ひ約東西に延長す、而して漢江、嘉陵江間の分水嶺は該盆地の西端を圍み楚西山地は其東側を繞れり、盆地内の漢江と其支流との合流地に沖積平地形成せらる、漢中附近、石泉附近及

興安附近の平地は其主要なるものに屬し就中漢中附近の平地は西は沔より東は固城を經て洋に至り其延長約三百支那里に達し海拔約五百米の高處に位す、俗に漢中盆地と稱するものは即ち此平地にして三國時代の史蹟を以て著名なり。

(八) 大巴山脈

大巴山脈は又九龍山脈と稱し巴蜀盆地と漢中盆地との間に介在する山脈なり、本山脈は西北西より東南東に走り巴蜀盆地に向ひ緩斜し漢中盆地に向ひ急斜す、其高さ千米乃至二千米あり、蜀の棧道と稱するは四川省廣元より陝西省漢中に至る通路にして大巴山脈を横斷する所を云ふ、蜀棧道に於ける大巴山脈は南列及北列の二山列より成る、南列は廣元、寧羌間にあり、朝天關及北盤關の二嶺其上に崛起し海拔約千米とす、北列は寧羌、沔間にあり、五丁嶺其上に聳え海拔千二百米とす、(第三版乙參照)該二山列の方向は東北東より西南西に走り以て大巴山脈の一般の方向と異れるは是れ廣元、寧羌、沔の三箇所に衝上斷層露はれ大巴山脈を貫けるか爲なりとす、而して該二山列は西方に於ては嘉陵江及其支流白水の溪谷に斷たれ其連續甚だ明かならざれども一般の方向に從ひ西北西の方向に亙るが如し。

蜀の棧道より東方に於ける大巴山脈の主脈は四川、陝西省界に沿ひ東南東に走り海拔二千米の峻峰崛起す、夔州の北方鷄心嶺に至りては約千六百米となり之より東方湖北省内に入りては斷層の爲に斷絶す、而して其東方に露はるゝ楚西山地は北々東より南々西に亙れり、鷄心嶺は四

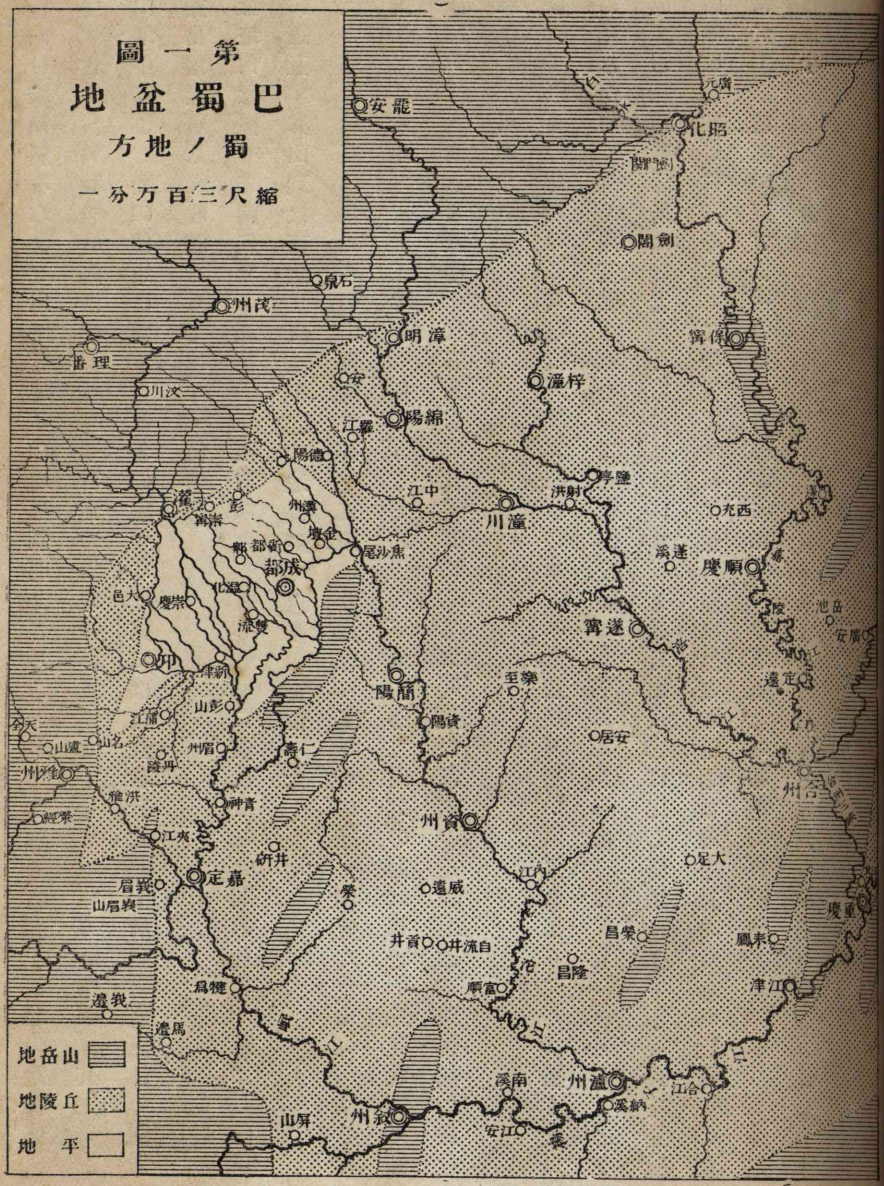
川省巫山より大寧河の深谷に沿ひ陝西省興安に通ずる街道上にありて大巴山脈の主脈中の一嶺なり、之より北方興安並に南方巫山に至る間西北西より東南東に連亙する山列多し。

（二）楚西山地

楚西山地は夔州、宜昌間に介在する千米乃至千五百米の隆起地にして北々東より南々西に走り北々東襄陽方面に至りて漢江に斷たれ南々西鶴峰より更に湖南省西部に連續し沅江の溪谷に達す、概して石灰岩の高原にして第三版丙參照揚子江の此山地を貫く所峽谷を成す、之を三峽と稱す、本山地は北支那に於ける南口山脈と其地貌並に地質構造に於て相似たる所あり、共に斷層線に面する高原の邊緣にして其東方は撓曲斷層の爲め陷落せり、故に本山地は之を宜昌方面即ち地溝帶の低地より見る時は一大山脈の如し、而して本山地は其南方に於ける桂湘山地と共に北支那の大行山脈に倣ひて之を楚桂山脈とするを適當とせん。

（ホ）巴蜀盆地

巴蜀盆地は高原地帶に於ける所謂赭色盆地にして嘉陵江の東にある巴及其西にある蜀の地を包括す、其外劃四邊形をなし夔州、雅州を通ずる線は其東西の對角線に相當し約經度六度半に連り叙州、廣元間は約南北の對角線に該當し緯度約五度半に亙る、而して大雪山脈其西方を、大巴山脈其北方を、楚西山地其東方を、雲貴高原其南方を劃し、是等の山地は其高さ千米乃至二千米、時に三千米に達す、其中大雪山脈は盆地に向ひ所謂斷層崖をなし甚だしく急斜し、其他の山地は盆


第一圖
巴蜀盆地
蜀ノ地方
縮尺三百万分一
地岳山
地陵丘
地平

地に向ひ緩傾斜をなすを以て盆地との境界判明せざること多しと雖も、概して盆地の邊緣部には中生代の含炭砂岩層露はれ海拔六七百米の山地を形成す、就中盆地の北方劍門關は其邊緣部の山地中に位し蜀の棧道に通ずる著名の險要なり、玆には含炭砂岩及其上層の鐵岩露はる、鐵岩の露出地は著しく嶮峻なりとす(第一圖參照)

盆地內は概して緩斜せる赭色の丘陵地なりと雖も所々に狹長なる山列あり北々東より南々西に連亙す、其山列は嘉陵江以東の巴の地に多く以西の蜀に少なし。

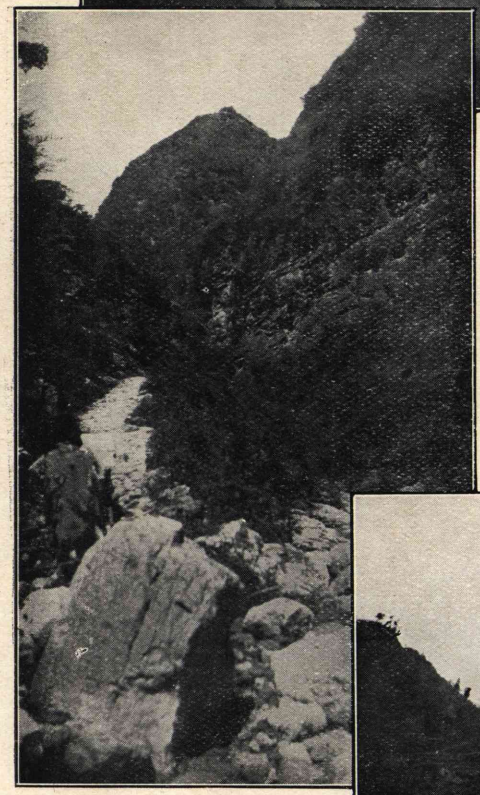
巴の地に於ては約五六の山列あり、其中重慶より綏定に亙るもの最も顯著なり、山列の高さは海拔五六百米即ち揚子江畔よりも高きこと約三四百米にして山列の間は赭色の丘陵地なり、蓋し該山列は含炭砂岩及中生代石灰岩の背斜部にして山列間の赭色の丘陵地は其向斜部に於ける赭色砂層地なり。

嘉陵江以西の蜀の地に於る山列は其南部の永川、榮昌、叙州及榮の附近に散在すること雖も、巴の地に見るが如く長く連亙せざるを以て赭色の丘陵地廣く其高さ海拔三四百米なり、而して之を構成する赭色砂岩層は砂岩及頁岩の互層にして其砂岩は頁岩に比し侵蝕に堪ふるを以て丘陵の山側は數多の段階をなし之を遠望すれば恰も階段狀をなせる耕地を見るが如し、巴の地の北部に於ては成都の東方に一山列あるのみにして一望廣漠たる赭色の丘陵地たるのみならず之を貫流する河流に沿ひ大なる平野あり、就中岷江及涪江の上流に亙れる成都平原は其延長七十

第三版

高原地帶

（甲）秦嶺山脈の天沙嶺及秦棧道
（陝西省鳳嶺より北望）



（乙）大巴山脈の蜀棧道
（陝西省甯羌大安間）

（丙）楚西山地の石灰岩高原
（湖北省宜昌縣秦家河）

哩、幅員三十哩と稱し四川省中最も肥沃の地なり、嘉陵江上流の保寧附近の平野並に涪江上流の綿の平野は其大さ成都平原に次けり。

（ハ）雲貴高原及桂湘山地

雲貴高原　は雲南省東半より貴州省の全部及廣西、湖南、四川四省の一部に亙れる高原地を總稱す、雲南省中部は時に同高原地中に包括せらるゝことあれども同地は雲南省の西半と共に約南北に走れる印度支那山系に屬し雲南府の東方曲靖附近に於て急に低下し之より東方に於て廣漠たる雲貴高原となる、本高原は概して西部に高くして東部に低く雲南省城より貴陽に亙れる約東西の地域は其脊梁なり、其南方斜面に苗族の居住するもの多きを以て之を苗嶺山脈と稱す、此山脈の北斜面は揚子江の支流たる涪陵江及沅江の流域に屬し、其南斜面は東京灣に注入する紅河並に南海に流下する西江の流域なり、而して高原の高さは雲南省の東部には約二千米、貴陽に於て約千百米となし北斜面は四川省界地附近に至る迄極めて緩斜し之より巴蜀盆地に向ひ少しく急に斜下す、南斜面は廣西省界附近に於て南方に向ひ急斜し之より南方に於ては僅に海拔六七百米の高原となり、西江の本流及數多の支流之を貫けり。

桂湘山地　は廣西省南寧より柳州、懷遠を經尚ほ北方に走れる斷層線に據り雲貴高原より分たれたる地體にして東方地溝帶に向ひ急斜す、其高さは西方の雲貴高原に比するに著しく低く一小地壇を形成す、該地壇は之を北方に追跡すれば沅江の溪谷を介して楚西山地に連續し、之を

南方に追跡すれば東京灣に瀕する廉州地方の山地に連續す、而して桂湘山地は楚西山地と同じく起伏多く、其隆起せる處は下部古生層の背斜層に該當し其間には其上部に向斜層をなせる石灰岩露出す、湖南省安化より溆浦、辰谿に亙る地方、五岳の一なる衡山より桂林の北方に亙る地方の如きは其隆起地の著しきものにして、新化、寶慶、桂林附近に於ては石灰岩の向斜層著しく露る、就中桂林附近に於ては高原を貫ける縱谷に石灰岩の奇峰列を成し極めて特異の地貌を呈す、(第四版甲參照)蓋し桂湘山地及楚西山地は共に斷層線に據りて分たれたる高原地帶の東緣たるに拘らず楚西山地は巴蜀盆地の東に隆起し桂湘山地は雲貴高原の東に陷落するものにして斷層線以東地體の歪動を示すものなり。

(丙)　中央地溝帶

中央地溝帶は湖廣低地より北方北支那の河南、直隸の平野即ち中原の地に連なり其南方は瀟湘溪谷に終る、然りと雖も南方には更に廣西省を通じて東京灣に連るが如し、蓋し本地溝帶の北方に於ては陷落甚しく地形の差異從て著しきも、南方にありては之に反し陷落少きを以て地形上著しき特徵を認むるに難し。

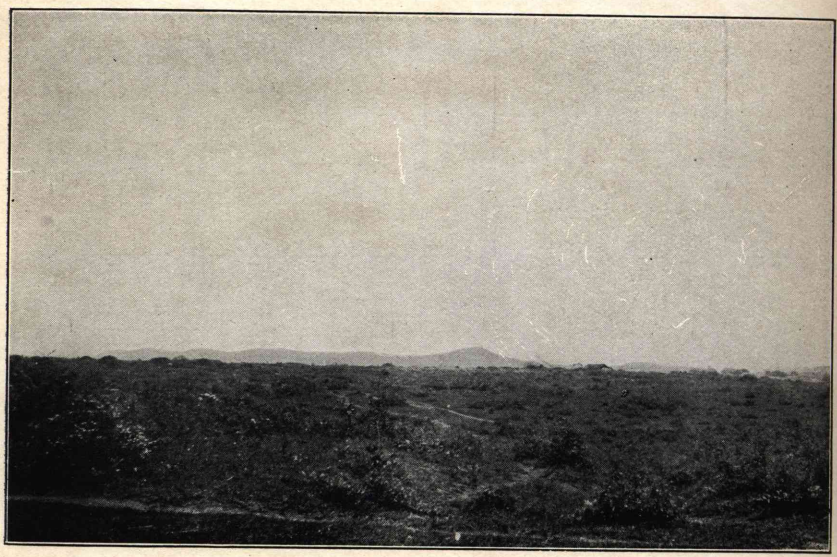
(イ)　湖廣低地

湖廣低地は湖北、湖南二省に跨り揚子江本流其中央を貫き漢江其北部を灌漑し洞庭湖其南部を占む、本低地は地溝帶內のみならず更に東方地壘帶內に向ひ楔狀に彎入するを以て著しく廣

第四版

高原地帶及地溝帶

(甲) 桂湘山地の石灰岩山列
(廣西省興安縣鬱塘)



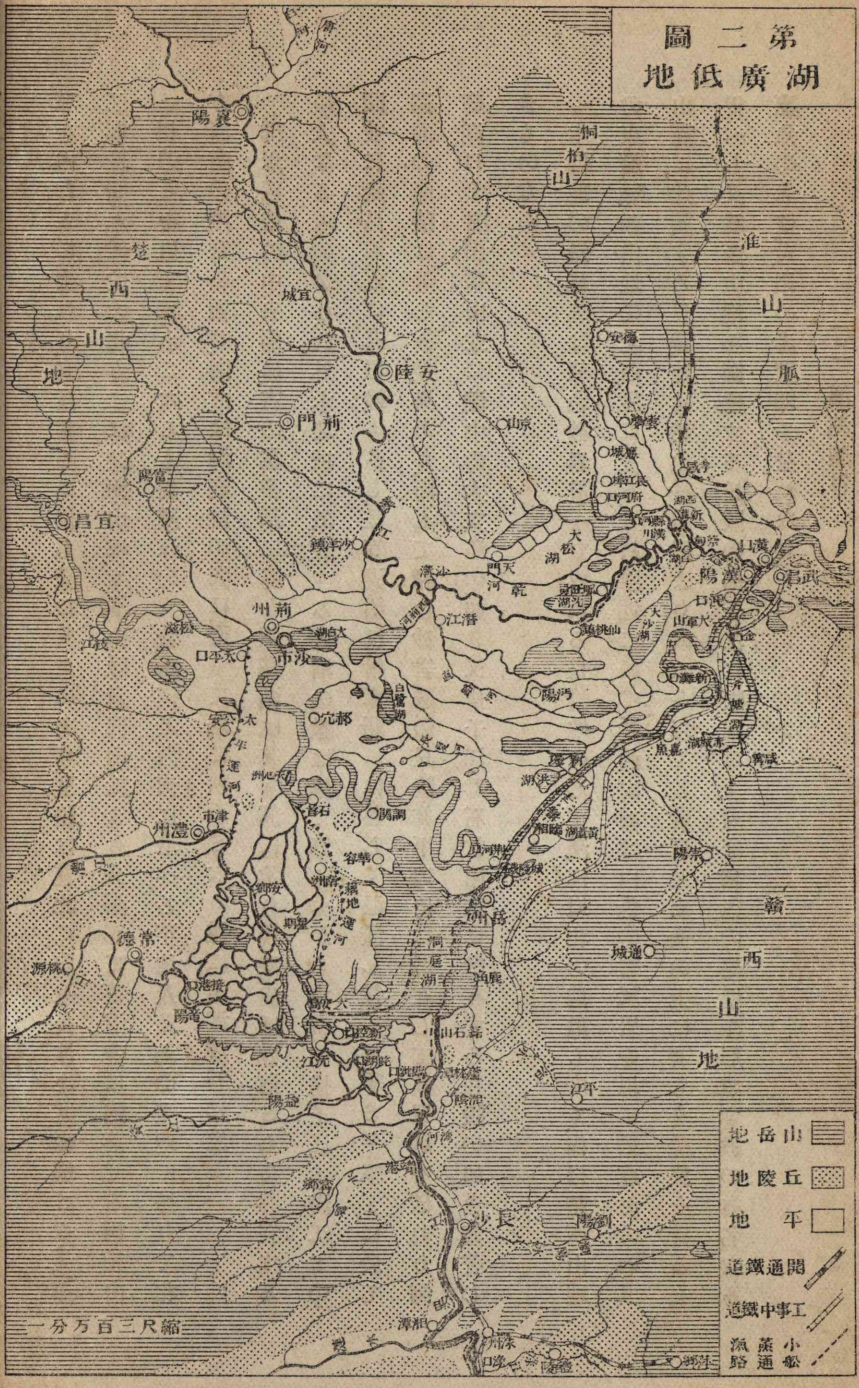
(乙) 瀟湘溪谷に於ける赭色砂岩層の臺地及其中の地塊
(湘南省攸縣廣家舖)

域を占むるに至れり、宜昌其西に位し漢口其東にあり、襄陽は其北に當り長沙を其南端となす、(第二圖參照)本低地の北方には楚西山地と淮山脈及同山脈より分離して地溝帶に陷落せる桐柏山とに相迫るを以て狹小となるも尙漢江の支流唐河及白河に沿へる平地及黃土の臺地に據りて北方河南の平野に通じ、南方は洞庭湖の南に至りて急に狹小となり遂に瀟湘溪谷に至る。

抑本低地の中央部は古の雲夢澤に屬し洞庭湖は其南部に當り現時尙ほ湖沼として存在する最大なるものなり、此外本地域に散在する湖沼の數は擧て算ふべからず、就中揚子江と漢江との間、並に武昌附近に其數最も多し、是等湖沼は增水期には甚しく氾濫し從て夏季と冬季とに於て湖面の面積に著しき差異あり、而して赭色砂岩層の丘陵其平地內に散在して其單調を破れり、洞庭湖口の君山、扁山並に湖中の大安島の如き又揚子江畔石首附近に散在する丘陵の如き其著しきものなり、

本低地の邊緣部は赭色砂岩層より成れる丘陵地にして漢江以北の地最も廣く、尙ほ楚西山地の東麓、贛西山地の北西麓に亙る、宜昌附近に於て楚西山地は白色の石灰岩を以て構成せられ其山麓に連續する丘陵地は赭色砂岩層より成るを以て其地形及風光の上に著しき差異を認るを得べし、又贛西山地を圍繞する丘陵の揚子江に斷たるゝ所は赭色の絕壁を形成す、彼の有名なる嘉魚の赤壁、黃州の赤壁即ち是れなり。

(ロ) 瀟湘溪谷



第二圖
湖廣低地
山岳地
丘陵地
平地
開通鐵道
工事中鐵道
小船蒸通路
縮尺三百万分一

瀟湘溪谷は湖廣低地の南に方り其幅員著しく狹小なり、本溪谷は主に赭色砂岩層の丘陵他にして(第四版乙參照)平地は僅に之を貫流する河畔に沿へるに過ぎず、而して衡州、常甯、永州地方に於ては河畔の平地頗る狹小となれり。

本溪谷の西側をなす山地は衡山より廣西、湖南の省界に連れる桂湘山地にして其東側をなすものは贛西山地及廣東、湖南省界をなす大庾嶺山脈なり、此兩山岳地間に介在する地溝帶は永州に至りて著しく狹隘となる、更に南方に之を追跡するに瀟湘溪谷は湘江の本流よりも寧ろ其支流の瀟江に沿ひて南方に亙れるが如く、廣西省賀江の溪谷は本地溝帶の連續と考ふるを得べし、梧州より北流江及南流江に沿ひ廉州に亙れる線路は恐らく此地溝帶に連續するなるべし。

(丁) 東部地壘帶

東部地壘帶は前述の中央地溝帶と沿海山地帶との間に約南北に延長し湘江、贛江の二水其兩側を劃す、蓋し地質構造上二水は斷層谷に相當し、二水間に介在する本地帶は一大地壘帶に屬するものとす、本地壘帶を分ちて淮山脈、贛西山地及五嶺山地となすを得べし、淮山脈と贛西山地との間は揚子江本流之を分ち、贛西山地と五嶺山地との分界は前者の如く著しからざるも江西省萬安より湖南省酃に至る斷層線之を劃す、該斷層線より南方の地は之を北方の地に比すれば急峻なる山岳地を形成す。

(イ) 淮山脈

淮山脈は淮河、揚子江の分水界を形成し約東西に走り高さ海抜七八百米あり、湖北、河南、安徽三省の界をなせる大別山(第二版參照)より湖北、河南省界をなし黃武山を經て信陽州の南方鷄公山に連る、鷄公山に於ては海抜六百米あれども其西方京漢鐵道沿線附近に於ては急に低く其武勝關の頂上に於ては海抜僅に二百十九米あるのみ、之より山脈は斷層に據りて地溝帶に向ひ陷落し桐柏山に於て多少隆起するも漢江の支流唐河及白河の流域に至りて絶ゆ、翻て三省の界をなせる大別山の東方に於ては本山脈は淮河の支流淠河の斷層谷に斷たるゝも更に再び其東に連りて霍山及皖山を興せり、而して桐城、廬州を通ずる斷層は其東方を南北に走り本山脈茲に全く斷絶す、本山脈は之を揚子江岸の平地より遠望する時は甚だしく崛起す、而して之れより流下する河川には大河なく其溪谷は概して狹小にして急斜し其地貌は高原性を有するものゝ如し(第五版甲參照)

桐柏山、鷄公山、霍山、皖山は本山脈中の名山なり、鷄公山は中支那に於ける避暑地にして江西省廬山と幷び稱せらる、霍山は嘗て之を五岳中に算へ南岳と稱せられたることあり、皖山は又潛山と稱し霍山の東に接す、安徽省北部即ち皖北の靈地にして其高さ海抜七百十米あり其南側の天堂に寺院多く皖南の黃山と並稱せらる。

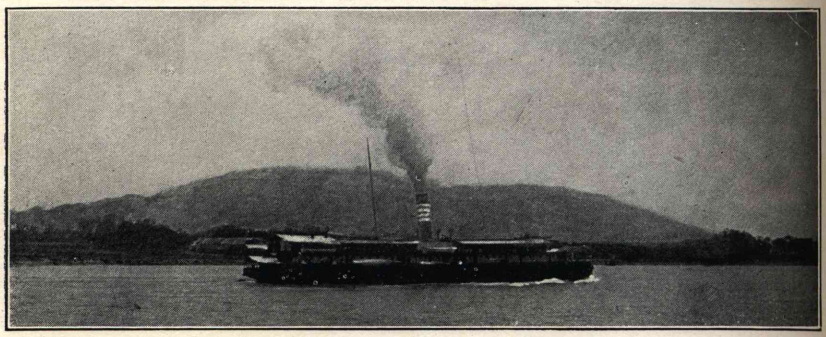
(ロ)　贛西山地

贛西山地は南北に延長せる地壘にして西方は湘江に東方は贛江に劃せられ、北方は揚子江に

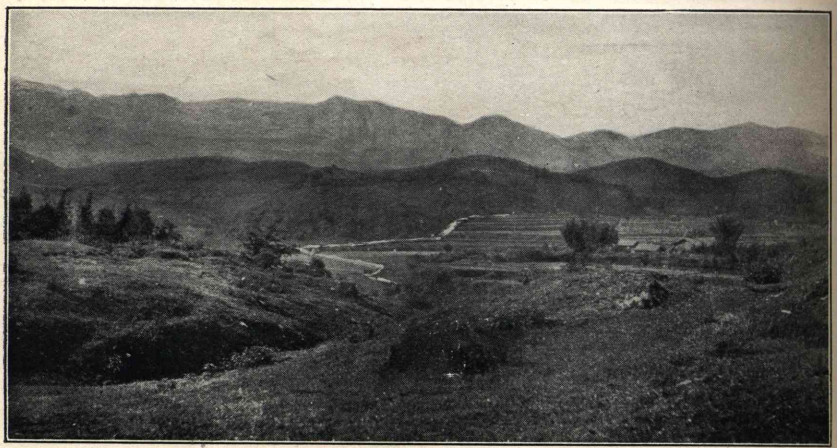
第五版

東部地壘帶

(甲) 淮山脈の鷄公山(湖北省)



(乙) 贛西山地の廬山(江西省)



(丙) 大庾嶺山脈の梅嶺(廣東省)

よりて斷たる、而して其南方は五嶺山地に接す、其五嶺山地に接する所は萬安贛間の斷層線にして其北方の陷落したるものなり。

本山地は約東西に走れる數多の山列を形成す、北方洞庭湖、鄱陽湖間に介在する地方に於て最も高く之を九宮山脈と稱す、九宮山脈は通山の南方九宮山に於て最も隆起し湖北、江西省界を成し、東方に漸次低下し再び九江の南方廬山に至りて隆起し鄱陽湖に斷たる、高さは、九宮山に於て約千五百米、廬山に於て約千三百米あり、共に此地方に於ける名山なり、(第五版乙參照)其他の山列は九宮山脈に並走するもの多く、溪谷亦是等山列の間を縱走す、即ち九宮山脈の北に陽新(興國州)及大冶の山列あり、其間の溪谷甚だ廣く其一部湖沼をなすもの多し、九宮山脈の南には、袁江の縱谷に至る間に義寧の南、瑞州の北及南に約三列の山列あり、袁江の南に亦、約二列の山列あり、其間の溪谷は九宮山脈以北のものゝ如く廣からざるも縱谷多し、其高さは袁江の北に沿へる山列に於て最も低く海拔二三百米とし、其他の山列に於て高さ三四百米時に五百米に達す。

(ハ) 五嶺山地

五嶺山地は廣東、江西及湖南の三省に跨れる山岳地にして水經注に所謂五嶺は皆此内にあり依て之を五嶺山地と稱せり、其主脈は廣東省と江西、湖南の二省との省界地をなす、廣東省韶州より江西省南安に通ずる峠を大庾嶺又は梅嶺と稱するを以て古來本山地の主脈を大庾嶺山脈と稱す、(第五版丙參照)大庾嶺は五嶺の第一嶺なり、其北方を嶺北と稱し、其南方の北江流域を嶺南と

稱す、茲に大庾嶺より其東に連れる主要なる嶺を列擧すれば韶州、汝城（桂陽間の臘嶺、武水の上流樂昌、宜章間の摺嶺（或は騎田嶺ともいふ）臨武、連州間の桂花嶺、江華と連山又は富川との間の山嶺是なり、本山脈は前述梅嶺、桂花嶺間には約東西に走り梅嶺より東方に於ては桃江の對岸に興起して長甯に亙り遂に東江に斷たる、而して桂花嶺より西方に於ては本山脈は瀟江の溪谷に至りて斷絶するも桂花嶺より南々西に於ては九疑山、姑婆山の如き花崗岩の峻峰崛起し賀江の東側に沿ひ連亙す、本山脈は其高さ平均千米以上なりとし嶺南より江西、湖南二省に至る主要なる道路の通ずる所は海拔僅に三四百米に過ぎず。

嶺北の山岳地は東西に走れる斷層に據りて其南北を斷たれ以て大庾嶺山脈並に贛西山地より分たる而して數列の山列より成る、其山勢は約南北にして地層も亦約南北の層向を有す、其高さは江西、湖南の省界をなせる山列に於て最も高く海拔千四五百米に達し、桂東より酃に通ずる路上の米嶺に於て海拔千二百五十九米に達す、其他の山列は漸次東方及西方に至るに從ひ低し。

嶺南の山岳地は急峻にして漸次南方に至るに從ひて低く、其山勢は約東西なりとす、而して該山地の東部は東江、中部は北江、西部は綏江及賀江の深き溪谷によりて貫かるゝと雖も其山脈を追蹤することは困難ならずとす、主要なる山脈二あり、一は江西省龍南、廣東省連平間に於て桃江、東江間の分水山脈をなし古生層の褶曲層より成る、中腹以上に赭色砂岩層に屬する厚き蠻岩露はれ海拔七八百米の奇絶の秀峰を形成す、本山脈は連平の北方より西南西に延び英德の北方に於

て北江及連州江に貫かるゝも、再び陽山の南方に隆起し高さ七八百米あり、遂に賀江の斷層谷に斷たる、他の一は東江の龍門の北方より起り、佛崗に亙り其の西に於て北江に貫かるゝも、再び其西方に連りて尙廣西省廣甯附近に亙り、其高さ五百米に達するもの多し、此外其南方に廣東より東江の北側に沿ひ惠州に亙れる小山脈あり、其高さ三百米ニす、東江及西江の南方にも亦一列乃至二列の小山脈あり、山勢は約東西に亙り高さ四五百米あり、而して是等の山岳は花崗岩より成るもの多く其方向の約東西に走れるは東西斷層によりて斷たるゝに據るなるべく、廣東より惠州に至る間の東江及廣東より三水を經て肇慶に至る間の西江及新會を貫く新會河の流路並に香港水道は此の如き斷層線を示すものニ見るを得べし、嶺南山地を貫ける東江、北江及西江は其下流に於て一大三角洲を形成す之を廣東三角洲ニ稱す（第六圖參照）

（戊）沿海山地帶

沿海山地帶は東海、臺灣海峽及南海に面する沿海地域にして浙江、福建の二省の全部、江西、廣東の二省の東部及江蘇、安徽の二省の南部を占め、北方及北西方は揚子江及贛江を以て限らる、其山勢は中部に於ては北東より南西に走るニ雖も北東に至るに從ひ次第に東西に近く南西に至るに從ひ南北に向ひ以て北西方に凸面を有する弧狀山脈を形成す、江西省樂安河の斷層谷ニ浙江省錢塘江の縱谷ニ據りて之を二帶に分つ、內帶は閩浙山地にして外帶は江東山地なり、閩浙山地は之を仙霞嶺山脈、下游山地及豫章山脈の三ニし、江東山地は之を黃山々脈、浙西山脈、南京山地

の三ミす、仙霞嶺山脈は褶曲山脈に屬し、下游山地は解析高原の地貌を呈し、江東山地は褶曲山脈に屬する數列の山列より成る。

（イ）閩浙山地

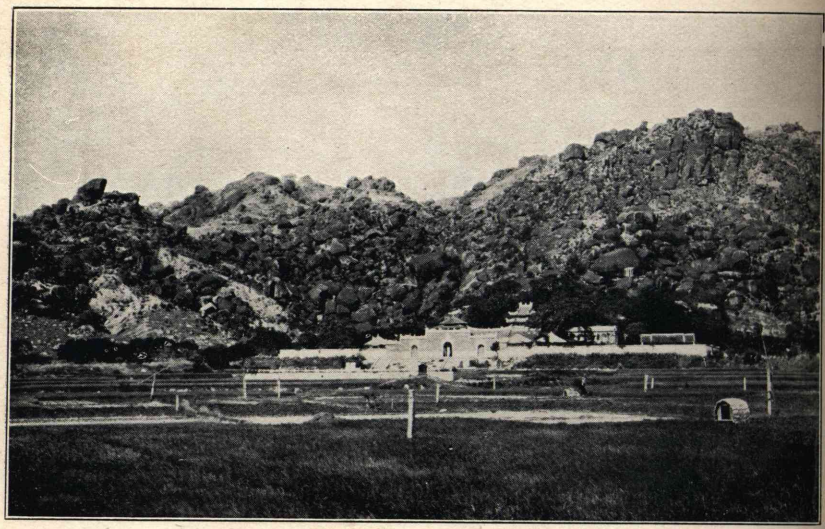
仙霞嶺山脈　は福建、江西二省界に於て最も隆起し贛江及錦江ミ閩江ミの分水嶺を形成す、所所に浸蝕の爲めに生ぜる稍低き鞍部ありて江西、福建二省を連ぬる通路をなせり、江西、福建、浙江の三省界には仙霞嶺又は楓嶺あり、鉛山、崇安間には分水關あり、邵武、建昌間には杉關あり、其北東に武夷山あり、汀州、瑞金間には九里嶺あり、共に本山脈中の名山にして殊に武夷山を以て其隨一ミなす蓋し本山脈の高處は千五百米乃至二千米に達すべく、其山側は外帶たる江西省に向ひ山側急斜し溪谷廣くして淺く、內帶即ち福建省に向ひては山側緩斜するも之を穿てる溪谷は峽谷なり、主脈は汀州の九里嶺より其山軸南方に延びて廣東省內に入り、漸次低下し東江、韓江二流の分水界をなす、之より南方の海上約百五十哩にある「プラタス」島は支那南海に於ける隆起地を示すものにして或は仙霞嶺山脈の海中に伏隆するものにあらざるか、翻て浙江省內に於ける本山脈を見るに仙霞嶺より衢州の南方侵雲嶺附近に至る間八九百米の高さを有するも之より東方には甚だ低下して五六百米ミなる、而して本山脈は錢塘江ミ甌江及椒江ミの分水嶺を形成し、象山半島に至りて海中に斗出す、臺州の北方に聳ゆる天臺山は即ち本山脈中の名山なり。

下游山地　は韓江ミ閩江の支流たる大溪及建甯水並に甌江の支流たる沙溪ミを以て仙霞嶺

第六版

沿海山地帶

(甲) 安徽省黃山々脈の黃山



(乙) 福建省厦門南普陀

山脈より分たる、其地貌は概して高原性にして閩江の横谷に據りて二分せらる、其北東部に於ては主に石英斑岩より成り解析高原を形成し、其南西部には北々東より南々西に走れる二三の山列より成る、就中龍岩、南靖間より北東方は大田、尤溪並に延平に通し、南西方は平和附近に亙れる古生層の褶曲山脈及石英斑岩の山脈を最も顯著とし其最高所に於て約千二三百米あり、而して本下游山地の海に面する地方即ち厦門より福州に至る地方は花崗岩地にして特異の地貌を呈す(第六版乙參照)

豫章山脈　は江西省の南東に位し仙霞嶺山脈に併走する三山列より成り山列の間に縱谷及狹長なる盆地を有す、本山脈は贛江、旰江、錦江及樂安河の溪谷に斷たるゝを以て連綿として連亙せずと雖も三山列は旰江、贛江間に最も良く露はる、瑞金、雩都間より建昌に至る山列、雩都、贛州間より撫州に連なるもの及贛州、萬安間より豐城の南に亙る山列即ち是なり、此外旰江、錦江間並に錦江、樂安河間には各二山列あるのみ、而して是等山列の高さは南東のものには六七百米あれども北西方に至るに從ひ三四百米となる。

本山脈を貫ける前述河流の縱谷には之に沿へる盆地ありて其中主要なるは錦江上流の興安盆地、旰江の撫州盆地、贛江及其支流に沿へる吉安、贛州、興國、雩都、會昌の盆地なりとす、而して是等河流は其下流地に於て會流し其合流地に豐饒なる大平野を形成し平野の北方には鄱陽湖を滙ふ、此平野を彭蠡平野と稱す(第五圖參照)

（ロ）江東山地

江東山地は江西省樂安河及浙江省錢塘江の衢溪及金華溪に據りて仙霞嶺山脈と分たれ揚子江は其北方を限る、本山地は古生層の褶曲山脈より成り、之を浙西山脈、黃山々脈、南京山地に分つ。

浙西山脈　は安徽、浙江二省に跨り數多の山列より成り其間に狹長なる盆地を有す、其山列の主要なるは開化、婺源間より二省界に沿ひ北東方遂安、徽州間及昌化、於潛地方に亙れる山列、衢州の北方にある海拔千二三百米の雷公嶺より嚴州附近に亙る山列、婺源、景德鎭間より徽州附近に亙るものとす、盆地の主要なるは遂安より淳安に亙るもの並に徽州を中心として之より北東方は績溪に、南西方は休寧及祁門に亙るものとす。

黃山々脈　は徽州の北方黃山より祁門、建德間の櫸根嶺に連亙し、南西方は鄱陽湖畔に斷絕し、北東方は寧國、廣德の南を過ぎ太湖畔に陵夷す、黃山は本山脈の盟主にして寧國の平野と徽州盆地との間に聳へ其高さ約千二百米ありて江南第一の靈山と稱す、山上には花崗岩の山峰嵯峨として聳え、靈泉其間に湧出し大刹又玆に在り、大通鎭及徽州より玆に登山するもの甚だ多しと云ふ（第六版甲參照）

南京山地　は南京より鎭江に亙れる低き山列にして東西走す、揚子江は其北麓を縱走し太平より常州に亙れる平野其南に控え、其高さ僅に三四百米に過ぎず、南京の紫金山は本山地中の第一峰なり。

第三圖
吳平野
縮尺三百万分一
阜寗
浦江清
安淮
洪澤湖
城鹽
運河
高郵湖
興化
台東
大
沙
鄭高
陵宜
仙女廟
泰州
塘曲
安海
揚州
儀徵
阜如
塲馬
港屈
蒲包塲石
口浦
浦江
京南
鎮江
港黃張
泰興
沙金
塲四
陽丹
港清
州通
山猴
角門廟
容句
州常
陰江
海門
和
壇金
水溧
湖湯長
錫無
熟常
崇明島
北分道
太千
橋和
北水道
南水道
石臼湖
燕湖
湖城固
高淳
陽溧
湖溧
興宜
太
州蘇
滬
倉太
浦黃
海上
湖西洞庭山
江松
陵南
南湖灣
國寗
州湖
湖菱
鎮烏
嘉興
湖平
德廣
浦仁
門石
峽
鄉桐
塘捷
高塍
塩海
寗塩
浦瀝
杭州灣
橋虹洪
州杭
山塞白
湖滆
山蕙
陽宜
浦臨
興紹
峽曹
姚餘
河運上
海鎮
波寗
盧桐
暨諸
地山岳
地丘陵
地平
道鐵通開
道鐵中事工
路通鹽蒸小
四九

（八）皖南低地

皖南低地は安徽省の中央に位し、揚子江畔の平地を云ひ、北は廬州の北に於ける丘陵地により て淮河の平野と分たれ南は直に黄山々脈に接す、本低地には揚子江の北方に沿ひ孤立せる低き丘陵ありて略東西に亙り、揚子江南に於ける江東山地の山列と併走す、其丘陵の北には湖沼多く巢湖は其著名なるものとす。

（二）吳平野

吳平野は江蘇省の大部及浙江省北方の一小部に跨れる大平野にして、西は鎭江より東は海に至り北は淮河及老黄河の平野に連なり南は杭州灣に至る、揚子江其中央を横斷し爲に南北の二部となる北部は廣漠たる平野にして通州に近き狼山に於て高さ四五十米の丘陵を見るのみ、南部は揚子江と杭州灣との間に介在する地方にして東海に斗出せる半島狀をなし其形正三角をなす(第三圖參照)太湖其他數多の湖沼は鎭江、蘇州、杭州の附近に亙りて散在し、大運河は鎭江より太湖の東を迂回し嘉興に於て上海より來る運河と合し杭州に至りて錢塘江畔に達す、此外尙小運河各地に少なからず、之を要するに吳平野は河川の氾濫すること少く地味肥沃にして水田廣く連り桑田相望み支那第一の生産地たり。

二　水系

(甲) 河流 (第七版參照)

(一) 揚子江水系

(イ) 源流及上流

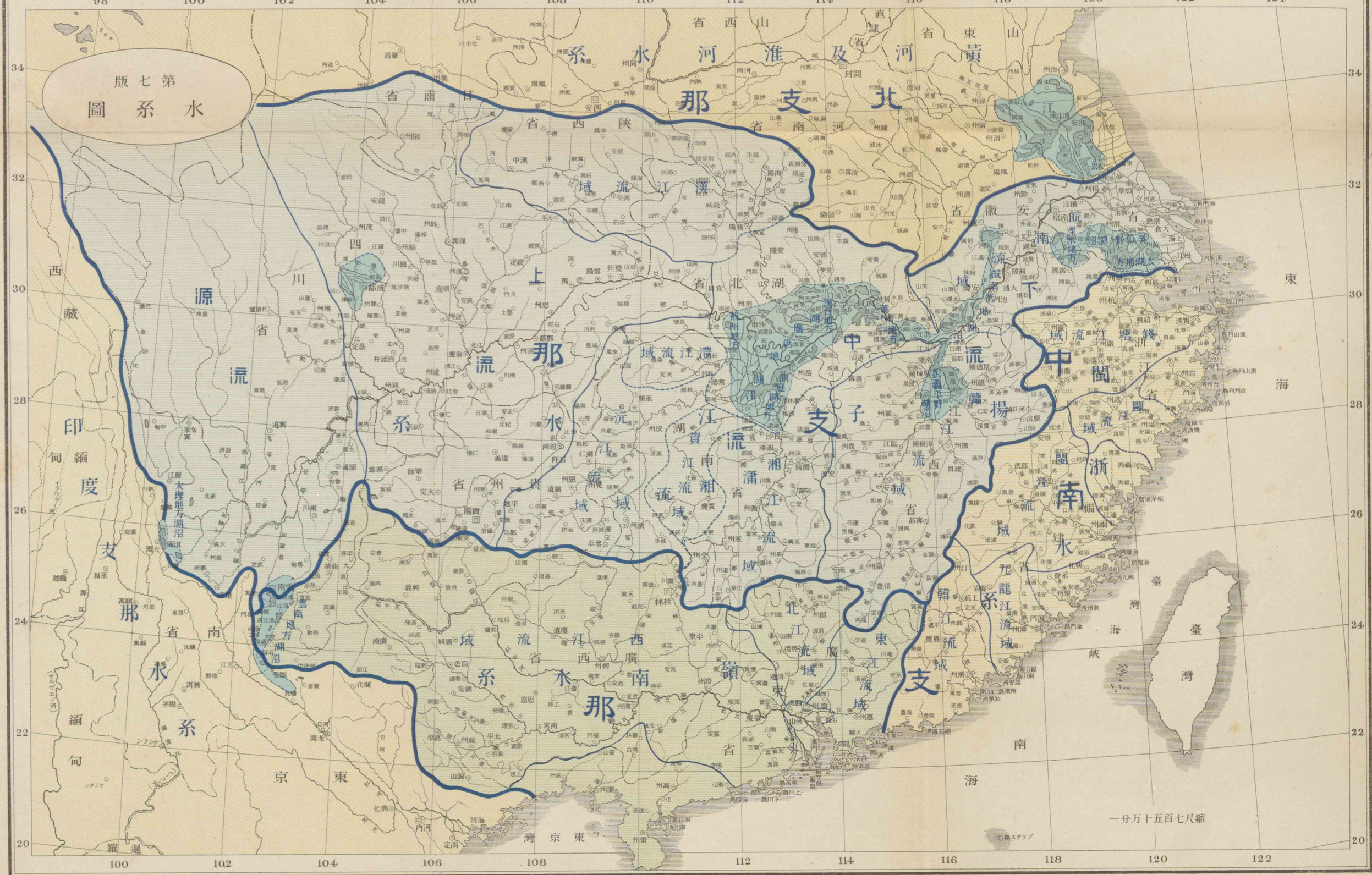
源流　揚子江は西藏高原の北側に發源し當拉山及巴顏喀喇山脈の間を東流し四川省に入りて大雪山脈と雪嶺山脈との間に沿ひて急に南方に向ふ之を金沙江と云ふ、之より四川省巴塘を過ぎ雲南省の北部を迂回し更に東に屈曲して大雪山脈を貫き會理府の西方に於て鴉礱江を合す、之より四川、雲南の兩省の境界に沿ひて流れ叙州の西方屏山に至り巴蜀盆地に入る、鴉礱江は巴顏喀喇山脈に發源し一山嶺を隔てゝ金沙江と並走す、金沙江及鴉礱江の水源地は海拔四五千米の高地にして東亞に於ける著大なる河流の水源地をなし亞細亞大陸の脊梁たり、黄河、瀾滄江(メーコン河)、潞江(サルウイン河)皆此地に發源す。

金沙江及鴉礱江の合流する附近は海拔千百米の高さを有すと雖も巴蜀盆地の門戸たる叙州に於ては僅に海拔二百五十米に過ぎず、以て河床の急傾斜たるや知るべく其溪谷は峽谷にして兩岸の高さ一二千米とし水路險惡舟楫の便なし。

上流　揚子江の上流は叙州の西方屏山より湖北省宜昌に至る間にして屏山、重慶間二百餘哩及重慶、夔州間二百二十餘哩間は巴蜀盆地を流れ、夔州、宜昌間百二十餘哩は楚西山地を貫き其溪谷は三峽の稱あり。

巴蜀盆地を流るゝ揚子江は屏山、叙州、瀘州、重慶、忠州、萬縣の如き四川省重要の都市を過ぎ夔州に至る間盆地の南東側を北東方に流走し、叙州に岷江を、瀘州に沱江を、重慶に嘉陵江を、涪州に涪陵江を合す、其江流の赭色砂岩層の丘陵を流るゝ所は水路溝渠狀をなし水勢稍緩なりと雖も石灰岩及含炭砂岩層の山列を貫く所は溪谷狹くして河床には危險なる灘を形成す、灘は叙州、重慶間即ち蜀地方に二三箇所あるのみなるも重慶より下流巴の地方には甚だ多く重慶、萬縣間に野騾子、大堆子、觀音灘、虎灘等の諸灘あり、殊に萬縣、雲陽、夔州間に最も多く就中新龍灘甚だ危險なり。

岷江、沱江、涪江、嘉陵江四水は巴蜀盆地を流るゝ重要の河流にして四川の名之に由來すと云ふ、岷江は松潘の北方岷山に發源し灌に至りて網狀に分水し(第一圖參照)其一部の水は沱江に入る、之より眉州に至る間に成都平原を形成し嘉定を經て叙州に至り揚子江に合す、嘉定より下流小蒸氣船を通ず、沱江は成都平野の北方山地に發源し其東方を貫き資州を過ぎ瀘州に於て揚子江に合流す、涪江は嘉陵江の一支流にして龍安の北方に發源し大巴山脈を貫き綿州、潼川を過ぎ合州に於て嘉陵江に合す、嘉陵江は秦嶺山脈に發源し大巴山脈を貫き昭化に至りて甘肅省階州より流下する白水を容る、昭化より上流は水勢急にして峽谷をなすも之より下流は盆地を流れ水勢緩なり、而して合州に於て龍安より來る涪江及綏定より來る渠江を合せ重慶に於て揚子江に入る、合州、重慶間には灘多し、而して石灰岩及砂岩の山列を貫く所の三箇所に於て溪谷狹く風景秀美なり、之れを合州三峽と稱す、涪陵江は又烏江或は黔江と稱し源を貴州、雲南省界の威寧地方


第七版
水系圖
北支那
中支那
南支那
中閩
南閩
南海
臺灣
臺灣海峽
西藏
印度支那
緬甸
京東
東京灣
羅暹
一分万十五百七尺縮

に發し雲貴高原の北側を東流して思南に至り其間に水城より流下する三岔河及貴陽より流下する青江水並に其他苗嶺山脈に發源する支流を合す、思南より下流は北々西に彎曲し龔灘に至りて四川省に入り涪州に於て揚子江に入る、其溪谷は高原中の峽谷にして盆地中の諸水とは其趣を異にす、增水期には思南より減水期には龔灘より舟楫の便あり。

揚子江は巴蜀盆地の東端夔州に於て峽門に入り湖廣低地の西端宜昌に至りて峽門を出づ、其間楚西山地を貫けり、所謂三峽是なり、夔州、宜昌間の高距は約二百米、此間の山地は宜昌を拔くこと千米乃至二千米とす、江流の此山地を貫くや急傾斜を成し其水路百二十餘哩屈曲少なし、其間或は峽を成し或は灘を成す、峽は石灰岩を穿ち時に數百米の絕壁を成し、水深く渦流を成し灘は其幅廣く水淺く巨礫河床に橫はり、嶮岩時に水上に現はれ流水激して舟行甚だ危險なりと雖も亦爽快を覺ゆ、左に夔州、宜昌間に於る峽と灘とを列記すべし。

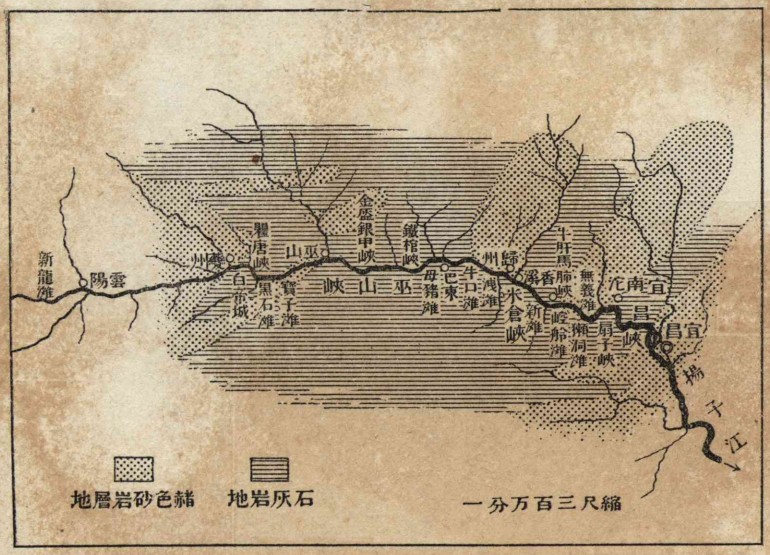
（夔州）
瞿唐峽（風箱峽）
黑石灘
寶子灘
交灘
下馬灘
跳石灘
巫山峽 金盔銀甲峽 鐵棺峽

（官渡口）
母豬灘
青竹灘
（巴東）
牛口灘
洩灘
（歸州）
蓮花灘
黃魚灘

（香溪口）
米倉峽 寶劍峽 小金灘 兵書峽
新灘
牛肝馬 肺峽
崆舩灘
獺洞灘
無義灘
宜昌峽 黃牛峽（扇子峽） 黃猫峽（宜昌）

第四圖

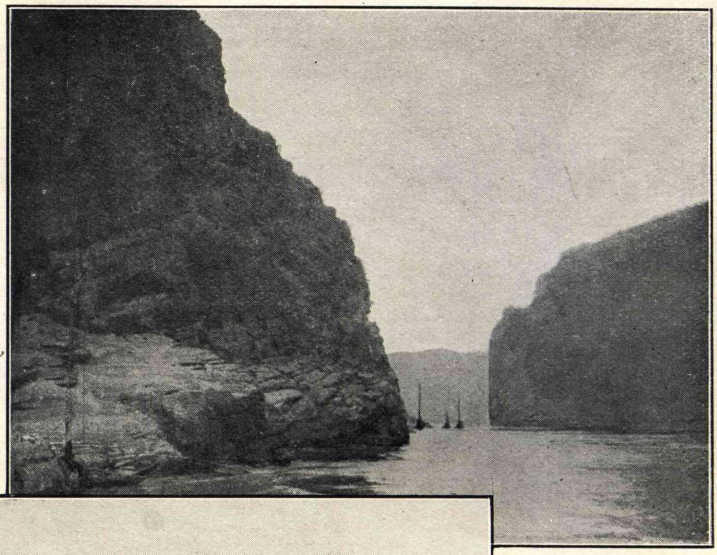
三峽



瞿唐峽は一に之を風箱峽と稱し、夔州より下流三哩に起り之れより江流俄に狹く江岸四五百米の絕壁をなす、(第八版甲參照)其上流峽門口の中央に灘頭堆と稱する巨石あり、冬季減水の候は水上に露はるゝも夏季大水に於ては水中に沒す、其峽門の左岸の斷崖上に白帝城あり、(第四圖參照)實に巴蜀盆地の東端を扼する天嶮なり、之より峽谷六哩にして瞿唐峽を出て下流巫山に至る十六哩間は溪谷廣くして黑石灘寶子灘、交灘、下馬灘等連續すれども著しき險灘なし、巫山縣城の下流一哩に至れば二十餘哩に亙れる峽谷あ

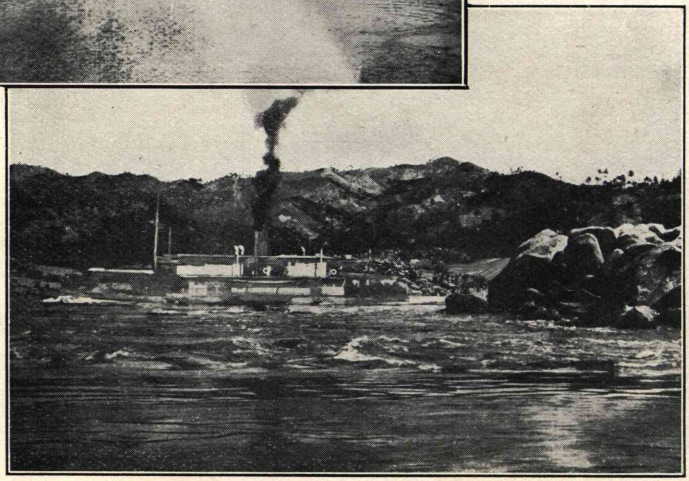
第八版

揚子江上流



（甲）瞿唐峽（四川省夔州）

（乙）新灘（湖北省宜昌縣）



（丙）獺洞灘及蜀通號（湖北省宜昌縣）

り、巫山峽と稱す、殊に四川湖北二省界の鐵棺峽は水平層の石灰岩を貫き、兩岸全く垂直にして峽谷の第一となす、其上流を金盔銀甲峽とす、蓋し石灰岩の直立層を過ぐる所なるを以て奇峰多し之を巫山十二峯と稱す、巫山峽の下流官渡口より溪谷俄に廣くして母豬灘、青竹灘、牛口灘、洩灘、蓮花灘、黃魚灘等あり、江流は香溪口より三度峽門に入る之を米倉峽と稱す、其長さ二哩、中央に小金灘ありて寶劍、兵書の二峽に分る、之を出づれば新灘あり、新灘は粘板岩を貫ける所に當り河床淺くして水中險岩多く三峽中最も險惡の灘なり、(第八版乙參照)新灘の下流に長さ二哩の牛肝馬肺峽あり、其下流の部分を特に崆舩峽と云ふことあり、之より南沱に至る二十四哩間は殆んど連續せる灘にして著名なるを崆舩灘、獺洞灘、無義灘と稱し皆片麻岩の地にあり、崆舩灘は蓋し新灘に次げる危險の灘なりとす、(第八版丙參照)無義灘の北岸は花崗片麻岩の丘陵なりと雖も南岸は石灰岩にして絕壁をなす、黃牛山は即ち黃陵廟の南方に於ける該絕壁上の高峯なり、南沱より宜昌の上流南津關に至る約十二哩の間を宜昌峽と稱す、宜昌峽の南沱に近き處を黃牛峽又は扇子峽と云ひ、天柱山は其峽門山上の一角にして黃牛山に相對す、宜昌峽は天柱山附近に於て最も壯大なるも之より下流に至るに隨ひ漸次に低し、其宜昌に近き所を黃貓峽と云ふ。

(ロ) 中流

揚子江の中流は宜昌、九江間にして流程五百三十餘哩あり、其河床の高さは宜昌に於て海拔約八十米、九江に於て約二十米にして高距僅に六十米なり、之を上流地に比すれば緩流にして河床

に砂礫の洲少なからず、流路は地形に據りて二部に分つを得べし、其上部は宜昌、漢口間の四百哩にして湖廣低地を流れ、下部は即ち漢口、九江間の百三十餘哩にして淮山脈と贛西山地との間を貫けり（第二圖參照）。

湖廣低地を流るゝ江流は宜昌と岳州附近の荊河口との間は略南東に向ひ、荊河口に於て一大屈曲をなし、それより下流漢口に至る間は約北東に走れり、其彎曲の內側は揚子江と漢江との間に介在する廣大なる卑濕の平地にして、外側は丘陵及山地の麓を洗ふ所少なからず、其間に於ける支流の主なるものは岳州附近に於て洞庭湖を通じて合流する湘江、漢口に於ける漢江なり。

揚子江の宜昌に於て三峽を辭し、湖廣低地に入るや沙市の上流松滋に至る間は赭色砂岩層より成れる海拔二三百米の丘陵地を貫き溪谷尙狹くして河床に灘少なからざるも松滋より下流に至れば河幅廣く、兩岸共に廣漠たる卑濕の地にして之を貫きて水路網狀をなし、又湖沼多し、增水期には江水兩岸に氾濫するを以て堤防を築きて之が防禦に努む、沙市及荊州の平地は其氾濫最も甚しき所なりとす、卑濕地を貫ける水路の主なるものは左岸に於ては沙市附近より便河、太白湖、白鷺湖、長夏河を通じて漢江の上流に於て揚子江に至るものにして、右岸にありては太平より洞庭湖に通ずる太平運河と石首より洞庭湖に通ずる藕地運河なりとす、石首より下流荊河口に至る間の本流は左岸には渺茫たる平地あり、右岸には洞庭湖との間に赭色砂岩層の丘陵地を控ゆ、此間の流路は屈曲甚しく揚子江流域中其比を見ざる所なり、荊河口の上流二十一哩のフッ

ク直路附近の如きは江流S字形に屈曲し其兩屈曲部の地頸は漸次に迫りて遂に江水の爲め切斷せらるゝに至れり、水深は淺き所多くして殊に屈曲部に於ては砂洲多く其間舟楫を通ずる水道は年々變遷するを常こす、石首のサラミス水道、調關のコリンソン水道は其の變遷の最も著しきものこす。

揚子江は荊河口に於て洞庭湖を貫通する湘江を合す、之より下流の漢口に至る間其流路は北東に向ひ、嘉魚、金口間に於ける一大彎曲の外著しき屈曲なし、荊河口こ嘉魚この間は概して左岸には平地多く、右岸には赭色砂岩層より成れる丘陵多く江流に面する所絶壁をなす、嘉魚縣にある小丘陵の低き絶壁は三國の古戰場こして有名なる赤壁なりこ傳ふ、嘉魚より下流は兩岸に湖沼多く又所々丘陵多し、殊に金口附近にある大軍山、小軍山の如きは二三百米の丘陵にして江岸に迫れり、兩岸の地勢は湖沼多しこ雖も沙市附近の如き廣漠たる卑濕の氾濫地を形成せず、其湖沼の多くは丘陵及臺地の間に介在するものなり(口繪參照)。

揚子江は漢口に於て漢江を合し、茲に流路を轉じて東走し黃州に至りて南東に向ひ九江に達す、其間の江流は淮山脈こ贛西山地ここの間を貫き其兩岸より注ぐ所の支流少なからざるも皆小流なり、漢口、黃州、黃石港間は赭色砂岩層の丘陵の間を流るゝを以て所々に赭色の絶壁あり、黃州城西の低き絶壁は蘇東坡が賦して以て景を賞したる赤壁なり、黃石港、九江間は古生層より成れる高さ四五百米の山岳地を貫きて流れ、田家鎭こ其對岸半壁山ここの間石灰岩の小峽門を形成す、

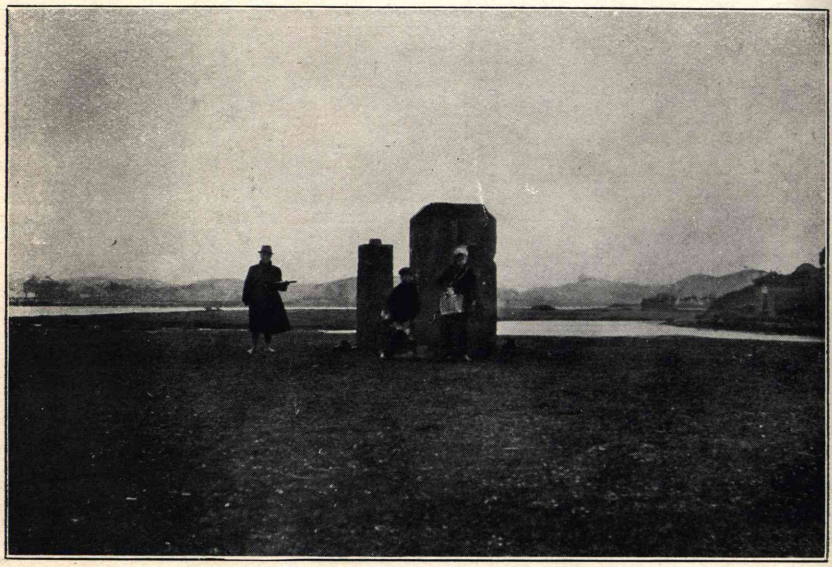
蓋し此地は恰も三峽の巴蜀盆地に於けるが如く湖廣低地に於ける關門にして往時鐵鎖沈江の戰蹟を有し、近くは清末革命亂に於ける兩軍對峙の要害たりしなり(第九版甲參照)

中流地に於ける支流の主なるものは湖廣低地に於て注入する湘江及漢江の二大流にして漢口より下流には支流の大なるものなし、中流地の支流は上流地の支流と異なり其合流する所に氾濫地ありて湖沼を形成するもの多し、其最も大なるものを湘江の河口に於ける洞庭湖となす、漢口、九江間に於て多くの小支流は其河口に湖沼を有するのみならず增水期には上流に至る迄も擴がり一大湖水と化するもの多し、漳源湖、網湖等は其著しきものなり。

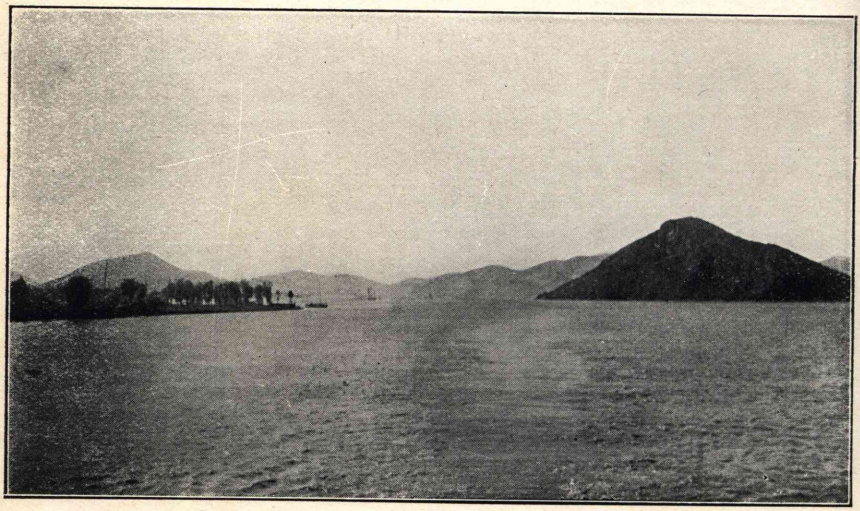
湘江は洞庭湖を通じて岳州附近の荊河口に於て揚子江に合流する一大支流なり、源を廣西省興安縣海陽山に發し興安の南方十支那里の分水灘に至りて二流に分る、其一流は湘江の本流にして、他の一流は運河によりて桂江に下り之を灘水と稱す、分湘灘灘と稱するは即ち此地なりとす、(第九版乙參照)運河は漢朝前の工事に係ると傳ふる所にして石灰岩地の削剝甚だしき所を穿ち大溶江に於て桂江に合流す、蓋し廣東より舟行し西江を溯り桂江に入り此運河を通じて湘江に下り遂に揚子江に出づるを得べく、南支那に於ける主要なる水路なりとす、湘江の本流は興安より石灰岩地の窪地に沿ひ縱谷をなし永州に至り、赭色砂岩層の臺地又は低地を流れ、衡州より下流は稍廣き平地を走り、湘潭、長沙、湘陰を過ぎ遂に洞庭湖に入る、假に湘江を地勢によりて上、中、下流の三部に分つときは永州以上を上流とし、永州、衡州間を中流、衡州以下を下流とするを至

第九版

揚子江中流



（甲）桂江湘江分水地（廣西省興安縣分水灘）



（乙）中流下流間の峽（湖北省富池口の半壁山附近）

當ㇾす、湘江は其上、中流に南北走の支流多く、下流には東西走のもの多し。

上流に於ける支流は南方より來る瀧水を以て主ㇾなす、中流に於けるものは瀟江、春水、耒水、洣水の四流なり、瀟江の上流は湖南、廣東の省界地に發源する營水ㇾ湖南、廣西の省界地より來れる萌渚水ㇾにして江華に至りて合流し瀟江ㇾなる、之より道州を經て永州に至り湘江に合す、江華より下流舟楫の利あり、春水は桂水又は鍾水ㇾ稱す、其源を湖南、廣東の省界に發し嘉禾、桂陽を貫きて北流し茨河口に於て湘江に合流す、其流域は石灰岩地の縱谷にして巒峯重疊する地方なれども溪谷稍廣し、耒水は桂東の東方、湖南、江西の省界の山地に發源して、南走し更に北西に迂回し興寧、永興を過ぐ、永興の上流に於て郴水を合し衡州附近に於て湘江に合す、下流に於ける支流の主要なるものを揭ぐれば、衡山の上流に於ける洣水、湘潭附近に於ける湓江及漣水、長沙の下流に於ける瀏陽水及濕水等ㇾす、第二圖參照洣水は源を桂東の北界米嶺に發し、酃及茶陵に至る間は山岳地を北流し茶陵より下流は急に流路を西轉し攸に於て攸水を併せ、臺地中を走りて衡山の上流に於て湘江に合す、湓江は江西省萍鄉の東方袁州界に發し、萍鄉、醴陵地方の丘陵又は臺地を貫き湓口に於て湘江に注ぐ、漣水は新化縣の東方石灰岩高原地に發源して東流し湘鄉に至りて臺地に入り湘潭に於て湘江に合流す、瀏陽水は湖南、江西の省界に發源し西流して瀏陽を貫き長沙の下に於て湘江に入る、濕水は安化縣の石灰岩高原地に發し、東流して靖港に於て湘江に入る、湘江の支流は共に其上流に至る迄舟楫の便あるを以て湖南省に於ける物產の搬出路ㇾして肝

要なり、湘江の下流には湘陰及蘆林潭に於て資江の分流の之に合流するもの二三あり、長沙より資江及沅江流域の各地に通ずる民船及小蒸氣船の爲めに緊要なる航路たり、加ふるに湘江は湘陰の下流に於て洞庭湖に入る、其口に磊石山あり、磊石山附近に於て湘江の河口に流入する河流あり之れを泪水と云ふ、平江の東方より流下するものにして其下流に於て羅水を合す、屈原が身を投じたる泪羅は即ち其二水の合流點なりと傳ふ。

資江　は其上流二水より成る、一は武岡水にして一は武夷水なり、武岡水は武岡の西方に發源し石灰岩高原地の水を集めて東流し、武夷水は新寧の南方湖南、廣西の省界山地に發源し石灰岩高原の南東邊緣を北東に縱走す、此二水は寶慶の西に於て合流し東流して寶慶に至る、之より下流は石灰岩高原中に峽谷をなして北々西に流走し、安化縣界に至りて急に其流路一大彎曲をなし北東に轉向し三堂街に至る、其間古生層の山地を貫き峽谷にして急流なり、之より下流は溪谷廣く兩岸に廣き平地あり、流勢緩慢となる、益陽に至り數多の分流となり洞庭湖に入る、尙ほ二三の分流は湘潲及蘆林潭に於て湘江に合流す。

沅江　は上流を清水江と稱す、源を雲貴高原の中部貴州省貴定の北東方に發し、平越を過ぎ東流して湖南省界に近き錦屛に至る、其間に於て南方苗嶺山脈より流下する支流多し、馬尾河、王團江等其主なるものなり、錦屛より下流は一大彎曲をなして北東に走り黔陽に至る、其右岸に於て苗嶺山脈より流下し靖州を通ずる渠江、其左岸に於て貴州省鎭遠、思州、湖南省晃州、沅州を貫き来

る無水(瀉水)を合流す、黔陽より下流は流路を北方に轉じ、辰谿に至りて銅仁より流下する辰水を合し、瀘溪に至り流路再び一大彎曲をなし東北東に向ひ、辰州に於て四川省酉陽より發源し湖南省永綏、永順地方の水を集むる酉水を合す、沅江は辰州より下流に於て漸次溪谷廣く常德に至れば既に大汽船を通ずる大河となり且つ數多の分流を派し洞庭湖内に三角洲を形成す、沅江の上流地は高原地を貫流する峽谷にして且つ灘多きを以て舟楫の便少なく無水の鎭遠及本流の黔陽より民船を通ずるに過ぎず。

澧江　は永順府桑植縣の湖北、湖南省界に源を發し桑植、永定の石灰岩地に峽谷を成す、永定より東方に向ひ流走し慈利に於ては湖北省鶴峯より流下する漊水を合し、之より下流漸次に溪谷廣く石門に於ては省界地より流下する澹水を合流し、澧州に至りて數多の分流を派して洞庭湖畔に三角洲を形成す、澧江は三角洲を通ずる水路に據りて安鄉の南東方に於て沅江に合流し、又太平、藕池の二運河に據りて沙市及石首附近に於て揚子江に連絡す(第二圖參照)。

漢江　は漾水又は沔水と稱す、其源を陝西省沔の西方嶓冢山又は鮒嶋山に發す、是れ尙書に、嶓冢導漾東流爲漢」と云ひ或は山海經に「漢出鮒嶋山」と稱するもの蓋し秦嶺山脈の南側に發源するものなり、漢江は東方に流下し沔に至る間峽谷なれども沔に至りて溪谷稍廣し、沔より下流興安に至る間漢江は大巴山脈、秦嶺山脈間の漢中盆地を約東方に向ひ縱走す、概して急流にして灘少なからずと雖も沔、洋の間、石泉及興安の平地を貫く所には稍緩流にして沔より下流舟を通ず、支

流は皆小流にして主ㇲして秦嶺山脈より流下す、漢江は興安より下流襄陽に至る間楚西山地ㇲ秦嶺山脈ㇲの間を貫き其溪谷概して狹しㇲ雖も漢陽附近及老河口、襄陽間に平地廣し。

支流は右岸に竹山より鄖陽に流下する堵水ㇲ、保康及房より穀城に流下する筑水ㇲあり、左岸に均の下流に注入する丹江ㇲ襄陽に注入する白河及唐河ㇲあり、丹江は秦嶺に發源し陝西省の龍駒寨、荊紫關、河南省の淅川を過ぎ均口に於て漢江に合流する斷層谷にして龍駒寨より舟を通ず、白河は伏牛山に發源し南陽に至りて分流を派す、其本流は新野を過ぎて襄陽に至りて漢江に注入す、唐河は裕の北方伏牛山に發源し唐を過ぎ其南方に於ては桐柏山より流下する支流及南陽に分れたる分流即ち栗河を合し襄陽の北方に於て白河に合流す、其流路は兩河共に丘陵地及平地を通ずる緩流にして南陽及徐旗店より舟を通ず、蓋し兩河は高原地帶ㇲ地溝帶ㇲの境界を流走するものにして湖廣低地より河南平野に至る通路をなせり。

襄陽より下流安陸を經潛江附近に至る間漢江流路は急に其方向を南々東に轉し湖廣低地を貫流す、其溪谷は襄陽、宜城間河幅廣く平地亦廣濶なり、宜城、安陸間は赭色砂岩層の丘陵地を貫くを以て溪谷狹きも安陸より下流に於ては殆んㇲ平地を流走し、其兩岸には氾濫を防ぐ爲めに堤防を築けり、潛江より下流は流路約束走し漢口、漢陽間の大別山下に於て揚子江に注ぐ、其流路は卑濕の平地を流れ又數多の分流を派す、分流の主要なるものは北に沙溝、脈旺司間の乾河あり、南に潛江より沙市に至る西荊河、潛江より沔陽に至る直路河あり、殊に漢江以南に於ては更に無數

の分流に分れ揚子江の左岸にある湖沼に連絡す、沙市より漢口に通ずる便河の水路は此の如き分流及湖沼を通ず、支流には天門、京山、應城、雲夢地方より流下する諸水あり皆緩流なり。

(八) 下　流

揚子江の下流は九江より河口に至る間にして其流程は吳淞に至る四百三十八哩、河床の高距約二十米にして甚だ緩なり、揚子江の中流を岳州、漢口間並に漢口、九江間に分てる如く下流も亦之を九江、南京間と南京、河口間との二部に分つ。

九江、南京間に於ける揚子江は皖南低地の南東側を北東に流れ其右岸は概して山地にして左岸は概して卑濕の平地なり、支流は右岸に贛江の大支流あり、左岸に大支流なし。

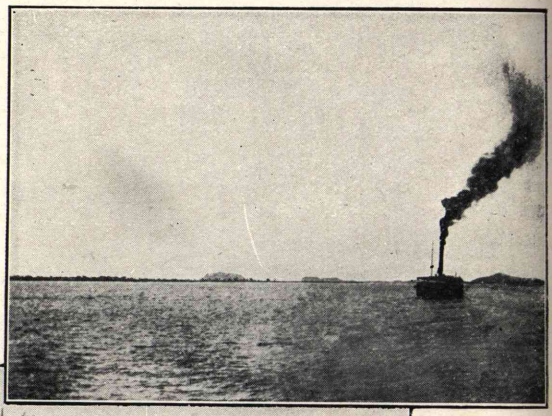
本流には九江より湖口に至れる江の右岸に當り東方に向ひ突出せる沙洲あり鄱陽湖口を扼す、之より揚子江の右岸は彭澤、馬當鎭、東流に至る間石灰岩の山岳江岸に迫るも左岸は平坦なる沖積平地にして大水時に於ける氾濫地なり、而して其左岸の內部には漳湖、伯湖、龍宮湖等廣大なる湖沼連續す、安慶附近に至れば江流の兩側に赭岸迫りて急に狹し、赭岸は左岸には安慶附近に現はるゝのみ右岸には東流より池州、大通、銅陵に亙れり、(第三圖及第五圖參照銅陵より南京に至る間の左岸は和州に至る迄平地にして和州、浦口間臺地及丘陵なり、右岸は蕪湖に至る間山岳の江に臨むもの多しと雖も蕪湖、太平間は平地にして所々に丘陵の散在するあるのみ、太平より下流平地廣し、蓋し蕪湖附近の揚子江の兩側には卑濕の平地多く支流、分流及運河其中を流走す、就

中左岸には巢湖より江に注げる三叉河及運漕河あり、右岸には黃山々脈に發源し南陵、涇、宣國を通ずる三支流の下流に分流及運河多く又湖沼を形成す、傳說によれば揚子江は元と蕪湖より東流して高淳、溧陽、宜興を經太湖に注ぎ之を中江と稱すと云ふ、「三江既入海震澤底定」と稱するもの即ち是なり。

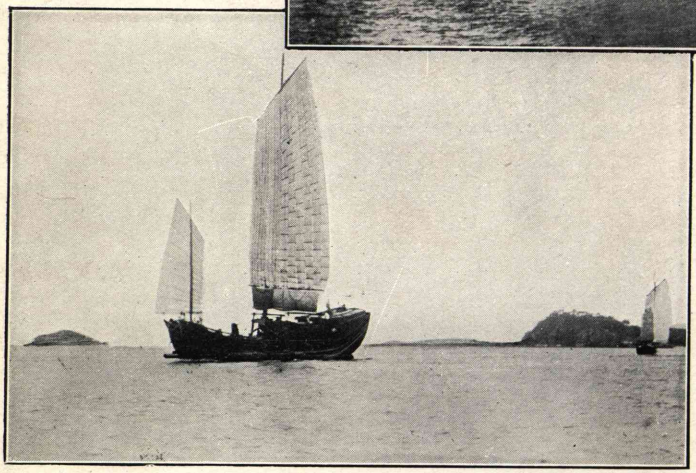
南京、河口間の揚子江は鎭江に至る間南京山地と六合、揚州間の燐岩丘との間を東流し南京と其對岸浦口との間に於て最も狹し、鎭江には江中に焦山の孤島あり、（第十版甲參照）水道分れて二となり各水道は大運河に通ず、北水道より起るは江蘇運河にして淮河、黃河を橫斷して北京に通じ、南水道より起るは江南運河にして太湖、錢塘江を橫斷し杭州の洪宸橋に至りて止まる、洪宸橋に於ける大運河の水面は杭州市街を縱橫に貫ける錢塘江の水面に比するに甚だ異れるを以て其間は壩によりて連絡す、而して運河の水を下塘河と云ひ杭州の水を上塘河と云ふ、鎭江より下流の揚子江は約南東方に流走し吳平野の三角洲地を形成す、江幅は江陰に於て未だ著しく廣からざるも張黃港に至れば急に擴大し、狼山に於て既に江幅七哩となり、（第十版乙參照）海門に於て江幅更に膨大し漸次開口す、而して河中に崇明嶋其他數多の沙洲を形成す、鎭江より下流には無數の支流、分流、運河交叉するも大なるもの無く、唯鎭江に於ける前述大運河と吳淞の黃浦江を擧ぐべきのみ、黃浦江は太湖に發源し平望鎭に於て大運河と交叉し松江、上海を經て吳淞に於て江に注ぐ、黃浦江は又松江、嘉興間並に上海、蘇州間に於て更に運河に據りて大運河に連絡す。

第十版

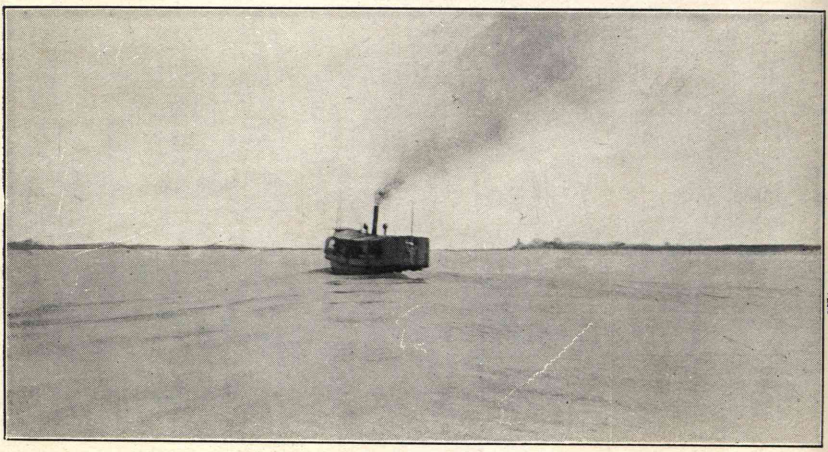
揚子江下流



（甲）江蘇省通州狼山附近



（乙）江蘇省鎭江焦山附近

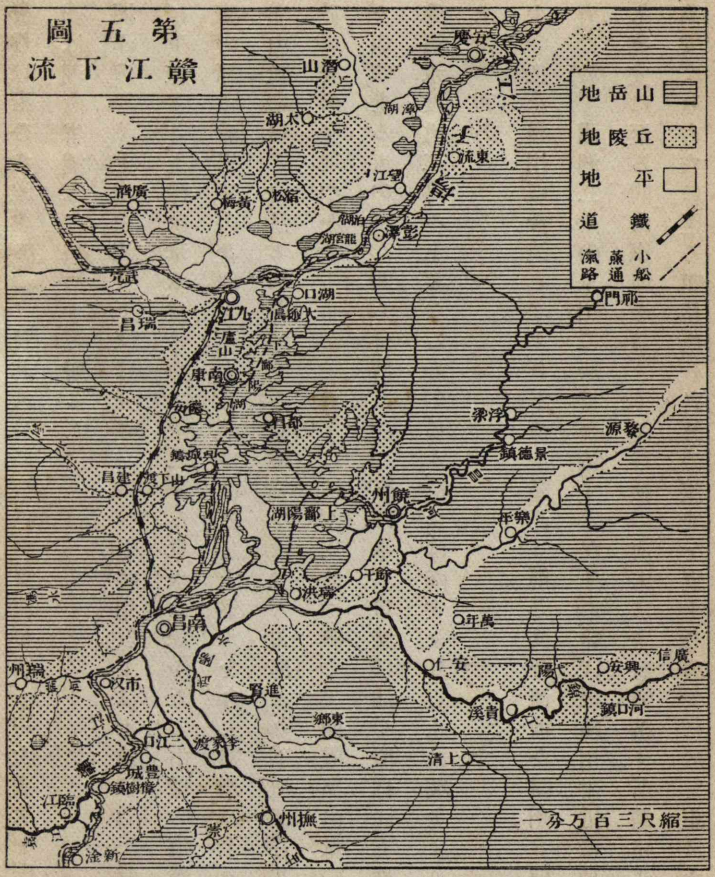


（丙）江西省贛江の下流（清江縣拖船埠）

贛江　は揚子江の下流に於ける唯一の大支流にして江西省全省の水を集む、而して地壘帶を斷てる斷層谷に沿ひ北流すること及其河口に二三の支流と共に一大湖水を形成すること、其他支流の狀況は湖南省湘江に酷似する所多し。

贛江は湘江の如く上流中流及下流に分つを得べし、贛州以上は上流にして贛州吉安間は中流、吉安以下は下流なり、上流は章水、貢水の二水に分る、章水は源を五嶺山地の梅嶺に發し東方に向ひ南安、南康の赭色砂岩層の盆地を流走し南康に於て上猶水を合し贛州に至り貢水と合流す、貢水は仙霞嶺山脈に發し會昌、雩都を通ずる間峽谷をなすも雩都より下流溪谷甚だ廣く贛州に至れば赭色砂岩層の臺地中を流る、而して貢水に注ぐ支流は概して仙霞嶺山脈の方向に沿ひ北々東より南々西に走るもの多し、即ち會昌に注ぐ雁門水、洛口墟に注ぐ梅林江、雩都に注ぐ甯都水、江口に注ぐ興國水及桃江等を主要なるものとす、章水は南安より、貢水は瑞金より民船を通じ貢水の支流各水運の利あり。

章水、貢水の二水贛州に合流し之より下流を贛江と稱し其合流地を贛州と稱す、蓋し其位置は恰も湖南省に於て瀟湘二水の永州に於て合流するが如し、贛江は贛州附近に於て廣き臺地の間を流るゝも萬安に至る間山嶽地を貫きて溪谷狹く河床に岩石突出す、所謂贛江十八灘は即ち此地方なり、萬安より吉安に至る間赭色砂岩層の窪地を縱走し、萬安に於て龍泉水を、吉安に於ては安福及永新より流下する溶江と、樂安、永豐より流下する恩江とを合流す。


山岳地
丘陵地
平地
鐵道
小船
蒸通
汽路
縮尺三百万分一
慶安
濟山
太湖
湖潭
東流
望江
廣濟
黃梅
宿松
彭澤
湖口
九江
瑞昌
南康
都昌
門祁
浮梁
黎源
景德鎮
饒州
上鄱陽湖
樂平
餘干
洪瑞
南昌
萬年
安仁
廣信
興安
陽
河口鎮
貴溪
東鄉
上清
瑞州
市汉
進賢
江口
豐城
撫州
新淦

贛江の下流は湘江の衡州より下流と同樣に吉安より江幅甚だ廣く、峽江に於てのみ山岳兩岸に迫りて狹隘となるも江水多くして流緩なり、新淦より下流には兩岸は赭土の臺地にあらざれば泥岸にして江幅益々廣く(第五圖參照)樟樹鎭より下流は殆ど平地を北行し(第十版丙參照)豐城、南昌、南康を過ぎて鄱陽湖を貫き湖口に於て揚子江に合流す、支流は樟樹鎭より下流に甚だ多く、左岸に袁江、瑞河、修水あり、右岸に盱江、錦江、樂安河、昌河あり。

袁江は源を袁州府盧溪の南方、袁州、吉安府界の山地に發して北流し、盧溪より袁江の炭田に沿ひ東流す、就中盧溪、袁州、分宜間は石灰岩地の北側を流れ風光甚美なり、分宜の東方に鍾山を貫く所溪谷狹きも新喩より下流は溪谷俄かに廣くして冲積平地を走り臨江の東方に於て贛江に注けり、明朝成化年間以前には贛江は迂曲して臨江に至り袁江を併せたりと云ふ、袁江は蘆溪より舟楫の便あり。

瑞河は湖南省界の山地に發源し東流して萬載、上高、瑞州を經、市汊に於て贛江に注ぐ、上高より下流は縱谷にして溪谷廣く平地を流る。

修水は義甯の西方湖南省界に發源し東流して義甯、武甯を經、建昌に至りて奉新より流下する馮水を合せ吳城鎭に於て贛江に注ぐ。

盱江は又撫河と云ふ、其源を廣昌縣の東方仙霞嶺山脈に發し北流して建昌に至り杉關より流下する支流を合す、建昌より上流には溪谷狹く急流なれども其下流は溪谷甚だ廣く水流緩と

り撫州に於て樂安及崇仁を貫ける臨水を合し、撫州より下流は全く平地を流るゝのみならず三流に分る、其本流は南昌に至る、一分流は三江口を經西流し小江口に至りて贛江に合流す、他の一分流を武陽水と稱し崔港を經瑞洪に至りて錦江に注げり。

錦江は江西浙江省界山地に發源し玉山、廣信、河口鎭を經て弋陽及貴溪に至る間約西方に向ひ盆地を縱走し廣信に於ては廣豐より流下する永豐水を合す、貴溪より下流急に流路を北西に轉じて橫谷を成し餘干の南方に於て平野に出づ、其本流は北西方瑞洪を經て鄱陽湖に注ぎ分流は北東方に流れて樂安河に注ぐのみならず瑞洪、餘干、饒州間には錦江と樂安河とを通ずる運河あり、旰江は建昌より下流に民船を通じ其下流の瑞洪には小蒸氣船を通ず。

樂安河は安徽省祁門縣魚亭の南方に發源し婺源、樂平を通じ饒州に於て昌河を合し、饒州より下流鄱陽湖の氾濫地を流る、昌河は祁門の北方に發源し浮梁、景德鎭を經饒州に至る、而して婺源及祁門より民船を通ず。

（二）閩浙水系

（イ）錢塘江

錢塘江は其下流に海嘯の災害あり之を防ぐに錢工を以て海塘を築けるを以て其名を生ぜりと云ふ、又浙水の別名あり是れ河流甚だしく屈曲する爲めなりと云ふ。

錢塘江は嚴州より上流三水となる、新安江、衢溪、金華溪とす。

新安江は源を黄山に發し南流して徽州に至り其南方に於て黟、休甯及屯溪より來る屯溪水を合し黄江潭に於て浙江省に入り、淳安に於て鳳林港を合せ、嚴州に於て蘭溪と合す、而して新安江は徽州、休甯又は淳安附近に於ける赭色砂岩層の盆地を流るゝ際は其溪谷廣きも(第十一版甲參照)概して浙西山脈を横斷する横谷なるを以て溪谷狹く灘多し、黟及休甯より民船を通ず。

衢溪は衢州より上流二流となる、一は金溪又は常山溪と稱し開化、常山を貫き、一は文溪又は江山溪と稱し江山を貫き共に衢州に於て合流す、衢溪は之より赭色砂岩層の臺地又は其間の平地を縱走し蘭谿に於て金華溪を合す、之より下流ば横谷にして之を蘭溪と稱す、金華溪は東陽江又は瀫水と稱し衢溪の如く約東西に走れる縱谷にして天臺山に發源し東陽義烏、金華を貫き金華に於て永康及武義を貫ける南港を合す。

新安江と蘭溪とは嚴州の東關に於て合流し之より下流を錢塘江と稱す、本流は桐廬に至る間峽谷を流走するも桐廬に於て桐廬水を合するや溪谷俄に廣く之より富陽を經て杭州に至る間廣濶なる縱谷を成して流走し、杭州の上流臨浦に於て浦陽江を合流し杭州に於て大運河其兩岸に起る、杭州より下流河口に至る間は江幅漸次に海に向ひ漏斗狀をなして開口し杭州灣に連續す。

桐廬水は、昌化の西方安徽省界に發源し昌化、分水を經桐廬に至る間横谷を流れ溪谷狹く水流急なり、浦陽江は蘭谿の東方山地に發源し北東に流走して浦北を貫き諸暨に至りて北流する横

山港を合す、諸暨より上流は山地を流るゝも下流は殆ど平地を走り臨浦に於て錢塘江に注ぐ。

（ロ）甌江

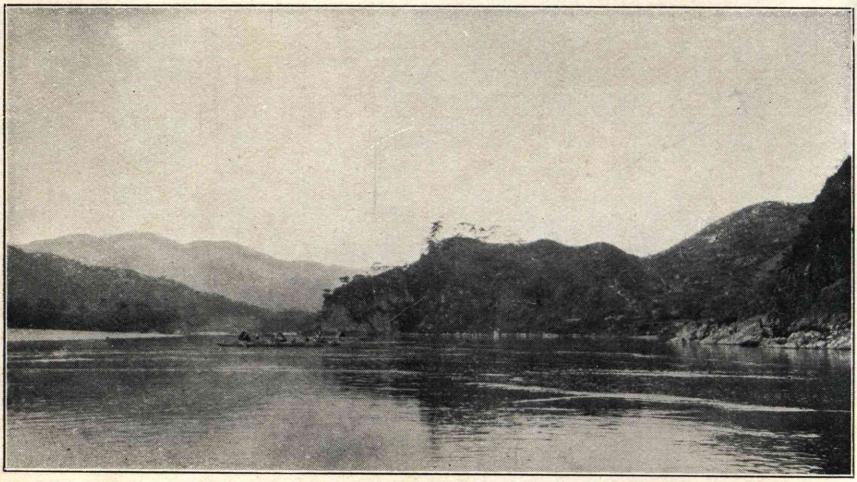
甌江は其上流を大溪と稱し浙江、福建省界山地に發し南東方に向ひ龍泉、雲和を貫きて寶定に至り玆に於て遂昌縣侵雲嶺に發源し南東流遂昌、松陽を貫ける松陰溪と合す、兩溪共に峽谷を流る、寶定より處州に至る間には溪谷稍廣きも處州より急に流向を南東に轉じ靑田の下流溫溪街に至る間峽谷なり、（第十一版乙參照）處州に於て縉雲より流下する好溪並に靑田に於て景甯より流下する小溪を合す、溫溪街より下流を特に甌江と稱す、溫州に於ては左岸に南溪注入し、右岸に瑞安に通ずる運河即ち塘河あり、甌江の溪谷は溫州に至る間漸次に廣く溫州より漏斗狀をなして海に朝す。

（ハ）其他の浙江諸水

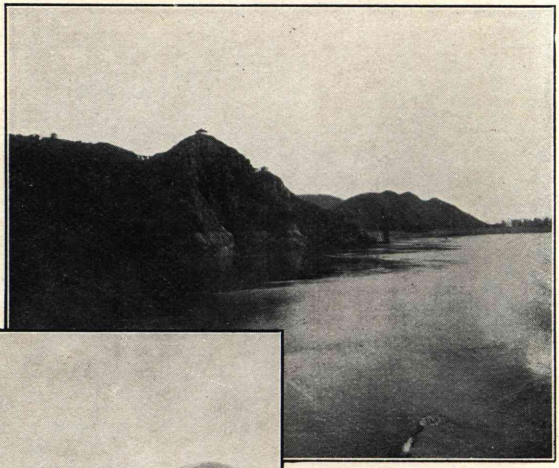
錢塘江の南東方に位する浙東地方は楔狀の半島をなして杭州灣と東海との間に長く突出し海に面す、之を貫く河流は皆小流なり、數多の小流中杭州灣に注げる曹娥江を除けば其他は山勢に從ひ北東流して東海に注ぐもの多し、曹娥江は天臺山に發源して北流し新昌嵊を通じ曹娥に至りて西興運河に連なり、紹興の東方を迂回し北流して杭州灣に朝宗す、北東に流るゝ河流中甬江は奉化の南方に發源し奉化より平地を流れ寧波に至りて西興運河と合流し之より江幅俄に廣く鎭海に於て海に朝す、西興運河は杭州對岸西興より起り紹興、曹娥、百官、餘姚を經て寧波に至

第十一版

閩浙水系



（甲）浙江省處州の甌江中流



（乙）浙江省淳安の錢塘江上流新安江

（丙）福建省安溪の晋江中流

るものにして其流程約四百支那里と稱し餘姚、寧波間は小蒸氣船を通じ餘姚以西は壩に據り民船を通ず。(第三十二版參照)

椒江は又靈江と稱し仙居の西方に發源し東流して臺州に至り、茲に於て天臺山より南流し天臺を貫く始豐溪を合し三江口に至れば黃巖を貫ける永寧江と太平より流下する東宮河とを合す、黃巖には永寧、東宮兩河に連絡する運河あり、

臺州より上流は峽谷なれども下流は溪谷廣く又水量多く所々に平地あり、而して仙居より民船を臺州より小蒸氣船を通ず。

(三) 閩江

閩江は仙霞嶺山脈の杉關に發源し其南方斜面を橫斷して南東方に流下する橫谷にして其上流を富屯溪と稱す、杉關より光澤、邵武を經順昌に至り北東流する金溪を合し延平の上流沙溪口に於て沙溪を、延平に於て建溪を合す、之より下流を閩江と稱し其水量甚だ多きも閩清に至る間尙河床に險岩突出し急流なり、尤溪口に於て尤溪を、水口に於て劍溪を合す、而して閩清より下流に於て水流緩となり福州に於て河中に南臺島を介して水流二となり南水道には双溪注入す、然るに二水道は馬尾に於て合流し之より漸次江幅廣し、河口に五虎島の沙洲あり、之が爲に再び二水道となりて以て海に注ぐ、支流は概して縱谷多し、而して右岸の支流中金溪は建甯に發源し將樂を通じて北東走す、沙溪は甯化に發源し清流、永安を經北東方に向ひ沙を過ぎ尤溪口に注ける

大支流にして仙霞嶺山脈と下游山地との境界地を縦走するものなり、尤溪は其の上流には大田より發源する湖頭溪と其北方に發源する花溪とあり、二溪は尤溪に於て合流し之より水量多く北東に走れり、福州の南水道に注ぐ双溪は德化に發源し北東方に流走し永福を通ず

左岸の支流中建溪は建甯より上流に於て二流よりなる、一は東溪と稱し松溪及政和より南西方に流下し、一は西溪と稱し楓嶺又は仙霞嶺に發源し浦城を貫きて南流し崇安より建陽を通ずる崇溪と合し建甯に至りて東溪に合し南々西方に流下す。

(ホ) 韓　江

韓江は汀州の北方に發源し汀州より仙霞嶺山脈に沿ひ南方に縦走し廣東省に入りて海に朝する大河なり、上流を鄞江と稱し汀州より上杭を經福建、廣東省界に近き峰市に至る、其間溪谷稍々廣く所々に平地あるも峰市に於ては其支流永定河との合流地に特に峽谷をなせり、峰市の下流廣東省大埔より溪谷急に廣濶となり水量も亦著しく增加す、本流は南方に流下し潮州より下流汕頭に至る間楓江と共に三角洲を形成す、支流は三河城に於て其左岸に注入する梅江あるのみ。

梅江は長樂縣の南方に發源し北及東に流れて長樂及興甯より流下する小支流を合し尙北々東方嘉應州を過ぎ程江に於て武平、平遠、鎭平より來る汶水を合し三河城に於て韓江に合流するものとす。

（ハ）其他の福建諸水

福建省には此外九龍江及晉江の二流あり、九龍江は石碼より上流北溪、南溪の二流より成る、北溪は九龍江本流にして源を龍岩に發し北東流して漳平に至れば膏洋より流下する支流を合し之より流路を南東に轉じて石碼に至る間横谷なり、其溪谷は峽谷にして河床に險岩多く龍岩の雁石並に漳平の下流華封附近を最も著しとす、南溪は又龍溪と稱し南靖より上流は三流に分る、一は平和より北東流する花山溪、二は小溪にして山城に於て前者に注ぐ、三は林田より南東流する水頭溪なり、南靖より下流溪谷廣しと雖も水量多からず、石碼より江幅俄に廣くして三角洲を形成し水道三分し海澄附近に於て三流合一して厦門の對面に於て海に注けり。

晉江は源を永春州の北方に發し東溪と稱し南東流して双溪口に於て西溪を合す、西溪は安溪縣潘田に發して安溪を貫き双溪口に至る、双溪口より上流は溪谷狹く岩礁多きも（第十一版丙參照）之より下流は溪谷廣くして水量多く南安を經て泉州に至れば溪谷益々廣く漏斗狀をなして海に注ぐ。

以上諸水の外福建省には興化灣に注ける木蘭溪並に三都澳灣に注ぐ交溪あり共に小流なり。

（三）嶺南水系

（イ）西江

西江は南支那第一の大河流なり、其源を雲南省東部に發し廣西省を東西に貫き東流して貴州

省南部、廣西省一圓の水を集め廣東省に至りて海に入る、其流域は東經百二度より同百十四度に至る間約十二度に亙り雲に其本流の長大なるのみならず、其支流亦甚だ多し。

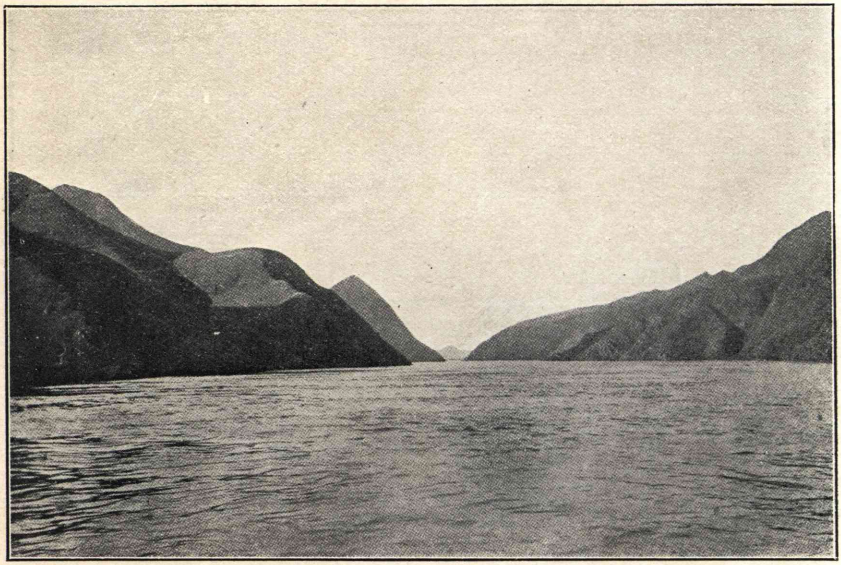
本流を分つて上、中、下の三とす、上流は水源より遷江に至る間、中流は遷江、梧州間、下流は梧州、河口間なり、又支流の大なるを北盤江、柳江、鬱江、桂江、賀江等とす。

西江上流　西江の上流を紅水河と稱す、其源を雲南省東部の曲靖府霑益に發して印度支那山系と高原地帶との境界地を南流し曲靖、陸涼を過ぎて宜良に至り之より阿迷州の東方に至る間滇江湖、通海並に臨安より東流する支流を合す、阿迷州の東方より其流路を急轉し廣西省那地に至る間約東流す、其間顯著なる峽谷を形成す、其右岸は鬱江の上流と一嶺を隔つのみなるを以て大なる支流を見ざるも左岸には貴州省の苗嶺山脈に發源し南流する支流多し、其主なるものは威寧に出て平彝を過ぎ雲南、貴州、廣西省界に注げる九龍江、大定府水城に發し永寧、貞豐を貫ける北盤江、都匀の東方に發し那地に注ぐ巴盤江等となす、紅水河の本流は那地より遷江に至る間大體に南東方に向ひ石灰岩の峽谷を流るゝ急流にして支流少なし。

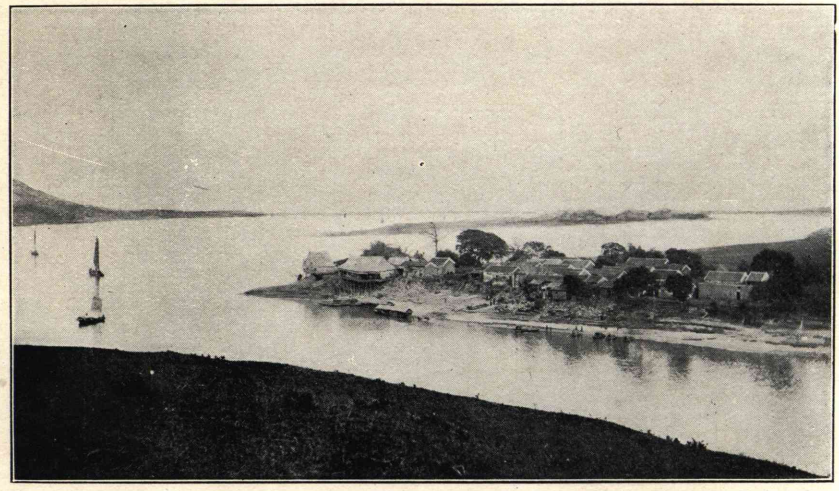
西江中流　西江の中流を潯江と稱す遷江より下流梧州に至る間の稱にして遷江より東流し西安に至りて其左岸に柳江を合し、潯州に於て其右岸に鬱江を合するや水流俄に增加し江幅著しく擴大し梧州に於て桂江を合して下流域に入る、其江幅甚だ廣くして流緩となり遷江より下流民船並に小蒸氣船を通ず。

第二十版

嶺南水系



（甲）西江下流の峽（廣東省肇慶）



（乙）北江及西江合流地（廣東省三水）

右岸の支流中鬱江は南寧より上流に於ては西洋江及麗江の二流より成る、西洋江は源を雲南省東端の廣南に發して南東方に流走し廣西省界の剝隘に至りて稍大流となり之より百色、隆思、隆安、永康を過ぎ南寧に至りて麗江に合流し剝隘より下流民船を通ず、麗江は佛領東京の大原に發源し北東流し諒山より北西走する支流と合し龍州に至りて龍江及明江を合し大平に於て歸順河を合せ龍州より下流は大流となり民船を通ず、麗江と西洋江とは南寧に於て合流し之より下流を鬱江と稱す、南寧、潯州間は石灰岩地の横谷なれども江幅廣く流れ緩なり、龍州よりは民船を、南寧よりは小蒸氣船を通ず。

劍江は梧州の上流藤に近く潯江の右岸に注入する小支流にして其上流地の北流に於て鬱林の南流江即ち廉江と一嶺を隔つのみ、梧州、廉州間の交通を助くること大なりとす。

左岸に注入する支流中柳江は其源を苗嶺山脈に發し貴州省獨山、三脚、古州を過ぎて東流し廣西省に入りて流路を南に轉じ斷層谷に沿ひて懷遠、融を過ぎ柳城に於て河池及慶遠より流下する龍江を、柳州の下流に於て洛清江を合し、西安に於て紅水河と合流す、而して柳江は三脚より龍江は慶遠より水量多く民船を通ず。

桂江は湖南、廣西省界の西延に發源し六洞水と稱して靈川の北方大溶江に至り茲に灕水と稱する支流と陡河と稱する運河とに據りて湘江に連絡し民船も亦陡河に據りて桂江より湘江に通ず、大溶江より南流して靈川、桂林を過ぎ桂林の南方には相思江と稱する支流に據りて前述洛

清江に通じ之より更に平樂、昭平を通じ梧州に於て潯江に合流す。

西江下流　西江の下流を特に西江と稱し梧州、三水間と三水、河口間の二部に分かる、梧州、三水間は概して山岳地を東流し德慶、肇慶に於て峽谷を形成すと稱す（第十二版甲參照）其左岸に二支流あり、賀江及綏江と稱す、賀江は湖南、廣西省界の九疑山に發源し富川、賀、開建を經斷層谷に沿ひ南流し封川の上流江口に於て西江に注ぐ、綏江は廣西省懷集の北方に發源し廣東省、廣寧、四會を過ぎ、二流に分れ一は三水の北方に於て北江に、一は三水の西方に於て西江に注入す。

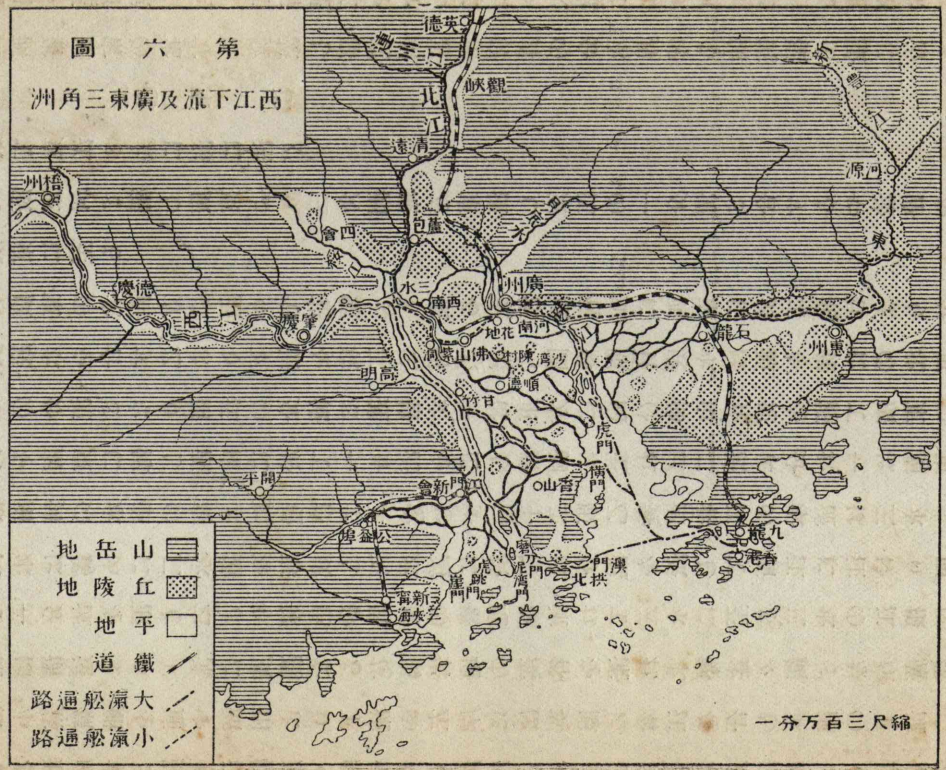
三水より下流に於て西江は平野を流る、而して西江は三水に於て一水道を以て北江に通じ其本流は三水より急に流路を南東に轉じ甘竹に至りて數多の水流に分る、而して多くの水流は北江の下流並に新會に注入する新會河の分流と共に所謂廣東の三角洲地を形成す、該三角洲地を貫く水流の河口は主なるもの五あり之を門と稱す、橫門、磨刀門、泥灣門、虎跳門、崖門是なり（第六圖參照）

（ロ）北　江

北江は韶州より上流湞、水武水の二流より成る、湞水は源を梅嶺に發し赭色砂岩層盆地の縱谷に沿ひて南西流し南雄、始興を過ぎ始興溪及錦江の二支流を合し韶州に至る、武水は湖南省宜章の北方摺嶺に發源し、樂昌を過ぎ南東に向ひ峽谷を流る、兩水韶州に合して大流となり、之より下流清遠に至る間は五嶺山地を貫きて南流する峽谷にして英德の北方に湞陽峽、英德、清遠間に觀

第六圖

西江下流及廣東三角洲



峽の二峽をを形成すこ雖も江幅廣く緩流なり、韶州より上流は宜章及南雄より民船を通じ韶州より下流は小蒸氣船を通ず、韶州より下流の左岸には英德に翁江を合し英德の下流に連州江を合流す、本流は清遠より下流に廣濶なる花崗岩地の溪谷を流れ水勢益々緩こなり蘆苞に於て廣東に通ずる一分流を派し之より赭色砂岩層の臺地を流れて三水に至る、三水の江根には江中に一洲あり、江水は爲めに二水道を形成し西水道に於ては分流を派して西江に注げり而して此分流の水流は兩河の水準の高さに從ひて一定せず、(第十二版乙參照)北江の本流は三水より下流に於て其方向を南東に轉じ西南(サイナム)に於て一分流を出し紫洞に至れば二流に分れ、一は南東方に走りて更に數多の分流こなり西江の分流こ連絡す、一は東方に向ひ佛山、花地を經て廣東に至り北方より來る貝底水を合す之より下流を珠江こ稱す、(第六圖參照)貝底水は源を從化の北東に發して南西に流れ廣東の北西方に至りて花縣より來る支流、蘆苞並に西南に於て北江より分れたる分流を合し廣東に至る。

珠江は又廣東河こ稱し廣東より三角洲地を東流し東江の一分流こ合するや流路を南東に轉じ虎門に於て東江こ共に海に注ぐ。

(八)　東　江

東江は江西省長甯の北方に發源し嘉應州、惠州府界の分水界即ち仙霞嶺山脈に沿ふて南々西方に流れ龍川を經、河源に至りて新豐江を合し之より大流こなり惠州に至る、惠州より下流は急

に西流し石龍に於て數派に分れて三角洲地を形成す、其中一水流は南東方に向ひ東莞を貫き虎門に於て海に注入す、東江は其上流の長寧及新豐江の連平より民船を通じ河源より下流には小蒸氣船往復す。

(二) 其他の嶺南諸水

廣東省には廣州灣に注入する浮山水、廉州に於て海に注入する廉江あり、廉江は其上流を南流江と稱し潯江の支流劍江と一嶺を隔つるのみ、雲南省に於て雲南府西部の綠豐及南安附近より南流する河流は佛領東京の紅河の上流にして他郎、元江、蒙自、蠻耗を過ぎ老開に至りて安南に入るものとす。

附 淮河

淮河は黄河、揚子江二大流域の間に介在す、淮河と揚子江との間に淮山脈其分水界をなすも黄河との間に何等分水界と認むべきものなし、西曆千八百五年即ち清朝咸豐二年老黄河は開封より南東方に流れ淮安に於て淮河と合流し支那東海に朝宗せるものにして其當時は淮河を以て黄河の一支流と認むるを至當とせしならんも黄河の變遷に據りて二流各其向ふ所を異にせり

淮河の源は河南、湖北省界の桐柏山即ち淮山脈の西端にあり、之より東流して信陽州に至れば既に大河となり之より黄土の臺地を東流し壽州、鳳陽を過ぎて洪澤湖に入り淮安に近き清江浦に於て大運河に通ず、其支流は右岸に於ては霍山及六安を貫ける滁河あるのみなるも左岸には

甚だ多く洪河、潁河、淝河、渦河、澮河あり。

(乙) 湖　沼

湖沼は印度支那山系と西部高原地帶との境界並に中央地溝帶、沿海山地帶の三區域内に分布し殊に該三地帶を横斷する揚子江畔に多し、而して湖沼は印度支那山系と西部高原地帶との境界には海拔千五百米乃至二千米の高處に位し其區域は狹く、地溝帶には海拔三四十米に位し湖廣低地中に大區域を占む、而して沿海山地帶には海拔十米乃至二十米の地に位し彭蠡平野皖南低地及吳平野中に廣域を領す(第三版參照)。

(一)印度支那山系と西部高原地帶との境界の湖沼は雲南地方、大理地方及成都地方に分たる、雲南地方には雲南府より南方臨安及蒙自に至る間に雲南府の滇池湖(昆陽湖)、澂江の撫山湖(澂江湖)、寧州の星雲湖、通海の把麓湖(通海湖)、臨安の異龍湖、蒙自の長橋海あり、是等は約南北に走れる斷層谷に沿ひ分布するものにして海拔千五百米乃至二千米の高處に位し、滇池湖の水は安寧、富民を通じ北流して普渡河となり金沙江に注入す、撫山湖其他の諸湖の水は南流又は東流して西江の上流に注す、此外路南、廣西より北方東川、昭通、威寧附近にも湖沼散在す。

大理地方に於ける湖沼は大理の洱海、雲南の青龍海及之より北方麗江に至る間に散在し海拔二三千米の高處に位す。

巴蜀盆地の西端成都平原、保寧附近等蜀の北部には丘陵地の中に平地散在し其地形上より湖

沼乾陸せりと思惟すべきもの多し。

(二)中央地溝帶の湖沼群は古の雲夢澤にして湖廣低地内に位し同低地を貫ける揚子江及漢江に據りて湖南省洞庭湖と湖北省の荊州地方、漢口地方、黄州地方との四區に分たる、

洞庭湖は春夏大水の候には一大湖沼となり其延長七十五哩、幅員六十哩と稱するも冬季減水の候は草原中に湘江、沅江、資江、澧江の諸水並に其分流の流路を殘留するに過ぎず(第十三版甲及乙參照)。

蓋し洞庭湖の水は湘江並に太平、藕池の二運河に據りて揚子江に通ずと雖も春夏增水期には湘江、資江、沅江、澧江の河水激增し氾濫するのみならず揚子江の水も亦著しく增水し時に支流及運河に向ひ逆流を生ずるを以て洞庭湖の水は其排水の路を失ひ茲に甚だしき氾濫を生ず、沅江の大安島、岳州の君山、扁山等の丘陵は增水時には湖中の島嶼と化し、(第十三版丙參照)湘江の盧林潭の如き其他沅江に沿へる村落の如きは水に圍繞され陸上の交通を遮らる、民國二年六月湘江の旅行に際し稀有の氾濫を目擊せり、當時の氾濫は獨り洞庭湖のみに止まらず更に南方長沙、湘潭、衡州に亙れる湘江沿岸の平地をも一面の湖水と化せり。

湖北省荊州地方の湖沼は沙市の北方にある大白湖即ち長湖を大とし之より南東方張家口並に南方公安地方に大小數多の湖沼あるも漢口附近の湖沼の多きに如かず。

漢口地方の湖沼中漢川、應城間に大松湖、慈湖、三臺湖等あり、是等は狹き水路に據りて連續す、仙

鎭に沈湖、葉嚴湖あり、漢川、漢陽間には漢江の左岸に西湖、右岸に白湖、黃連湖、十湖、官湖あり、武昌、岳州間には左岸に洪湖、大同湖、大沙湖あり、右岸には左岸よりも遙に多く、臨湘に近き芭蕉湖、黃蓋湖、嘉魚の赤城湖、金口の魯湖、武昌の南湖等殆んど連續す、黃州地方の湖沼は武昌、九江間の左岸には武湖、張渡湖、黃安湖、黃州より下流に後湖、長海等あり、右岸には龍家湖、鴨兒湖、梁子湖、保安湖、三山湖、華家湖、澤源湖、海口湖、網湖等あり、是等は互に水路に據りて連續し又揚子江に通ず、而して增水期に於ては既に洞庭湖に於て述べたるに同樣に揚子江の水準昂起する爲めに本流に排水する能はずして廣く氾濫し、減水期には主要なる一條の流路と所々に湖沼の殘留するものあるに過ぎず、故に夏季の逆流並に冬季に於ける支流の乾涸を防ぐ爲めに本支流の合流點に於て運河に見る所の水門即ち閘を設くるもの少なしとせず。

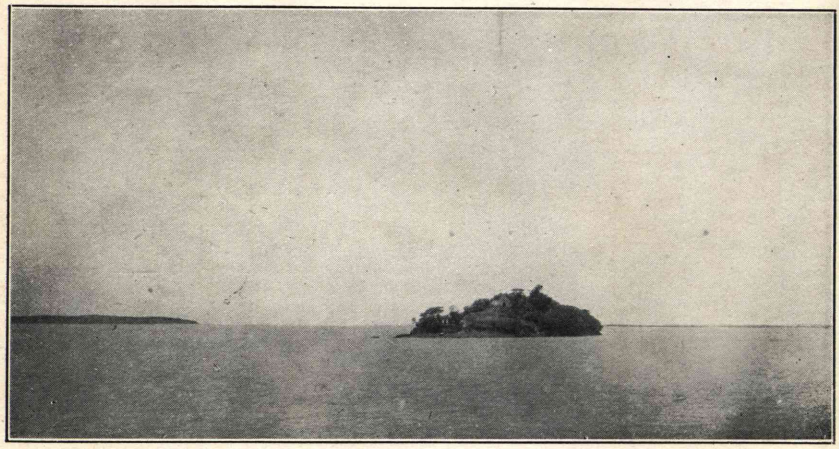
(三)沿海山地帶の湖沼は江西省の彭蠡平野、安徽省の皖南低地及江蘇省の吳平野に分たる。

(イ)彭蠡平野の湖沼は洞庭湖と同樣に增水期と減水期とに於て其廣袤に著しき差異あるを以て其外劃及面積を擧ぐる能はずと雖も其延長約九十哩、幅員二十哩ありと稱す、本平野中の湖沼を鄱陽湖と稱し約南北に延長し都昌、吳城鎭間に於て狹隘となるを以て上鄱陽湖、下鄱陽湖の二に分たる。

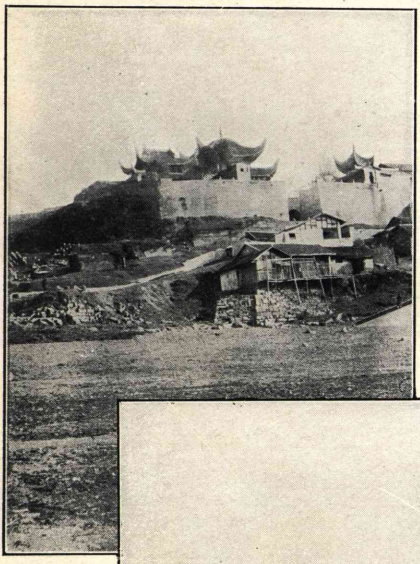
上鄱陽湖は冬季には之に注入する贛江、錦江、樂安河、昌河の水路を認むるに過ぎずと雖も增水期には西は贛江の西方に氾濫し、南は瑞洪、東は饒州附近に亙れる一大湖を形成す、其北方都昌附

第十三版

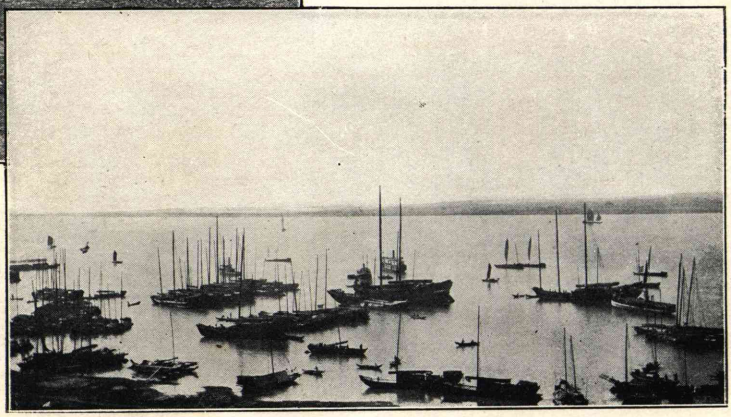
湖沼



（甲）増水期ノ洞庭湖（右は扁山にして左は君山なり）



（乙）洞庭湖畔の岳陽樓



（丙）岳陽樓上より湘江を隔てゝ減水期の洞庭湖を望む

近の山地を除けば其四周は平地なるを以て其氾濫の區域は增水の多少に依りて一樣ならず、其幅員は饒州附近の中央部に最も廣く、吳城鎭に至りて俄に狹隘となり之より下鄱陽湖に入る。

下鄱陽湖は彭蠡湖と稱す、其西方には廬山の連峯障壁の如くに聳立し恰も我邦の琵琶湖より西方比良山の峻峰を見るが如く東方にも亦稍高き山岳あり、其氾濫地域は是等兩山岳に據りて限定せらるゝを以て之を上鄱陽湖に比するに其面積甚だ狹長なり、其幅員は中央部に廣く南端吳城鎭に於て狹く又北端の湖口に於ては一水道を以て揚子江に通ず、湖口の水道は西方狹長なる砂嘴の擁する所となり東方湖口の城址となれる石灰岩の丘陵の扼する所たり、彭蠡湖の水深は上鄱陽湖に比して淺く減水期には贛江の水路を殘すに過ぎず、湖口の南方にある大孤山は洞庭湖の君山と同樣湖口の孤島にして冬季は平地上の丘陵となる。

(ロ)皖南低地の湖沼は揚子江右岸には九江の揚林湖及東流より池州に至る間に散在するものあるも大なるものなし、然るに左岸には九江の對岸より望江に至る間に龍宮湖、大官湖、泊湖其他數多の湖沼相集まりて增水期には全體水底に沒す、(第五圖參照)安慶附近には湖沼の區域稍狹小となるも池州の對岸に至りて再び數多の湖沼分布し更に北方廬江、廬州間に巢湖あり、巢湖は安徽省に於ける一大湖にして其周回百二十五哩と稱し、其南東隅巢に於て水を三叉河及運漕河に通じ蕪湖の對岸に於て揚子江に注入す。

(四)吳平野の湖沼は太湖地方と溧水地方に分たる(第三版及第三圖參照)

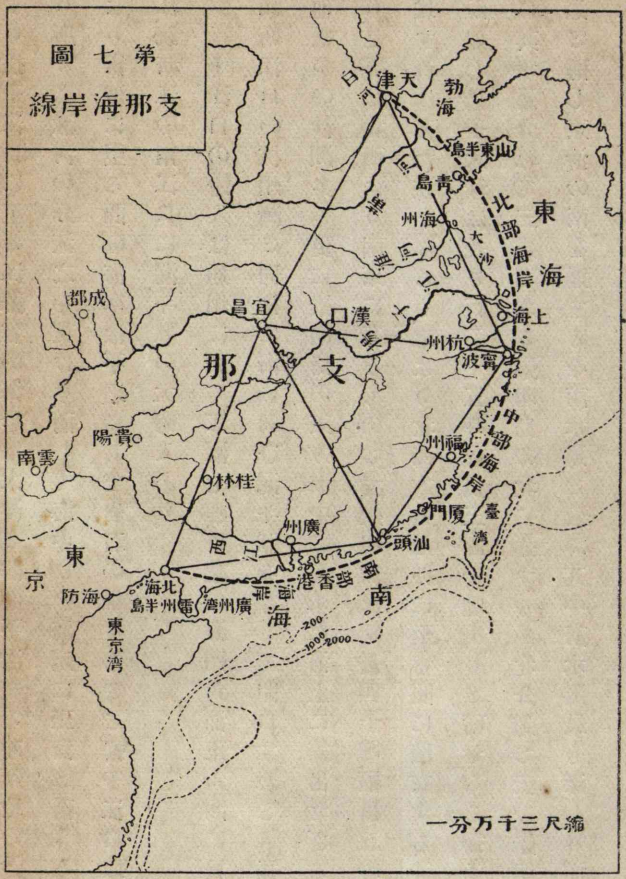
(イ)太湖地方の湖沼は古は震澤と稱す、其中太湖は約圓形をなす、其北東方に蘇州の半島斗出し湖中に十島ありと云ふ、西洞庭山、東洞庭山の二島を著名とす、其面積は鄱陽湖に讓らず、減水期に於ては洞庭湖又は鄱陽湖の如くに其面積縮小せられず、大運河は其北東及東を通じて太湖の水を受く、又太湖より南方に一運河を派出し湖州より杭州の北方洪宸橋に通じ其運河に沿ひ小湖沼多し、太湖の東方に於ては吳江、松江間に澱山湖、澄湖其他大小數多の湖沼あり、互に連續し又太湖に通じ其水を大運河、黃浦江に注入す、太湖の西方には滆湖長蕩湖あり、太湖及大運河に連る。

(ロ)溧水地方の湖沼は溧水、寧國間に石臼湖、固城湖、南漪湖等あり、是等の湖沼は水流に依りて東方は太湖地方の湖沼に通じ西方は揚子江に連結す、蓋し古の中江に相當するものにして揚子江と太湖とを連ぬる湖沼地なり、此外江蘇省の北部に一湖大沼地あり、其中洪澤湖は江蘇、安徽二省に跨れる淮河下流の氾濫地なり、洪澤湖の面積は約太湖に讓らずと云ふも增水期と減水期とには其面積の差大なるは勿論なりとす、淮安より揚州に至る間寶應湖、高郵湖、界首湖、邵伯湖、苦大縱湖等數多の湖沼あり、大運河其中央を縱貫す、蓋し該湖沼地は排水最も困難なる淮河の氾濫地にして、年々增水期に甚だしき災害を蒙むり窮民を出すこと算し難く、北米赤十字社は窮民救護の爲めに多額を費せるのみならず近事米支合辦事業として淮河治水工事に着手せんとす。

(丙)　海岸及島嶼

支那東海及南海に瀕する支那の海岸は弧狀を呈し宜昌附近を中心點とする半圓形を以て之

を示すを得べし、其半徑の長さ約千基米にして天津、青島、上海、寧波、溫州、福州、厦門、汕頭、香港、雷州等は其圓周上に位するものとす、此の如く一半圓を畫ける支那海岸線は其地形及地質構造の關係によりて三部に分つを得べく、之を北部中部、南部の海岸とす(第七圖參照)



(二)北部海岸は支那海岸中最も屈曲に乏しき地方にして山東半島の僅に其單調を妨ぐるあるのみ、其海岸は北々西より南々東に走り山東半島以北は渤海に瀕する白河及黄河の沖積地、以南は東海に面する淮河揚子江並に錢塘江の三角洲地即ち吳平野にして險岩の露出を見ず。

山東半島の南端海州

より揚子江口に至る江蘇省の海岸は大沙と稱し平滑なる沖積地の沙岸にして殆ど一直線に走り所々に淮河の分流之を貫けり、而して海中には海州に玉島と稱する一小島あるのみ、揚子江口より甯波に至る間の海岸は平坦にして岩石の稀なること揚子江口以北と異ならずと雖も揚子江、錢塘江の兩江口に漏斗狀の大灣入あり。

揚子江口の灣入は通州に於て江幅七哩、東端の海門角、浦東角間に於て六十哩あり、而して恰も錢塘江口の杭州灣と同樣に海に向ひ漏斗狀をなして開口すれども揚子北口には崇明島、東沙其他數多の沙洲多く更に崇明島の東方海中にも未だ海上に露出せざる揚子大沙と稱する沙洲あり、是等は北西より南東に亙るものにて、崇明島は延長四十哩、幅員五哩乃至八哩あり、東沙は之に比すれば甚だ狹小なるも、之より北西方吳淞沖に至る間に散在する沙洲と河中に於て連續するが如し、揚子大沙は長さ百二十五哩、幅員三四十哩ありと稱せらる、揚子江口は是等の沙洲の爲めに其水道分れて三道となる、崇明島の北に通ずるを北分道と云ひ、崇明島、東沙間に通ずるを北水道と稱し、東沙の南を通ずるを南水道と云ふ、其中南水道最も深し、外洋航行汽船の通ずるは即ち本水道なり（第三圖參照）。

錢塘江口の灣入部を杭州灣と稱す、其形狀揚子江の河口と酷似するも亦顯著なる差異點を見出すべし、即ち彼にありては江口に沙洲甚だ多くして三水道に分れ、是に在りては小島嶼の散在するのみにして沙洲の揭ぐべきなく、灣外には舟山叢島碁布す、元來錢塘江の江幅は杭州より下

杭州海嘯

（大正四年九月）

（甲）海嘯の來襲

（乙）海嘯の前面

（丙）海嘯の通過

流に於て漸次に廣くして杭州灣に推移す、海寧の東方に至りて其幅七八哩となり、曹娥江口附近十哩あり、澉浦にては一時狹窄せるも海鹽及乍浦に至れば益〻其幅員擴大し浦東角、鎭海間幅員約六十哩ありと云はる、杭州灣の南側は全部沙濱よりなり曹峨江口には凹入し其兩側の蕭山及餘姚には突出す、灣の北側は屈曲少なき沙濱なれども唯澉浦及乍浦の突出部には沙濱の中に岩石露出し海波殊に海嘯の突破する所となれり、灣内には海寧の南方の沖合に白塔山あり、乍浦の東方沖合に小さき島嶼散在す、灣外の舟山叢島に就ては之を閩浙海岸の項に讓らん。

杭州灣に於ける一異觀は舊曆八月朔望に起る所の海嘯(Bore)なりとす、海嘯は又弄潮と稱し古來人の觀光するもの多きを以て又觀潮と稱す、錢塘潮又は浙江潮と云ふもの皆之を指すものとす、海嘯は灣外より灣内に進む所の外潮の爲めに海水著しく暴漲するものを云ひ、灣内深く入るに從ひて愈〻甚だしく海寧附近に於ては狂濤白沫を飛ばして灣内に突入し海水の暴漲すること約十尺乃至二十尺恰も堤防の押寄するが如し、(第十四版參照)海嘯は兩岸の海塘を打て錢塘江に進入し杭州富陽を通過し桐廬附近に達して止み、之より海水は河水と共に漸次海中に背進すと云ふ、海嘯の速力は一時間十二三浬にして海水一時に十尺乃至二十尺に漲起するを以て兩岸の災害甚だし、故に古來海塘と稱する堤防を兩岸に築き之を防禦するのみならず船舶の避難所を設けて航海の安全を計れり、蓋し錢塘の名は此海塘の築造に基因するものなり。

(二)中部海岸　即ち閩浙海岸は甯波より汕頭に亙れる浙江及福建二省の海岸を指すものにして

東海、臺灣海峽及南海に面す、其方向は北々東より南々西に向ひ延長し半島、灣入、島嶼の交互錯雜甚だしき多島海を形成し所謂リアス式の複雜なる海岸線を示すものこす、浙江省にありては石英斑岩、福建省に於ては花崗岩現はれ海岸に突出して險崖を形成す、而して全體を通じて半島、灣入、島嶼の排列を査察するに二種の方向を示せり、一は北東より南西に走れる仙霞嶺山脈の方向にして、一は北西より南東に走るものこす、半島こ島嶼こは現時海水に隔てられ各其處を異にすこ雖も互に密接の關係を有す、是等の半島及島嶼の間に介在する港灣及水道も亦海岸線こ同方面に沿ひ深く灣入し之に注入する河流の河口は漏斗狀をなして海に向ひ開口するもの甚だ多し、此地方海岸の特性は海底甚だ淺くして其百尋線は遠く臺灣島の外にあるに拘らず海岸には殆ど臺地を見ざるなり、これ徐々の沈降によりて生ぜる標式的のリアス式海岸たり、蓋し地質時代より不斷の削剝に據りて著しく調節作用を受け地形著しく變體を來したるものこす、左に半島及島嶼の主要なるものを列擧し其の關係を述ぶべし。

(イ)甯波半島は楔の如く東方に突出し一水道を隔てゝ舟山叢島の北部諸島に對峙す、(ロ)舟山叢島は象山浦より舟山島の南東端を連ぬる線を以て之を南北の二群に分つを得べく兩群共に島嶼の全長は北東より南西に走るも各島の延長は北西より南東又は約東西に走るもの少からずこす、(ハ)象山半島は甯海の地頸を以て象山浦、三門灣間に突出し東方に至るに從ひ幅員益々廣く且つ二突出部に分る、一は象山の突起にして舟山叢島の南部諸島に應じ、一は石浦の突起にして

三門灣外の牛頭島と共に北東方は韮山列島に對し南西方は三門島を隔てゝ臺州半島に呼應す、(ニ)太平半島は黃巖より南東に斗出し楚門の一水道を以て玉環島に對し松門の一水道に據りて吊耑島に向ひ是等は北東より南西に延長す、臺州列島、金門島、黑山列島も亦皆同一方向に向ひ排列す、(ホ)福建省に入りては三都澳、羅源灣を擁する福寧、寧德、連江の半島並に三都澳外の柘洋堡島更に之より沖合に散在する島嶼も亦同方向を示す、(ヘ)海壇島並に興化灣を擁する福清又は興化の兩半島の如き其全長より見るときは北西より南東に斗出するも各灣入の爲めに地頸を生じ其突出する所に於ては北東より南西に走り、一般の海岸線の方向に從ふもの多し、(ト)泉州灣を擁する二半島は厦門島及金門島と共に北東より南西に亙れる線上に坐し銅山島及其北東方の狹長なる半島も亦同方向に連亙す。

前述半島及島嶼の相集まりて複雜なる屈曲部をなす所に港灣多し、而して港灣を形成する場合に約三種類あり、一は半島と半島との間に、二は半島と島嶼との間に、三は河口に港灣を形成す、是等は各單獨に現はるゝものと其中二者及三者同時に現はれ港灣を成すものとあり、象山浦、三沙灣、興化灣は第一類に屬し、三門灣、隘頑灣、樂清灣、海壇灣、厦門灣、銅山灣、詔安灣、汕頭灣は第二類又は第一類、第二類より成り、臺州灣、溫州灣及厦門灣内の海澄灣は第三類に屬するものとす、而して第一、第二の場合に於ける港灣は水深大にして其邊緣には屈曲多く又岩石露出し岩礁亦少なからず、反之第三の場合には概して水深淺く其四周には岩石稀にして沙濱を多くし岩礁に代ふる

に沙洲を以てすること少なからず、左に港灣の主要なるものに就き說明せん。

象山灣は北東より南西の方向に延長し幅員僅に四哩甚だ狹長の彎入にして其灣底及象山に更に複雜なる彎入あり、灣の兩岸には概して險岩迫りて沙濱甚だ少し、灣の北西岸は灣底より殆ど直走して松岙、慈岙を過ぎ半島の岬角に至る間連綿として連續し、其對岸には舟山叢島南部諸島を控へ以て其間に象山浦と連續せる狹長の水道を形成す。

三門灣は石浦の岬角と建跳の尖端とを以て擁せらるゝ大港灣にして灣外に二群の島嶼あり、一は石浦の沖合にある牛頭島其他の諸島にして一は建跳の沖合にある三門列島なり、故に灣口は二群の島嶼の爲めに三水道を生じ以て三門灣の名を附するに至れりと云ふ、三水道中石浦水道最も深く其深さ二三十尋あり石浦は良碇泊所たり、灣内は象山灣に比し甚だ廣濶にして其沿岸甚だ屈曲に富めりと雖も惜むらくは灣底稍淺く且つ岩礁少なからずとす。

三沙灣は閩浙海岸に於ける最も屈曲に富める港灣にして約四個の半島に據りて二重に擁する所となり三個の港灣と一水道を形成す、最も内部に在るを三都澳と稱し三都の小島其灣の中央に位し寧德及福寧より斗出する二半島其兩側を抱擁す、三都澳の外側にある彎入は羅源灣と拓洋堡とを以て圍まれ三都澳より外洋に通ずる水道を三沙海口と稱す。

興化灣は福寧及興化より斗出する二大半島の擁する所となり、南日島其灣口を扼するを以て水道二となる之を南日水道、海壇水道と稱す、興化灣の東には海壇島の島影に海壇灣あり、其西に

も亦一港灣あり。

厦門灣は圍頭角、鎭海角其兩端を扼し灣口に金門島灣内に小金門島厦門島鼓浪嶼の島嶼横はり灣内に安海同安灌口の灣入の外海澄に九龍江河口の港灣あり厦門島鼓浪嶼間水深甚だ深く大船を舶するに足る蓋し南支那に於ける屈指の良港なり（口繪參照）汕頭灣は潮陽の半島其南を抱擁し北方韓江及楓江の三角洲を控え汕頭は三角洲の南端に位す灣内深く大船を入るべし。

（三）南部海岸　即ち廣東海岸は汕頭附近より香港を經て安南界に至る海岸にて南海に面し海岸線の大體の方向約東西に走れり而して半島灣入島嶼は甚だ複雜せりと雖も閩浙海岸の如き多島海の繁多なるに如かず又其海岸に露出するは石英斑岩花崗岩古生層を多しとし殊に澳門より西方に古生層多し其海岸の險岩に富める狀況は閩浙海岸に酷似すと雖も之と異なる點を掲ぐれば海岸線の屈曲の彼の如く緻密にあらずして稍粗大の曲線をなすもの其一半島の南方に斗出するもの多きこと其二海岸線全部の方向東西に走るのみならず島嶼及半島相互に東西に連亙するもの多きこと第三なり。

汕頭香港間の海岸は香港以西の海岸に比し閩浙海岸に類似する所多し即ち九龍半島の南端には香港島大嶼島其他數多の島嶼あり之より東方には平海所海豐の半島と其間に介在する紅海灣碣石鐵灣あり。

香港以西に於ける海岸は香港澳門間に灣入し雷州半島に於て突出す而して香港澳門間の灣

入は香港、澳門其灣口を擁し灣口には大嶼島其他數多の島嶼あり、此灣入の西側をなすものは澳門半島と其の北方に連續する廣東三角洲地に屬し冲積地多きも東側をなすものは九龍半島の險岩なりとす、其灣頭の虎門には珠江、東江の注入するあり、珠江の上流には廣東の大市街を控ゆ、澳門半島の南端に位する澳門の沖合に横琴島あり、之より西方に三竈島、赤溪島、上川島、下川島、海晏島等あり、東西又は東北東より西南西に碁列す。

海晏島より西方には陽江の南方沖合に海陵島を見る外特に顯著なる島嶼なきのみならず海岸一般に屈曲少なし、雷州半島の北東部には佛蘭西の租借に係れる廣州灣のあるありと雖も港灣は沙濱を以て圍まれ灣口の東山島も亦一の沙洲に屬し灣外の吳川より北東方雷白に至る間は一帶の沙濱にして平滑なる海岸を成すものとす。

雷州半島より東方に於ては東京灣の東側に於て屈曲少なきも北側の北海、廉州、欽州に亙れる海岸に於ては灣入斗出稍多く西方東京の海岸に島嶼甚だ多し。

第三章　氣　候

一　氣溫、雨量及風位

北支那、中支那及南支那の中、北支那を代表するは黃河流域にして北緯約三十五度に當り中支那を代表するは揚子江流域にして北緯三十一度に沿ひ南支那を代表するは西江流域にして北回歸線之に當る、該三部は緯度の差此の如く大なるを以て各部に於ける風土の差從て大なり、即ち北支那は空氣乾燥にして氣溫激變し朔北の烈風黃土を席卷して天日爲に暗きこと多く、中支那は空氣濕潤氣溫暖和にして又生物の棲育に適し農產物に富めり、若し夫れ南支那に至りては既に亞熱帶に屬するを以て炎熱强く豪雨亦沛然として到り、颱風は南海の怒濤を招きて海岸を襲ふこと少なからず。

中支那の氣候に就ては之を揚子江の上流地、中流地及下流地に分ちて述ぶるを最適當とす、即ち上流地は高原地たるのみならず盆地を形成し、中流地は之を高原地に比するに土地著しく卑く且つ湖廣低地を包み、下流地は開濶にして平野廣く且つ海岸に瀕す、次表は是等地方の代表たるべき重慶、漢口、上海、香港を擇び其氣壓、氣溫、雨量、風向を表示し之を比較するの用に供せり。

		重慶	漢口	上海	香港
氣壓（單位吋）	一月	29.19	30.37	30.33	30.16
	二月	29.29	30.28	30.28	30.14
	三月	29.06	30.18	30.17	30.06
	四月	28.97	30.12	30.00	29.99
	五月	28.86	29.90	29.87	29.86
	六月	28.76	29.80	29.74	29.76
	七月	28.70	29.73	29.69	29.73
	八月	28.76	29.99	29.73	29.74
	九月	28.97	29.78	29.91	29.84
	十月	29.27	30.18	30.11	29.99
	十一月	29.26	30.27	30 24	30.11
	十二月	29.40	30.34	30.31	30.19
	平均	29.04	30.08	30.03	29.96
氣溫（單位華氏）	一月	47	38	37.4	60.0
	二月	49	41	39.0	58.0
	三月	55	50	46.2	62.7
	四月	68	62	56.0	70.2
	五月	72	71	64.2	76.8
	六月	77	78	74.08	80.7
	七月	80	84	79.06	81.8
	八月	81	84	79.50	81.3

	九　月	73	77	72.3	80.4
	十　月	66	65	63.2	76.3
	十一月	57	54	52.0	69.2
	十二月	49	42	41.6	62.7
	平　均	65	62	58.8	66.3
雨量（單位吋）	一　月	0.59	1.40	2.15	1.41
	二　月	0.99	2.64	2.29	1.70
	三　月	1.58	3.82	3.21	2.95
	四　月	4.57	6.56	3.57	5.66
	五　月	6.58	6.81	3.60	12.75
	六　月	5.55	7.73	6.66	16.43
	七　月	4.53	5.77	5.10	12.37
	八　月	4.88	4.51	5.94	14.29
	九　月	5.32	1.94	4.72	9.47
	十　月	4.73	2.67	3.31	4.53
	十一月	2.25	3.44	1.85	1.51
	十二月	0.95	1.53	1.18	1.06
	計	42.52	48.82	43.60	84.13
	一　月	NWE		N90W	E14N
	二　月	,,		N8W	E14N
	三　月	,,		N52E	E7N

風向				
四　月	NES	S76E	E	
五　月	E—S	S55E	E133	
六　月	〃	S55E	E533	
七　月	E	S39E	E54S	
八　月	E	S62E	E51S	
九　月	N—E	N45E	E11N	
十　月	N—E	N31E	E19N	
十一月	N—E	N8W	E28N	
十二月	——	N23W	E24N	

重慶は巴蜀盆地の中央に位し其氣候は揚子江上流に於ける氣候を代表す、同地に於ける一年の平均氣溫は華氏六十五度、氣壓約二十九吋、雨量四十二、五二吋ニして雨天日數百二十五日ニす、而して冬季は雲深くして曇天多く氣溫四十七度乃至四十九度、氣壓は高くして二十九、三吋を示すも夏季は氣溫甚だしく上昇し五月には氣壓低下して二十八、八吋を示すニ共に既に氣溫は平均七十三度半ニなり最高七十二度乃至九十四度、最低六十二度乃至七十四度を示し七月には氣溫百度ニなり時に百十度に達すニ云ふ、酷暑は即ち雨期にして四五吋の雨量を有す。

漢口は湖廣低地に位し殊に支那内地の中央にあり、其氣候は揚子江の中流地氣候を代表す、其一年平均の氣溫六十二度、氣壓三十、〇八吋、雨量四十八、八二吋、雨天日數八十五日、風向北東乃至南東ニす、但し氣候概して乾燥し夏季は甚だ暑く九月中旬に入り漸く初秋ニなる、秋は甚だ永く晴

朗の天氣多し一月始めて降雪を見ることあり。

嚴寒は一月にして最低十四度を示し一月、二月兩月には北東風と共に黃砂の烈風を起すと云ふ、最も暑きは七八月にして時に百四度に上り此際大雨激しくして河水の氾濫を見るべし。

上海は揚子江口の平野に位し其氣候は下流地の氣候を代表するのみならず又海岸地方の氣候を示す、其一年平均の氣溫は五十八度、八、氣壓三十、〇三吋、雨量四十三、六吋、雨天日數百二十四日にして冬季には北々西風、春秋には北東風、夏季には南東風多し、嚴寒は一月にして最低二十五度を示し、酷暑は七八月にして最高百度に上る、蓋し概して夏冬長くして春秋短く、冬季降雪を見ること少なからず。

南支那の氣候は閩浙の海岸地方と西江流域とに分つを適當とす、上海は閩浙海岸の北端に位し香港は兩地域の間に介在す、香港の氣候は南支那の氣候を代表し、一年平均の氣溫七十六、三度、氣壓二十九、九六吋、雨量八十四、一三吋にして東北東乃至東南東の風最も多し、嚴寒は二月にして酷暑は七月とし最低三十二度、最高九十四度なり、夏季最も永くして雨期は三月より七月に亙り、冬季には降雨稀なりとす。

以上中支那及南支那を代表する重慶、漢口、上海、香港の氣象によりて其氣候の概略を知るべく更に是等の地方に於ける氣候を通覽し其差異の大なる點を指摘せん。

中支那及南支那の氣候に最も至大の影響を與ふるものを季節風とす、季節風の中には冬季

季節風、夏季季節風の二種あり、或は之を北東季節風及南西季節風と稱し、季節風を時に信風と云ふ、蓋し冬季大陸に高氣壓を生じ氣流は海岸に向ひて傾斜し夏季は大陸に低氣壓を生じ氣流は海洋より陸地に向ふ、是れ兩季節風の生ずる所以なり、但し冬季季節風は北東貿易風と同方向に流れ北東より南西に向ふを常態とすれども處に據りて方向を變ず、例へば中支那に於て下流地に於ては北々西風となり、中流地に於ては北東風の外に北々西風を混へ、上流地に於ては北東風となる、南支那に於ては閩浙海岸には北東風なれども廣東海岸には東風又は北東風なりとす、而して冬季季節風の期間も亦普通は九月乃至十月より四月に亙るを雖も揚子江上流及中流地に於ては七八月の兩月を除く外は冬季季節風の期間にして其期間甚だ長く之に反して南支那に於ては夏季季節風の期間比較的に永くして冬季の季節風は中支那に比すれば稍短く十一月頃より吹き始むることあり、夏季季節風は南西風を普通とすれども香港には東風又は東南東風となり、閩浙海岸には南風又は南西風、上海に於ては南東風を示し、漢口及重慶には東風又は東南東風となる、而して夏季季節風の期間は五月より九月に至るを常態とするも該季節風は元來印度支那海岸より始まり漸次支那海岸に及ぶものなるを以て南支那の南部に早くして中支那方面之に後る、其季節風の期間は南方には三、四月より十月頃に亙ることあるも中支那の漢口及重慶方面に於ては約七、八二箇月に限らるゝこと多しとす。

要するに中支那は冬季季節風の影響を受くること最も多く南支那は之に反して夏季季節風

の影響を受くること最も大なる結果として中支那の氣候は冬季に寒氣稍强くして烈風を生じ屢々北支那の黃砂を席卷して揚子江に降下す、蓋し漢口附近は北に淮山脈を負ひ北東の烈風を遮ること雖も、漢江の支流唐河に沿へる南陽附近の一窪地は北支那より中支那に向ひ黃砂を吹込む所の一大狹間を形成し、之に沿ひ吹込める黃砂は漢口の北西方應城縣附近の地表を被へるを目擊せり、加ふるに中支那に於ては冬季季節風の齎す所の濕氣の爲め冬の雨期を生じ夏季季節風の之に代るに際し再び夏の雨期を現出するを以て雨量稍多く又氣溫の一年間の差比較的多く漢口の如き支那內地の中央に位し平野の廣大なる地方にあるものは冬夏の氣溫甚だしく激變するものあり、之に反して南支那は夏季季節風の影響を受くること大なるを以て冬季は溫暖にして降雨稀に且つ冬季季節風によりて齎す所の雨雪は閩浙海岸の北部に之を見るのみにして臺灣海峽より南方に於ては冬季雨期を現出せずと雖も夏季季節風に伴ふ雨量甚だ多くして夏の雨期を現出し且つ颱風の之に伴ふこと多し、又夏季は甚だ永くして炎暑燒くが如く瘴癘の氣に充てり、殊に西江の上流雲南地方は六七千尺以上の高處に位するも夏季季節風の影響に據りて炎熱の時多く且つ沼澤に富めるを以て頗る瘴癘多しと云ふ。

二　雨期及增水期

雨期には冬の雨期と夏の雨期とあり、是れ前項に述べたる季節風の影響なりとす、冬の雨期

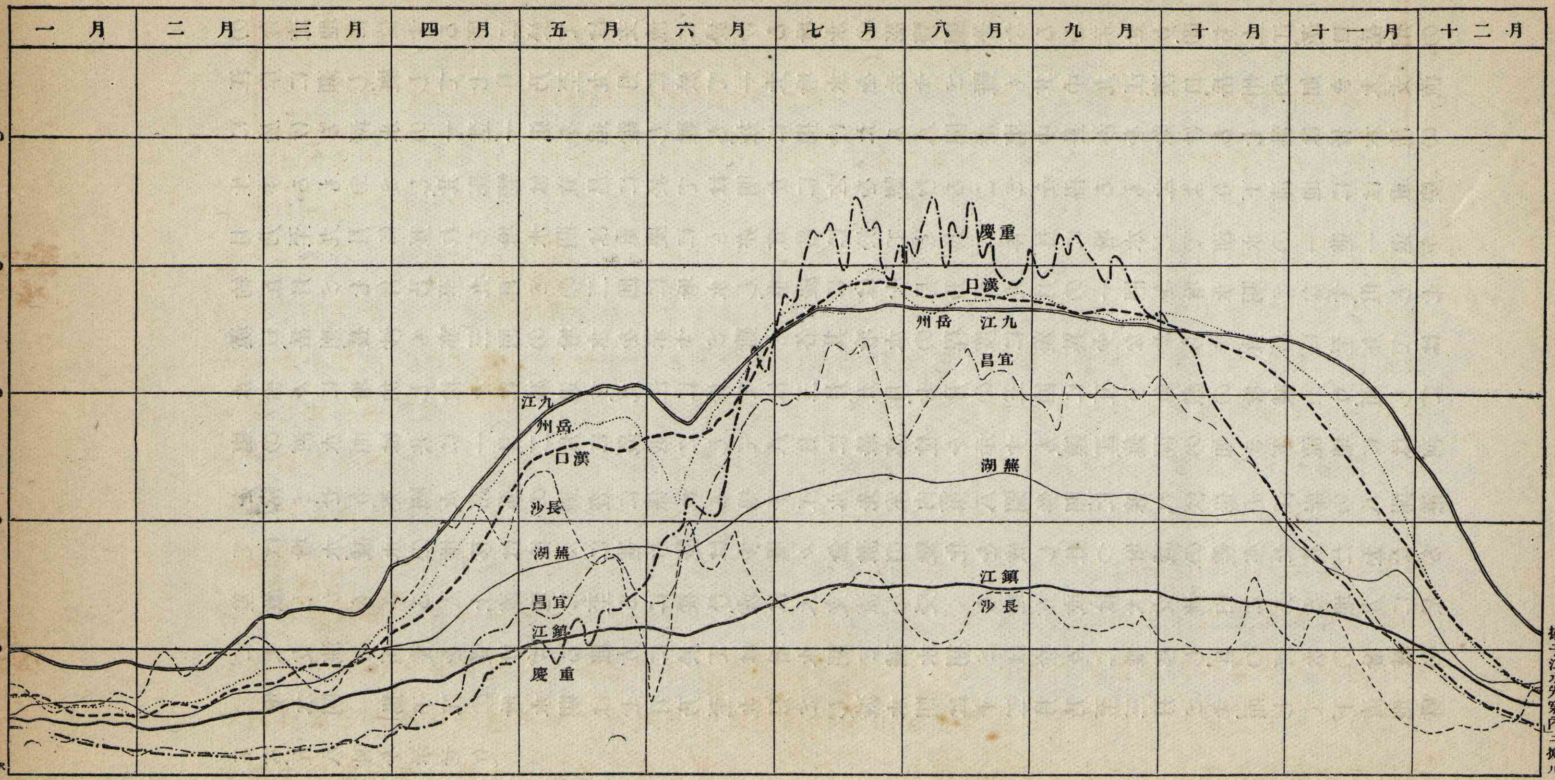
ば冬季季節風の齎らす所にして一、二月頃に多し、大正三年一月湖南省資江流域に於て、大正四年二月江西省袁江流域に於て約一箇月間の雨期に會せり、但し此時期には大雨を見ざるも時々雨雪を降し概して陰鬱の天氣多く其雨量は夏季の雨期に比すれば甚だ少なし且つ高處には積雪となりて殘るを以て河水は著しく增漲を見るに至らず、揚子江流域に於て冬の雨期の及ぶ所は上流よりも下流に至るに從ひて著し、之を前表に依りて徵するに一月の雨量は重慶に於て〇、五九吋、漢口に於て一、四〇吋、上海に於て二、一五吋、香港に於て一、四一吋となし、二月には重慶〇、九九、漢口二、六四、上海二、二九、香港一、七〇となす、蓋し冬季の雨量の揚子江流域の上流に少なくして下流に多く南支那に少なきを示すものとす、但し閩浙海岸殊に臺灣海峽以北即ち福州より甯波に至る海岸には冬季季節風並に寒流の影響を受くること我臺灣の北部と同樣にして雨雪多し、現に旅行中大正二年一月臺州附近に於て大雪に會せしことあり。

夏季の雨期は夏季季節風の齎す所にして六七月に多きも廣東方面並に南支那沿岸に於ては三四月頃既に酷暑と共に雷雨を生ず、中支那及南支那の境界地方及之より北方に於ては五月頃に至りて雨期となり揚子江の中流及上流の沿岸には六七又は八月頃雨期を現出す、夏季の雨期は南支那の臺灣海峽以南に於て最も著しく揚子江流域に於ては中流地方最も顯著にして下流及上流の順序なり、其雨量は香港に於て平均二吋乃至十六吋にして最高約四十九吋を示せり、而して其他の地方に於ける平均雨量の最高は漢口に於て七、七三吋、上海に於て六、六六吋、重慶に於

て六、五八吋を示せり。

增水期　揚子江の增水期は七月乃至九月ニし、減水期は十二月乃至三月ニす、而して下流地殊に大支流の涵養を受けざる地方に於ては增水期ニ減水期ニは徐々に推移し、且つ河水の增減の差激しからざるも上流地に至るに從ひ、或は大支流を受くる地方或は大支流内にある地方に於ては增水、減水の推移は徐々に進む能はず屢々急激の變化を成し且つ增減の差亦た甚だ大なるを常ニせり、英國水路部の調査に係れる揚子江水先案内(第八圖參照)に據れば揚子江岸の八開港場の河水面は共に一月、二月に最低にして八月に最高位を示すも、鎭江、蕪湖の如き下流地には河水徐々に增加し徐々に減退す、九江に於ては三月、五月、七月の三回に亙り急激の增減あり、而して漢口、岳州、長沙も亦三回の增水を示すニ雖も各其增水の程度に差異少なからず、宜昌に至りては約五月ニ七月乃至九月ニの二回に增水し、重慶には七月乃至九月の一回を增水期ニなす、但し七月乃至九月に亙れる增水期は重慶にも亦宜昌に於ても共に各月に增水して河水の一進一退を生ずるものニし、其影響は宜昌に於ては明かに之を認むることを得るも之より下流地には重慶に於ける河水の一進一退を追蹤し難し、茲に揭げたる八開港場中長沙を除ける七港は皆本流の江岸に瀕し、概して七月乃至九月に於て一大增水を示すニ雖も其中九江、漢口、岳州の如き大支流の合流地に位する所に於ては支流に於ける增水の影響顯著なるを示せり、即ち九江、漢口、岳州の三港に於て七月乃至九月の大增水の外に更に三月、五月の二回に亙りて小增水を示せるは是れ

第八圖　揚子江河水高低表



冬季の雨期と並に揚子江南部に來る初夏の雨期との影響なりとす、若し夫れ長沙の增水期に至りては他の七港と稍趣を異にせり、即ち長沙は其位置湘江畔而も洞庭湖の上流に位するを以て同地に於ける增水は湘江の流域に於ける雨量の多少に據るものなり、故に之に據りて本流と支流との間に多少增水期の差あるを知ることを得べし、即ち湘江に於ける第一回の增水は二月にして其雨は冬の季節風の齎す所とし、第二回の增水は四月中旬より五月上旬にして其他の諸港に於ける增水に比し約一箇月の差あり、但し五月上旬には既に長沙附近に豪雨を見るも四月中旬には長沙附近に未だ豪雨なく寧ろ之より南方湘江の上流に豪雨多し、是れ初夏廣東、廣西を侵す所の夏季季節風の影響を受くること多きが爲にして、該季節風は大庾嶺山脈に多量の雨を降下するを以てなり、故に湘江のみならず江西省の贛江、湖南省の沅江、資江も共に其上流には該季節風の影響を受け多少の增水を示せり、但し湘江は源を廣西省内に發し水流は桂江と連絡し其間に主要なる分水嶺を認めざるを以て桂江上流に始まれる南支那方面の雨期は最も多く湘江流域に影響を與ふべきものと思惟す。

揚子江の上流より下流に亙り處に從ひて增水の量一樣ならざることは左表に示すが如し。

	河口よりの距離(哩)	河水面の高低の差(呎)		河口よりの距離(哩)	河水面の高低の差(呎)
重慶	一、三七〇	四三五	宜昌	九七〇	三二、五
岳州	七三〇	三五	漢口	六二〇	三四

九江	四七〇	二九五	蕪湖	二八一	一九
南京	二二八	一八	鎭江	一八二	一二
吳淞	三二	三			

但し右表は支那海關に於て日々の平均水面より算出せるものなれども一日中に於ける水位の上下甚だしきを以て之に據りては未だ河水增減の極度を知ること能はざるべし、故に左に增減の甚だしき一二の例を示し以て河水增減の如何に大なるかを說明せん、即ち重慶に於ては右表に示すが如く平均增減差四十三呎半とせるも千八百九十二年七月には九十六呎半、千八百九十八年八月には約百呎の增水を見、宜昌に於ては千八百九十二年に四十九呎、千八百九十八年に四十八呎を算せり、又宜昌より下流に於ける最高記錄に據れば岳州に於ては千九百九年に四十八呎、漢口に於ては千九百二年七月に四十六呎、千八百七十年に五十呎なりとす、蓋し重慶に於て時に增水百尺以上に達するに拘らず宜昌に於ける河水面は之より上流並に下流の地方に比して高からざるは次の理由に據らん、即ち一は宜昌より上流には三峽の峽門を控え排水比較的多からざるに反し宜昌は其下流に廣大なる氾濫地を控ゆるを以て上流地の如く增水せず、一は宜昌には大支流注入せざれども之より下流の岳州、漢口、九江には大支流注入す、是れ宜昌よりも其下流に於て支流より排水する水量の爲に著しく增水を成す所以なり。

揚子江の水量　其季節に據り增減あること前々より述ぶる所なり、蓋し其流域は約七十五萬

平方哩を占むと稱し其流域に於ける降水量も亦前々の表に示せる如く多量なるを以て其水流の多きや明かなりとす、宜昌に於て六月の水量一秒に付六十七萬五千八百立方呎、漢口に於ては同月の水量一秒間に付百萬立方呎と稱す、ガッピー氏の漢口に於ける觀測に據れば揚子江より海面に排出する水量は平均一秒に付七十七萬立方呎と稱す、但し揚子江の河水は四時濁水にして其增水時の如きは殆ど泥水相半するが如き感を與ふるものにして其河水中に含まるゝ泥土の量亦甚だ多し、同氏は揚子江より海中に排出せらるゝ泥土の量を一年間六十四億二千八百八十五萬八千二百五十五立方呎ならんと斷ず、以て其水量の多きを知るべし、而して河水の海面に向ひ流出する速力は季節に從ひて異れりと雖も沙市に於て夏季に七八浬、冬季に二三浬とし、漢口に於ては減水期に半浬乃至一浬半、七月に三浬半、八月に四浬、時に五乃至八浬となることあり、九江に於ては增水期に五浬、減水期に二浬、南京に於ては十一月、三月間に三浬半なりとし、之より下流は潮汐の影響を受け變化大なりとす。

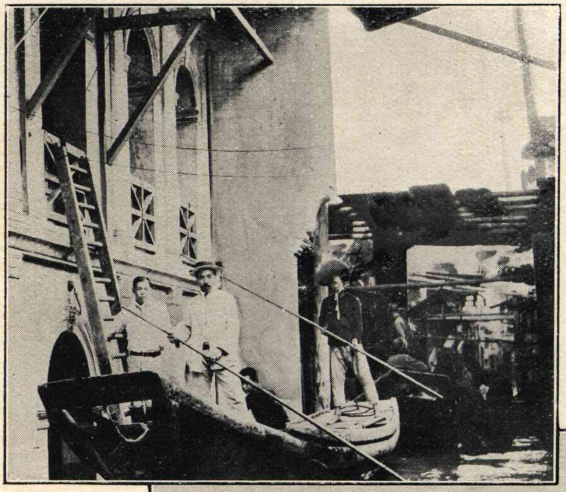
氾濫及被害　揚子江に於ける增水の程度は前述したる如く甚だしく、從て其氾濫地域も亦甚だ廣し、其上流地の重慶附近に於て河流は四周の山岳地より百尺以上の增水を現出すと雖も元來揚子江は深谷を流るゝを以て增水百尺に達するも尙氾濫する平地なしと雖も、一たび三峽の峽門を出で宜昌に至りて湖廣低地に流下するや流水を遮る山岳なく滔々たる奔流は兩岸の平野に氾濫し或は堤防を破壞し以て一大湖沼を形成す、洞庭湖、鄱陽湖の如きは增水期に於ける河

水の氾濫に據り生ずるもの其主要部を占む蓋し揚子江流域に於て最も水害の災を受くるは洞庭湖及湘江、鄱陽湖附近にして蕪湖地方之に次ぐ、而して千九百一年の如く未だ大害を受けたることなかるべし、九江に於ては同年三月十三日其水標零位下一呎なりしも七月二十一日增水して零位上四十四呎十一吋ミなり九江附近約三十哩の地に氾濫せり、漢口に於ては同年三月十三日零位下二呎四吋なりしも七月二十四日には零位上四十六呎三吋ミなり、長沙に於ては千八百九十九年に三十七呎、千九百五年には四十呎ミなれり、千九百九年七月十七日には沙市、漢口、洞庭湖、岳州には水量甚だしく、殊に岳州の水標四十八呎ミなり九江には四十二呎を示せり。

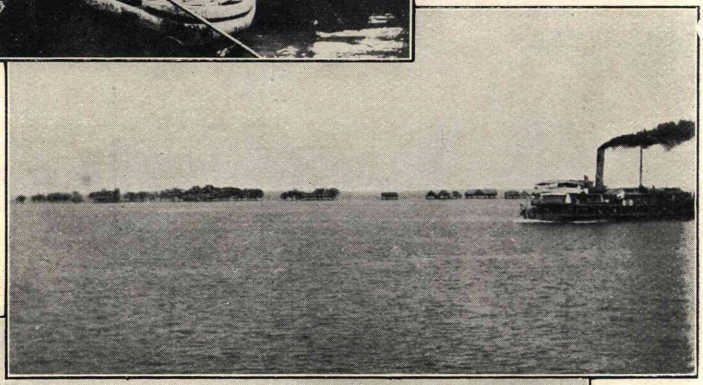
民國三年旅行中南支那及中支那に亙れる大洪水に遭遇し其被害の如何に大なるかを目撃せり、即ち同年は約二回水害あり、初めは五月十七日より二十日に亙り廣東並に江西、湖南二省界地に大雨あり、北江、贛江並に湖南省湘江に增水し被害多く株萍鐵道の鐵橋を破壞す、六月には九日より二十日に亙り同三省及南支那一帶に大雨あり、殊に湖南、廣東、江西に於て其被害多し、長沙に於ては十二日より增水して二十日に其極度に達し稅關水標三十九呎を示して城内に浸水せり、(第十五版甲參照)這般の大洪水當時に於ける氣壓の分布を見るに五月十八日江西省鄱陽湖地方に低氣壓現はれ七百六十粍より七百五十二粍に降下し甯波方面に向へり、六月九日には低氣壓は湖南中部に現はれ七百五十粍を示し十四日には再び洞庭湖に低氣壓現はれて七百五十二粍を示し、十五日黄海方面に進行したるも十六日より十八日に亙り更に低氣壓現出せるものゝ如し、

第十五版

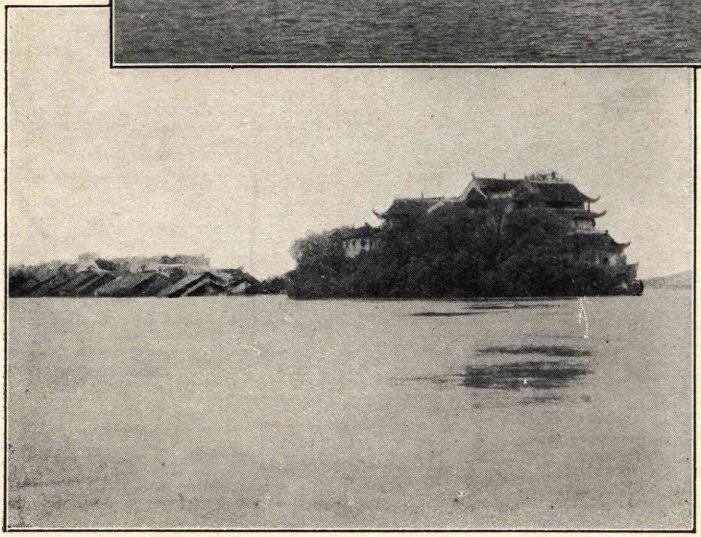
洪水



（甲）湖南省長沙城内の洪水



（乙）湖南省盧林潭の洪水



（丙）湖南省衡州の洪水

之が爲に其被害大なりしは湖南にありては湘江の永州、衡州、醴陵、湘潭、長沙にして沅江、澧江、資江共に氾濫し衡州より下流は一帶の湖沼と化せり、(第十五版乙及丙參照)江西省にありては建昌、南昌、吉安地方其害最も甚だしく、廣東省にありては梧州より下流に大氾濫をなし梧州に於て七十尺の增水をなし德慶、肇慶亦其災に會し三水、順德、香山、新會の如き三角洲地は其浸水の區域其全部に亙れるが如く其人畜產業に與へし害や計り知るべからざりしなり。

西江は其源を遠く雲南及貴州の高原地に發し廣東に至りて北江、東江を合せ之より下流に所謂廣東三角洲を形成するを以て三角洲地は網の如き縱橫の水流に貫かれ一たび其上流地に豪雨あるときは三角洲地は一面水底に沒することゝ屢々目擊する所なり、前述民國三年の洪水の如き其一例なりとす、而して西江並に北江及東江の流域は揚子江流域の如く冬季季節風の齎す所の冬季の雨期を見ずと雖も夏季季節風の流行する期間甚だ長くして三月頃より九、十月頃に至る迄雷鳴と共に豪雨を降らし其雨量は四十九吋に達することあり、八九月頃、夏季季節風の終期に近かんとするや後に述ぶる所の颱風を惹起して海岸を襲ひ陸上に洪水を現出す、三水は西江と北江との合流地にして兩江は一條の通路に據りて連絡す、其稅關の水標を基とし平時は十八呎の水位を示すも其最高記錄は二十五呎四吋、最低記錄は三呎十吋なり。

三　支那海の颱風

南支那には夏季季節風流行の間殊に其終期に至りて颱風即ち大風の襲來するもの激し、颱風は呂宋附近殊にヤップ島及グアム島附近に發生し北西方に向ひ印度支那海岸より海南島に達し之より進路を北東に轉じ南支那海岸及日本の南方を襲ふものにして、五月中は熱帶地方に限らるゝも六月には海南島に向ひ香港及汕頭地方を襲ひ或は臺灣海峽内を進み七月乃至九月頃には南支那海岸全部より日本を襲ふ、就中大風の猛烈なるものは臺灣より日本に向ふもの多く、支那海岸に沿ひ北進するもの稀なるを以て福州及厦門には被害少なく且つ上海方面は大風の害を受くることは甚だ稀なりとす、故に大風の害を受くるは支那にありては香港及汕頭とし之より南西方並に臺灣、日本本土とす、アーシューク氏の調査に從へば八十五年間に颱風の南支那海岸を襲へる回數は五月十一回、六月十回、七月二十二回、八月四十回、九月五十八回、十月三十五回、十一月十六回、十二月六回とし八九月に最も多し、又支那年鑑に據れば南支那には一年平均十六回の颱風現はれ時に上海附近に達することあり、其速力は一時間平均五十哩乃至百十哩にして其中心の移動は普通九哩内外なるも時に八哩乃至五十哩に達することありと云ふ、千九百八年香港及廣東を襲へる颱風は近年稀なる災害を與へたり、同年九月十八日晴雨計の急劇なる下降と共に颱風は怒濤を伴ひ襲來し當時港内に碇泊せる船舶は避難の暇なく沈沒の災難に遭遇せるもの外洋汽船四、内河汽船五、小蒸氣船五十八、戎克千二百餘に達し此外汽船二十五隻は擱坐し三十二隻は衝突し港内の溺死者五千餘名に達せりと云ふ以て其颱風の猛烈なりしや知るべし。

第四章　住　民

一　住民の分布

支那は國土廣大にして其歷史甚だ悠遠なるを以て其住居民族の種類甚だ雜多なり、而して其統治者の滿族たるに、蒙古族たるに、將た漢族たるに拘らず支那を形成する主要民族の漢族たることは支那建國以來現時に至るも毫も變る所なし、蓋し漢族は北支那に起り中支那に發展して漸次南方に及べるも其根據は常に中支那にあり、惟ふに漢族は南方三苗並に南蠻諸族を征服して同化に力を致せりに雖も常に禍亂の因を成せり、飜て北方を見るに漢族は滿蒙諸族の壓迫に對し防備甚だ努めしも力及ばず萬里長城亦以て之が侵入を防止する能はずして遂に其族の統治を受くるに至れり。

中支那及南支那に於ける住民は其種類甚だ多く漢族其大部分を占め蠻族其間所々に散在す、殊に高原地帶には蠻族の今尚山岳中に占居するもの多し、近年外國との交通盛なるに從ひ開港場には外國人甚だしく增加するに至れり。

（一）蠻　族（第十六版參照）

蠻族には西藏族に屬する西番族、印度支那族に屬する羅羅族、蠻子族、苗族、猺族、黎族、夷家族、摩叟族、力叟族、民家族等の種族あり、蓋し蠻族は漢族の支那に移住せし以前に於て南支那は固より中支那の揚子江流域に播布せり、漢族の黃河溪谷に據り更に陝西、河南の地より秦嶺、大巴山脈並に淮山脈を橫斷して南方四川及湖北の豐饒なる地方に移住せる際には、三苗は武漢の地に據り揚子江流域は實に苗族の居住地たりしなり、然るに帝舜の南巡以來漢族は苗族を征して南進し南支那の沿岸地方に移住せる漢族は南支那に於ける蠻族を北方に壓迫したれば閩浙山地に於ては彼等は僅に所々小區域に散在するに過ぎず。

（イ）高原地帶の蠻族

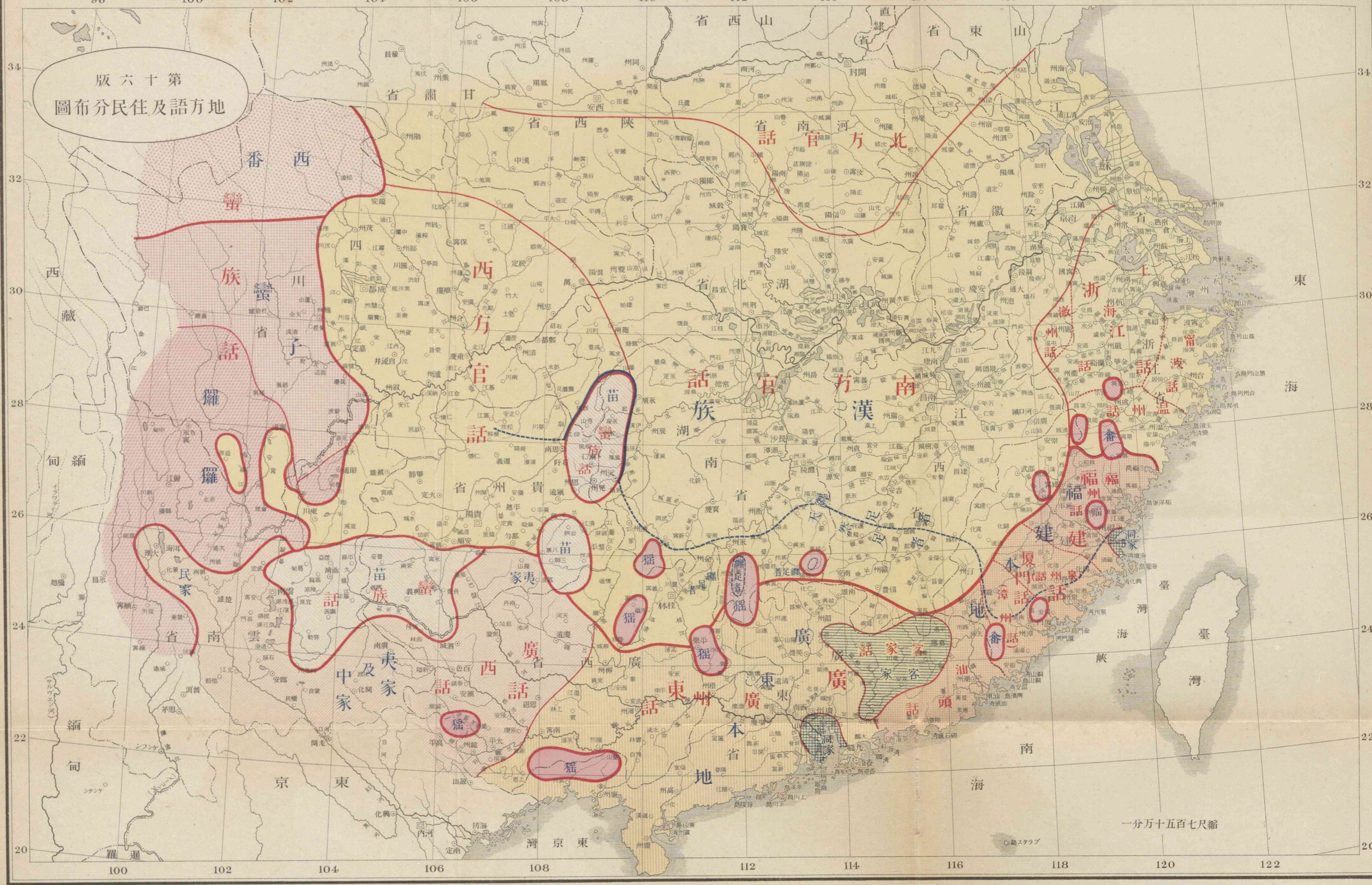
高原地帶には苗族、羅羅、蠻子、西番、夷家、摩叟、力叟、民家の諸族あり。

苗族　は蠻族中最も廣き區域に播布し最も大なる勢力を有し古代に於ては揚子江流域に住居せりと雖も漢族の爲めに湖南、貴州、雲南、四川四省の一部に壓せられ、貴州及雲南の二省に於ては常に漢族に抗し西曆千八百五十六年より千八百七十二年に至れる回教亂及苗賊亂の後遂に全く漢族の支配に屬するに至れり。

苗族は苗子と稱する一大族にして其服裝に據りて白苗、黑苗、華苗の三大別あり、更に五十餘種に分たる（第十七版甲參照）

現時苗族の最も廣く居を占むるは雲貴高原にして雲南省の中部より東部並に貴州省に亙れ

第十六版
地方語及住民分布圖


98
100
102
104
106
108
110
112
114
116
118
120
122
124
34
32
30
28
26
24
22
20
省西山
直隸省
省東山
省肅甘
省西陝
省南河
話官方北
江浦江
安淮
熊
省徽安
京南
省常
上海
浙江
徽州話
話
寧
波
話
省
溫
州
話
福州話
福
建
廈門話
漳州話
泉
話
地
區
廣東省
西話
廣東話
家客
汕頭
話
廣東本地話
猺
苗蠻話
苗族
家及中家
南省
漢
南
江
西
貴
州
省
雲
南
省
西
藏
緬甸
羅遜
京東灣
南海
臺灣海峽
番西
蠻
族
羅
猓
話
蠻
川
省
子
話
官
方
西
話
官
話
族
湖
北
省
苗
族
話
蠻
猺
猺
猺

り、此地方は所謂化外の地にして苗嶺山脈東西に走り分水嶺をなす、力娄は南方に住居す、此外貴州省の南東部及東方より四川省南東部に分布する苗族あり、摩娄及力娄は苗族の一種と云ひ又玀玀族或は西藏族の一種と云ふ恐らく雜種ならん、摩娄及民家は雲南省の北西方に、力娄は同省の南方に住居するも其區域狹し。

玀玀族　は猓猓又は獠獠と稱し其服裝に據りて白猓、黑猓の二種に分つ、玀玀は緬甸方面より移住せる民族なりと云ひ其分布地は雲南省の東部より貴州省の南西部に亙る、而して四川省の南部建長の溪谷に居住する玀玀は特に之を蠻子と稱す。

西番族　は番子と稱す、羌子即ち西藏人と同種族に屬し甘肅省に最も多く四川省の西方懋功、打箭爐の如き西藏界より南方雲南省の維西及中甸に亙りて分布し、成都に近き灌縣地方にも居住すと云ふ。

夷家族　に擺夷、僰夷の二種あり、其分布の最も廣きは廣西省にして北方貴州省の南部に亙り廣西省に於ては全住民の三分の二を占むと云ふ。

（ロ）五嶺山地の蠻族

五嶺山地には猺族及黎族の二族住居す。

猺族　は緬甸族に屬し廣西省より湖南及廣東二省に散在す、猺族は苗族に次ぐる一大族にして苗族の如く漢族と爭鬪したりと雖も道光年間には既に漢族の爲めに征伏せられ復之に抗せ

す、其種類多しと雖其居住地によりて之を山猺、平猺の二種とす、平猺は平地の猺にして現時は漢族と雜り風俗亦彼等と異るなし、山猺は今尙山村即ち猺洞に居住し風俗、言語共に漢族と異れり、(第十七版乙參照)其分布は湖南省に於て三箇所あり、一は資江の上流地たる武岡州、城步縣、二は湘江の支流たる瀟江流域の道州、江華縣、永明縣、三は同支流耒水流域の桂陽縣、汝城桂東縣地方とす、江華縣附近の猺族は南方に廣西省賀江流域の賀縣並に廣東省連江流域の連州及連山廳に連り其分布の地域廣しとす、蓋し古來此地方の猺族は姑婁山、九疑山の如き天險に據り頑强に漢族に抗し容易に屈せざりしも現時は極めて勤勉の民となり農業又は林業に從事す、而して彼等の據れる天險は近時解散兵、革命餘黨及草賊より成れる土匪の一團之に據り漢族及猺族の良民は却て之が爲に困しむ所となれり。

廣東省の海岸地方に居住する猺族は之を廣東猺と稱し、之に對して前述湖南、廣西、廣東三省界地のものを湖南猺と稱す、廣東猺は廣東省廉州府內の山地に住居し十二世紀頃廣西省より移住せりと稱す現時其數約三萬人あり。

黎族　は苗族の一種にして廣東省海南島に居住し二千年前より漢族に抗して山地に據れり。

(ハ)　閩浙山地の蠻族

閩浙山地の蠻族を畲族と稱す、浙江省に猺族住居すと稱するも明かならず。

畲族　は又畲客と稱す、(第十七版丙參照)畲は假字にして畲を正とす、浙江通志の記す所によれ

第十七版

蠻族

（甲）苗族

（乙）猺族

（丙）畲族

ば畲族の浙江省處州に入しは順治十八年にして廣東省瓊州より移れりと云ふ、現今處州府に最も多く居住し福建省及浙江省北方に散在す、處州府の麗水、青田、縉雲、松陽、遂昌、龍泉、慶元、雲和、宣平、景寧十縣中雲和、景寧に住するもの五千餘、遂昌に住するもの約八千と稱し、此外衢州、嚴州二府にも居住す。

(二) 漢族

漢族は幾度か北方より南方に、又海岸地方より山地に移住せり。

中家　は客家、學老、洞家と共に先住の漢族なり、就中中家は貴州省にありて時に之を中苗と稱し、青中家、老本家、土人等の別あり、本族は元來貴州省に駐在せる漢族軍人の後裔なりと稱するも蓋し漢族と苗族との雜種と認むべきものならん。

客家　は廣東土着人に對する稱にして廣東及廣西の二省に居住し福建省より移住せる一族なりと云ひ廣西省に於けるものは夷家と漢族との雜種なりと唱ふるものあり、廣東省に於ては北東方福建省に近き地方に居住するも其數多からず。

學老　は廣東省の北東部に居住し、客家と同じく福建省より移住せる一族なりと云ふ。

洞家　は廣東、福建二省の海岸地方に於て水上生活を成す一族にして、船中に生れて船中に死し陸上に住宅を有せず、廣東市街の珠江に浮ぶ所の一二萬の蠻民は即ち之に屬す、此外福建省厦門、福州地方に散在するもの亦少なからず。

漢族は概して中支那の揚子江流域に於ては風俗、言語等に著しき差異なきも南支那に於ては蠻族又は前住漢族との雜種多く且つ言語、風俗、人情著しく異れり、殊に浙江省より福建省を經て廣東省に至るに從ひ漢族の數減少し貴州、雲南二省に至りては蠻族の數著しく增加するに至る、而して福建、廣東及廣西省の一部に於ては後住の漢族並に其雜種を本地人と稱す。

中支那及南支那の漢族中四川人は北方は甘肅、陝西二省に、南方は貴州、雲南二省に移住し、安徽省殊に皖北に於ては湖北人及河南人の移住するもの多く、之に反して皖南の徽州人は江蘇及浙江二省に出づるもの甚だ多し、江西人は南方福建省內に移住するのみならず商人として各省に駐まるもの多し。

湖南人は湘江に沿ひ廣西省に移住するのみならず沅江に沿ひ貴州省に移住す。

福建人は古來廣東地方に移住し客家、學老と稱せらる、此外東方浙江省甌江流域に移住せるもの少なからず、而して福建人に廣東と共に海外に移住すること支那人中に最も多しとす。

(三) 滿族

滿洲は北支那と境を接し且つ統治者として北支那に君臨せることあるを以て北支那には滿族甚だ多く住居するも中支那及南支那には其數甚だ少なし、清朝に至りて滿洲八旗兵を主なる險要に派し、中支那に於ては成都、荊州、南京、杭州に、南支那に於ては福州、廣東に駐在せしめたり、八旗兵は清朝二三百年の間代々相襲ぎて殆ど土着し其地方に於ける一勢力たりき、然るに中華民

國成立後多くは離散するに至れりと雖も尚舊駐屯地方に住居するもの少なからず。

(四) 外國人

外國人は宗教傳道及通商の爲め支那に來住す、即ち印度人、猶太人の如きは主として布教の爲め、亞剌比亞人、葡萄牙人其他の歐米人は主として通商又は布教の爲めに居住するに至れり。

印度人の支那に往來するに至りしは西曆紀元六七十年頃の佛教傳來の時代に始まり、其目的は多く宗教に存せり、猶太人及波斯人の支那に移住するに至れるは猶太教即ち景教の傳來當時即ち唐の貞觀年間にして其當時イスラエル人の來住せるもの四百人に及びしと云ふ、而して印度人及猶太人は主として北支那方面に住せり、中支那及南支那に於ける外國人の移住は亞剌比亞人を以て嚆矢とす。

亞剌比亞人は七世紀の頃通商の目的を以て支那に來住せり、其通路として一部は中央亞細亞より陸路に據るならんも一部は海路廣東、福建、浙江の海岸に至り、廣東及杭州に於て盛に貿易に從事せり、後通商貿易の衰微するや亞剌比亞人の數甚しく減少し其勢力を失へりと雖も、彼等の信ずる回教は廣東地方に於ける支那人の間に著しく傳播せり、廣東市街の懷聖寺は紀元六百二十六年の建立に係り其四周に今尚ほ回教徒多く居住し寺内に學堂を有し子弟の教育に從事す。

近世に至りて歐洲人の始めて支那に來住せるものを葡萄牙人、西班牙人、和蘭人とし之に次ぐを英吉利人、佛蘭西人とす、爾後歐米各國人の支那に來住するもの多し。

葡萄牙人は喜望峰航路の開始以來印度より東亞の貿易に從事し、西曆千五百十六年支那に入り廣東海岸三竈島を根據とし福州、寧波等に來往し遂に阿瑪港即ち澳門に其植民地を建設するに至れり。

西班牙人は比律賓島の占領後馬尼剌を根據とし支那海岸の廈門、福州地方と往來し通商に從事せるも却て支那人の比律賓島に移往するもの多し。

和蘭人は爪哇、スマトラ占領後千六百二十二年澳門に來りしも澳門は既に葡萄牙人の植民地たり、即ち去て澎湖島に至り更に臺灣に移り基隆、淡水、安平を根據とし支那の通商に從事したりしも明末に至り鄭成功に追放せられ、臺灣を撤退して爪哇に至り茲を根據とし尚ほ廣東に往來して通商に從事せるも遂に植民地を建設するに至らず。

英吉利人の支那に入りしは西曆千六百三十七年にして澳門に於ける英、葡、支三國間の紛擾後貿易の許可を得、之より英人は臺灣及廈門に通商の途を開き更に千七百年舟山島及廣東に於て東印度會社の活躍當時貿易を開きたるも未だ多くの來住者を見ざりしが千八百三十四年頃廣東には既に英人の居住するもの增加するに至れり。

支那は阿片戰爭後千八百四十二年香港の割讓、廣東、廈門、福州、寧波、上海の五港を開き英人の通商及居住を許したるのみならず、最惠國條款に據りて英人以外の外人にも五港の開放を見るに至れり、南京條約に據れる此五港の開放は實に支那に於ける外國人居住の一新紀元を開きたる

ものにして白耳義、獨逸、佛蘭西、北米合衆國の外、和蘭、西班牙、葡萄牙は各公使又は領事を廣東に派し、各國の貿易漸く盛ンなり來住者日を追ふて多きを加ふるに至れり。

長髮賊の擾亂後千八百五十八年の天津條約及千八百六十年の北京條約に據り北京駐在並に牛莊、芝罘、臺灣、汕頭、瓊州の開港、布教の自由更に九龍の割讓並に天津の開港ありてより英人並に其他外國人の支那海岸及內地に入るもの益々增加するに至れり。

佛蘭西人は千八百六十二年より千八百八十三年に至る間に安南を領土ニなし老開並に諒山を開港して以來佛人の東京並に更に深く雲南廣東二省の境界地に入るもの增加し、千八百九十六年の英佛協商、千八百九十四年の英清間の滇緬條約に據りて英、佛、支三國の境界決定せられてより英佛二國人の雲南地方に往來するもの增加せり。

日本人は西曆紀元五十七年前より既に支那に往來し遣唐使の派遣より降つて足利時代に至て貿易盛に行はれ彼我の交通頻繁たり、倭寇以來通商衰微せるも、日清戰爭後臺灣島の割讓並に沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開港せしめ宜昌、重慶間の揚子江航路、上海、蘇州、杭州間の內河航路即ち所謂三角航路の汽船航行權の許可せらるゝあり爾來日本人の支那に移住するもの增加せり。

日清戰後支那は外國の要求に據りて漸次門戶を開放し露、佛、英、獨に租借地を與へしのみならず自ら稅務、郵便事務を開き、外人を招きて其經營に當らしめ更に吳淞、岳州、三都澳、南甯（並に秦皇島）を開港して外人の通商居住の範圍を擴張せり。

日露戰爭後に於ける列國の支那に於ける利權の擴張は鐵道借款に始まり獨、佛、米の各國人は借款に關聯し其管理者、技術者の名の下に支那內地に入るもの增加し此外各種政治、財政に關する借款に據りて列國人の監督官として來住するもの著しく增加せり。

以上述ぶる所の支那と歐米、日本との外交關係に從ひて外人の支那に住居するもの近年著しく增加し、殊に日本人は滿洲のみならず揚子江流域に移住するもの甚しく增加せり。

歐洲戰爭以前外國人の支那に於ける分布に就きては千九百十四年の海關報告に據り支那全體に在住するものを擧ぐれば左表に示すが如し。

國籍	會社數	人口	國籍	會社數	人口
日本	九五五	八四、九四八	丁抹	一三	三三〇
露西亞	一、二三七	五六、三一九	西班牙	二三	二七九
英吉利	五三四	八、九一四	諾威	九	二五八
北米合衆國	一三六	四、三六五	和蘭	一四	二一八
葡萄牙	三二	三、一八七	墺太利	一九	二〇二
獨逸	二七三	三、〇一三	白耳義	一五	一七三
佛蘭西	一一三	一、八六四	匈牙利	二	一六
伊太利	三六	四〇九	墨西哥	一	一

其國別は日本、英、佛、獨、露、米、和蘭、丁抹、葡萄牙、墺太利匈牙利、瑞典、白耳義、伊太利、西班牙、諾威にして其中日本人を主とし露人、英人、佛人、獨人、米人、葡人之に次ぐ、上海、漢口、厦門、廣東は其居留地中の主要なるものなり。

英人は北支那を除けば日本人に次で多數を占む、彼等は香港に根據地を有し、各開港中彼等の住居せざる地なしと雖も、就中上海に五千人餘、漢口に七八百人、之に次ぐは厦門、廣東、汕頭、寧波、福州、鎭江とす、佛人の上海に住むものは七百人、其他百人以上の居住者を有するは蒙自、廣東にして、漢口には僅に九十人內外なり、是れ佛人の多くは布教に從事し商業に從事するは英、獨の如く多からず、獨人は英、佛人と同樣に殆ど各地に住し就中上海に居住するもの千餘人、廣東、漢口及汕頭に各百人餘の居住者あり、是等は英人と同樣に商業に從事するもの多し。

露人は北支那及滿洲に居住するもの多く中支那及南支那には甚だ少し、中支那の上海に二百七十五人、漢口に百二十九人、其他の諸港には之を見ず主として商業に從事す。

米人は英人に次で其居住者多く各開港場に散布す、就中揚子江流域に多く上海に千三百人、廣東、南京、漢口之に次ぎ商業者の外布教に從事するもの甚だ多し。

葡萄牙人は澳門に其根據地を有し、且つ支那に渡航せるは諸國人に先んぜるを以て現今商業の振はざるに反し植民甚だ多し、殊に上海に三千人、廣東に百四十人其他南支那に居住するもの多し。

日本人の支那に移住するもの年々著しく增加す、殊に北支那を重要とし揚子江流域に於ける增加も亦輕視すべからず。

日本人の支那に居住するものは前表に據れば八萬五千人なれども最近我外務省の報告に據れば約十二萬二千人にして中支那及南支那に居住するは僅に一萬六千四百四十六人とし此中に臺灣人二千三百五人、朝鮮人六十五人を含めり、臺灣人及朝鮮人を除ける內地人の居住地を列擧すれば左の如し。

中支那

江蘇省	上海	一〇、八七四	通州	一	南京	一五〇	鎭江	二六
	蘇州	一〇一	揚州	三				
浙江省	甯波	四一	杭州	六九				
安徽省	蕪湖	二七	安慶	一				
江西省	九江	七八	南昌	四	吉安	一		
湖北省	漢口	一、四七〇	漢陽	一八	武昌	一四	大冶	一五
	樊城	二	沙市	二七	宜昌	四〇		
陝西省		一〇						
河南省		一三						
湖南省	長沙	一五三	常德	一五	衡州	三	醴陵	一

南支那

| | | |

朝鮮人は上海に六十五人の居住者あるのみ。

（五）支那移民即ち華僑

支那人の海外移住は唐代に始まれるが如しと雖も明末清初より漸く盛となり萬曆年間及道光年間には厦門附近の海澄及金門嶼より既に呂宋、新嘉坡、瓜哇地方に移住するもの多かりしが如し、蓋し其當時葡萄牙人は澳門を經營し之に次で西班牙人及和蘭人は彼等の南洋を根據地とし支那との間に來航するもの盛となれり、而して交通機關の發達せる結果彼等外國人の支那に移住するものよりも支那人の南洋諸島に移住するもの甚だしく增加するに至れり、其後千八百四十二年の南京條約及千八百五十八年の天津條約の締結せらるるや南方諸港は開港せられ其結果汕頭の德記洋行、元興洋行、福州の魏地洋行、厦門の大元公司の如き移民會社の設立を見、支那人の海外に移住する者甚だしく增加せり、而して現在支那人の海外に在住するものは約四百萬人と稱し其中約三百二十萬人は東洋及南洋即ち印度支那、南洋諸島馬來半島、濠州にして其他は北米、南米及南亞非利加地方とす。（別表支那移民表參照）

支那移民表

	汕頭移民	厦門移民	香港移民	總計
暹羅	九五〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	一、二一〇、〇〇〇

安南及東京	七〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	九〇、〇〇〇	一八五、〇〇〇
新嘉坡	五〇、二四六	一〇〇、七六七	五九、六五二	
彼南	二九、四三〇	五四、八九二	二六、九〇〇	三五一、七九四
馬剌加	六、五九六	九、七九〇	一三、五二一	
馬來半島	一七五、〇〇〇	二二〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	五〇五、〇〇〇
瓜哇	七三、〇〇〇	一九〇、〇〇〇	——	二六三、〇〇〇
蘭領印度諸島	八五、〇〇〇	九〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	二四五、〇〇〇
獨領印度諸島	三五、〇〇〇	一五、〇〇〇	二〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
比律賓	八、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	——	一六八、〇〇〇
緬甸	一五、〇〇〇	七五、〇〇〇	一七、〇〇〇	一〇七、〇〇〇
濠洲	——	——	一一〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
計	一、四九七、二七七	一、〇六〇、四四九	六五七、〇七三	三、二一四、七九四

支那移民の出所は山東、福建、廣東の三省とす、山東人は主に滿洲方面に移住し海外に出づるもの少なし、然るに福建人及廣東人は主に海外に移民を送れり、而して兩省の移民の出入港は厦門、汕頭、香港の三港とす、左に東洋及南洋に於ける移民出入の狀況を略述せん(臺灣銀行調査南洋に於ける華僑に據る)

厦門より出づる支那移民の出所中最も多きを漳州及泉州とし之に次ぐを興化、永春並に福州

府下の福清、長樂、侯官、閩、仙遊の諸縣こす、彼等移民は往航には一旦厦門に集まり復航には香港に上陸して厦門、福州、三都澳を經て歸鄉す、而して往航者の多くは海峽植民地に渡り更に之より各地に轉航するもの或は馬尼拉及香港を經由するものあり、而して千九百十三年に於ける往航者約十萬人、復航者三萬三千人こし其移住地は馬來半島の海峽植民地を最多こし爪哇、比律賓、暹羅之に次ぎ其他蘭領諸島、安南、獨領諸島、緬甸こす、其移住民の總數は約百萬人に達すこ云ふ。

汕頭移民は潮州府下の九縣並に嘉應州一帶こし、就中海陽、澄海、潮陽最も主要にして揭陽、豐順、惠來、普寧、饒平、大埔、梅州之に次ぐ、而して往航者は十四萬三千人、復航者は約十一萬人なり、其移住地は暹羅を最も多しこし海峽植民地、馬來半島、安南之に次ぎ、其他爪哇、蘭領印度、獨領諸島、比律賓、緬甸等こす、而して其移住民の總數は約百五十萬人に達すこ云ふ。

香港移民は廣州府下香山、順德、番禺及新會、惠州、霍山より來るもの最も多く梧州、高州地方のもの之に次ぐ、此外雷州、瓊州地方のものには厦門及汕頭より轉航せるものありこ雖も、要するに香港より出入する移民の數は往航者十二萬人、復航者十五萬人こす、而して彼等移民の移住地は北米、南米、墨西哥、南亞非利加の如き亞細亞以外の地方に出づるもの少なからざるも、主に馬來半島、暹羅、安南地方に出づるものこす、而して亞細亞以外に出づるもの〻中、新會人は北米合衆國に、香山人は布哇、南米、濠洲及印度に、霍山人は北米及南米に行くもの多し、而して東洋及西洋に於ける移民總數は約六十五萬人ならんこ云ふ。

要するに支那の海外移住民は殆ど全部南支那より出で殊に廈門、汕頭、香港より出入するもの多し、千九百十三年に於て三港より東洋諸地方に出でたる移民數は三十三萬人餘、歸れるもの二十萬人餘ニす、而して海峽植民地に至れるもの最も多數にして全部の三分の二以上を占め之に次ぐは暹羅、蘭領印度並に其他呂宋、西貢、濠洲、獨領印度諸島、印度カルカッタ等ニす、東洋以外の地に移住するものは皆香港より出入す、其出航者二萬五千人餘、復航者十六萬人餘にして其中加奈陀に移住するもの約半數を占め北米合衆國、布哇、墨西哥之に次ぎ其他南米、英國等ニす。

(六) 渡航地に於ける支那移民

(イ)馬來半島の移民地　は新嘉坡、彼南、マラッカ其他馬來聯邦諸地方にして茲に來航する移民中多數は支那移民なり、同地植民政廳に於ては移民保護局を設置し且つ支那人を官吏及行政委員に擧げて彼等移民の保護に任じ呂宋及瓜哇の如く支那移民の防止をなさゞるを以て年々此地方に集まる移民の數甚だ多く支那移民の在住者約九十一萬人に達し同半島全部の人口二百六十五萬人中約三割に當る、而して同半島中最も移民の集中する地を新嘉坡、彼南ニす。

新嘉坡及彼南並に馬來全半島の支那移民の總數約九十一萬人ニ稱し、海峽植民地に三十五萬人、其他の半島内に約五十萬人あり、彼等の職業は金貸、藥種、砂糖、雜貨、米、綿布、煙草、海産物、瀛船等の商業の外錫鑛山護謨事業、築港、船舶、車夫等の勞働に從事す、而して商業に從事するものには數代の間に數千萬弗の巨資を擁するに至れるものあり、廣東の興隆は三千萬弗、福建の豐興は八百萬

弗の富豪にして潮州の余仁成、福建の振裕、振成は各百萬弗以上の富豪なり。

新嘉坡は東洋に於ける支那移民の中心地にして年々此地に上陸する移民數二十四、五萬人にして彼等の中新嘉坡より海峽植民地、馬來諸地方、北ボルネオ、暹羅、蘭領印度等に轉航するもの二三萬人を占む、而して新嘉坡に止まりて茲に住居する支那移民の數は二十一萬人餘にして新嘉坡人口の約七割を占む、以て如何に支那移民の同地方に於て重要なる位置を占むるかを知るべし、同地在住移民中厦門移民十萬人、汕頭移民五萬人、香港移民約六萬人にして、就中厦門移民主要部を占む、厦門移民の出所は興化、福清、福州、泉州、漳州、永春地方にして泉州及漳州地方のものは商業を營み其他は車夫となるもの多し、汕頭移民の出所は潮州及嘉應州にして潮州人は舢板業即ち舟夫多く雜貨商及問屋之に次ぎ嘉應州人は職人多し、香港移民の出所は廣州、高州、海南島及雷州にして廣州人は商業を營み海南島人には車夫又は農夫多し。

彼南にも亦新嘉坡と同樣に支那移民甚だ多く其數約十一萬人餘と稱し全人口の約四割を占む、移民中厦門移民最も多くして約五萬五千人、汕頭移民約三萬人、香港移民約二萬七千人とす、移民の出所は新嘉坡と同樣なり。

(ロ)蘭領印度諸島の移住地　は爪哇、スマトラ、ボルネオ並にセレベス、バンカ、リユー、ビルトン、チモール、バリー、ロンボック、デュードニッブリナ及英領ボルネオ等にして爪哇及スマトラに移住するもの甚だ多し。

蘭領印度諸島に於ける支那移民の總數は約五十萬人にして、爪哇に二十六萬五千人、スマトラ及ボルネオに二十四萬五千人とす。

彼等移民は三百年前の移住に係り土人及歐洲人間にありて彼等の商業上の位置は牢乎として拔くべからざるものあり、唯嘉應州人中職工及農夫となるものあるのみ、商業に從事するものには富豪多く、製糖、銀行、汽船、精米、海產、雜貨、綿布、倉庫、砂糖、石油、タピオカ、金屬煙草、油、珈琲諸業に從事す、サマランの建源は福建人にして南洋華僑中最も巨資を擁す、バタビヤの黃玉昆之に次ぎて千萬弗の富豪なり、此外百萬弗以上の富豪に至りてはバタビヤに福建人許溫玉、許淮生、李興良、李興廉、李興邦、蔡金元、陳俊良、陳俊梨、洪文福、永福、高保全、廣東人の林長輝あり、サマランに福建人の黃仲涵、鄭百鴻、林滿州、黃仲鵬、馬厥經、馬厥田、馬順宗、臺灣人の顏江守、郭春快、薛開禧等あり、スラバヤに福建人の和美、韓宗慶、鄭泰興あり、バンドンの源安、ソローの建昌棧、建源和、河東公司、葉全復組合等あり。

爪哇は蘭領印度諸島に於ける支那移民の根據地にして三百年前此地に渡來せるもの少なからず、渡來後既に十有餘代を經過し土人を娶りて土著人と選ぶなし、故に爪哇在住支那人中支那生れのものは僅に二割五分にして七割五分は爪哇に出生せるものとす、而して在住移民の總數は約二十六萬人と稱しバダビヤに最も多く居住しサマラン州スラバヤ州、チェリボン州、レンバン州、ベカロンガン州之に次ぐと云ふ。

瓜哇在住支那人中六割半は福建省泉州及漳州人にして泉州及漳州より出で、二割半は廣東省嘉應州人なり、嘉應州人中には斬髪、洗濯、裁縫、大工、鐵工、左官等の職工ありこと雖も福建人の多くは各種商業に從事し其大なるものに至りては黃玉昆外數百萬の巨資を擁するもの多きこと前に述べたるが如し、蓋し生産力に富める瓜哇に於て支那移民の由來する所甚だ古くして商業上の實力に於ては土人は勿論歐米人の上に位し彼等の位置甚だ重きを加るを以て移民は互に自重する結果近年勞働者としての支那移民の來住を防止するの策に出づるを以て馬來半島地方の如く下級勞働者を見る能はずと云ふ。

スマトラに於ける支那移民の數約十萬人にして土人に對し百分の三に當る、彼等は汕頭方面より來るもの多く相當の實力ある商人として居住するものよりも錫鑛山、珈琲、護謨園開墾、製油伐木等の勞働に從ふものを多しとす。

ボルネオ及其他の蘭領印度諸島に於ける支那移民は其數約拾四萬人にしてボルネオ、セレベス、バンカ、リユーに居住するもの最も多く一般の商業の外錫鑛山、珈琲園、石油坑、煙草園、伐木等の勞働に從事す。

(ハ)其他の地方に於ける支那移民　暹羅の支那移民は約百二十一萬人にして全人口の一割五分内外とし汕頭方面即ち潮州及嘉應州より出づるもの大部分を占め精米、製材、海産物、果實、鑛物、雜貨等の商業に從事す。

佛領印度の支那移民は安南、東京、柬蒲塞、交趾支那、老撾に散在すと雖も安南及東京に最も多く其數十八萬人と稱し香港より出づるもの多數を占め汕頭より出づるもの之に次ぎ厦門より出づるものは多からず、而して彼等は米、砂糖、藥材、果實、雜貨の取引に從事するもの多し。

比律賓の支那移民は約十七萬人にして厦門より出づるもの多數を占め汕頭より出づるもの之に次ぎ香港地方より出づるものは此地方に至るものなし、彼等は全島人口の三分弱にして其半數はマニラに在住すと云ふ、但し千九百五年以來支那移民を排斥するを以て其增加を見ず。

緬甸の支那移民は約十一萬人にして厦門より出づるもの其大部を占め汕頭及香港より出づるものは多からず、彼等は木材及農產物の商業に從事すと云ふ。

濠洲に於ける移民は十一萬にして共に香港より出づ。

香港の人口は四十五萬六千人にして其中支那人は四十四萬四千人を占む、澳門の人口は七萬五千人にして支那人は七萬一千人を占むと云ふ。

此以外の地には北米合衆國十五萬人、布哇二萬七千人、加奈陀一萬二千人、秘露四萬五千人、伯剌西爾二萬人、キューバ一萬人、墨西哥三千人とし、我國にも八千人內外の支那人在住者あり、而して此の中北米及濠洲に渡航するものは鑛業の勞働に從事し布哇に於ては農業に從事したるも近時排斥中なるため轉じて南米、加奈陀方面に出づるに至れり。

厦門、汕頭及香港より出づる海外移民は香港地方の自由渡航者の外多くは客頭と稱する移民

周旋業者の立替金に據りて渡航するものにして、彼等無一物の移民は渡航地に於ける多年の刻苦に據りて資金を得之を携へて故郷に錦を飾り或は餘生を故郷に送るもの少なしとせざるも又再三海外に移住を試み彼等は常に故郷に送金しつゝも尚資本を得るものは商業に轉業す、而して渡航地に於ける根底堅きに至るものは土着人同樣數代に亙りて居住し數百萬弗乃至數千萬弗の富豪となるもの少なからず、此の如く堅き地盤を築くに至らざる所謂出稼的移民にありても年々三十萬人内外の出航及歸航者を見るを以て、彼等出稼民の年々父母妻子に送金する零碎の資金と雖も之を總括すれば多額の金額に達す、海外より來る總額に就きては固より之を明にし難きも南洋方面よりの送金は臺灣銀行の調査に從へば年々約五千七百萬弗に達し厦門に二千萬弗、汕頭に二千五百萬弗、香港及廣東に千二百萬弗の支拂額ありと云ふ、而して福建、廣東二省の如き現時生産物の比較的乏しき地方に於ては海外移民の盛なるに從ひ壯年者は殆ど海外に出で其鄉里には生産力に乏しき老弱のもののみ殘存するを以て益々其生産力を減ずる結果を生じ年々多額の輸入超過を見るとと雖も彼等鄉里に居住するものゝ購買力は移民の送金に據りて維持するの現況を呈す、試に厦門、汕頭、廣東に於ける輸出入額を列擧せんか厦門輸入千五十九萬六千兩、移入六百八萬兩、輸出三百四十萬兩、汕頭輸入二千三十萬兩、移入千八百萬兩、輸出千三百萬兩とす、之に由りて同地方に於ける貿易の移民に負ふ所大なるを知るべく以て南支那に於ける移民即ち南洋華僑の經濟上重要なる位置を占むるを知らん、福建省及廣東省の諸地方を旅

行するものゝ山間僻地に大厦の散在するを見るは彼等華僑の賜たるのみならず、新會鐵道は勿論粵漢、潮汕、厦漳の鐵道の如き又紡績、航業、其他各種商工業の華僑の出資に據るもの甚だ多しとす、故に彼等華僑は鄉間に重きをなすのみならず南洋地方に於ける各種生產業開發の華僑の手に據るもの最も多きを知らば彼等の貢獻する所亦大なりと云はざるべからず、數百年來海外發展の爲めに其荒廢をも顧みられざりし彼等の故鄉は、無一物にして進取の氣質に富める彼等華僑の大に其恒產を得るに至り今や漸く開發せらるゝの機運に向はんとするが如し。

二　地方語及風俗

（一）　地方語

地方語即ち方言は支那の如き廣大なる國に於ては其種類甚だ多く其分布亦錯雜す、之を蠻族語、官話、南方話の三に分つを得べし（第十六版參照）

（イ）蠻族語　は苗族、猺族、玀玀族、黲族、西番族等の數種にして各特種の地方語を有すること尙其人種及種族の支那人と異なるに同じ。

（ロ）官話　は北支那及中支那の大部分に通用する地方語にして其範圍最も廣く南支那に於ても亦主要都會地又は宮衙に使用せらる、蓋し支那に於ける標準語なり、官話には北方官話、南方官話及西方官話の三あり、北方官話は北支那に通用する官話にして北京官話を以て其代表とす、南

方官話は揚子江の中流地及下流地に使用する官話にして官話中其の流通の範圍最も廣きものなり、但し俗に南京官話と稱するもの之に屬するも揚子江の北と南とに於て稍大なる差あり、即ち江の北方には湖北、安徽二省に跨れる漢口官話、安徽、江蘇二省に跨れる南京官話及揚州官話あり、江の南方には湖南話、江西話の二種あり、西部官話は四川、雲南、貴州、廣西地方の高原地帶に使用する官話にして又四川官話と貴州官話とあり。

（ハ）南方話　は浙江話、福建話、廣東話に分ち各更に數多に分る、浙江話に上海話、寧波話、温州話及徽州話あり、上海話は上海、蘇州、松江、杭州の平地及錢塘江流域に、寧波話は寧波、臺州等海岸地方に、温州話は浙江南部地方甌江流域に行はる、徽州話は錢塘江上流徽州盆地に於ける地方語にして其土地は安徽省に屬するも寧ろ浙江話に近きものなるべし。

福建話は福建省の海岸地方より浙江及廣東の一部に行はる、地方語にして主として下游地即ち海岸地方に多く上游地即ち奥地に於ては官話の通用多し、而して福建話は更に福州話、厦門話、汕頭話に分たる、福州話は福州及福寧、興化附近の海岸地方並に閩江流域に行はる、ものにして福建話中特種の方言に屬す、厦門話は福建省南部に廣く行はる、のみならず、我臺灣、馬來半島並に南洋諸島の彼等植民地に於て使用する地方語なり、更に之を二に分ち泉州及晋江流域に流通するを泉州話と稱し厦門、漳州並に九龍江上流に行はる、を漳州語と云ふ、汕頭話は汕頭、潮州並に韓江流域の永定上杭地方に行はる、のみならず遥羅、南洋諸島の植民地に於て使用せらる。

廣東話は廣東廣西二省並に貴州及雲南の一部に行はるゝ地方話にして其流通する區域は甚だ廣し、之を分ちて客家話、廣州話並に廣西話とす、客家話は主に東江流域並に韓江流域の嘉應州附近に使用せらるゝものとし臺灣、南洋地方にも亦之を使用するもの多し、廣州話は廣州附近より北江流域並に西江の下流及中流の一部に行はれ廣東話中最も重要なる位置を占む、廣東商人の使用するもの即ち是に屬す、廣西話即ち夷家話は西江の中流及上流の流域地に行はるゝものなり但し廣西省中湖南省と接壤する桂林地方に使用するは官話に屬して廣西官話と稱し廣西省に最も廣く使用するものと異れり、蓋し夷家話は夷家の使用する地方語にして廣州話に近きものとす。

(ニ)以上の類別に據れる地方語は之を使用する人口との割合如何と云ふに南方話は官話の約四分の一に過ぎずと云ふ、而して南方話の中浙江話は福建話及廣東話に比し其使用せらるゝ區域の狹き割合に之を使用する人口多し、就中甯波語を以て最も多しとす、左に其概數を示さん(後藤朝太郎氏現代支那語學に據る)

甲　官話　三〇〇、〇〇〇、〇〇〇人

乙　南方話　八四、〇〇〇、〇〇〇

(一)浙江話　四四、〇〇〇、〇〇〇

(イ)　上海話　一、八、〇〇〇、〇〇〇

（ロ）寧波話	二五、〇〇〇、〇〇〇
（ハ）温州話	一、〇〇〇、〇〇〇
（二）福建話	二〇、〇〇〇、〇〇〇
（イ）福州話	五、〇〇〇、〇〇〇
（ロ）厦門話	一〇、〇〇〇、〇〇〇
（ハ）汕頭話	五、〇〇〇、〇〇〇
（三）廣東話	二〇、〇〇〇、〇〇〇
（イ）廣州話	一五、〇〇〇、〇〇〇
（ロ）客家話	五、〇〇〇、〇〇〇
計	三八、〇〇〇、〇〇〇

但し右表に於ては徽州話は寧波話中に夷家話は廣州話に包括せらるゝものとす。

（ホ）地方語の特徴　南方話は古音にして官話は新しき音を示し其中南方話に屬する浙江話は福建話及廣東話よりも古音に屬しジャイルス氏は之を吳音と漢音との差別に比せり、蓋し客家の如きは古く福建省より廣東省内に移住せる北方民族たりとの傳說を有する民族にして最も北方話に類する地方語を有し廣州話も亦福建語及浙江語よりも官話に類する所多しと云ふ。

官話の中北方官話は現時の北京語に最も類するものなれども、南方に至るに從ひて音調の差

あり、南方官話は南方話の影響を受くること甚だ多く殊に吳音の本場たる蘇州及上海に近き所に於て其影響最大なり、揚州話は蓋し官話中最も多き特色を有するものなり、且つ概して江北は北方官話使用區域に接するを以て大なる特色を有せざるも、江南地方の江西及湖南二省に於て南方話の影響を受けたること少なからず、人若し漢口と湖南省長沙との間を往來する時は官話中にありても其差異の大なるを知らん西方官話に至りては其土地僻地なると獵獵族、苗族の蠻族と境を接し其影響を受けたる所少なからざるべし。

抑支那語の如き單綴音にありては音調は最も必要なるものなり、從て地方に據りて種々なる音調を生ずるに至るは必然の結果と云ふべし、北京話は音調最も簡單にして上平、下平、上聲、去聲の四聲あるに過ぎず、四川及貴州に使用する西方官話も亦四聲あるのみなりと云ふ。

南方官話の中揚州話及南京話は五聲を有し南方話中上海話は八聲、福州話は七聲、泉州話及漳州話は七聲を有し汕頭話は八聲、廣州話は九聲を有し、客家話は六聲を有すと云ふ。

綴音の數はリッチャード氏に據れば北京語に於ては四百三十音、南京話には三百十六音、揚州話に於ては四百十五音とし概して官話には綴音の數多からざるも南方話には之より多く上海話には六百六十音、寧波話には四百四十四音、温州話には四百五十二音、福州話には七百八十六音、厦門話には八百四十六音、汕頭話には六百七十四音、廣東話には七百八十音、客家話には七百音とす。

之れを要するに地方語の種類は其數甚多しと雖も近代の地方語に屬する官話と古語に屬す

る南方話とに大別せらるべく官話中秦嶺又は淮の兩山脈以北即ち黄河流域に於ける官話は最も新期のものにして北京官話之を代表し、揚子江流域に於ける官話中上流の四川、貴州の所謂西方官話は地形上僻地にありて一特色を有し、中流及下流地の所謂南方官話は共に浙江話の影響を受けたること大なりとす、南方話に至りては浙江話、福建話及廣東話の三に分たるゝとは雖も福建話中福州話は厦門話との關係よりも寧ろ浙江話との關係深くして温州話に近し、又福建話中汕頭話は其土地廣東省中にあるも福建省の厦門話に近きものにして之を福建話中に編入せらるゝものとす、且つ是等の南方話はヂャイルス氏に據れば皆古語に屬するも其中浙江話中の上海話、甯波話、温州話並に福建話中の福州話は吳音の系統に屬し、廣東話中の廣州話及客家話は漢音の系統に屬するものにして福建話中の汕頭話及厦門話は其中間に介在するものなり、此の如く各地方語は相互に關係する所深く地形、歷史的關係、商業上住民の移動によりて其影響する所大なるを以て各地方話間に境界を劃するは事實上出來得べきにあらず僅に大體の位置を示すに過ぎざるなり、之を官話と南方話との境界に就きて見るも甚だ複雜なる關係を示せり、即ち湖南、廣東の省界は地形上亦五嶺山地の分水界にして亦官話と南方話との境界たりとは雖も廣西省に於ては湘江の上流より桂江方面に移住せる湖南人の勢力盛なるを以て官話の流通する所は分水嶺よりも遙に南方に移れり、江西省方面に於ける官話の境界は同省人の福建移住と共に仙霞嶺山脈の分水嶺を越へ福建省中部に至れり、然るに浙江省に於ては却て南方話の流通區域甚だ

廣く錢塘江流域に於ては安徽省徽州盆地に達し北方に於ては江蘇省南部の平野一帶に亙れり。

(二) 風俗

漢族の風俗は支那全般並に隣邦諸地方に普及し殊に清朝の懷柔政策は其統治國に於ける風俗の統一を強制せるを以て支那の如き大國にありても風俗は比較的に一樣なり、就中、中支那に於ては到る處風俗の差殆ど明かならず、唯南支那には蠻族散在するを以て言語、風俗、習慣の著しく異れるものあるのみならず南支那の漢族を中支那の漢族に比するに前住の蠻族と雜はり或は細小に分るゝ地理的區劃の影響を受け或は交通の不便に因りて舊習を保つもの多く或は特別の言語、風俗を生ぜり。

(イ) 服裝

住民の服裝中男子の服裝は中支那たると南支那たるとを問はず將又漢族たると蠻族たるとに論なく殆ど大差あるを認めず、彼等の著用するものを上衣と下裳との二に分つべく、上衣には汗衫、長褂子、短褂子、馬褂子、外褂子あり、汗衫は襯衣、褂子は外衣の總稱にして短褂子は概して腰間に達し長袖にして手を被ふを常とするも長褂子は長さ脚頸に達し馬褂子は長褂子の上に着し(無袖のものを背心と稱し短褂子に類するものなり、下裳には褲子即ち袴と韈子即ち足袋とあり第十八版丁參照)

日常彼等の使用するは下に褲子を著し上に汗衫と短褂子を着するのみ、中流以上のものは其

上に長褂子を着す、馬褂子は正裝の際之を長褂子の上に着用し略服としては馬褂子の代りに背心を用ふ、外褂子は冬季に使用する袖の長き褂子なり、長褂子の上には普通細き帶を用ひ後方に於て結びて下方に垂る、褲子の上方は細き紐を以て其落下を止め其下方には帶子と稱する狹き帶を纏ふ、脚部には足袋と其上に鞋靴を穿ち頭上に帽子を頂けり(第十八版乙參照)

四季に從ひて單子、袷、綿入を用ひ嚴寒には褂子の裏に毛皮を附する習慣にして中流以上のものにありては廣東、福建二省の如き暖地に於ても習慣として毛皮を使用す、之と反對に貧民は夏季より冬季に至るに從ひ單子の褂子を一枚つゝ重ねて寒を凌ぐ。

衣服の裁縫は日本の如く女子の內業たらず、做衣裝的と稱する一種の仕立屋、專業者あり主に男子の職業とす、中流以上にありては仕立屋を臨時に雇入れて調裝をなさしめ中流以下にありては裝舖に至りて仕入衣裝又は古着を買入るゝを常とす、絹衣裝に至りては中流以上のものと雖も之を仕入又は古着に據るものを多しとす、古着又は仕入衣裝を賣買する店舖は其數の多きこと蓋し我邦に於て見る能はざる處、是れ彼等支那人の衣服は其裁縫の方法上我邦の衣服の如く解體して仕立直をなす能はず其儘洗濯し破損するに至れば新服を購ふを以て足り我邦の如く再三裁縫直をなすの要なきなり。

鞋靴は一般に木綿製にして踵を有せず、又左右の別なく之を足袋の上に穿てり、其製造は普通女子の內業にして或は之を靴商に求むべし、蓋し支那婦人は前述の如く衣服を裁縫するの要な

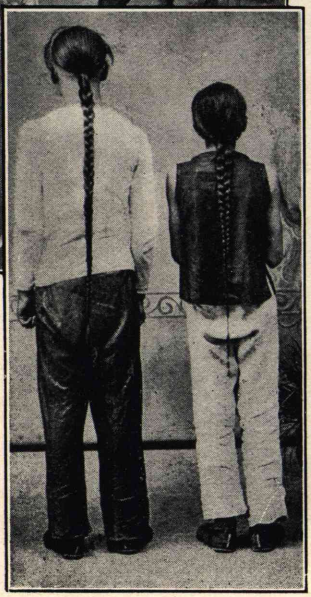
第十八版

服裝

（甲）男子夏服裝及僧侶の服裝（浙江省溫州）

（乙）男子各種服裝

（丙）福建省及浙江省田舍婦人の服裝



（丁）辮髮

く僅に之を修繕するに過ぎず、彼等の内業こしては常に靴の裁縫に從ふものこす、木綿靴の外に底皮を有する木綿又は絹製の靴あり、靴商の製する所に係る、雨天用こしては皮製深靴を使用す、廣東地方には我國の駒下駄形に似て稍圓味を帶びたる下駄を用ふ、畬族の習慣は足駄形の下駄を用ふこ云ふ、然れごも近年一般に西洋の皮靴を使用するもの甚しく增加せり。

帽子は古來椀形の木綿、山羊毛製又は絹製を用ひ湖南省に於ては布帛を以て頭部を纏ふ風習あるここ恰も印度人の如く又苗族の風俗に類す、近年西洋式の鳥打帽、中折帽又は山高帽を著用するもの增加せり。

女子の服裝も亦男子の服裝こ同じく褂子及褲子より成るこ雖も形狀は異れり、此外裙子を用ふ、褂子は男子のものに比すれば狹袖にして且つ袖丈甚だ短く又褂子の長さは男子の長褂子こ短褂子この中間の長さにして膝に達するを常態こするも近年都會地に於ける流行は男子の短褂子こ選ぶなし、南支那の山地殊に廣東、廣西地方に於ては男子の長褂子同樣脚頸に達するものあり、袖は甚だ濶にして男子の外褂子に似たり、(第十八版丙參照)褲子は男子のものに比して概して廣濶にして下部に於て褲帶子を以て結ばざるを常こす、但し褲子の大さは山間に於ては濶なれごも都會地に至るに從ひ狹く殊に新流行のものに至りては男子の褲子よりも狹し、裙子は我邦の廣き前掛を側面に於て重ねたるか如きものなれごも之を著用したる所は西洋人のスカートに類す、裙子は南支那に於ては山間地方に於て之を使用するもの多く殊に福建地方に於ては

苗族と同樣に襞積の甚だ多きものを使用す、但し之を使用せざる地方も亦少なからず、殊に海岸一帶を特に然りとす、中支那に於ては裾子を用ふるもの稀なり、蓋し中支那に於ける女子の服裝は南支那よりも模樣、色彩共に其の嗜好高尚なり。

前掛は西洋の前掛又は我邦小兒の胸掛に類し上胸より膝に達し頸部及腹部に於て紐を附せり。

苗族及猺族の衣服は男女共に我國の筒袖に類し濶領にして右衽又は左衽せるも男子は漢族の服裝に革まり女子は今尙舊習を存するもの多し、但し濶襟の褂子の上には裾子及前掛を使用するを以て外觀上福建、廣東地方に於ける濶袖にして裾子を有するものと大差なし。

僧侶の服裝は佛敎及道敎に於て共に濶襟にして長さ膝下に達し右衽にして附紐を結べる所は我國の小兒の附紐ある衣服を濶に著用したるが如く袖は濶くして之を垂るれば長さ膝に達するものなり(第十八版甲參照)

兵士の服裝は上衣は西洋式にして冬は綿入の上衣を著用するものあり、褲子は其他の服裝と異るなし、但し新式編成の兵士に至りては西洋式にして我邦の服制を模せり。

服裝の色彩は男女共に單純なり、日常服にありては男子には藍色最も多く絹著服には黑、靑、綠、蝦茶、紫、赤等あり、其模樣は概して花の唐草、雲龍又は無地なり、雲龍の模樣は淸朝の倒るゝと共に廢せられ吳服商は之が爲めに著しき損失を招けりと聞く、近年男子の服裝に羅紗地及セル地を

用ふるもの增加せり。

女子の服裝の色彩も單純にして赤、青、藍、多く概して無地にして襟、袖口、裾並に褲子及裙子の裾に白、赤、青の緣を取れり、前掛にも亦緣を取るを常とす、但し絹著服には男子と同樣に唐草の模樣のものを著用す。

苗族の女子中には青色或は赤色或は雜色の衣服又は緣を取れる衣服を著用するを以て其服裝に據りて苗族の分類を成せり、猺族、畲族も亦苗族と同じく種々の色彩の緣を有する衣服を著用す。

僧侶の衣服は灰色又は木蘭色の無地なり、喪服にありては衣服は勿論帽子、靴に至るまで白色を用ふること人の知る所の如し。

（ロ）結髪及纏足

支那の旅行中其風俗上最も注意を惹くものを結髪と纏足とす。

結髪　は男子にありては、辮髪を以て最も普通とす、僧侶は剃髪し苗族には推髻をなすものあり、苗族の推髻は前額に圓き小形の髻を結ぶも舊習廢せられ辮髪多しと云ふ、辮髪は頭の四周を剃髪し頂上に髪を存し之を編みて背後に垂るゝことは人の能く知れる所なり、蓋し辮髪は滿人の風習なり（第十八版丁參照）

清朝の立つに及んで兵力を以て服裝と共に其風習を强制し漢族を壓迫したるを以て清朝三

百年の久しき支那の全部此風に習ひ苗族其他の蠻族に至る迄之に準するに因れり、然るに最近革命亂勃發し清朝倒れて政權漢族に移るや前に清朝の强制せる辮髪令は一朝にして斷髪令と なれり、革命動亂の中心地たりし湖北省は率先し罰則を設け一整に其斷髪を實行せり、湖南、江西其他揚子江流域の諸省に於ては斷髪を行へるもの甚だ多しと雖も舊習を尚ぶ支那人は今尚清朝の遺風を存するもの少なからず、殊に江蘇省より浙江、福建、廣東の諸省に於て都會地以外には今尚辮髪を斷たざるもの甚だ多く斷髪に際しては種々の小說的喜劇を演ぜる好話柄甚だ多し。

斷髪令後の支那人の頭髪には奇怪の形をなすもの多く唯斷髪したるのみにして依然として周圍を剃髪せるを以て四十歳、五十歳の男子にして恰も此國の小兒の河童頭の如き狀をなせるものあり、或は前額部を剃り上げたる總髪者あり、丸剃をなせるもの、五分刈、最新式の散髪をなせるもの等千樣萬態なり、要するに從來の剃頭的は廢れて新式の散髪屋盛に起り其範を我邦に取るを以て之を東洋剪髪と稱す、革命後我邦より支那に輸出せる散髪器は帽子と共に其額甚だしき多額に上れりと云ふ。

女子の結髪は年齢に據りて差あり、少女の結髪は辮髪即ち我邦のオサゲにして前髪を垂る、年長者にありては最も普通のもの二種あり、一は三つ編の束髪にして網を以て包めるもの、二は㊥形をなせるものなり（第十九版甲參照）

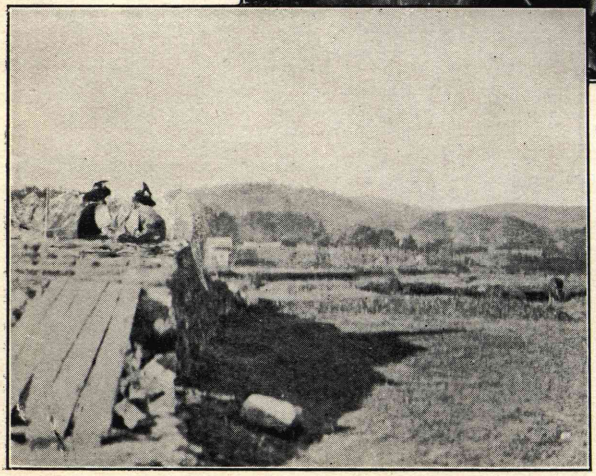
兩者共に髷（マゲ）は襟上に垂るゝもの、後頭に垂下するもの等髷の位置には種々あり、前額を廣くす

第十九版

結髮

（甲）最普通の結髮

（乙）福建省福州の田舍の婦人及結髮



（丙）福建省龍岩縣婦人の結髮

る爲に剃り上ぐるもの多きも時に三四十歳の年配者にして前髪を切り下げたるものあり近頃の流行には前額にて圓き髷を作り或は三つ編こなし組合せたるものあり。

中支那の揚子江沿岸及南支那の海岸地方にありては如上の束髪者を多しこするも中支那の南部より南支那に亙れる山嶽地にありては舊風を存するもの多く所に據りて種々なる結髪をなすを見るべし然れごも大體に舊習中一定の形式を備ふ要するに十形の變形にして山間地には特に長き髷を作れるもの多く或は頂上より後方に垂れ或は後頭部より背上に突出するもの或は煙筒の如く頭上に直立するものあり。

福建省龍岩州、永定、湖南省桂陽縣、醴陵縣、安徽省祁門地方に於て見たるものは鬢及鬙を備ふること我邦の結髪に類す殊に福建省龍岩地方に於ては髪の長さ一尺内外あり且つ髷の形奇怪にして恰も孔雀を頭上に頂くが如し(第十九版丙參照)

結髪こ關聯して風俗上重要なるは頭飾及帽子なり男子は一般に椀形の布製帽を被るも湖南省一帶に於て兵兒帶こ同樣の布帛を頭上に纏ひ廣東省連平に於ては圓環狀の布切を頭上に頂くものあり近時西洋式の帽子を被るもの益多し炎天には古來竹又は竹葉にて製せるバッチャウ笠樣のものを用ふ。

女子の結髪に附屬するものを首飾こ稱し櫛、笄、簪等あり十形の髷の横の橋渡には金銀製の笄を必要こし髷の長形のものには赤色、青色等の打紐を纏ふ簪は金、銀製又は造花にして泉州附近

に於ては生花の花束を髷の周圍に附著す、最も奇拔なるは福州附近土民の婦人にして三本の劍を髷に簪すものあり（第十九版乙參照）

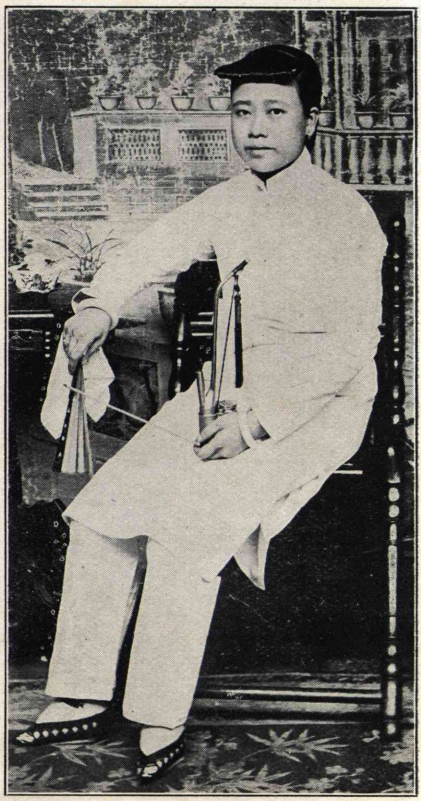
婦人は結髮の上に鉢卷形の附屬品を用ふ是れ前頭上部より後頭下部に亙り髮を被ふものにして、刺繡又は寶石を嵌めたるもの多し、而して此附屬品と並び用ふるものは耳環及首環なり、苗族、猺族の如き蠻族は耳環及首環の甚だ大形のものを用ふるも漢族は耳環の小形のものを用ひ首環は時に小兒の之を使用するものあるのみ、被物は一般に使用せざるも廣東、廣西、福建の如き南方炎熱地に於ては布切を被るもの麥稈帽子、篠笠を使用し湖南省醴陵地方には布を被るものあり。

纏足　の習は漢朝に始まれりと云ひ「武梁祠畫像老萊母、曾子妻著銳頭履」と云ふもの即ち是なり、或は唐朝にありと云ひ「李後主宮嬪窈娘、纖麗善舞、後主作金蓮高六尺、令窈娘以帛纏足、令纖小屈上作新月狀」と云ふもの即ち是を云ふなり、要するに纏足の習は其起源甚だ古く種々憶說あるも美觀を尙ぶにあり、纏足は女兒三才の頃に始めて足を纏ひて其生長を妨ぐ、長ずるに及んで踵を以て步行す、纏足者の足の長さは四寸乃至五寸其形種々あれども筍狀を成せるを良しとし「三寸金蓮」を以て理想とす、蓮步を運び「纖々作細步」を以て美人の第一要素とし如何なる美貌者も馬蹄の如く或は象脚の如くんば以て美人たる能はざるなり（第二十版甲及乙參照）

纏足の習は漢族の風習にして滿蒙族に於ても亦蠻族に於ても之を見ざるのみならず主とし

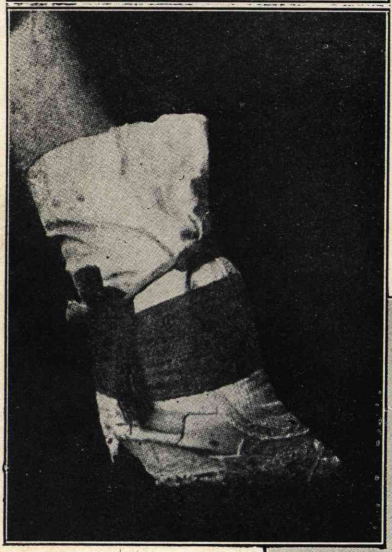
第二十版

纏足

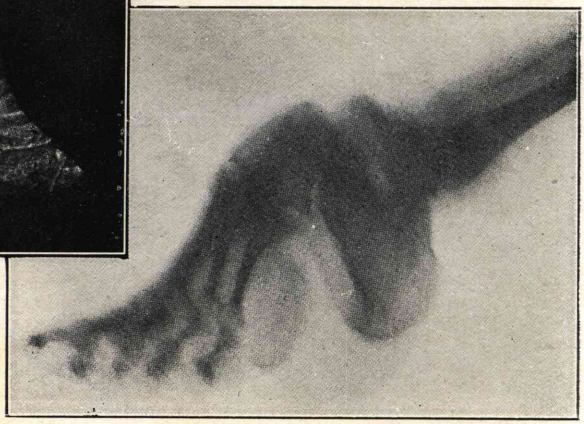


（甲）江西省贛州婦人の纏足（附水煙管、腕環）

（乙）盛裝せる纏足



（丙）跣足の纏足



（丁）X光線を以て見たる纏足

て中支那並に北支那南部に行はれ南支那に於ける廣東、廣西地方のものには此風習なし、清朝倒れてより纏足の制を禁じ女學生及都會地に於て最近出産せるものには此風習漸次行はれざるものの如し。

纏足者と天然足者との分布に關し旅中觀察せる所に據れば大要第十六版に示すが如く其分界線を劃するを得べし即ち廣東、廣西二省は都會地に於ける官吏等の少數移住者を除けば殆ど全部天然足者にして纏足者を見ざるのみならず農民中には裸足の儘耕作に從事するものあり、貴州、湖南、江西の南部には纏足者稀なり即ち湖南省の資江上流には新寧以南に於て、湘江流域にありては永州、耒陽及茶陵以南に於ては纏足者を見ず、唯だ廣西省全州附近、湖南省道州附近、汝城縣附近に纏足者の多き地方散在す。

江西省に於ては贛江の上流萬安、興國、瑞金の諸縣即ち南部には纏足者甚だ少なし、福建省に於ては汀州、上杭、永定の如き韓江流域及廣東に隣接せる地方には纏足者を見ず、漳州、泉州、福州海岸地方には纏足者と天然足者と雜はり、纏足者は市中に天然足者は田舍又は漁業に從事するものに多し。

福建省其他の地方並に浙江省に於ては海岸地方に散在する洞家族並に船業者の外天然足者を見ず、江蘇、安徽、湖北、四川等に於ては悉く纏足者なり。

（八）食

支那人は普通の挨拶には必ず先づ吃了飯麼と稱し食事終れるや否やの應答あり、之に次で互の安否を尋ね次で話の本題に入るものとし、食事を重要視する習慣あり。

食事は二食を普通とす、朝食には菓子又は粥を食し又全く之を食せざるものあれども勞働者は常に朝食を喫す、朝食兼晝食は十時頃にして夕食は夕刻とす、米は彼等の常食なれども麵を食するもの少なからず、副食物は野菜に豚肉を煮込みたるものを最も普通とし下流社會に於ては一菜を出すに過ぎざるも中流以上に於ては一汁二三菜とす、上流社會又は饗應に至りては數十菜を出し二三回の休息時間を介して徹宵し所謂長夜の宴を設く、支那人の膳部に上るものは山海の珍味を以て尚とし支那各地の珍品を集むるのみならず廣く海外の美味を貯ふ、即ち閩廣の海味、四川の木耳、香菰(椎茸)、東洋(即ち日本)の鮑魚、海參、魚翅、南洋の燕窩は彼等の食膳に缺くべからざるもの、蜀熊の掌肉の如きに至りて珍中の珍なるものなり、而して肉類には牛、豚、羊、山羊、家鷄、家鴨、鴨其他野鳥及野獸肉等あり、其調理法に至りては極めて巧妙にして西洋の佛蘭西料理と共に東西の隨一たるべし、均しく支那の料理にも地方によりて各其特長を有し田舍と都會とは各嗜好の高低ありと雖も廣東料理を以て最も美食とす、支那の諺に生在蘇州、食在廣州、著在杭州、死在柳州と稱す、即ち食は廣州を以て最上とし蘇州、揚州は美人を以て鳴り、被服は杭州の綢緞を最とし、棺材は柳州産を著名とするものなり。

廣東料理は最も淡白にして而も美味たるのみならず、蛇蛙、沙蠶を調理して食膳に供するを以

て其誇こなせり龍虎料理、三蛇會は蛇の料理にして田鷄は蛙の料理を云ふ。

食事は食卓を圍みて行はるゝものなれども概して男女時を異にして食し一家團欒は食事の際には之を見るを得ず寧ろ中流以下の家庭に於て時に家族一食卓を圍むを見ることあり、食事の際偶通行者なごある時は椀こ箸こを手にして道路に驅出し之を眺めつゝ食事するもの多し、此の如きは獨り小兒に限らず年長の婦女に於て之を見るは奇こすべし。

食事に次で重要なるは茶、酒、煙草、阿片等なり、就中茶は訪問者ある時必ず之を客に饗するを禮こす、市に茶館あり大厦高樓を設けて茶客を招き、村落に茶亭ありて通行者を呼ぶ、蓋し支那に於て茶の飲用の習慣は上下の區別なく又四季の差あるなく彼等に唯一の慰安を與ふるものなり、彼等の尚ぶ所のものは平水及婺源の綠茶、武寧、祁門及武夷の紅茶なりこす。

酒は上下を通じて飲用の習あり、老酒即ち紹興酒を以て優良こし五加皮酒、火酒、水酒、米酒等其種類多し、煙草は男子の外女子も之を喫用す、普通は條絲煙こ稱する刻煙草を煙管にて喫す、煙管には種々あるも我邦に用ふるこ同じく竹管に金屬製雁首及吸口を有するもの並に水煙管こ稱し水中を通過せる煙を吸ふ裝置をなせるものを最も普通こす(第二十版甲參照)

阿片喫用の弊は支那經政者の憂ふる所にして之を嚴禁せしここ古來幾度なるやを知らずこ雖も喫用の風習全支那に蔓延し遂に如何こもするを得ず、支那に於ける阿片吸用の風は何時に始まりたるや明かならざれごも千七百七十三年に於ける東印度商會の阿片輸入を以て大輸入

の初めこす、千八百年には既に嚴禁令あり、千八百四十一年遂に阿片戰爭の禍亂を見るに至りたりこ雖も其弊風は革命戰爭に至る迄革むることこ能はざりき、阿片の弊は上流より下流に至る迄普及し殊に苦力の如き日々の勞役に從事するものは阿片喫用を以て唯一の慰安こし且つ其刺激に據りて勞役を繼續する狀態を呈せり。彼等一般阿片喫飲者の體力は飲用するに從ひて衰弱し一見して其喫飲者たるや否やを判ずるを得べし、諺に「面黃牙齒白必定鴉牙客」こ稱す、顏色蒼然こして肉落ち髮枯れたるもの即ち阿片喫用者の標式なり。

近時革命亂に際し漢族の覺醒するや極端なる阿片嚴禁令を布告し死罪を以て其違反者を處したるを以て其弊風俄に革まるに至れり、其後舊習者のみ許可を得て少量の喫用をなす者なきにあらず、殊に廣東及福建二省の如き最も阿片喫飲の風盛なりし地方には今尙多少の喫飲者を見ざるなきも公に之を喫用するものなし、從來喫用し來れる苦力の如きは俄に之を廢せる爲めに彼等の勞役に堪へざるもの多く從て刺激劑を使用するの要あるを以て彼等は高價なるモルフヒンを注射し僅に勞役に對する餘力を養ふが如き憫然たるもの少なからず、殊に福建地方に於ては此の如きもの多し。

（三）住　居

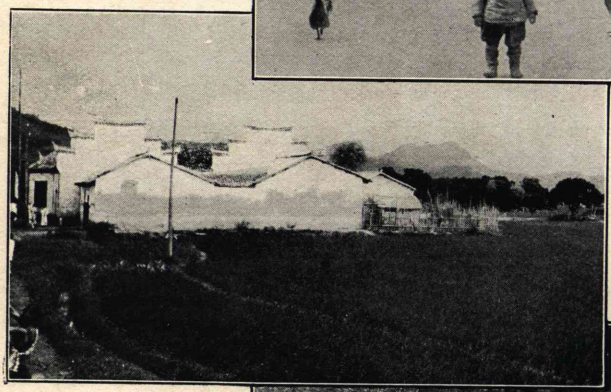
支那人の家屋の構造は簡單なるものにありては三室こなり中央室の入口は應接室にして食堂を兼ね其右方なるは炊事場にして左方なるは寢室なり、之を下等社會の住家こなし最下級の

第二十一版

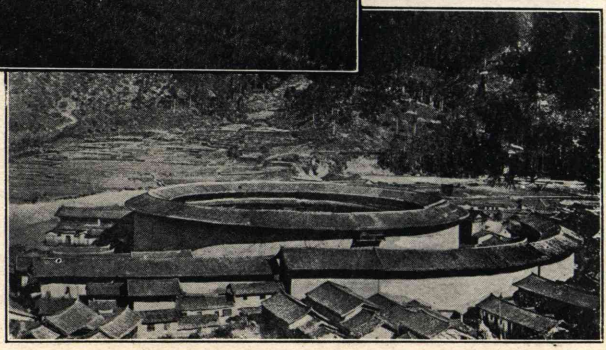
住家

（甲）湖南省汝城縣猺族の住家

（乙）江西省九江附近の農家



（丙）江西省萍鄉縣峽山口の豪家



（丁）福建省南靖縣下豪族の住家

ものに至りては一室に單に寢臺を置けるものあり、之より少しく高等なるものに至りては左右兩室共に居間又は寢室となり其背後に炊事場あり、家族の多に從ひ又は富者となるに從ひて縱列に又は横列に數多の室を列ね應接室は入口の外に數多あり、要するに簡單なる三室の制を重複するに過ぎず、而して更に富めるものは二階を設く、家屋には木造、土造、煉瓦造の三種あり、木造は福建地方に最も多し、其他中支那にありても南支那にありても木材の多き地方には木造多し、土造は煉瓦形に切り取りたるのみにして未だ燒成せざる土を以て築けるものにして湖北省北部の田舍地方に多く之を見るべし、(第二十一版乙參照)煉瓦造は煉瓦にて造れるものなり、煉瓦は普通は土質にして灰色を呈し充分に燒成せざるものこし城壁又は寶塔を建造するものこ同樣なり、福建省泉州、漳州地方には赭色の板煉化を使用するもの多し、湖南省、江西省、廣東省其都會地には煉瓦造の上に白堊を塗附するもの多く其遠望甚だ美觀なり、(第二十一版丙參照)屋根瓦は土燒にして灰色を呈し其質土煉瓦に異ならず、而して屋根瓦の覆瓦の狀は我國に於けるよりも小形のものを多數に使用し宮殿廟には釉藥を施せる靑、藍、紫、黃等各種の所謂琉璃瓦を使用す。

住居は普通都會に於ては軒を並べ、材落に於ては一軒づゝ散在するも南支那殊に廣東、福建二省には家族制度の風習今尙存し一軒の內に一族住居するを以て自然大家屋の建造せらるゝもの多く、福建省南部、廣東省東江流域、廣東三角洲地、韓江流域に於て之を見るを得べし、(二十一版丁參照)且土匪の防禦上より又異族この爭鬪の必要より彼等一族の住居は恰も城壁の如く且つ銃

眼を備ふるもの少なからず。

支那の家屋は概して窓甚だ小なるを以て客室又は入口又は中庭に位する室を除けば其他の居室は光線の投射及通風甚だ少なくして陰鬱なり、且つ障壁は多くは土又は煉瓦なるを以て土造倉庫の内に住む感あり、(第二十一版甲參照)故に夏は甚だ暑くして冬は甚だ寒し、然るに冬季と雖も北支那の如く何等防寒の設備を有せず。

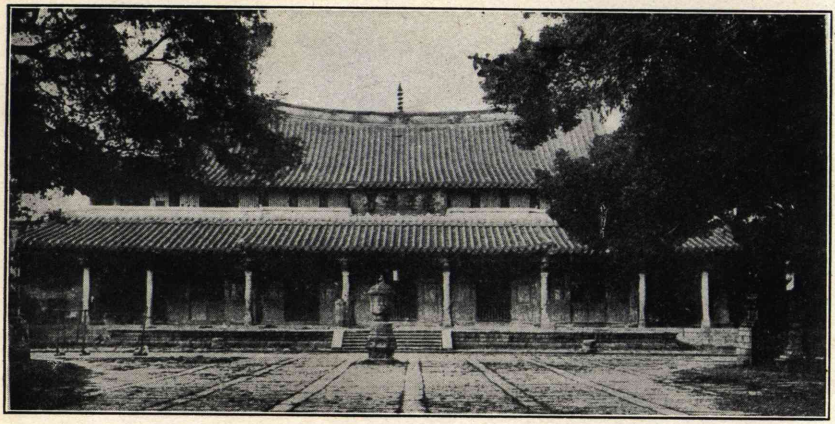
室内には一般に床なきを常とし敲又は土間にして中流以上の家屋には木製の床板を見ることあり、若し夫れ衙門、會館、寺廟並に城壁上又は城内の樓閣の建築に至りては人目を驚すべき壯觀のもの多し、(第二十二版、二十三版、二十四版參照)支那人の家屋に於て最も外國人の注意を惹くは對聯にして各其職業に應じたる文字を書列ね之を門柱に貼附するにあり、對聯の紙は普通紅色なれども忌中のものは白色にして忌の明けんとするものは藍色を用ふ、對聯に種々あり、塗貼する場所に據りて門心、框對、横披、抱柱、春條、斗方と稱し門柱の兩側にある門の上部に貼れるを横披と稱す。

支那人の家居には應接にも食事にも共に椅子に倚り跪坐することなし、但し廣東地方には食事するに際し蹲るものあり。

(ホ)　械鬪及匪徒

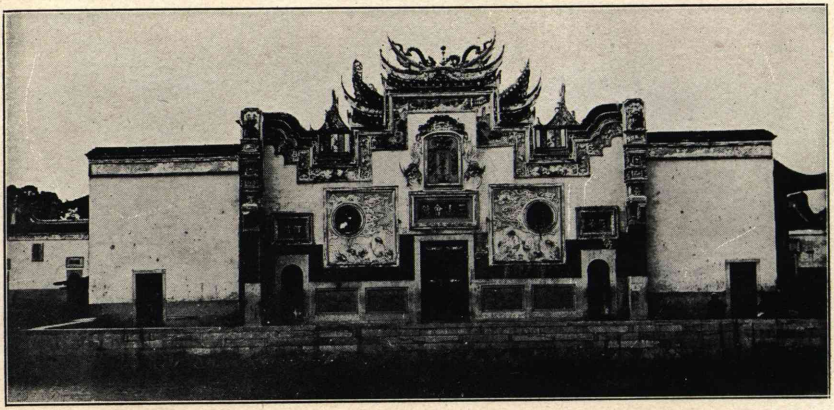
械鬪　南支那は家族制度の舊習を保持するもの多し、殊に廣東、福建二省に於ては或は一族一

公館



（甲）福建省泉州開元寺

（乙）福建省福州巡按使署

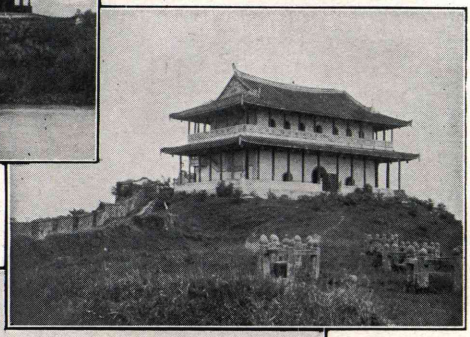


（丙）福建省福州三山會館

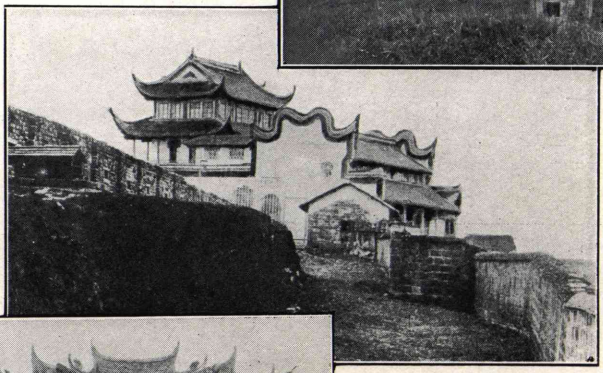
第二十三版

樓閣

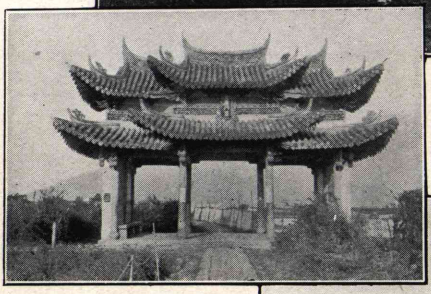
（甲）福建省泉州魁星樓



（乙）福建省福州鎭海樓



（丙）湖南省長沙天心閣



（丁）浙江省溫州の牌樓

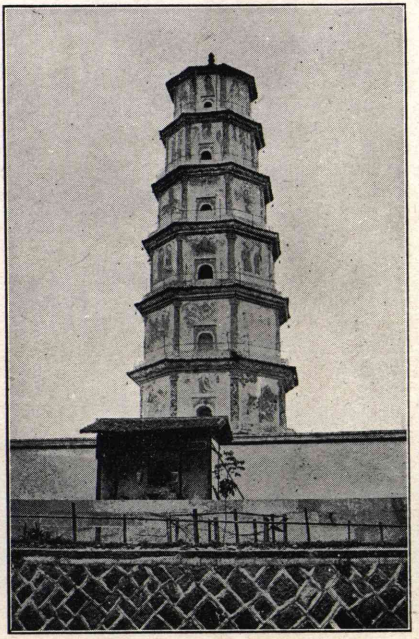
（戊）江蘇省上海城隍廟の湖心亭

第二十四版

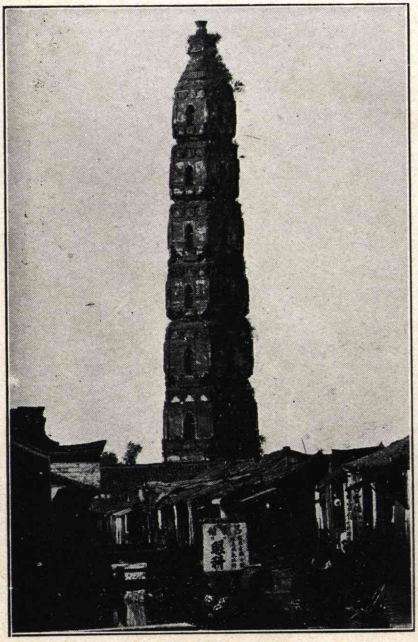
寶塔

（甲）安徽省安慶迎江寺の塔

（乙）江蘇省蘇州北寺塔



（丙）福建省福州白塔



（丁）浙江省甯波天封塔

家をなし或は一族一鄉をなせり、而して彼等異族は祖先の時代より讎怨を構へ其子孫に至るも尙相解けざるを以て極めて些細の事件の爲めに異族の爭鬪を開始し、甚しきに至りては武器を携へ銃器を手にし數村入り亂れて鬪ひ死傷者を出すもの少なからず、此の如き爭鬪を械鬪と稱す、爭鬪の結果は敗北者より金錢を出し或は仲裁者に據りて休戰又は和懇をなすと雖も其讎怨重なりて解くるの時あらず、蓋し械鬪は野蠻なる民族の移動に際して免るべからざる爭鬪なるべく南支那の如く新舊民族の移動の甚だしかりし所殊に家族制度今尙存する所にありては械鬪の如き野蠻の風俗も近代に至る迄尙保存せられたるならん、張亮桑氏の中國風俗史に依れば唐の杜佑通典に五嶺以南には夷獠の如き蠻族雜居し敎義を知らざるを以て彼等の中其雄なるものは都老と稱し銅鼓を庭に懸け之を鳴して異族を攻擊すと云ひ、又海槎餘錄には黎人は善く射且つ好く鬪ひ積世の仇を報ず、若し祖先の鬪敗の恥を雪がんとし兵を起さば仇家之に應じ兵を募りて對陣す、府縣の公人之を觀戰し兩家の婦女も亦本營に集まり斯くて大々的戰鬪は開始され戰死者を出すも父母妻子は敵人との體面上悲泣するものなしと云へり、但し械鬪をなすものは必ずしも蠻族に限れるにあらずして漢族も亦此風習を有するもの多し、械鬪の盛なるは廣東、福建二省を主とし江西省吉安、贛州、樂平地方にも此風習ありたるも盛ならざりしと云ふ、廣東省中最も盛なるは廣州府、惠州府とす、福建省に於ては漳州、泉州、興化地方を以て械鬪の本場とし就中惠安、泉州、同安並に漳州の小溪を其中心地とす、漳州地方に於ては異族の村落を通過する時

は常に武器を携ふるを要し且つ不意の襲撃に備へん爲めに煙管の尖端に槍形の武器を附するものあり、曾て同安縣石溝地方土民の開始せる械鬪は厦門港に於て勃發し港内の汽船中銃丸を蒙りたるものありたり、予も南靖の上流に於て旅行中現に械鬪の銃聲を聞けり、左に南靖縣城の告示を掲げ同地方械鬪の如何に盛なるかを示さん。

南靖縣公署　　示

爲嚴禁械鬪以重人道事照得靖邑地處下游民悍俗强從前械鬪之風訪諸耆舊數見不鮮年來稍見安靜不可謂非民德進步蠻鄉鉅族偶因細故忿爭躍々領試者仍時有所聞殊不思一經成鬪非傷殊生命糜費資財布且仇怨愈結愈深必致兩敗俱傷同歸於盡巡檢使對於各屬械鬪極爲住意特汀弭聞章程犯必嚴加懲辦曾經張前知事出示公布在案茲本知事下車伊始特恐吾民積習未除復釀開禍合行剴切示禁爲此示仰閭諸邑色人等知悉爾等嗣後務各安分守業勉作民縱有不平之事小則投邀公親理論大則赴縣起訴聽候公斷萬勿沾染惡習列械鬪互鬪逞一時之小忿貽無窮之大禍倘故違本知事定即督帶軍隊團拏辦鄉族家長辨與同坐決不姑寬各宜凜遵毋違此示

中華民國三年十一月二十日　　縣知事　王　述　曾

匪徒は古來支那到る處に存し彼等は單に奪劫を事とするのみならず其當時の不遇者或は政府に對し不平を抱くもの或は政府の倒覆の爲めに亡命せるもの等を包括し地方的一勢力を形成す、蓋し支那の如き政變の多き國に於ては政府顚覆の異圖を抱くもの甚だ多く彼等革命者

は無賴の徒を集めて土民を煽動し匪徒と通じ或は秘密結社と聯結し以て常に社會の秩序を擾亂するもの少なからず。

匪徒には土匪、河賊、海賊の數種あり、土匪は山間に根據を有し最も猖獗を極む、河賊は揚子江流域到る處に之あり、砲一二門を有する警務船所々に泊して其取締に當る、宜昌より上流蜀通の水路に旅客及貨物の上下するもの甚だ頻繁なるを以て河賊の出沒甚だ盛なり、三峽の宜昌峽附近並に其上流瀘州附近を以て最も猖獗の地とす、南支那にありては西江流域殊に廣東、梧州間に於ては一二千噸の汽船と雖も時に河賊の犯す所となることあり、海賊は明末の倭寇前後を以て最盛時とす、蓋し當時支那海岸を劫せるもの獨り我國民のみならず、其多くは支那流民の之に加はりて仇せるものなりと稱す、浙江省海岸は今尚海賊の出沒盛にして甯波より臺州に至る地方を最も猖獗とし、小蒸氣船又は民船に砲を備へ常に之が警備に任ずと雖も警備船中時に海賊の襲ふ所となるものあり、海門に於ては警備船中賊手に罹り多數の死傷者を出せるものを見たり、廣東海岸に至りては更に大規模の海賊あり、嘗て招商局の二三千噸の汽船にして海賊の難に遭遇せしことは今尚人の記憶に新なる所なり。

陝土匪の出沒は各省到る處之を見ざるの地なきも揚子江流域には警備軍普く配置せらるゝを以て大部隊を成すもの其跡を斷ち僅に鼠賊の所々に出沒するのみ、唯だ湖北省の北西部に於て西、四川と境を接する地方殊に興山、保康、竹山、房の諸縣に於て今尚稍大部隊の土匪あり、民國元

年興山縣城を犯したるものは其頭目の一部斬首せられ縣城外に梟首せられたり。

南支那の山地は一般に土匪甚だ猖獗なり、殊に著しく盛なるは湖南、廣西、廣東の省界地、廣東省東江流域、福建省南部、浙江省の臺州府とす、是等の土匪の盛なる地方には隨時討伐軍隊を派し或は常に軍隊を駐在せしむと雖も到底各地に出沒する土匪に對し充分なる兵備を配置する能はざるを以て討伐と云ふも實は掃蕩にして一縣より他縣に轉々追ひ拂ふに過ぎずして安寧秩序を保持することは甚だ困難なりとす、殊に廣大なる行政區劃を有する地方に於ては地方官憲の威力の普及せざる所多きを以て人民は須く自衞の道を講ずるを要し、彼等は保衞團又は之に類似の武備を設け又家の內外の警備を嚴にし又は住家は其障壁を高くし一度門を閉せば城壁と異らず、山間の僻地に至りては一族一村を成し一市に城壁を設けて外防とし、一家に墻壁を廻らして銃眼を備ふる等彼等の常に外難に對する憂慮は我國人の想像するも尙及ばざる所とす。

廣東省東江流域にありては惠州附近既に土匪の出沒するもの多く之より永安、河源、連平に亙る一帶を以て土匪猖獗の地とす、現に惠州の北方二十五支那里の七女湖に於ては土匪の襲撃を目撃せり、連平の北方三十支那里の上坪墟の如き一村擧て土匪なりしを以て民國元年討伐隊の砲撃に逢ひ一村全滅せる跡を見たり、此の如く土匪甚だ盛なるを以て惠州より河源に至る間には河畔に所々望樓の如き見張所を設け、且つ兵隊を所々に配置して其警備に任ぜり、而して河源より連平に至る地方の村落に於ては人家は各障壁を設け或は一村に一砲壘を築きて非常時に

備ふるものあり或は一村擧つて城壁を繞らせるものあり。

福建省南部の土匪は安溪、永春、漳平、大田、德化地方に出沒し殊に安溪より永春に至る間を最も猖獗の地とす、安溪縣下には常に福建南路警備隊に屬する二三千人の討伐隊を分派し掃蕩に從ひ最近數百人の土匪を斬首したるを以て稍小康を保てるも彼等警備隊を避けたる土匪の中永春、大田、德化地方の山中を巡りて出沒するもの亦少なからず。

浙江省臺州附近の土匪は大部隊を組織せざるも臺州、甯海、天臺地方の山地に出沒す。

湖南、廣東、廣西の省界地は土匪の最も猖獗なる地方にして湖南省の道州、江華、甯遠、永明より廣西省の富川、賀、信都、懷集並に廣東省連山に於て最も甚だし、此地方は古來猺族の根據地にして漢族に抵抗せる險要とす、蓋し此地は九疑山、姑婆山、大甕山等海拔千米以上の花崗岩山地に據れる天險にして、千九百二年廣西亂以來無賴の徒此地に集まれるのみならず清末の擾亂時に於ける雇兵中秩序の恢復に從ひて解散せられたるものは前述三省は勿論江西、福建地方より此地に集まれるもの多く土匪の一大團結を組織するに至れり。

廣西省の信都縣には數百人の屯田兵を駐在せしめたる結果土匪を掃蕩し富川、賀二縣に於ては民國元年以來廣西鑛務分局所在地の沿道に多數の警備隊を駐屯せしめたるが爲めに土匪の出沒するもの大に減少せり、而して彼等掃蕩せられたる土匪は今や湖南省又は省界地の前述山岳地に潛在し湖南省の江華、甯遠、道州、永明地方は其難を受くること甚だ多し。

抑、湖南省界地に於ける土匪に大馬と土馬とあり、大馬は一名廣馬と稱し廣東、廣西の土匪に屬す、一團を成して所々に割據するもの多く各團に都督あり、其下に頭目、匪首、匂匪、劫匪、旗人等あり、土馬は湖南省土民の土匪となれるものにして大馬の配下に屬するもの多く、土馬の團體を同股幇と稱す、彼等大馬及土馬の一團は數百人乃至千人にして之を總ぶる都督には永明に潭達成あり、江華縣嶺東に林某あり、旗人は劫匪、匂匪の下に屬して旅人を劫し要所々々にありて通行人の動靜を信號す、旗人には女匪を多しとす、大凡土匪の良民を犯すは劫匪の如く單に通行人の掠奪をなすのみならず、土地の名望家、富家に亂入して掠奪を行ふもの或は之に火を放て掠奪を縱にするもの或は家人を山中に奪ひて之を人質とし之と交換に金錢を強奪する等其方法其種類種種ありて恰も水滸傳を目前に見る思あり。

匪徒と秘密結社即ち會黨との關係に就きては、彼等會黨者は常に匪徒を操縱す、抑も秘密結社の基源は黃巾賊平定後にして唐宋に至りて益々多く、宋末北支那に白蓮會あり、清初福建に天地會又は三合會あり、或は三點會と稱し福建より兩廣、江西に蔓延し時に猺族を煽動し亂を興せり蓋し長髮賊亂も亦三點會に萠芽せるものとす。

乾隆年間湖南省に哥老會あり、哥老會は粵匪平定後湘勇中解散せられて衣食に窮せるものゝ組織せるものに係り一名哥弟會と稱す、反清復明を主義とし不義の豪富不正の官吏を襲劫し且つ盛に排外思想を布衍するを理想とせり、其支派に洪家、紅幇並に黑幇、白幇あり、其最も隆盛なる

を湖南浙江とし湖北並に其他揚子江流域之に次ぐ、清末革命に際し哥老會大に活躍する所ありたり、三點會亦之に合し茲に一大革命を建立せりと云ふ、興中會及同盟會其他以上諸會黨の支部にして地方に在るもの各〻特種の名稱を附せり。

第五章　人口及都邑

一　人口の密度及其密集地

人口密度は第百五十八頁のA表及第七版に示すが如く浙江及江蘇二省に最も密にして一平方哩に付四百人乃至五百人ニす、之に次ぐは湖北及安徽二省にして三百人乃至四百人を示し、湖南、江西、福建、廣東四省は二百人乃至三百人、四川及貴州二省は百人乃至二百人、雲南及廣西二省は百人以下ニす、今參考の爲め北支那に於ける隣接地方の人口密度を見るに山東省最も稠密にして江蘇、浙江二省を凌ぎ、河南省は安徽、湖北二省に類し、陝西、山西二省は四川及貴州に似たり、蓋し各省平均の人口密度は支那の東方平地より西方高原地に至るに從ひ密より疎に入り且つ人口稠密の地方は揚子江に沿ひて、其下流より上流に向ひ彎入するものニす、以上は各省平均の密度に就き記述せるものなれども各省内に於ても亦地形、交通機關、産業等の關係上都會の密集地を生じ從て人口の密度は局部に偏在するを認むべし。

今各省に就きて人口密集の狀を檢するに最も人口密度の多き江蘇、浙江二省に於ては吳平野及錢塘江流域に集中し江蘇省の北方及浙江省の南方には都邑の分布するもの甚だ少し、(第二十

五版參照)

吳平野の揚子江畔及其南に在る都邑中五十萬人以上のもの二、十萬以上のもの五、五萬以上のもの二、一萬人以上のもの約八あり、錢塘江流域には五十萬以上のもの二、十萬以上のもの二、五萬以上のもの二、一萬以上のもの五乃至七あり。

湖北及安徽二省中安徽省に於ては人口は揚子江及淮河の江畔に沿ひ密集す、就中重要なる都邑は揚子江畔即ち皖南低地に位し十萬人以上のもの二、五萬人以上のもの二、一萬人以上のもの三四あり、淮河畔には十萬人以上のもの一、一萬人以上のもの六あり、而して徽州盆地には一萬人以上のもの一其他小都邑少なからず、湖北省に於ては人口は湖廣低地の揚子江及漢江の河畔に多く就中兩江の合流地には五十萬人以上の都邑二、十萬人以上のもの一あり、漢口より下流の揚子江畔には一萬人以上のもの約五、上流には十萬人以上のもの一、五萬人以上のもの二、一萬人以上のもの一あり、而して漢江には一萬人以上のもの五あり。

湖南、江西、福建及廣東四省の中湖南省に於ては人口は湘江畔に沿ひ最も集中す、殊に長沙附近には十萬人以上の都邑二、一萬人以上のもの四あり、長沙附近より下流に一萬人以上のもの二、上流には、本流に於て五萬人以上のもの一、一萬人以上のもの四あり、資江及沅江の高原地を流るゝ溪谷には人口稀薄なりとし其都會中資江の上流に五萬人以上のもの一、下流に一萬人以上のもの三、沅江には其下流に十萬人以上のもの一、上流に一萬人以上のもの四乃至六あり。

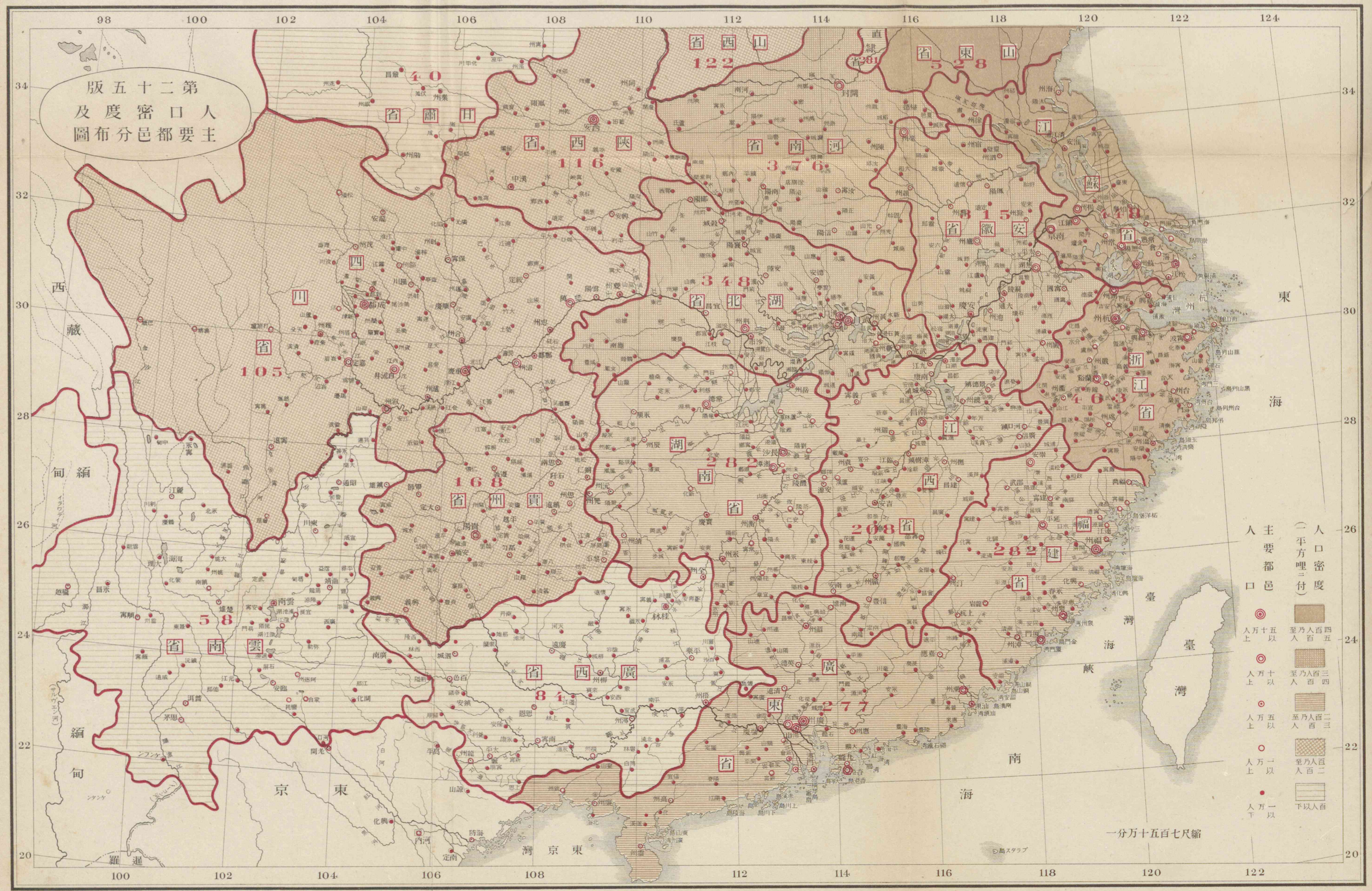
江西省に於て人口の稠密なる所は贛江の下流より袁江に沿ひ湖南省に通ずる街道附近にして、贛江の下流には南昌を中心とし十萬人以上の都邑一、一萬人以上のもの四あり、河口に五萬人以上のもの二あり、袁江には萍鄉附近に一萬人以上のもの四あり、此外人口の密集するは贛江の上流、盱江及錦江上流にして贛江の上流には五萬人以上のもの二、一萬人以上のもの二、盱江及錦江上流に於ては一萬人以上のもの各二あり。

福建省に於ては人口は海岸地方に最も集中し五十萬人以上の都邑一、十萬人以上のもの二、五萬人以上のもの一、一萬人以上のもの五六あり、海岸以外の地に於て人口の多きは閩江上流及其支流の建溪に沿へる地とし、十萬人以上のもの二、一萬人以上のもの二あり、九龍江の上流及韓江の上流にも人口稍多く一萬人以上の都邑二三あり。

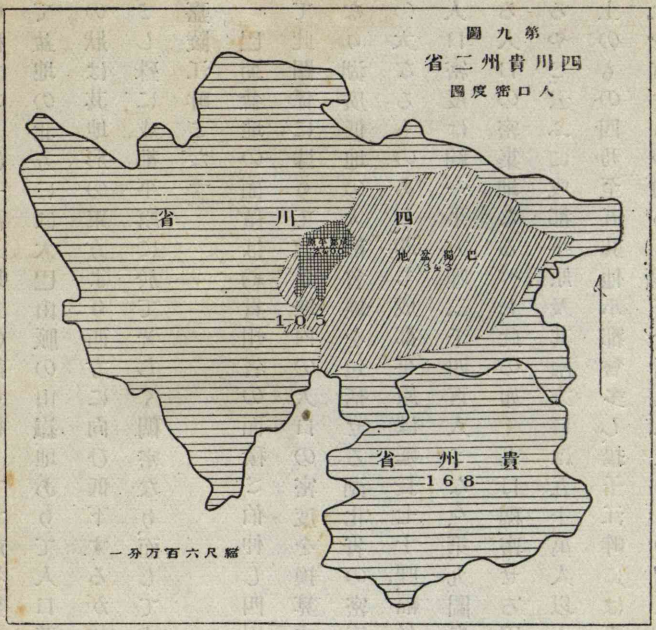
廣東省に於ける人口は廣東三角洲地に集中し、其他東江、北江及西江並に韓江に沿ひ稍多し、廣東三角洲地には五十萬人以上の都邑二、其中廣東は百萬以上を算す、十萬人以上のもの一、五萬人以上のもの二、一萬人以上のもの數多あり、此外海岸には外國領土に屬するものに五十萬人以上及五萬人以上のもの各一、一萬人以上の開港場一あり。

東江には惠州の五萬人以上の都邑ある外皆小都邑とし、北江には一萬人以上の都邑四乃至五あり、西江には五萬人以上のもの一、一萬人以上の都會二三あるのみ。

韓江には下流の潮州附近の三角洲地に於て人口稠密し、十萬人以上及五萬人以上のもの各一


第二十五版
人口密度及
主要都邑分布圖
人口密度
(一平方哩ニ付)
主要都邑
人口
縮尺七百五十万分一
東海
南海
臺灣
臺灣海峽
京東
京東灣
西藏
緬甸
緬甸
羅暹
直隸省
山東省
江蘇省
安徽省
浙江省
福建省
江西省
廣東省
廣西省
湖南省
湖北省
河南省
陝西省
山西省
甘肅省
四川省
雲南省
貴州省
廣西省
廣東省
40
122
528
116
376
315
148
348
105
463
168
282
208
282
58
84
277

あり、上流には都邑少なし。



第九圖

四川及貴州二省に於ては省全體としての人口密度は貴州省に百六十八人、四川省に百五人とし、貴州省に於て密に四川省に於て疎なるを示すも四川省の面積は貴州の面積の三倍餘にして而も人口の集中する狀況に甚しき差異あるを以て兩省に於ける人口の密度は單に全面積に對する人口を以て比較する能はず、即ち四川省に於ける人口は所謂巴蜀盆地內に集中し、貴州省に於ては全省に亙りて人口洽く賦存するものとす。

抑、四川省の如く人口密度と地形との關係の密接なる地方は多からず、同省は前述せる如く大なる面積を有すと雖も人口の集中するは巴蜀盆地にあり、盆地の西方は大雪山脈のある所にして西番、蠻子の住する人煙甚だ

稀なる地方なり、從て都邑は西藏、甘肅省及緬甸に通ずる街道に沿ひ散在するに過ぎず、其中都邑の稍大なるは一萬人以上の都會にして甘肅省界に三、西藏界に三、雲南省界に二三あるのみ、而して盆地の北方には大巴山脈の山嶽地ありて人口甚だ疎なりとす、巴蜀盆地内に於ける人口集中の狀は其地形の東方より西方に向ひ低下するが如く、東方巴の地方には疎にして蜀の地方に密とし殊に成都平原に於て著しく稠密なり、而して成都平原に次で人口の稠密なるは揚子江畔とす。

巴蜀盆地の面積は約貴州省の面積と伯仲し四川全省の人口は殆ど此盆地内に集中するを以て此關係に據りて該盆地内の人口の密度を換算するときは一平方哩の密度約三百四十三人となり湖廣低地の大都會地を包括せる湖北省の密度と殆ど相同じ、成都平原に至りては更に密度の大なるものあり、即ち成都平原は延長七十哩、幅員三十哩、其人口約五百萬人と稱するを以て、其人口密度は約一平方哩二千四百人となる、(第九圖參照)蓋し吳平野に於ける滬甯鐵道沿線に次げる人口の密集地なるべし、此の如く人口稠密せる巴蜀盆地に於て都會は如何なる狀況に分布するやと云ふに成都平原及其南方には五十萬人以上、十萬人以上、五萬人以上のもの各一、一萬人以上のもの四乃至五其他小都會多し、揚子江畔には嘉陵江との合流地に於ける重慶の五十萬人以上を有するを初めとして十萬人以上のもの四、五萬人以上のもの三、一萬人以上のもの三あり、嘉陵江畔には五萬人以上のもの一、一萬人以上のものは本流及其支流涪江に各二あり。

貴州省に於ける人口は殆ど全省に亙りて賦存せられ四川省の如く集中せられず、十萬人以上のものは省の中央に位する貴陽一あるのみ、其他は全省に散亂し五萬人以上のもの二、一萬人以上のもの約十あり。

廣西及雲南二省は人口の密度最も疎なる地方こす。

廣西省に於ては人口は西江の支流桂江及鬱江に稍集中せらるゝのみ、桂江には五萬人以上の都會三、一萬人以上のもの一あり、鬱江には五萬人以上の都會なく一萬人以上のもの五あり、此外柳江及鬱江の支流西洋江並に紅水の上流に一萬人以上の都會あり。

雲南省の人口は雲南府より臨安に至る盆地並に滇越鐵道沿線に集中せらるゝも五萬人以上の都邑一、一萬人以上の都邑六乃至七あるのみ、雲南府以外の地に於ては緬甸及東京界の開市場に一萬人以上の都會あるのみ。

二　都　邑

(一)　城所在地即ち城邑

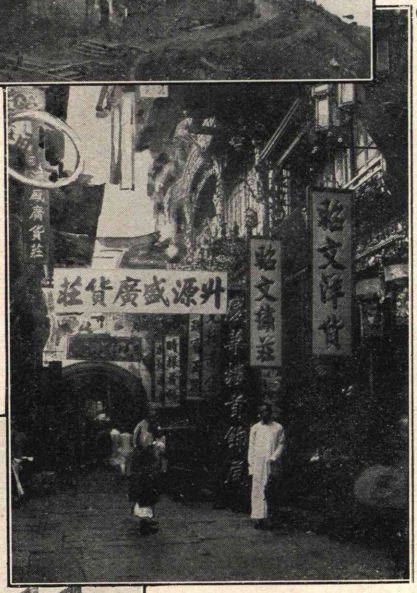
城の起源は周代にあり、「天子城九仞、公侯七仞、伯五仞、子男三仞」と稱し其大さ並に城壁の高を制限せり、蓋し城は平城又は平山城にして常に方形の城壁竝に其外部に濠を有するも僅に其形式のみ存するもの或は全然之を有せざるものあり、城には普通東、西、南、北の四門と其他小門、水門あ

り、而して城を中心とする主要交通路は城門を通ずるを以て城門の開閉は地方の交通上に重要なる關係を有するものなり、(第二十六版甲參照)元來支那の城は日本の城と大に趣を異にす、即ち主要の市街は城壁内即ち城内に存し城外には城門より主要交通路に沿へる市街地あるのみ、概して城外の市街は城内の市街に比して遜色あり、但し河邊に沿へる城に於ては問屋又は大商人の城外に住居するもの多く繁華なる市街を成し之を河邊街と稱す、城の大なるものに至りては内城、外城の二部より成り、内城には官衙の類多くして外城には商家多し、廣東市街の如きは内外兩城を備ふるのみならず城外に大市街を形成し更に外國居留地之に接し一大都會を形成す。

城は清代に、地方行政の制度に則りて、省城、府城、縣城、州城並に廳城に分てり。

省城は省の首府にして總督及巡撫の駐在地今は都督の駐在地として帝都に次ける大城なり、省城は左表に示す如く中支那に在るものは成都、武昌、長沙、南昌、安慶、南京、杭州の七、南支那にあるものは福州、廣州、桂林、貴陽、雲南の六とし、長沙、南昌、南京、杭州、福州、廣州の六省城は開港場を兼ぬ、是等省城中最も大なるは廣州にして成都、武昌、杭州及福州之に次き各五十萬人以上の人口を有し、長沙、南昌、南京は各十萬人乃至三十五萬人とし、安慶、桂林、雲南は人口僅に四萬乃至八萬人にして府城の大なるものに及ばず、蓋し雲南は回教亂及苗族亂に因り、桂林及安慶は長髪賊亂に據りて破壞せられ爲めに荒廢するに至れりと云ふ、桂林は南甯に其省城を移されたれども再び省城に復せんとの議あるを以て玆に桂林を以て省城として掲げたり。

（甲）廣東省惠州府城



（乙）浙江省甯波東門街の店舗

（丙）福建省厦門の市街

省名	舊名	省城	舊名	人口	省名	舊名	省城	舊名	人口
四川	（蜀）	成都	（益州）	四五〇、〇〇〇	浙江	（越）	杭州	（武林）	五九四、二三〇
湖北	（鄂）	武昌	（鄂渚）	五〇〇、〇〇〇	福建	（閩）	福州	（三山）	六二四、〇〇〇
湖南	（湘）	長沙	（三湘）	三五〇、〇〇〇	廣東	（粵）	廣州	（羊城）	九〇〇、〇〇〇
江西	（贛）	南昌	（洪都）	三〇〇、〇〇〇	廣西	（桂）	桂林	（建陵）	八〇、〇〇〇
安徽	（皖）	安慶	（晉州）	四〇、〇〇〇	貴州	（黔）	貴陽	（順元）	一〇〇、〇〇〇
江蘇	（吳）	江甯	（金陵）	三七七、一二〇	雲南	（滇）	雲南	（甯州）	四五、〇〇〇

府城、直隸州城、直隸廳城所在地は其大さ概して省城に比するに遙に小なり、其配置は各省の面積に比例し、大省には多く小省には少なく、必ずしも其省の人口の密度と關係せず、是等府城、直隸州及直隸廳城の大さ種々あり、概して元の道臺及現時の道尹の所在地となれる所は大都邑多く其他は小城にして其大さ縣城と何等選ぶ所なきもの少しとせず、B表は府、直隸州城及直隸廳城所在地にしてC表は道臺又は道尹の所在地とす。

A表

省名	面積	人口（一九一〇年民政部調查）	密度	新縣城	省城	道	舊府直隸州及直隸廳城	舊縣州城	開港場
陝西省	七五、二九〇平方哩	八、八〇〇、〇〇〇	一一六	九〇	一	三	一二	八五	〇
河南省	六七、九五四	二五、六〇〇、〇〇〇	三七六	一八	一	四	一五	一〇一	〇
四川省	二一八、五三三	二三、〇〇〇、〇〇〇	一〇五	一四六	一	五	二四	一三一	一
湖北省	七一、四二八	二四、九〇〇、〇〇〇	三四八	六九	一	三	一二	六六	三

湖南省	八三、三九八	二三、六〇〇、〇〇〇	二八二	七五	一	四	一八	六七	二
江西省	六九、四九八	一四五〇〇、〇〇〇	二〇八	八一	一	四	一四	七八	一
安徽省	五四、八二六	一七、三〇〇、〇〇〇	三一五	六〇	一	三	一四	五五	一
江蘇省	三八、六一〇	一七、三〇〇、〇〇〇	四四八	六〇	一	五	一三	六七	四
浙江省	三六、六八〇	一七、〇〇〇、〇〇〇	四六二	七五	一	四	一三	七八	三
福建省	四六、三三二	一三、一〇〇、〇〇〇	二八二	六二	一	四	一二	五八	三
廣東省	一〇〇、〇〇〇	二七、七〇〇、〇〇〇	二七七	九四	一	六	一九	八三	七
廣西省	七七、〇〇〇	六、五〇〇、〇〇〇	八四	七七	一	六	一五	九〇	三
貴州省	六七、一八一	一一、三〇〇、〇〇〇	一六八	八〇	一	三	一六	四九	〇
雲南省	一四八、七一四	八、五〇〇、〇〇〇	五八	九六	一	四	二三	六九	三

B表

省名	府、直隸州及直隸廳城所在地
陝西省	西安府、商州、同州府、乾州、邠州、鳳翔府、漢中府、興安府、延安府、鄜州、綏德州、榆林府。
河南省	開封府、鄭州、陳州府、許州、歸德府、彰德府、衛德府、懷慶府、河南府、陝州、南陽府、淅川廳、汝寧府、光州、汝州

四川省	成都府、資州、緜州、茂州、寧遠府、保寧府、順慶府、敘州府、敘永廳、重慶府、酉陽州、忠州、夔州府、石砫廳、綏定府、龍安府、松潘廳、潼川府、眉州、嘉定府、邛州、瀘州、雅州府、打箭爐廳。
湖北省	武昌府、漢陽府、安陸府、荆門州、襄陽府、鄖陽府、德安府、黄州府、荆州府、宜昌府、施南府、鶴峯廳。
湖南省	長沙府、岳州府、澧州、寶慶府、衡州府、桂陽州、常德府、辰州府、永綏廳、鳳凰廳、乾州廳、晃州廳、沅州府、永州府、靖州、郴州、永順府、南州廳。
江西省	南昌府、饒州府、廣信府、南康府、九江府、建昌府、撫州府、臨江府、瑞州府、袁州府、吉安府、贛州府、寧都州、南安府。
安徽省	安慶府、徽州府、寧國府、池州府、太平府、廬州府、鳳陽府、潁州府、廣德州、滁州、和州、六安州、泗州。
江蘇省	江寧府、蘇州府、太倉州、松江府、常州府、鎮江府、淮安府、海州、揚州府、海門廳、通州、徐州府。
浙江省	杭州府、嘉興府、湖州府、寧波府、定海廳、紹興府、臺州府、金華府、衢州府、嚴州府、温州府、處州府。
福建省	福州府、泉州府、建寧府、延平府、汀州府、興化府、邵武府、漳州府、福寧府、永春州、龍

	岩州。
廣東省	廣州府、肇慶府、羅定州、佛崗廳、赤溪廳、連州、連山廳、韶州府、南雄州、惠州府、潮州府、嘉應州、廉州府、欽州、高州府、雷州府、陽江廳、瓊州府、崖州。
廣西省	桂林府、柳州府、慶遠府、思恩府、百色廳、泗城府、平樂府、梧州府、鬱林州、潯州府、南甯府、太平府、上思廳、歸順州、鎮安府。
貴州省	貴陽府、思州府、思南府、鎮遠府、銅仁府、松桃廳、黎平府、安順府、興義府、普安廳、都勻府、平越州、石阡府、大定府、遵義府、仁懷廳。
雲南省	雲南府、大理府、臨安府、楚雄府、澂江府、景東廳、廣南府、廣西府、順甯府、曲靖府、武定州、麗江府、元江州、普洱府、蒙化廳、永昌府、永北廳、開化府、東川府、鎮沅廳、昭通府、鎮邊撫彝廳。

C表

省名	道臺所在地（舊制）	道名及道尹所在地（新制）
陝西省	西安、潼關、鳳翔、榆林、漢中	漢中（漢中）、關中（西安）、榆林（秦）
河南省	開封、武陟、信陽、陝州	開封（開封）、河洛（河南）、汝陽（信陽）、河北（彰德）

四川省	瀘州、重慶、保寧、雅州、成都	西川(成都)、東川(重慶)、建昌(雅州)、永寧(瀘州)、嘉陵(保寧)
湖北省	鶴峯、沙市、襄陽、漢口、武昌	江漢(武昌)、襄陽(襄陽)、荊南(宜昌)
湖南省	鳳凰、澧州、長沙、衡州	湘江(長沙)、衡陽(衡州)、武陵(常德)、辰沅(辰州)
江西省	贛州、九江、南昌	豫章(南昌)、廬陵(袁州)、贛南(贛州)、潯陽(九江)
安徽省	鳳陽、安慶、蕪湖	安慶(安慶)、蕪湖(蕪湖)、淮泗(鳳陽)
江蘇省	徐州、淮安、常熟、江寧	滬海(上海)、蘇常(蘇州)、淮揚(淮陰)、徐海(徐州)、金陵(南京)
浙江省	杭州、嘉興、寧波、衢州、温州	錢塘(杭州)、會稽(寧波)、金華(蘭谿)、甌海(温州)
福建省	福州、延平、漳州、厦門	閩海(福州)、厦門(厦門)、汀漳(漳州)、建安(延平)
廣東省	肇慶、惠州、廣州、韶州、瓊州、高州	粵海(廣州)、嶺南(韶州)、潮循(汕頭)、高雷(高州)、瓊崖(瓊州)、欽廉(欽州)
廣西省	龍州、柳州、南寧、桂林	南寧(南寧)、蒼梧(梧州)、桂林(桂林)、柳江(柳州)、田南(百色)、鎮南(龍州)
貴州省	黎平、貴陽、畢節	黔中(貴陽)、鎮遠(鎮遠)、貴西(畢節)
雲南省	大理、雲南、尋甸、普洱、蒙自	滇中(雲南)、蒙自(蒙自)、普洱(普洱)、騰越(騰越)

縣、州、廳屬州及屬廳城は時に人口一萬以上を有するものあるも概して數千の人口を有す、元來縣、州、廳の設置は行政上の見地に據るを以て府城と同じく面積の大なる省に其數多きも亦地形の關係並に商業上の關係より人口密度大なる所には多數の縣、州、廳城の設けある所なり即ち A

表に示す如く四川、雲南、廣東の如き大省には他省に比し縣城の數甚だ多し、四川省は面積大なるのみならず其人口は巴蜀盆地に著しく稠密なるを以て縣城の多きこと他省に冠絶す、雲南省は廣東省に比し面積甚だ廣きも人口稀薄なるを以て同省内の縣城の數は廣東三角洲地を控ゆる廣東省よりも遙に少なし、浙江省の如き最も面積の小なる省に於て却て縣城の數の福建、江蘇、安徽三省を凌駕するの理由は同省の地形及産業發達の狀を知るときは自ら明かとならん。

（二）城所在地以外の都邑

市は神農氏の頃より開かれ漢唐に至りて完備し九市、四市、三市、會市、檜市等の名稱ありたり、蓋し市は古來開市日にのみ市を成し開市外の日には住居者を見ざりしものにして現時と雖も僻地に於ては定期に開市するもの少なからず、而して我邦に於て三日市、四日市、五日市、十日市と稱するが如く開市地には市名を附するを常とするも現時市名ありて開市せざるもの、市名なき處に開市するもの多く、墟の名を有する地方は小市の開かるゝ都邑なり。

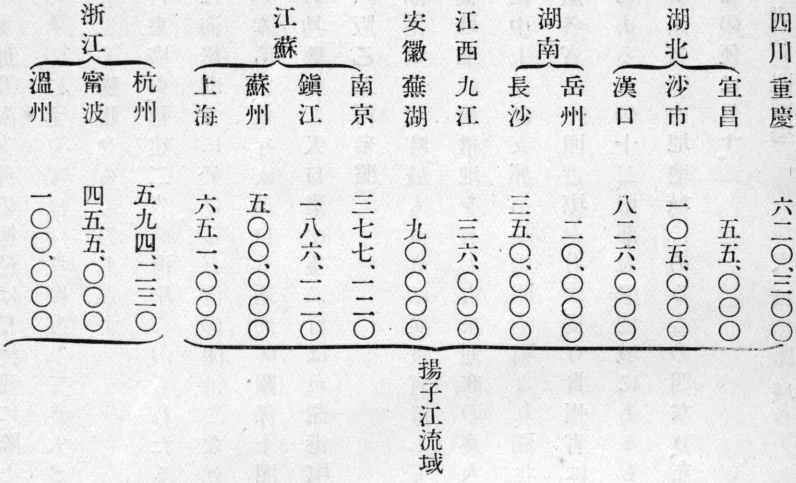
鎭は純然たる商業上の都邑にして元の通制又は司長の所在地たることあるも縣城の如く城壁を有せず、其大なるものに至りては、景德鎭、吳城鎭、樟樹鎭、河口鎭の如く江西省四大鎭と稱し、其大さ府城を凌駕するものあり、又河南省朱仙鎭、江西省景德鎭、湖北省漢口鎭、廣東省佛山鎭の如く天下四大鎭と稱せられたるものあるも上海、漢口の如く近年開港場となり省城を壓するに至れるものあり。

中支那及南支那の都邑は長髪亂に際し破壞せられて衰微せるもの甚だ多く、其中商業上重要なるものに至りては漸次恢復して盛大となれるもの少なからず、但し開港場となれる都邑の如く著しく膨脹せるものあらず。

古來廣東、福建二省の海岸に限られたる支那の外國貿易は阿片戰爭以來著しく發展し、之が爲めに海岸地方に於ける五港の開港となり、漸次揚子江流域及西江流域に開港場を見るに至れるのみならず、近年支那自ら通商の關係上開港場の範圍を擴大するに至り是等の開港場には商工業の勃興並に人口集中盛に行はれ開港場の發展は府城並に省城を壓するもの少なからず(第二十六版乙及丙參照)

開港場の現時最も多きは廣東省にして七開港場を有するのみならず、香港、澳門及廣州灣の三外領地並に租借地を有し、古來通商の盛大なりし所なり、之に次ぐは江蘇省にして四開港場を有し就中上海は支那第一の開港場なり、湖北、浙江、福建、廣西、雲南の各省は三開港場を有し四川、江西、安徽各省は一開港場を有す、獨り貴州省は一開港場をも有せず、而して是等開港場の中揚子江流域にあるもの十二、中部海岸地域にあるもの七、南部海岸地域にあるもの四、西江流域にあるもの六、雲南省の內地地域にあるもの四なり、左に各開港場の所屬省名及人口を表記し、其大小を比較するの便に供す。

省名	開港場	人口區域	省名	開港場	人口區域


四川 重慶 六二〇、三〇〇
湖北 宜昌 五五、〇〇〇
湖北 沙市 一〇五、〇〇〇
漢口 八二六、〇〇〇
湖南 岳州 二〇、〇〇〇
長沙 三五〇、〇〇〇
江西 九江 三六、〇〇〇
安徽 蕪湖 九〇、〇〇〇
江蘇 南京 三七七、一二〇
江蘇 鎮江 一八六、一二〇
江蘇 蘇州 五〇〇、〇〇〇
上海 六五一、〇〇〇
浙江 杭州 五九四、二三〇
浙江 寧波 四五五、〇〇〇
溫州 一〇〇、〇〇〇
揚子江流域
三都澳 八、〇〇〇
福建 福州 六二四、〇〇〇
厦門 一一四、〇〇〇
廣東－汕頭 七〇、〇〇〇
中部海岸地域
九龍 一五〇、〇〇〇
拱北 七五、〇〇〇
北海 二〇、〇〇〇
廣東 瓊州 四四、〇〇〇
南部海岸地域
江門 六二、〇〇〇
廣州 九〇〇、〇〇〇
三水 六、〇〇〇
西江流域
西 梧州 四〇、〇〇〇
西 南寧 四〇、〇〇〇
龍州 一三、〇〇〇

蒙自　一〇、九〇〇
雲南　思茅　一五、〇〇〇　内地地域
騰越　一〇、〇〇〇

(三)　重要都邑の分布

(A)　揚子江上流及貴州雲南省の都邑

(イ)成都平原及岷江の都邑　成都平原及岷江流域の都邑中最も大なるは成都なり、成都は曾に四川省城たるのみならず商業及機業盛大なり、其人口四五十萬あり、而して成都附近は岷江と沱江との間に數多の運河網狀をなして通じ交通至便にして田園開け都邑の數甚だ多し、成都に近き新都の如き縣城に於ても人口五萬を算すと云ふ、成都より下流岷江に沿ひては眉州及嘉定あり、嘉定は岷江と其支流大渡河及青衣水との合流地に位する商業及機業地にして人口十五萬あり、成都の西方にある邛州及雅州は西藏及雲南の街道上に位する商業都市なり。

(ロ)沱江、涪江及嘉陵江の都邑　沱江には資州、富順の外主要なる都邑なく、沱江と岷江との間の産鹽地には自流井及貢井より成れる人口二三十萬人の大都會あり、嘉陵江流域には保寧、順慶の如き機業地たる二萬人乃至四萬人の都會あり、嘉陵江と其支流涪江及渠江との合流地にある合州は人口五萬人の商業地にして其地理上の位置は岷江の嘉定に酷似す、其支流涪江には綿州、潼州あり、綿州は北京に至る官路上に位し潼州は鹽亭、洪射等産鹽地を控ゆる商業地なり。

（六）揚子江畔の都邑　巴蜀盆地を貫く揚子江畔に都邑多し、之を上流より下流に向ひ列擧せん、屏山は盆地に於ける揚子江舟行の最終地なり、叙州は岷江と揚子江との合流地にして且つ雲南省陸上交通の衝に當り揚子江上流に於ける最終の大都會とし其人口は五萬と云ひ或は拾萬と稱す、瀘州は沱江の揚子江に注入する所に位し且つ納溪及叙永を經て雲南及貴州に通ずる叙永大路の基點にして商業上重要の地位を占むるも叙州、重慶の如き大都會の間に介在するを以て著しき發達を見ず、重慶は揚子江、嘉陵江合流地に位し永川を通ずる重慶大路、綦江、遵義を通ずる綦江大路の基點にして、水陸の交通を控へ加ふるに四川省内唯一の開港場なり、而して豊饒なる四川省内の物産は此地より輸出せらるゝもの多きと共に、消費力大なる四川省民は下流より多額の物資を輸入するを以て其商業の盛なること揚子江畔の都會中第三位にあり、其人口は江北を合するときは六十二萬人ありと云ふ、涪州は涪陵江に沿ひて貴州省及湖南省の澧江及沅江に出づる通路に當り人口約十萬人の商業地なりとす、涪州より下流揚子江畔には酆都、忠州、萬縣、雲陽及夔州あり、其多くは蜀通航路の船着場として繁榮をなせるものなれども、唯萬縣は成都街道の基點にして商業地として繁榮す、其人口約拾四五萬を有す。

（七）巴蜀盆地の邊緣部の都邑　盆地の西方西藏界は天を摩する峻嶺連亙し西番、蠻子の住居する地方とし、人口稀薄にして都邑極めて稀なり、其中記すべきものは涪江上流の龍安、岷江上流の茂州、松潘並に西藏街道の天全、打箭爐、裏塘、巴塘、及大理街道の清溪、越巂、寧遠、會理等とす、盆地の北

方大巴山脈には廣元及昭化より甘肅及陝西二省に通ずる交通路あり又巫山より大甯河に沿ひ陝西省興安に通ずる交通路あるも都邑の大なるものなし、盆地の東方楚西山地には夔州より下流宜昌に至る間揚子江に貫かるゝ所三峽の險を成し都邑の大なるものなく巫山巴東、歸州等小都邑の江畔に存するのみ、楚西山地の北方漢口より漢中に至る街道上には漆の產地を以て著名なる南漳、保康、房、竹山、竹谿の小都邑あり楚西山地の南方にある盆地には名茶を產する施南、鶴峯の二邑あり。

(ホ)貴州及雲南省の都邑　貴州及雲南省に於ける都邑は湖沼地並に之より放射する交通線路に沿へるもの多くして却て河流に沿へる谷道に多からず、大理の湖沼地には大理の外趙州、雲龍、鄧州、劍州、麗江等の都邑あり、大理は洱海に瀕す嘗て繁榮なる都會なりしを苗族及回教徒亂に於ける殺戮により人口減少し現時僅に六千內外の人口を有するに過ぎず、大理附近には夷家族並に民家の住居するもの多し、其他の都邑の小なるや推して知るべし、大理より放射する交通路中巴莫に通ずる緬甸路に永昌、騰越あり、騰越は緬支間の開港場こす、雲南路には蒙化、鎭南等あり。

雲南の湖沼地には滇池、湖撫山湖、長橋海等數多の湖沼あり、約南北の方向に延長し其の湖畔の北方には雲南、安甯、昆陽、晉甯、澂江あり、之より南方に甯州、海通あり、更に南方に石屛、臨安あり、其中最も主要なるは省城の雲南府にして其人口は回教亂後著しく減少し現時僅に四萬五千に過ぎず、此地は四川、貴州、緬甸並に東京に通ずる交通路に當れるも陸路の交通不便なるを以て商業未

だ盛なるに至らず、雲南府を中心とする交通路中思茅大路には他郎、普洱、思茅あり、其中思茅は國境貿易場たり、滇越鐵道に沿ひては宜良、路南、阿迷州、蒙自、蠻耗、河口、老開あり、蒙自は錫鑛業地たるのみならず外國貿易場として繁榮するに至れり、雲南府より北東方に出づる交通路中叙州大路に崇明、尋甸、東川、昭通の都邑あり、叙永大路に馬龍、曲靖、宣威あり、而して雲南より廣西省に出づる交通路上の都邑は廣西州を經由して西江に沿ふものよりも彌勒、邱北、廣南を經由する陸上交通路に沿ひ都邑の分布するもの多く、廣南に至れば之より西江の支流西洋江に沿へる線路に都邑多し、其中主要なるは剝隘、百色、奉議、鎭遠、果化、南甯等とす。

貴陽は雲貴高原上に位する最大都會にして貴州省城とし其人口は十萬餘あるも商業地としては重要ならず、貴州に於ける都邑は此地を中心とする交通線路上に分布し重慶に出づる綦江大路に開州、遵義、桐梓及四川省の綦江あり、沅江流域に出づる街道には平越、黃平、鎭遠、忠州、晃州、沅州等の都市あり、都匀大路に都匀、獨山、三脚、古州及懷遠あり、雲南官路には廣順、安順、鎭甯、貞豐、興義、並に郎岱、永甯、晋安あり、瀘州に出づる叙永大路には大定、畢節、叙永、仁懷等あり、此外貴州省の北東隅思南府より或は北方四川省涪州に通じ或は東方湖南省西部に通ずる街道に銅仁、鳳凰、印江、酉陽等あり。

(B)　揚子江中流地の都邑

(イ)漢江流域の都邑　襄陽は古來北支那と中支那との間に介在する重要都邑にして襄陽より

放射する河南街道及陝西街道の陸上交通の衝に當る河南省に出づる街道に沿ひては襄陽の對岸に樊城の都邑あり、此地より陸路河南省に入り南陽を經て開封又は河南府に達す、陝西省に至る街道に沿ひては襄陽の上流に穀城及老河口の都邑あり、之より陝西省西安に通ず、襄陽より上流地に於ける都邑中主要なるは鄖陽、興安、漢中の三にして漢中附近の平野には固城洋、褒城、沔等の小都邑あり。

漢中は四川官路と漢江の水路とを控え豐饒なる平野の中央に位す、蓋し此地は三國時代の蜀の都にして現時人口約八萬あり、漢江上流に於ける殷富の商業市なり。

(ロ)湖廣低地の都邑　湖廣低地に於ける都邑の分布は之を巴蜀盆地に於ける都邑の分布に比較するに地理上著しく相似の點あり、即湖廣低地の中央を流るる漢江と漢口より下流の揚子江とを以て該低地を二分するものとすれば北東部は淮山脈及其山麓の丘陵地より成り、都邑の分布甚だ少なきこと恰も巴蜀盆地の巴の地方に酷似す、之に反して南西部は主に卑濕の平地にして其中に都邑の多きこと恰も同盆地の蜀の地方に似たり、若し此の如き相似の點ありとすれば德安、應城、隨州の都邑の位置は巴、渠、綏定、通江に該當すべし、嘉陵江に似たる漢江には沔陽、安陸、宜城、襄陽の都會を控へ宜昌、荊州、沙市の如き大都會の外長陽、宜都、枝江、松滋等小都會を有する平原地は成都平原の都會多きに似たらずや、更に揚子江畔の都邑に至りては洞庭湖口に位する岳州の叙州に當る如き、又赤壁を控えて江に臨める嘉魚又は新堤の湖南、江西二省陸路交通路の衝に

當ること尙瀘州の貴州、雲南二省陸路交通を控ゆるが如し、若し夫れ武漢の地に至りては揚子江と漢江との會流地に鼎立すること恰も重慶の揚子江及嘉陵江會流地に位するが如し、且つ武漢の地の省城、開港場並に內地商工業の中心地を集むるは尙四川省の成都、重慶、自流井を一箇所に集めたるが如し、漢口より下流の揚子江畔に至りては其地形恰も重慶より下流の三峽諸灘の地に類し武昌、黃州、黃石港、蘄州、武穴等都邑の江畔に散在するを見るべし。

湖廣低地の前述都邑中最も殷富なるを武漢の地とす、武漢即ち武昌、漢口、漢陽の三大都會は揚子江と漢江との合流地に鼎立し兩江の水利を控ゆるのみならず陸には漢口より京漢鐵道あり、武昌より粵漢鐵道、漢陽より川漢鐵道の布設せられんとするあり、其位置は揚子江の上流約六百哩支那の中央に位し水陸交通の衝に當る、武昌は古來湖北省城にして廣東、福州、成都と共に支那省城中の大都なり、其人口約五十萬あり省城としての設備間然するなく官營に屬する製造工場多し、漢陽は漢陽府城所在地たりし所にして人口四十萬と稱す、其大別山と武昌の蛇山とは揚子江を挾んで重要なる險要を成す、漢陽は大別山に據りて二部に分れ府城は大別山の南西麓に位す、其東麓漢江畔には鐵政局、兵工廠、鋼鐵廠、油廠等工場甚だ多し、漢口は天下四大鎭の一にして古來船舶物資の輻湊する地なれごも開港場となるに至りて甚だしく膨脹し人口約八十二萬六千を算す、支那人市街は漢江に沿ひ外國租界地は揚子江に沿へり、而して租界には英露佛獨日の五國租界地あり、此地は支那に於ける茶の最大市場にして磚茶工場其他雜多の工場甚だ多し、蓋し

武漢の都は之を合すれば其人口約百七十二萬にして支那に於ける最大都會とす、其商業は未だ上海の盛なるに如かざるも將來工業地として異常の發達を見んとす。

(ハ)湘江及其支流域の都邑　湘江、資江、沅江、澧江四水の中都邑の分布最も多きを湘江畔とす、既に地形章に述べたる如く湘江畔には赭色砂岩層又は赭土の丘陵臺地並に沖積平地甚だ多く水陸の交通至便にして生産に富み商工業盛なるのみならず桂林官路通ずるを以て都邑絡繹として連續す、而して數多の都邑中主要なるものを列擧すれば本流に於ては下流地方に岳州、湘陰、長沙、湘潭あり、中流地方に衡山、衡州、祁陽及永州あり、上流地方に廣西省所屬の全、興安の二都邑あり、支流に於ては衡州より耒水に沿ひ廣東省韶州に出づる摺嶺大路に耒陽、永興、郴州並に摺嶺の南に宜章、樂昌あり、永州より瀟江に沿ひ道州、江華、河路口等の都邑あり、長沙の南方株洲より淥江に沿ひ江西省に通ずる街道に醴陵、湘東、萍鄉並に炭坑所在地たる安源あり、是等湘江畔の都邑中重要なるを長沙、湘潭とす、長沙は湘江の下流右岸に位し對岸の岳麓山に面す、此地は湖南省城にして人口約三十五萬あり、近年開港場となりて以來益伸展するに至れり、殊に增水期の短期間を除けば湘江のみならず資江及沅江の農產物、鑛產物其他の土產物は殆ど長沙に於て集散せらる。

湘潭は長沙の上流約十七哩の湘江左岸に位し人口三十萬と稱す、增水期には漢口、湘潭間の大汽船航路の終點とす、現時湘江上流の物資の集散地にして商業盛なりし昔時汽船の航行なく專ら陸上貿易の行はれたる時代にありては更に殷富にして內外貿易の一大仲繼所たりしなり。

資江、沅江、澧江の流域は概して高原地にして其溪谷は峽谷を成し從て谷道狹きを以て谷道に沿へる都市の分布多からず、且つ大なる都會をなすもの少なし、資江に沿ひては寶慶を最大の都會とし之より下流に新化、安化、三堂街、益陽並に新化の錫鑛山、寶慶の龍山の如き鑛業地多く上流にあるを武岡、新寧とす、沅江に沿ひては常德を最大都市とす、常德は古の武陵、桃源にして今は沅江を通じて貴州、湖南兩省の商業を司り增水期には漢口、常德線の終點となる、之より下流の洞庭湖畔に龍陽、沅江の上流には雲南官路に沿ひ桃源、辰州、瀘溪、沅州、晃州等、之より西方に貴州省思州、遵義等あり。

辰州より南方沅江の溪路に沿へる都邑には辰谿、叙浦、黔陽、靖等あり、澧江には澧州の外下流に安鄉、津市、上流に石門、慈利、永定あり、之より沅江に亙れる街道上に永順、保靖、永綏等あるも、元來苗族の堡寨のありし所にして大なる都邑をなすものなし、洞庭湖畔は大水時に於ける湖水の氾濫地にして人家は屢水底に沒するも尙都會及村落の分布少なからず、蓋し湖畔は米田、綿園に富める豐饒地なるを以て水災の害多きに拘らず湖畔に都邑多し、即ち湖畔北方に津市、安鄉、南州、華容の小都市、南方には龍陽、沅江、白沙塘、盧林潭あり。

(c)　揚子江下流地の都邑

(イ)贛江流域の都邑　贛江流路に沿へる谷道は赭色砂岩層の臺地又は丘陵を通じ、水陸の交通及商工業發達し廣東官路亦此谷道を通ずるを以て該流域に於ける都邑の分布は湘江流域のも

のに類似す、即ち其相似の點を擧くれば鄱陽湖口の九江及湖口は岳州及城陵磯に對立し、共に開港場たり、南昌は其位置並に行政及商業の中心地たること尙長沙の如く、之より上流に於ては樟樹鎭の湘潭に對し吉安の衡州に當り贛州の永州に對するが如き其類似點の主要なるものとす、九江は鄱陽湖口の上流十二哩の揚子江畔にあり、又前面は江に面し南方廬山を控ゆ、此地は江西省唯一の開港場にして殊に江西茶の輸出地として重要なり、其人口三萬六千あり、南昌は彭蠡平野を貫ける贛江の右岸に位し其人口約三十萬あり、曾に江西省城たるのみならず贛江、袁江、盱江並に錦江の物資の集散地なり、樟樹鎭は江西四大鎭の一にして支那製藥業の最大中心地なり、其位置は贛江、袁江の合流地に近きを以て物資の集散多し。

樟樹鎭、吉安間に豐城、新淦、峽江、吉水の都邑あり、吉安、贛州間に泰和、萬安あり、贛州より上流、梅嶺を過き廣東省韶州に亙る街道には恰も永州より湘瀟二水に依り桂林に通ずるが如く、其谷道に沿ひ南康、南安、南雄、始興、韶州等大小數多の都邑あり、贛州より桃江に沿ひ廣東省東江流域に通ずる線路に信豐、龍南の都邑あること尙瀟江流域の都邑の如く、贛州より貢水に沿ひ福建省韓江流域の雫都、會昌、瑞金等は恰も耒水の摺嶺路にある都邑の如し。

贛江の支流に於ける都邑中重要なるものを擧ぐれば盱江流域に撫州及建昌あり、錦江には餘干、安仁、弋陽、興安、河口鎭、鉛山、廣信、玉山ありて錢塘江上流の都邑と連續す、昌河及樂安河には樂平、浮梁及窯業にて著名なる景德鎭等の都邑ありて其上流には安徽省の名茶を產する祁門、婺源あ

り、此外贛江畔の建昌より修水を溯れば武寧、義寧あり、南昌より瑞河を溯れば瑞州、上高、新昌、萬載の小都邑多く、樟樹鎭に近き臨江より袁江に沿ひ湖南省湊江に出づる湖南街道には新喻、分宜、袁州並に萍鄉、醴陵等の都市村落絡繹として連續す。

鄱陽湖畔に於ける都邑には北に南康、吳城鎭東方及南方に瑞洪、餘干萬年、饒州の都邑あり。

(ロ)皖南低地の都邑　皖南低地の都邑は揚子江畔に分布するものを主要とす、其南方は山岳地にして都邑少なく北方は卑濕の地にして亦都邑の大なるもの多からず、而して揚子江畔には安徽省城の安慶あり、人口僅に四萬、支那省城中最小のものなり、又商業の見るべきなし、之より上流に東流、望江、彭澤あり、之より下流に池州、大通鎭、銅陵、荻港、蕪湖、太平等あり、其中大通鎭は淮鹽の集散地として、蕪湖は開港場として並に米の集散地として共に重要なり、而して蕪湖の南方平野に南陵、寧國、涇の都邑あり、廬州は淮河、揚子江兩流域の間に介在する重要都市なり、同地より九江に至る街道上に舒城、桐城、潛山、太湖、宿松、黃梅等あるも宿松、黃梅の煙草集散地として重要なるのみ。

(ハ)吳平野の都邑　吳平野は一望目を遮るなき平野にして之を貫ける揚子江畔並に大運河に沿ひ都邑多し、即ち揚子江畔にありては南京、鎭江の外下流に江陰、常熟、太倉、通州、海門、崇明あり、運河に沿ひては江北に瓜州、揚州、淮安、清江舖あり、江南に常州、無錫、蘇州、吳江、平望鎭あり、黃浦江に沿ひ上海、松江、楓涇鎭、嘉興、平湖あり、太湖、杭州間の運河に沿ひては湖州、菱湖鎭あり、是等の中上海蘇州鎭江、南京は開港場として其他は生絲及棉花の機業地として重要なり、就中上海は人口約六十

五萬の大都會にして開港以來甚だしく膨脹せり、上海の位置は揚子江の支流黃浦江の上流約十二哩蘇州江の合流地に位し北部は外國居留地にして南部は上海縣城なり、此地は綿、繭絲、米及茶の集散地にして加ふるに豐饒にして水運に富める吳平野を控へ支那を橫斷する揚子江の河口に位するを以て內外交通並に商工業の最大中心にして支那の門戶と稱すべく且つ支那第一の開港場なり(第六章交通及第七章商業及工業參照)

南京は明の應天府にして主都たりし所なるも淸朝に至りて衰へ殊に長髮亂に際し甚だしく破壞せらる、人口三十七萬七千あり、商業地としては曾て鎭江に及ばざりしも近年揚子江航業盛大となり並に津浦鐵道の開通するに至り南京の下關は其對岸の浦口と共に貿易上重要の地たらんとす、鎭江は、大運河と揚子江との交叉地にして古來中支那、北支那間の重要貿易場たりしも近年其貿易は上海、南京の爲めに奪はる、人口約十八萬六千とす、蘇州は太湖畔に位し大運河、蘇州江此地を通ず、古來杭州と共に市街美麗にして繭絲並に絹織物の產を以て著はる、彼の上有天堂下有蘇杭と稱する地即ち是なり。

(D) 錢塘江流域の都邑

錢塘江流域の都邑は山岳地を貫ける谷道に沿へるもの多し、就中大都會をなすものは河流の合流地に位す、杭州は錢塘江口に位するのみならず運河と錢塘江との交叉地に位すと雖惜らくは杭州灣の舟行危險なるを以て上海の如く外洋との交通盛ならず、蓋し杭州は南宋の帝都あり

し所にて西湖の勝地を控へ其市街の美觀なることは蘇州と並び稱せられ、又蘇杭は共に絹布の機業を以て秀づるの地なり、之より上流に富陽、桐廬、嚴州、蘭谿あり、蘭谿は錢塘江の上流衢溪と金華溪との合流地に位し江西、福建及南浙と杭州及上海方面との交通の衝に當れる商業地にして錢塘江流域中杭州に次ける大都會なり、錢塘江上流及支流に於ける都邑中新安江に於ては其合流地に嚴州あり、之より上流に淳安、茶園鎭、威坪等あれども狹隘なる溪谷に沿ひ散在するあるのみ、却て上流地に於ける徽州盆地に都邑稍密集す、即ち徽州の外績溪、屯溪、休甯、魚亭、黟、祁門あり、就中徽州を大なりとす、蓋し徽州盆地は支那に於て著名の產茶地にして人口及都邑の比較的多き地方なり、衢溪に沿へる都邑には衢州の外龍游、常山及江山あり、江西及福建に至る通路に當れり。

此外杭州より甯波に至る西興運河沿線には蕭山、紹興、曹娥、上虞、餘姚、慈谿、甯波及鎭海あり、其中甯波は外國貿易場又は支那沿岸商業地とし、紹興及蕭山は機業造酒其他各種の商工業地なり。

(E)　閩浙の都邑

閩浙の都邑とは福建省一圓の外、南浙並に廣東省韓江流域に於ける都邑を云ふ、都邑の分布地を分ちて三とす、一は海岸地に分布するもの、二は海岸と約直角に流下する河流即ち横谷をなせる本流に分布するもの、三は該本流の支流に分布するものとす、其中重要なる都邑は海岸及本流の河口附近に位し、之に次ぐを本流及支流の合流地に位するものとす。

(イ)海岸の都邑　大都會の海岸に發達するに至れるは外國貿易の隆盛となれる結果にして大

船を繫留する必要上水深大なる海岸を選めるものこす、其以前にありては沿岸商業並に外國貿易は戎克船に依りて行はれたるを以て水深の大なるを要せず、且つ内地商業又は行政上の關係より閩浙海岸地方に於ける重要なる都邑は從來海岸よりも少しく河口を溯れる所に置かれたるもの多し、近年汽船の交通隆盛こなるに從ひて此の如き河港は單に内地商業地たるに止まり、外國貿易場こしての價値を失ひたるを以て商業の中心は海港を控ゆる都市に移らんこするに至れり、今海岸に建てられたる都邑を列擧せんか、浙江省の海岸に舟山島及其島影に鎭海、定海、沈家門あり、三門灣口に石浦灣底に甯海及建跳あり、其外臺州灣に海門、温州灣に玉環、樂清あり、福建省に於ては三都澳並に之を中心こする地方に福甯、甯德、羅源、連江あり、閩江口に馬尾、興化灣附近に興化及福清あり、厦門灣に厦門、安海、同安、石碼、海澄、詔安あり、廣東省屬に於ては汕頭灣の汕頭、揭陽、澄海、惠來及陸豐等あり、其中厦門、汕頭の開港場並に鎭海、定海、海門、馬尾、三都澳を重要こす、而して海岸より少しく溯れる所に位するものは或は海港の如く或は河港の如く恰も兩者の中間性を帶ぶ、是れ南支那に於ける河口の性質の然らしむる所なり、此の如き港をなせる都邑中其主なるものは左の如し。

省名	河流	河口に近き都邑	河口の都邑
浙江省	甬江	甯波	鎭海

浙江省	椒江	臺州及黃巖	海門	
同	甌江	温州	館頭	（温州、瑞安及平陽は運河にて連絡す）
同	飛龍江	瑞安		
福建省	南關港	福鼎	南鎭	
同	閩江	福州	馬尾	
同	晉江	泉州	臭塗	
同	九龍江	漳州	石碼、海澄及厦門	
同	浮頭山河	漳浦	古鎭	
廣東省	韓江	潮州	汕頭	

厦門は厦門島と鼓浪嶼とに亙れる開港場にして南支那に於て香港に次げる良港なり、殊に我臺灣との間の重要貿易場とし明末鄭成功の遺跡を以て著名なり其人口十一萬四千とす。

（ロ）河流の都邑　河流に沿ふ都邑中本流及其主要の支流にあるものを記述すれば左の如し。

椒江の本流に天臺、臺州、海門、支流に仙居、黃巖、路橋鎭及太平あり、臺州は小蒸氣船航路の終端とし、黃巖地方は柑橘の輸出地として著名なり。

甌江の本流に遂昌、舊市、松陽、寶定、處州、青田、温州あり、支流の中、大溪には龍泉及雲和あり、小溪に景甯あり、温州を除けば處州及松陽を大なりとし、松陽は煙草の産地として、青田は蠟石の産出地

ミして著名なり。

閩江の本流に光澤、邵武、順昌、延平、水口、閩清、福州、馬尾あり、支流中建溪に崇安、建陽、松溪、政和、建甯あり、沙溪に甯化、清流、連城、永安、沙あり、是等の中福州は省城及開港場にして人口六十二萬四千あり、其重要輸出品たる茶を輸出し馬尾は其輸出港にして且つ海運造船所を設く、延平は閩江の本支流合流地に位し福建省中央部の商業中心ミし福州に次ける大都會なり、崇安は福建ミ江西及浙江ミの省界商業の行はるゝ地なりミし建甯ミ共に茶業の中心地たり。

晋江の本流に湖頭、安溪、南安、泉州あり支流に德化、永春あり、泉州は古のザイタムの地なりミ云ひ外國貿易の初めて開かれたる地方にして今は厦門の隆盛に壓せらるゝも尚内地商業地ミして繁榮す。

九龍江の都邑には其下流に石碼、海澄あり、支流の南溪に於ける都邑は主ミして下游地方に分布し漳州、天寶、南靖、山城、小溪等あり、北溪に於ては都邑は下游地方に少なく主ミして上游地方に分布し龍岩、龍門、雁石、漳平、甯洋等あり、漳州は福建省中最も廣き平野を控へ農產物に富み且つ商工業盛なり。

韓江の都邑は上流に多し蓋し韓江の上流は福建省に、下流は廣東省に屬す、福建省内に於ては本流に古城、汀州、河田、上杭、峰市あり、支流に湖雷、坎頭あり、古城は江西、福建省界商業地にして上杭は韓江上流に於ける商業地ミす、峰市は永定河ミ韓江ミの合流地に位し兩河共に峰市附近に於

て水路通ぜざるを以て此地に貨客の積替を成すを以て繁榮す、廣東省内に於ては本流には福建省界に太埔の都邑ある外下流の潮州に至る迄都邑こして掲ぐべきものなし、潮州より下流三角洲地に澄海、汕頭の都會あり、支流には梅江に沿ひ嘉應州の外興甯、長樂、平遠鎭平、程江、松口等あり楓溪に揭陽、普甯あり、是等の都邑中潮州は三角洲地に於ける生產地を控へ韓江流域に於ける内地商業の中心地こし、福建省の漳州こ並ぶべきものなり、汕頭の其位置恰も漳州に對する厦門の如く、其港は香港、厦門こ並び稱せられ南支那に於ける外國貿易場こして重要なり、太埔は韓江に於ける小蒸氣船航路の終點にして貨物の集散多く、嘉應州は客家の居住地にして且つ海外に移民を出すを以て有名なり。

(E) 嶺南の都邑

嶺南は五嶺以南にして廣東省及廣西二省を含む、茲には廣西省の西方苗嶺以南の地をも包括す、而して嶺南に於ける都邑の分布は東江、北江、西江の流域並に廣東三角洲地に分たる。

東江に於ける都邑の分布は惠州より上流に疎にして下流に密なり、上流に於ては江西省内に長甯、廣東省内に龍川、和平、河源、並に連平、忠信あり、河源は小蒸氣船航路の終點なり、下流に於ては博羅、石龍、東莞、增城等の都邑あり。

北江に於ける都邑の分布は比較的上流地に密にして下流に疎なり、上流に於ては武水こ湞水この合流地に位する韶州を大こす、湞水に沿ひ江西省に通ずる官路は赭色砂岩層より成れる窪

地を通じ都邑の分布比較的多く其中始興、南雄を大なりとす、武水には湖南省に至る騮嶺街道通じ樂昌、宜章其他小都邑少なからず、韶州より下流三水に至る間の本流に沿ひ烏石、英德、黃石、清遠、芦包及三水の都邑あり、支流には連州江に連山、連州、陽山あり、是等の都邑中韶州は江西及湖南に通ずる兩街道の分岐點にして北江の小蒸氣船航路の終點なるを以て貨客の此地に集散するもの甚だ多く一大商業地なり、英德及清遠は韶州に次ける都邑なり。

西江に於ける都邑の分布は下流より中流に至るに從ひ疎となり、上流に至りては雲南及貴州の高原地に連續し都邑の分布甚だ稀なり、且つ中流及上流に於ては支流よりも本流に於て都邑の分布少なし、而して上流及中流地に於ては其本流に貴州界の西隆、泗城、那地並に遷江、來賓、武宣、南平等あるも大なる都邑少なく支流には柳江に沿ひ柳州及慶遠の外南丹、河池、懷遠、融、思恩、天河あり、鬱江に沿ひては都邑多く、其中南甯を以て大とし、之より下流に永淳、橫州、貴及潯州あり、上流には西洋江に沿ひ永康、果化、鎭遠、奉議、百色並に雲南の剝隘、廣南等あり、麗江に新甯、太平、龍州、東京の涼山等あり、百色は雲南、廣西の省界商業の行はるゝ所にして水路交通の最終點とし、龍州は東京との間の開港場にして廣西省には水路東京には鐵道の交通あり、南甯は廣西省南部の內地商業地にして開港場を兼ね中華民國以來都督府を桂林より此地に移し行政及商業の兩中心地となれり、但し人口僅に四萬の小都市なり、劍江に沿ひては藤、容、北溪、南流、鬱林の都邑あり、此溪谷に沿ひ廣東海岸の廉州及北海に出づるを以て從來商業の盛なる地方とす。

下流地方には其本流に梧州、封川、都城、西寧、德慶、東安、肇慶等都邑の大なるもの多し、梧州は西江、桂江合流地に位し大汽船を舶し開港場に屬するを以て廣西省並に湖南省南部に於ける物貨の集散盛にして廣西省中桂林に次ける大都會なり、梧州以外の都會は皆廣東省に屬す、其中梧州に次ぐを肇慶とし嘗て廣東省城ありし所なり、支流には桂江、賀江、綏江の三あり、桂江に沿へる都邑は其上流の桂林を以て最大とす、桂林より上流に靈川、興安、下流に陽朔、平樂、昭平等あり、桂林は舊廣西省城にして且つ湖南、廣西兩省界商業地とし、近年其都督府は南寧に移され爲に廣西省の最高行政的中心たらずと雖も尙司法、教育、軍務の機關を有し依然として廣西省北部の商業地たり、蓋し桂江と湘江とは興安に於て運河に據りて連絡するを以て水路廣東、廣西、湖南三省の交通をなすを得べく此水路に據りて鹽其他物資の供給せらるゝもの多し。

賀江に沿へる都邑は其上流の富川、賀間に白沙、五竇橋、八步街、西灣等錫鑛業に關し繁榮する都邑多し、下流地方には都會甚だ少なく舖門開建の二都邑あるのみ、封川は賀江と西江との合流地に位す、綏江に沿ひては廣西省內に懷集あり、省內に凹仔あり、廣東省內に廣寧、石澗、石狗、四會あり、凹仔には大水時小蒸氣船の溯江を見るとゝ云ひ、四會は綏江流域に於ける都邑の最も大なるものなり。

廣東三角洲は北江、西江、珠江及東江より成れる三角洲にして而して水路は其中を通ずること網の如く之に沿ひて都邑の發達するもの多し、南支那に於ける最も生產力に富める地方とす。

三角洲地中主要なる都邑は珠江に沿へる廣三鐵道沿線に多く三水、西南、佛山、廣東を主要とす、三水は北江と西江との合流地にある開港場、西南は製絲其他の工業地、佛山は製絲及機業の中心地とす、廣東は廣東省城及居留地に加ふるに珠江の對岸にある花地及河南を合す、其人口約九十萬とし、中支那及南支那第一の大都會にして内外貿易の盛なること上海に次げり、珠江沿岸に次で都邑の多きは崖門に注入する西江畔にして茲には甘竹、江門、新會等あり、江門は開港場にして之より新會、公益埠を經新甯及三夾海に至る鐵道通ず、珠江、西江間の三角洲地内には陳村、菱塘、沙灣、官山、龍江、勒樓、順德、香山等の都邑あり。

第六章　交　通

南船北馬の語は支那に於ける交通情況の地方によりて異なることを最も適切に現はせるものなり、北支那の地は平坦なる高原と廣漠たる平野とにして共に黃土を以て被はれ殆ど到る處車馬を通ずるを得べきも舟楫の便少なし、彼の黃河の大なるを以てするも水淺くして洲多く舟を利用する區域甚だ僅少なりとす、之に反して中支那に於ては揚子江及其支流は水深くして流靜なれば、到る處舟楫の利ありと雖も、高地は嶺峯崛起し平地は湖沼多く車馬を通ずる地多からざるなり、然れども其山地間を流るゝ河川多く、上流に到る迄能く小舟を通ずることを得べし。

一　陸　路

交通の中心地たる支那の首都は古來西安、河南、開封、杭州、南京、北京等に移動せり、從て首都を基點として各地に通ずる交通線路も亦幾變遷をなし、或は荒廢し或は新に開通したるものありと雖も、其主要交通線路に至りては甚だしき變化を示さず。

北京より各省城に通ずる主要交通線路を官馬大路又は北京官路と云ふ、官路に依りて首都と連絡を有する各省の省城より更に各地に通ずる重要なる交通線路を大路と云ふ、官路及大路は交通の幹枝をなし小路之に連絡す（第二十七版參照）

（一）官　路

北京より中支那及南支那を貫通する官路即ち官馬大路五あり、四川官路、雲南官路、桂林官路、廣東官路、福州官路是なり。

北京より是等官路の終點並に其途上の省城に至る里程を示さん。

	途上の省城		終點の省城	
四川官路	西安	二千六百五十支那里	成都	五千七百十支那里
雲南官路	開封	千五百四十支那里	雲南	八千二百支那里
	貴陽	七千六百四十支那里		
桂林官路	武昌	三千百五十五支那里	桂林	七千四百六十支那里
	長沙	四千五百五十支那里		
廣東官路	安慶	二千七百支那里	廣東	八千二百支那里
	南昌	四千八百五十支那里		
福州官路	南京	二千四百四十五支那里	福州	六千百三十三支那里
	杭州	四千二百支那里		

(イ)四川官路　は北京より四川省成都に通ずる官路にして汾河に沿ひて山西省を縦貫し潼關に出づ、之より渭水の溪谷を溯りて西安を過ぎ鳳翔に至り、更に南方秦嶺山脈及び大巴山脈を横斷し廣元に至りて巴蜀盆地に入るものにす、所謂秦棧道、蜀棧道は該兩山脈を通過する天險なり、(第三版甲及乙參照)本官路は古來西安、成都間の主要交通路にして皆石を敷けり、之を金牛道と稱す、秦棧道には海拔二千米内外の天沙嶺、鳳嶺、武關の三嶺あり、鳳及留壩は該三嶺間の主驛にして武關の南麓に位する沔は秦嶺、大巴二山脈の間を縦貫する漢江の溪谷にあり、蜀棧道には五丁嶺、七盤關朝天關の三嶺あり、嶺の北方は漢中盆地に急斜するも南方は巴蜀盆地に向ひ漸斜す、朝天

關、廣元を過ぎ、嘉陵江、涪江、沱江を貫き、更に岷江上流の成都平原に至るものこす、玄宗皇帝の詠ぜる「劍閣橫雲峻、鑾輿出狩回、翠屏千仞合、丹嶂五丁開」云々の如き又李白の「見說蠶叢路、崎嶇不易行、山從人面起、雲傍馬頭生、芳樹籠秦棧、春流遶蜀城」云々の如き共に此官路に於ける地形並に其行路難を描せるものなり、本官路は既に西暦千二百七十九年マルコ、ポーロの蒙古朝より初めて本國に歸朝するに際し取れる線路なり、同氏は成都より道を西方に取り雅州、打箭爐、巴塘を過ぎアッサムを經て印度ブラマプトラ河に出でたるが如し。

(ロ)雲南官路　は北京より河南、湖北、湖南の三省を貫きて雲南府に達するものにして、初め高原地帶の東麓を南方に縱走し黃河を渡る迄現今の京漢鐵道線と同一の線路を取るも許州に至りて道は分れて二となる、一は桂林官路にして京漢鐵道之に沿へるも、本官路は之より秦嶺山脈の東端嵩山及伏牛山の東麓を南行し南陽より白河の溪谷に沿ひ漢江溪谷の襄陽に至り、荊門を經て荊州に至る間大巴山脈、淮山脈の間の湖廣低地を橫斷し、荊州に於て揚子江を渡り、澧州に於て澧江を渡り、常德に至りて沅江の溪谷に出づ、北京より常德に至る間は常に高原地帶の東麓を縱走したるも常德よりは急に方向を南西方に轉じ高原地に入る、而して常德より瀘溪に至る間は古の武陵、桃源の地にして、沅江の本流に沿へる谷道を通じ瀘溪に至れば道は全く石灰岩の高原上を通じ所々に沅江の支流の穿てる峽谷を橫斷す、沅州、思州、鎭遠、平越等は該路上に於ける沅江の支流の峽谷に位し貴陽は烏江の溪谷にあり、貴陽より南西方中生層の高原地に沿ひ道は益々

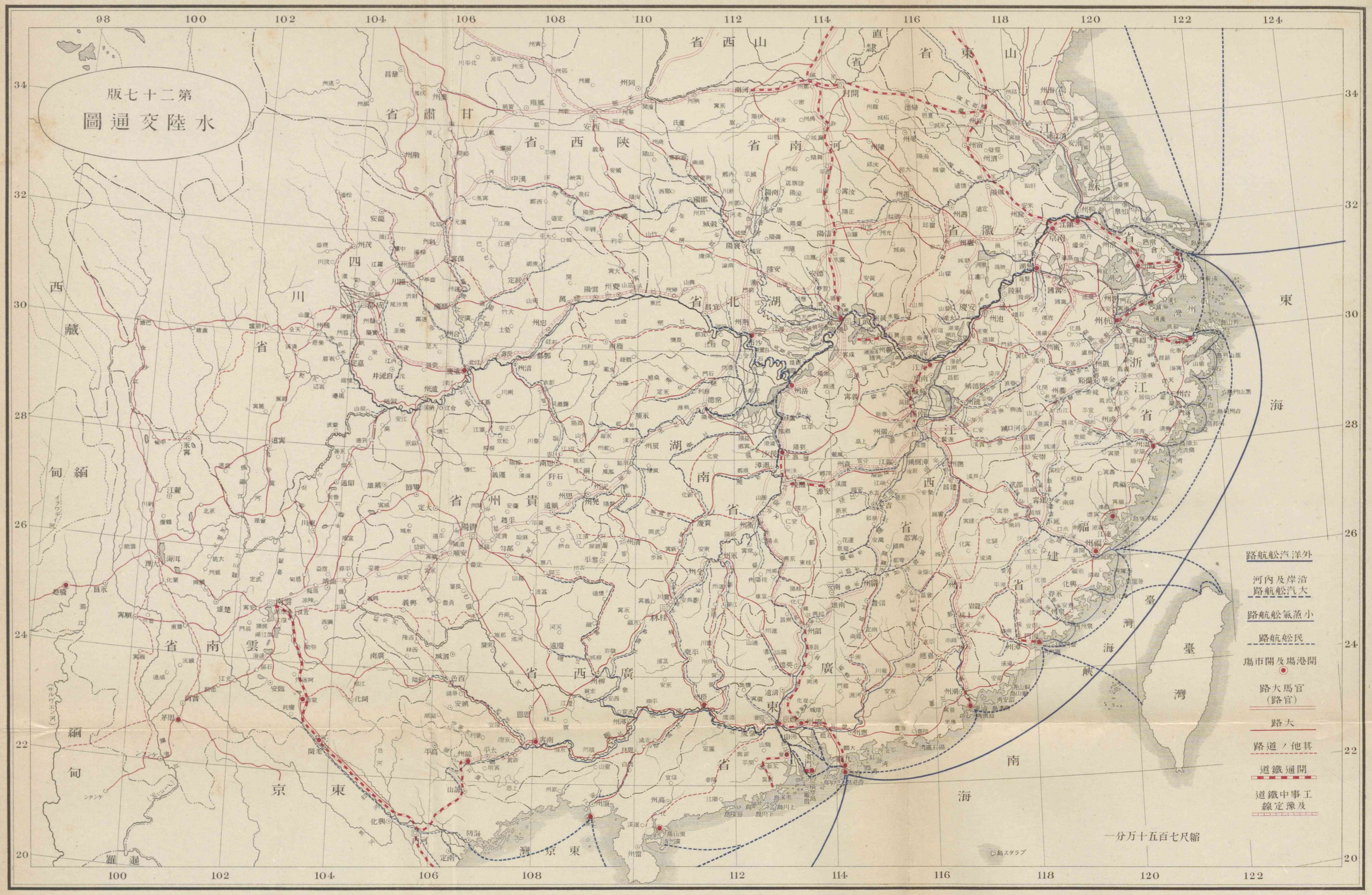
嶮路ニなり北盤江を貫く所急に深き渓谷に下るも再び西江の上流地たる平彝、曲靖の高原地に出で更に馬龍に至りて斷層谷に沿ひ遂に湖沼に富み風光秀美なる雲南府に達す。

(ハ)桂林官路　は北京より河南湖北、湖南を經廣西省桂林に至る官路にして、漢口に至る間は今の京漢鐵道ニ同じく黄河畔に近き許州に於て前記雲南官路ニ分岐す、本官路は信陽、應山間の武陽關に於て淮山脈を貫き之より湖廣低地に入り德安、孝感を過ぎ武漢の地に入る、而して漢口に於て揚子江を渡り武昌より咸寧蒲圻を過ぎて岳州に入り岳陽樓下の洞庭湖畔並に湘江に沿ひて南すれば長沙、湘潭に出で南岳山麓の衡州に達す、衡州は桂林官路ニ廣東に至る摺嶺路ニの分岐點にして摺嶺路は耒水に沿ひて摺嶺に出で、桂林官路は衡州より更に約湘江に沿ひ永州に至る迄赭色砂岩層の丘陵地を、永州よりは石灰岩中の窪地を通じ全州並に興安の湘江及灘水の分水灘を過ぎ石灰岩の奇勝を以て著名なる桂林の高原地に入る、蓋し武漢は古の三苗の故地にして唐虞以來屢々行はれたる遠征は蓋し本官路に據れるなるべく南方桂湘分水の工事は既に漢以前の設備に係れりニ云ふ、以て如何に重要なる交通線路たりしやを知るを得べく近くは長髪賊亂の嶺南より武漢を侵したるものも亦此線路に據れり。

(ニ)廣東官路　は北京より山東、安徽、江西諸省を過ぎ廣東省に通ずる官路なり、後に述ぶる福州官路ニは安徽省鳳陽の紅心に於て分る、之より淮山脈の東を斷てる斷層線に沿ひ皖南低地の廬州、舒城、桐城を過ぎ桐城に於て安慶に至る一路を分ち更に潛山、太湖、黄梅を經江を渡りて九江に

達し、之より廬山の東麓に沿ひ鄱陽湖畔を南行し南康より建昌に至りて南昌、撫州を通ずる杉關街道を分ち、本線は建昌より瑞州、臨江を經之より贛江の谷道に沿ひて吉安、萬安、贛州に至り、茲に汀州街道を分つも、本線は更に南西方章水に沿ひ南康を過ぎ南安と廣東省南雄との間に有名なる梅嶺を横斷し湞水に沿ひて韶州に入り、湖南より武水に沿へる騷嶺街道に合し之より北江の峽谷に沿ひ英德、清遠、三水を經廣東に至るものとす、梅嶺は所謂五嶺の最東に位する一嶺にして海拔約四百米とし南安、南雄間百二十支那里なり、嶺上に關あり、梅關と稱し(第二十八版乙參照)一連の兵を屯して其險要を守る、梅嶺の名は蓋し嶺上梅樹多きを以ての故なりとす、關上の扁額に嶺南第一關と記し其對聯には梅止行人渴、關防暴客來とせり、道は三間幅の敷石道にして改修常に行はれ支那に於て稀に見る所の良道とす、江西省に於ては赭色砂岩層より成れる窪地を縱走するを以て道路比較的平坦にして萬安より北方一輪車を通ず、本官路は古來廣東と揚子江流域の主要交通路たり、外國使節の多くは此道を取れるを以て外人は之を使節街道と稱す、即ち西曆千七百九十三年 Lord Amherst、同千八百十六年 Lord Macartney の北京、廣東間を往來せしは此線路なりとす。

(ホ)福州官路　は北京より山東、安徽、江蘇、浙江諸省を貫き福建省に通ずる官路にして、北京より天津、德州を過ぎ德州に於て濟南に至る一路を分てり、本線は德州より東阿に於て黃河を渡り兗州を過ぎ、利國に於て大運河を、徐州に於て黃河故道を、鳳陽に於て淮河を渡る、鳳陽の南方紅心に


第二十七版
水陸交通圖
外洋汽船航路
沿岸及內河
大汽船航路
小蒸氣船航路
民船航路
開港場及開市場
官馬大路
(官路)
大路
其他ノ道路
開通鐵道
工事中鐵道
及豫定線
縮尺七百五十万分一
山西省
直隸省
山東省
甘肅省
陝西省
河南省
安徽省
江蘇省
四川省
湖北省
湖南省
貴州省
江西省
浙江省
福建省
廣西省
廣東省
雲南省
西藏
緬甸
京東
臺灣
臺灣海峽
南海
東海
羅暹
島スタラプ

於て二路となり、一は前述廣東官路にして巢湖畔の廬州を過ぎて安徽省の首府安慶に達し、一は本線にして滁州を經南京の對岸浦口に於て揚子江を渡り南京より鎭江、常州、蘇州、嘉興を過ぎ杭州に至る、北京より此地に至る線路は殆ど平野又は湖沼の冲積地を通ぜる平坦の道路にして津浦、滬甯、杭滬の三鐵道は殆ど此線路に據れり、然るに杭州より福州に至る間は錢塘江、閩江兩河流の谷道を通ずるも概して平坦の地多からずとす、即ち杭州より錢塘江の左岸に沿ひ富陽、嚴州、蘭谿、衢州を過ぎ江山より楓嶺に於て仙霞嶺山脈を貫き、福建省浦城に至りて閩江の支流建溪に下り建陽、建甯を經延平に至りて閩江本流に出で茲に江西省南昌より來れる杉關街道と合し之より閩江に沿ひ福州に出づるものとす。

（二）大路

首都と各省城とを連絡する官路の外に各省城を中心として之より放射するもの、又は省城間を連ね、或は官路を連ぬる重要通路あり、之を大路と稱す、左に其主要なるものを揭げん。

（イ）秦嶺大路　秦嶺山脈を橫斷する道路に就きては西安より秦棧道、蜀棧道を通じて四川盆地に至れる四川官路のあることは既に述べたるが如し、此外該官路の西方に二大路あり、一は巴蜀盆地の廣元より嘉陵江に沿ひ北行して略陽、徽州を過ぎ、徽州より秦嶺山脈を橫斷して秦州に出で之より或は鳳翔を經て西安に、或は隴西を經て蘭州に至るものとす、一路は昭化より白水河に沿ひ北西方階州を過ぎて岷山の東方を通じ蘭州に至るものとす。

四川官路の東に三路あり、一は四川省巫山峽の巫山より大甯河に沿ひて北行し大甯、鎭平間に大巴山脈を越えて漢江に沿へる興安の窪地に下り、之より石泉、甯峽を經秦嶺山脈を越えて西安に下るものにす、二は襄陽に於て雲南官路より分れ北西方漢江に沿ひ老河口より其支流の丹江に入り淅川の窪地及商南を過ぎ商州に至り秦嶺を越え西安に至るものなり、三は雲南官路の南陽より北方南召に至りて伏牛山を通じ魯山、伊陽を過ぎて嵩山麓を經洛河の溪谷に下りて河南府に至るものにす。

(ロ)漢中大路　漢中は秦嶺、大巴二山脈間の溪谷に位し天嶮を控ゆる險要にして、西方沔に至れば四川官路に會して成都或は西安に通ずるのみならず漢中より漢江に沿ひ湖北省に通ずる水陸兩道あり、陸路は漢中、漢口間六百二十哩にして、之を水路及之に沿へる道路よりも近く、行程五百哩ありと云ふ、此大路は漢中より西鄉を經石泉及興安に於て漢江を渡り之より山路土匪の多き竹山、保康を經安陸に至りて漢江の溪谷を横切り湖廣低地の湖沼多き京山、孝感を過ぎて武漢の地に入るものなり。

(ハ)四川の大路　成都を中心とする大路は四川官路の外に五條あり、一は西藏大路にして成都より西行して邛州及雅州を過ぎ之より西方打箭爐、鐘城及巴塘に至るには南北走せる數條の山脈及其間を縱走する鴉礱江、金沙江の峽谷を横斷す其行路甚だ困難なりと云ふ、巴塘より北西行すれば西藏に出で、南行すれば大理、永昌、騰越を過ぎて英領緬甸の巴莫に出づべく古くはマルコ、

ボーロ、近くはチェシェニーの足跡を印せし所こす。

二は大理大路にして雅州に於て西藏大路より分れ南行して清溪、越雋の險路を過ぎ寧遠に至りて二路こなる、一は鴉礱江及金沙江を横切る道路にして鹽源、永北を過ぎて大理に至り、一は寧遠より安寧河に沿ひて鴉礱江、金沙江の合流地に下り、江を渡り白鹽井、米甸、賓川を過ぎて大理に入るものこす。

三は叙州大路にして成都より岷江に沿ひ眉州、嘉定を經て叙州に下り叙州に於て分れて二路こなる、一は揚子江に沿ひて納溪、瀘州、江津を過ぎて重慶に至るものにして、更に納溪に於て叙永を經て雲南及貴州に至る道路を分つ、一は本線にして叙州より南方均連を過ぎ永善に至りて巴蜀盆地を去り之より昭通、東川を經て雲南に至るものこす。

四は重慶大路なり、成都より東方簡に至り沱江に沿ひ資州及隆昌に下り之より沱江を去りて自流井の北方を過ぎ、榮昌、永川を經て重慶に至り、重慶に於て綦江を經て貴陽に達する綦江大路を分ち、本線は更に江に沿ひ忠州、萬縣に至る、是れ四川省中最も交通多きものにして道路は赭色砂岩層の丘陵を通ず多少の起伏あり。

五は宜昌大路にして成都より涪江の潼川、嘉陵江の順慶に至り之より渠、梁山を經て萬縣に達し、之より揚子江に沿ひ雲陽夔州を過ぎて四川盆地を辭し瞿唐峽、巫山峽、宜昌峽等三峽の險路を通じて宜昌に出づるものこす。

(ニ)雲南の大路　雲南府を中心とする大路は貴陽を經て北京に通ずる雲南官路の外に七條あり、一は瀘州大路にして雲南官路の曲靖より貴州省の威寧、畢節を經四川省叙永に入る最近雲南討袁軍と北軍との對抗地たる納溪を經瀘州に達するものとす。

二は叙州大路即ち成都に至る大路にして雲南府より北行し東川に於て西方會理に至れる一路を分つも、本路は昭通、大關を過ぎて巴蜀盆地に入り叙州に至る。

三は大理大路にして西方緑豐、武定、楚雄、鎭南を經、青龍海、洱海の湖畔を過ぎて大理に達す。

四は曼達來大路にして雲南府より滇池湖畔に沿ひ南西行し富民、安寧、易門を過ぎ景東、順寧間に於て漾公河の上流を渡り順寧に於て二路に分るも、共に瀞江を其上下に於て貫き緬甸のシャンステートに入り伊拉瓦弟河(イラワヂ)の溪谷曼達來及阿瓦に至る。

五は思茅大路にして雲南府より滇池湖の東に沿ひ瀲江に至り、之より滇池、撫山兩湖の間を南西行し通海、元江、普洱を經て思茅に至り、更に印度支那の老撾に通ず、而して通海に於ては蒙自に至る道路を分てり。

六は蒙自大路にして瀲江、阿迷、蒙自を經、蒙自に於て東方開化、廣南を經て廣西省に至る道路を分ち本路は蒙自より蠻耗老開を過ぎ之より東京に入り紅河に沿ひ河内に至るものとす。

七は百色大路にして雲南府より宜良、路南、彌勒、邱北、廣南を過ぎて剝隘に於て廣西省に入り鬱江の上流西洋江に沿ひて百色を過ぎ南寧に至るものとす。

(ホ)貴州の大路　貴陽を中心とする大路は雲南官路の外に四條あり。

一は重慶大路にして貴陽より北行し開遵義、桐梓を過ぎ四川省に入りては綦江を過ぎ重慶に至る。

二は大定大路にして雲南官路の安順より平遠を過ぎ大定に至り畢節に於て叙永大路に合す。

三は那地大路にして貴州より南方定番、長香、長塞を過ぎ廣西省那地に入り西江本流に出づるものとす。

四は都匀大路にして貴州より南東方に向ひ龍里を過ぎて二路に分れ、一は都匀に至り之より都江、古州を經て桂林又は柳州に通じ、一は獨山、荔波を過ぎ廣西省慶遠及び柳州に至るものなり。

(ヘ)廣西の大路　廣西省には交通の中心二あり、桂林及南甯とす、桂林は中支那と廣東との關係深く、南甯は廣東、雲南、安南との關係深しとす。

(い)南甯を中心とする大路四あり、一は百色大路にして西洋江に沿ひ隆思、百色を通じ剝隘に於て雲南に入るものなり、二は龍州大路にして麗江に沿ひ大平、龍州を過ぎて東京に入り河内に達するものなり、三は南甯より鬱江に沿ひ永淳、貴を過ぎ潯州に至る、四は慶遠大路にして思恩を經、一は慶遠に至り、一は那地又は柳州に通ず。

(ろ)桂林を中心とする大路は桂林官路の外に三條あり、一は新甯大路にして靈川縣大溶江に於て桂林官路より分れ六洞水に沿ひ北行し西延に於て一嶺を越ゆ、嶺の北麓は新甯にして資江上

流に位す、大路は新甯に於て二となり、一は之より夫夷水に沿ひ寶慶に通じ、一は城歩を經て沅江の溪谷に通じ沅州に達すべし。

二は柳州大路にして桂林より南西方永福を過ぎ江に沿ひて柳州に至り之より或は慶遠に或は潯州に至るものとす。

三は梧州大路にして桂林より桂江に沿ひ平樂、昭平を經梧州に、之より西江に沿ひ三水及廣東に至るのみならず、岐路は梧州より藤、容、欝林を過ぎ東京灣の廉州、欽州に至る。

(ト)廣東の大路　廣東を中心とする大路は廣東官路の外二條あり、一は北江に沿ひ三水、清遠、英德を過ぎ英德に於て連江に沿ひ湖南省江華に至れる一路を分ち本線は英德より韶州に至り之より梅關を通じて江西省に入ること既に述べたるが如し、韶州に於て尚二路を分つ、一は湞嶺大路にして韶州より武水に沿ひ樂昌を過ぎ湖南省宜章の北方に於て騎嶺を越え郴州を過ぎて耒水に下り、永興、耒陽を過ぎ衡州に於て桂林官路に合するものなり、一は韶州より北方仁化を過ぎ臘嶺を越えて湖南省桂陽に至り二路となり一は興甯を過ぎて耒水に下り。一は桂東、酆間の峻嶺たる米嶺を越えて酆、茶陵、攸を經て醴陵に至る。

二は梧州大路にして西江に沿ひ三水、肇慶、封川を經て廣西省に入る、本大路の分岐路中肇慶又は德慶より南西行するものは高州を經て雷州半島に至る、而して三水より綏江を溯り、封川より賀江を溯るものは共に賀に於て相會し富川を經て江華に至り茲に北江より連山を經由し來れ

關門

（甲）廣東省仁化縣臘嶺の關門

（乙）廣東省梅嶺關

るものと會す。

三は惠州大路にして廣東より東方に向ひ東江に沿ひ石龍、博羅を經て惠州に至り之より二路となる、一は本路にして河源、龍川を過ぎ興甯、嘉應を經て韓江の溪谷大埔に至るものなり、一は惠州より東方海豐陸豐を通過する海岸路にして潮州及汕頭に至り潮州より韓江に沿ひ福建省汀州に至る大路に連なる、此外分岐路には石龍より南東方に分れ香港の對岸九龍に至るもの、河源より分れて連平を通じ又龍川より分れ和平を通じて江西省龍南に至り更に信豐を過ぎて贛州に至るものあり。

以上述ぶる所によりて明かなるが如く五嶺山地の交通線路中主なるもの五あり、故に之を五嶺と稱せるなり、梅嶺は其東嶺即第一嶺にして廣東官路之を通じ、揩嶺又は騎田嶺は即其第二嶺にして韶州、衡州間の摺嶺路之を過ぐ、桂花嶺は第三嶺にして連州、臨武間の道路なり、第四嶺は瀟江より賀江に至る道路とし、桂湘分水地は第五嶺にして桂林官路之を通ずるものとす。

(チ)福建、浙江二省の大路　福建、浙江二省に亙れる仙霞嶺山脈を横斷する交通線は六條あり、一は汀州大路にして江西省贛州より貢水に沿ひ會昌、瑞金を經九里嶺を越へて福建省汀州に出づるものにして汀州の南方三洲に於て二路となり、一は韓江に沿ひ廣東の潮州に至るもの、一は山路龍岩、南靖を經漳州に出づるものとす。

二は南昌、福州間の杉關大路にして南昌より盱江の撫州、建昌を經、杉關を越えて邵武に至り閩

江に沿ひ順昌、延平を經て福州に出づ。

三は福州官路の建陽より分れ崇安の北方に於て嶺を越ゑ鉛山、廣信を經て浙江省衢州に至る。

四は福州官路にして前に述べたる所の如し。

五は浙江省衢州より蘭柯山の東を過ぎ侵雲嶺を越ゑ遂昌、松陽、處州を過ぎ温州に至る。

六は天臺大路にして紹興より嵊、新昌を經天臺山の西を越ゑて臺州に至る。

福建、浙江二省には以上横斷線路の外に尚兩省を縱貫する一條の海岸線路あり、汕頭より詔安、漳浦を經て漳州に入り同安、泉州、興化、福清を經て福州に至り更に寧德、福寧、平陽を經て温州に入り之より黄巖、臺州、寧海、奉化を經て寧波に至る、而して寧波に於ては杭州より紹興を經由する海岸線に會す、前述横斷線路と海岸線路とを比較するに横斷線路は五六百米の山嶺を通過するを以て其附近に於ては急傾斜地を通ずるも嶺を去れば谷道となり谷道は揚子江の斜面に於ては濶く海岸の斜面には狹し、而して横斷線路中江西、福建兩省間のものにありては汀州大路比較的緩傾斜地を通じ其他のものは急峻なる傾斜地を通ず。

海岸線路に於ける道路の狀況は前述横斷線路の如く急峻なる山岳を經過せざれども閩浙海岸に於ける彎入、斗出の甚だしき地方を通ずるを以て土地の低き割合に海中に斗出する無數の山岐を貫き起伏甚だ頻繁なり、然りと雖も該海岸線路は比較的其修理洽く沿岸航路と共に閩浙の交通に資する所甚だ大なりとす、マルコ、ポーロの千二百九十二年再度の歸國に際し彼の取り

たる行路は此海岸線路にして彼は杭州に於て福州官路より分れて道を海岸に取り福州及其當時のザイタムを經て泉州に至れりと云ふ。

(リ)湖南の大路　長沙を中心とする大路は桂林官路の外六條あり、一は常德大路にして長沙の對岸岳麓山下より北西方の甯鄉、益陽龍陽を通じ澧水、資江、沅江を渡り常德に於て雲南官路に會するものなり。

二は寶慶大路にして長沙より東西方湘鄉、寶慶、綏甯、靖州、黔陽を經沅州に於て雲南大路に會するものにして石灰岩の高原地を通ず。

三は摺嶺大路にして衡州に於て桂林官路より分れ摺嶺を越えて廣東省韶州に至るものにして、既に前に述べたり。

四は茶陵大路にして長沙より南東方湘州、醴陵、攸、茶陵、酃を經て之より峻嶮なる山路に據り桂東方面に出づるものとす。

五は袁州大路にして醴陵より東方萍鄉、袁江を經、袁江に沿ひ臨江に於て廣東官路に會するものにして萍鄉、袁州間に一嶺あるも低く袁州大路全部を通じて平坦の地多く交通又甚だ頻繁にして一輪車を通ず。

六は瀏陽大路にして長沙より東方瀏陽及江西省義甯を經九宮山を越して湖北省通山及咸甯を過ぎ武昌に至るものとす。

(ヌ)江西の大路　江西省には交通の中心二あり、南昌と贛州となり。

(い)南昌を中心とするものは廣東官路の外六條あり、但し廣東官路は建昌より南昌の西方を迂回し瑞州を經臨江に通ずるものとす。

一は義寧大路にして奉新より山路、靖安、義寧を經湖北省通山及咸寧に至る。

二は袁州大路にして臨江より袁州に沿ひ新喻、袁州を經て湖南省萍鄉に通ずるものとす。

三は杉關大路にして長沙より撫州、建昌を經杉關を越えて福建に入るものとす。

四は廣信大路にして南昌より東方錦江の溪谷に沿ひ余干、安仁、興安を經て廣信に至り更に玉山を經て浙江省常山に至る。

五は饒州大路にして南昌より鄱陽湖畔を東方に向ひ瑞洪、饒州を過ぎ昌河に沿ひ景德鎭、浮梁を經、安徽省祁門に至る。

六は彭澤大路にして九江より揚子江の右岸を東行し湖口を過ぎて彭澤に至り更に安徽省東流及安慶に至るものとす。

(ろ)贛州を中心とするものは官路の外二條あり、但し官路は吉安より贛州に至り贛州より梅嶺に至る廣東官路とす、一は汀州大路にして贛州より貢水に沿ひ雩都、瑞金を過ぎ汀州に至るもの、二は贛州より貢水の支流桃江に沿ひ信豐、龍南を過ぎ龍南より一は廣東省連平に一は同省龍門に通ず。

(ル)安徽の大路　安徽省の交通中心二あり一は廬州にして一は徽州なり。

(い)廬州を中心とする皖北の交通線路三あり、一は廣東官路にして北東方定遠を經て紅心に於て福州官路に合し南方桐城を經て安慶に至るのみならず潛山、太湖、黃梅を經九江に通ず。

二は六安大路にして廬州より西方六安及河南省光州を經信陽州に至るものにして淮山脈の北麓を走る、是れ浦信鐵道の豫定線路なり、蓋し本大路は雜山、信陽州に於て桂林官路を貫くのみならず六安に於て二分路を分ち一は北方潁州に向ひ一は南方鶴山を經淮山脈を貫きて英山及黃州に至るものなり。

三は潁州大路にして北西方正陽關を通じて潁州に至り更に陳州及開封に達す。

(ろ)徽州を中心とする大路三あり、一は祁門大路にして西方徽州窪地に沿ひ休甯を經て祁門に至り之より二路となり一は黃山々脈を越して江畔の東流に至り、一は昌河に沿ひ景德鎭を經て饒州に出づ、二は甯國大路にして北東方績溪を經黃山の東を過ぎ甯國縣甯國府を貫き太平に至る。

三は徽州より新安江に沿ひ浙江省の嚴州に出づるものとす。

安徽省には以上兩中心地の交通線路の外に揚子江に沿へる一大路あり、安慶の對岸より南西方は東流、彭澤を過ぎて江西省湖口に至り北東方は池州大通鎭、銅陵、蕪湖、太平を過ぎ南京に入る。

以上述べ來りたる多くの交通線路の外江蘇省には南京より北は鳳陽に、東は鎭江に亙れる福

州官路と南京より南東方溧陽、安吉を經て杭州に至る一線とあり、湖北省には雲南官路、桂林官路と漢口より安陸を通ずる漢中大路、咸甯より通山を通じ南昌又は長沙に通ずる大路とあり、黄州より北方麻城、黄安を經河南省の信陽、汝甯を通じ南東方蘄州、武穴を通じ以て桂林、廣東二官路間を聯絡するものあり。

(三)　陸路の設備

道路の幅は官路に於て三間、大路に於ては二間、其他には一間内外あるも其幅員は概して縮小し殊に耕地の中を通過するときは兩側より甚だしく削り取らるゝを以て、官路にても時に其幅一間に充たざることあり又却て坂路に於て甚だしく廣きことあり。

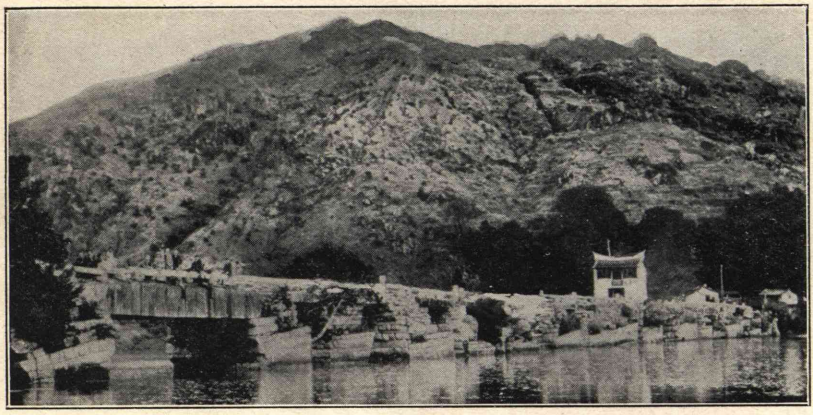
官路及大路に於ては概して石灰岩、粘板岩又は赭色砂岩、花崗岩、石英粗面岩等其所に從ひて比較的に其附近に得易き石材の板石を以て道路に敷き詰め、或は道路の中央部にのみ板石を連ね以て道路の破損を防ぎ通行者の便を計れり、又小路にありては板石の代りに巨礫を用ひて道路に敷設するを以て其破損を防ぐに妙なるも通行者の歩行には甚しく障害となる。

道路の修理に就ては省、府、縣に土木費の設け無く其の修理は道路沿線の土民の捐金に據りて行はるゝを常とす、故に古來改修道路碑の路傍到る處に設立せらるゝを見るべし。

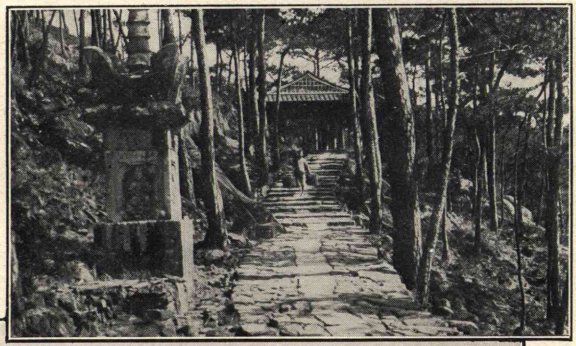
道路の設備は獨り敷石道の修築に止らず中支那及南支那には亭と橋梁との建設も亦道路設備の一半を占む、亭は普通石造にして通行者休憩の便に供す、蓋し樹木の甚だ少なき支那の道路

第二十九版

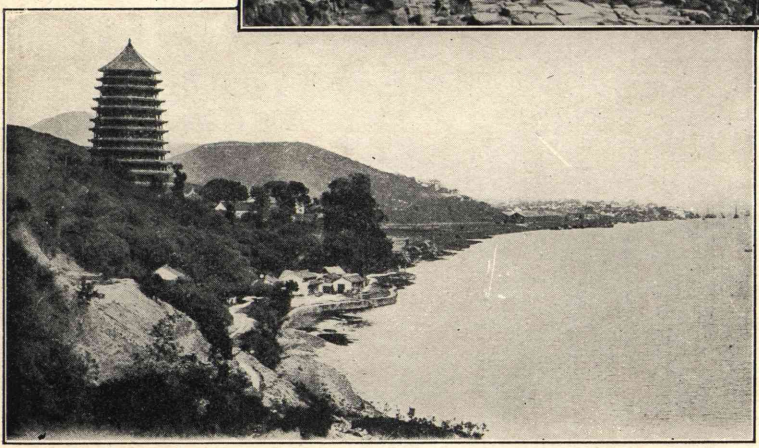
路上の設備



（甲）橋畔の亭



（乙）敷石道及亭



（丙）城外に於ける大路畔の村落及寶塔

には炎天砂石を燒くの時、烈風砂を席卷するの時所々に旅行者の休憩所を必要とし其必要なる所には或は捐金に依り或は一箇人の慈善事業として亭を設立す、(第二十九版甲及乙參照)而して其場所は二三支那里の間隔に設けらる、五里亭、七里亭と稱するは蓋し縣城を距る五支那里、七支那里にあるの意なりとす、亭には所々に茶菓を鬻ぎ草鞋を賣るを以て旅行者の慰安休息所として必要なるのみならず、道路上の一種の目標となるを以て縣城より縣城に至る一般旅行者は一亭より一亭に之を辿りて旅行するとき、遂に寶塔を遠望するに至り初めて身の縣城附近に達せしを知るべし、寶塔は五重、七重の塔にして縣城又は府城を距る五里乃至十里の山上に設けらるるを以て最も良く旅行者の目標となるものにして亭と共に旅行者の極めて重寶に感ずるものとす(第二十九版丙參照)

橋梁は中支那、南支那に於ける陸上の交通上最も必要なり、蓋し河流は概して上流には山地を流れ其溪谷深く刻まれ、下流には平地を流れ溪谷甚だ廣く且つ共に其水量多きを以て北支那に見る如き徒涉に便なる河流甚だ稀なり、中支那の揚子江本流及支流、湘江、贛江、南支那の錢塘江、西江、東江、北江の如き大流に於ては到底橋梁を架設せんとするも策の施すべきなきを以て渡船を設くるも、此の如き大流を除けば到る處に橋梁の設けあり。

橋梁の種類は舟橋、石橋、土橋にして木橋は甚だ稀なり。

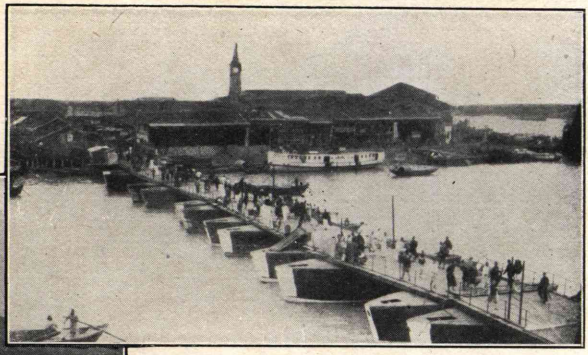
舟橋即ち舟梁は船を駢列し其上に木板を架せるものにして我阿波德島に於て吉野川に架せ

る舟橋と同様の形なり、甯波に於て甬江に架せるもの、(第三十版甲參照)湖南省道州に於て瀟江に架せる橋の如き其著しきものなり、舟の通行に際しては其一部を決潰し開閉をなす設備あり、又舟橋は一種の浮梁なるを以て河水面の高低に從ひ上下し得るのみならず、河岸との間には石橋の如く階段を有せざるを以て車馬交通の障害たらず。

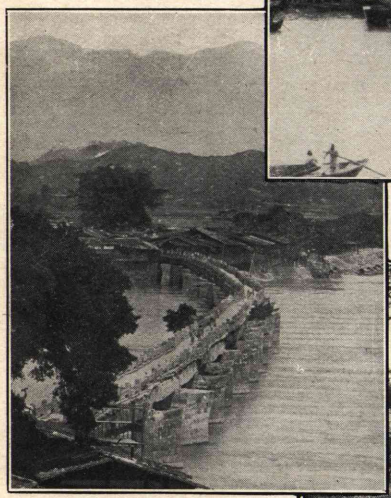
石橋は支那に於ては磽にして或は石梁と稱す、元來石を穿ちて水を通ぜしや又舟橋を摸造せしや明かならざれども多くの石橋を見るに其橋臺は流に從ひ兩側面に向ひ凸出し其形恰も浮橋を見るに異ならず(第三十版乙參照)或は橋臺は舟形の代りに龜の形をなし石龜相駢列して橋を支持するものあり、橋板は平坦なれども橋板より道路に移る所は普通は階段をなすもの多く又橋下に舟を通ずる必要上より橋板をなるべく高くするを要するものとす、又橋臺と橋臺との間は穹窿狀をなすものと(第三十版丙參照)然らざるものとあり、中支那には穹窿狀のもの多く南支那には然らざるもの多し、石橋には無蓋のものと有蓋のものとあり、有蓋のものは前述の亭と同樣に休憩所を有し商戸軒を駢べて其上に商店舖を開けるものあり(第三十版丁參照)福建の河最も橋梁に富み泉州の洛陽橋、福州の萬壽橋、洪山橋、漳州の江東橋等は石橋中最も著名にして、此外沿岸地方の河口には概して長橋多し、就中洛陽橋は宋朝の萬安渡に架設せりと云ひ興味深き傳說を有す其長さ三千六百尺幅十五尺にして全部花崗岩の長材を用ふ、沿岸地方の石橋は洛陽橋と同じく殆ど花崗岩の良材を用ふるものとす。

第三十版

梁橋

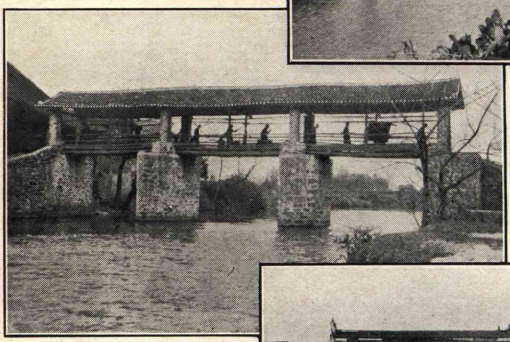


（甲）浙江省甯波の浮橋（甬江の新江橋）

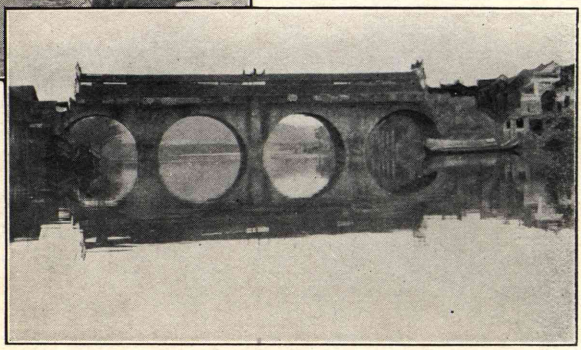


（乙）福建省福州の石橋（閩江の洪山橋）

（丙）浙江省溫州の穹窿狀の石橋



（丁）湖南省永興縣接鳳渡の橋（湖屯水）



（戊）湖南省衡陽縣洪羅廟の橋（蒸水）

中支那に於ては花崗岩の大材に乏しきを以て石灰岩を用ふるもの多く又赭色砂岩を使用するもの少なしこせず。

土橋及木橋は小河に架設せらるゝに過ぎず、特に記述すべきものなし。

(四) 陸路の交通機關

陸路の交通は徒歩、轎行最も多く、騎馬、一輪車之れに次ぎ、都會地には人力車、馬車、荷物車あり。

中支那及南支那には坂路多く而して敷石特に礫を敷ける所甚だ多きを以て車馬の通行に障害少なからず、且つ橋梁は概して階段を附して高く架設せるを以て舟行には便なれごも車行を許さず、故に徒歩を以て最も普通の旅行法こするも徒歩を好まざるもの又は中流以上の人士にありては轎に據らざるべからず(第三十一版甲參照)

轎は其種類甚だ多く其最も簡單なるものに至りては普通の屋根を有する椅子樣のものに二本の竹竿を貫ぬけるものにして二人、三人、四人にて擔ぐ等種々あり、之を擔ふものを轎夫こ稱し一種の階級をなし湖南轎夫最も熟練にして福建轎夫最も貧弱なり、彼等は交通機關の不備なる支那に於ては最も必要なる勞働者にして從て比較的收入多きを以て、彼等の多くは阿片の喫煙者こして顏色蒼然たるも尙日々裕に七八十支那里を旅行す、而して各縣城並に主なる鎭、市、村落に於ては何れも轎夫を雇ふここを得べし。

騎馬は普通の道路に於ては通ぜざる所なきも多くは自家々族用こして乘馬を飼養するのみ

にして之を旅行者用に供給し得る地方は甚だ少なく、僅に之を得るは湖北省又は江蘇、浙江、安徽の平原地に過ぎず、但し錢塘江流域には概して乘馬、駄馬共に稍多く其上流の徽州、休寧地方の山地に於ても駄馬を見たり、雲南省蒙自、騰越地方には駄馬の使用少なからずと聞けり、而して乘馬及駄馬に使用するは驢馬、騾馬及甚だ小さき支那馬なりとす。

車は都會地外には一輪車あるのみ、一輪車は其構造甚だ簡單にして之を牽くにあらずして推すを以て一に推車と稱し（第三十一版乙參照）坂路並に敷石道を通行し得るにより人車又は荷物車として使用す。

一輪車を通ずる區域は揚子江本流の中流及下流即ち湖北省宜昌より下流地域にして湖北、江西、安徽、江蘇、浙江とし、揚子江の支流に於ては江西省に最も多く其形亦大なるものあり之を江西推車と稱す、湖南省は江西省に次で推車多きも衡州より上流地には之を見ず、閩浙及兩廣の如き沿岸諸省は山岳地多きを以て推車を見ず。

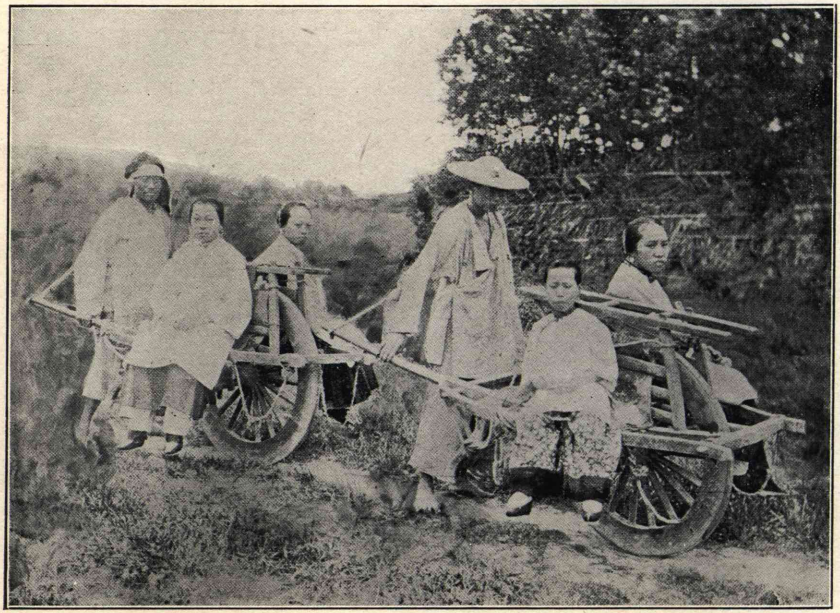
省城及開港場の如き都會地には人力車、荷車あり近時縣城所在地には人力車の通ずるもの漸く多く、開港場には此外馬車、自働車の通ずるもの少なしとせず、電車は上海及香港の市街に通ずるのみ。

二　鐵　道

第三十一版

乘物

（甲）轎



（乙）一輪車（推車子）

支那の既成鐵道は北支那に最も多くして中支那之に次ぎ南支那に少なしこす、之に反して架設中又は豫定線に屬するものは中支那に甚だ多し。

鐵道は其系統上幹線こ支線こに分つ、幹線には南北幹線こ東西幹線こあり。

南北幹線中京漢、津浦二線は中支那より北支那を縱貫して既に開通し、粵漢、江西二線は中支那より南支那を縱貫せんこするものにして一部開通せるに過ぎず、東西の幹線は滬甯、浦信、川漢の三線の連絡によりて成立するものなれごも開通せるは滬甯の一線あるのみ。

支線には中支那に於て株萍、大冶、滬杭甬の諸線あり、株萍、大冶、滬甯は開通し、滬杭甬は其一部開通す、南支那には廣三、廣九、新會、汕潮、厦漳の諸線あり皆開通するも延長甚だ短かし。

(一) 南北幹線

(イ)京漢鐵道　は元こ盧漢鐵道こ稱し、千八百九十七年の測量に係り千八百九十九年三月白耳義借欵によりて起工し千九百四年末大鐵橋の外全部竣成し翌年黃河大鐵橋も亦竣成し、千九百八年支那政府其利權を回收し交通部の所管に移れり。

本鐵道は北京前門より漢口玉帶門に至る、其延長七百五十三、七哩、其通過地は前に述べたる桂林官路に沿へり、即ち山西高原の東麓に沿ひ直隸平野を南走し保定、正定、衞德を過ぎ滎澤に於て黃河を渡り、之より秦嶺山脈の東麓を通じ信陽廣水間に於て淮山脈を橫斷し桂林孝感に至り之より漢口の江岸に達す、信陽以北は黃土の臺地を、廣水以南は赭色砂岩層又は赭土の臺地又は冲

積層地を通ず、信陽廣水間は花崗片麻岩より成れる淮山脈にして急傾斜地を通ず、殊に河南の新店、湖北の東篁店間には淮山脈の分水界を貫ける隧道あり、其長さ千百十五尺、海拔五百七十五呎、にして南北朝時代の史蹟たる武勝關、武陽關、平靖關の下を通ず、而して新店の西方龍跑山、東方五哩の鷄公山(海拔千九百八十呎)は江西省廬山と共に中支那に於ける避暑地として著名の地なり、本線路中の鐵橋中、黄河鐵橋の長さ九千九百三十八呎即ち約一萬呎にして東洋第一と稱す、此外千呎以上のもの六、五百呎以上のもの十七あり。

京漢鐵道と西方の高原地との間には運炭鐵道としての支線多し、本鐵道に屬するものに良鄉の陀里線(九哩)瑠璃河の房山線(十二哩)あり、他線に屬するものには保定の保定線(一哩)、和尙橋の陘山線(二十四哩)、鄲鄲の武定線(二十哩)あり、而して交叉線には北京の京張線、京奉線、正定の正太線、新鄉の道清線、鄭州の海蘭線、信陽の浦信線、廣水又は漢口の川漢線とし、漢口に於ては武昌の粵漢線に連絡するものとす。

京漢鐵道の延長七百五十三、三哩にして其中湖北省を通ずるは百九哩とす、漢口、北京間廣軌單線にして其通行時間は一週一回の最大急行に於て二十八時間十五分、普通列車に於て約三日間とす。

(ロ)津浦鐵道　は元と津鎭鐵道と稱し天津、鎭江間に布設する目的なりしも、其後變改して南京の對岸浦口と天津とを連絡したり、運河畔の利國驛を境とし北段は獨逸に依り、南段は英國に依

りて架設せらる、千九百八年利權の回收に據りて國有となり交通部の所管に入れり、本鐵道の北段は千九百八年八月起工し千九百十二年六月開通し、南段は千九百九年一月起工し千九百十二年十一月黃河鐵橋起工と共に全線の開通を見るに至れり、本鐵道の延長は天津中央停車場(總站)浦口間六百二十八・四哩にして其中北段の天津、利國間三百九十五・一三哩、南段の利國、浦口間二百三十三・二七哩とす、其通過地は天津より福州官路に沿ひ直隸平野を南走し德州を過ぎ官路より分れ黃河を渡りて濟南に入り、之より泰山の山麓を過ぎ兗州に至りて元の官路に出で之より雖、滕を經利國に於て大運河を橫斷す、濟南、滕間は山東地壘の西側を過ぎ西方は平地なり、利國より徐州、宿州を經て鳳陽に至る間は淮河の氾濫地にして徐州に於て黃河故道を、鳳陽に於て淮河本流を渡る、鳳陽、浦口間は官路の東方を通じ恰も淮山脈の東端を橫斷するの地なりと雖も淮山脈の地勢既に陵夷して僅に臺地を通過するに過ぎず、故に津浦鐵道は京漢鐵道の如く山岳地を橫斷するの困難なしと雖も却て黃河及淮河の氾濫地に屬する卑濕の低地を通ずるを以て橋梁を架設するの困難多しとす、即ち黃河鐵橋の全長約四千呎にして此外北段に五百呎以上のもの十、南段には大なるは千呎內外にして三、小なるは甚だしく多數に上ると云ふ。

本鐵道の支線にも運炭鐵道多し、本鐵道に屬するものには兗州の濟寧線(十九、七哩)臨城の棗莊線(十九、一一哩)あり、他線に屬するものには天津の京奉線濟南の山東線浦口の浦信線とし浦口に於ては對岸南京の滬寧鐵道と連絡す。

天津浦口間廣軌單線にして停車場其他の設備は南北兩段に於て甚だしく異れり、天津に於ける昇降は京奉線の天津東站を便利とし、東站總站間二、七哩あり、本線は京奉線と連絡し北京より最大急行列車を出すのみならず滬寧線とは揚子江の小蒸氣船にて連絡す、一週一回の最大急行列車は二十五時間半とし、一週一回郵便車及一日一回普通列車を發す。

（ハ）南潯鐵道及江西豫定線　南潯鐵道は江西鐵路公司の布設に係り我邦の借款に據る所多し、千九百六年十二月起工し千九百十一年には九江德安間を、千九百十五年二月南昌の對岸沙井を距る約二哩の地に至る間開通し殆ど全通を見るに至れり。

本線の延長は九江南昌間七十八、六七哩にして其通過地は德安、建昌、楊柳鎭等なり、九江の西端より沙河、馬廻嶺を經て廬山の西麓を南西走し德安、建昌を過ぎ楊柳鎭の南方三哩に於て修水を渡るも鐵橋未だ落成せず、本鐵道の線路には山岳及丘陵甚だ少なく僅に十米乃至二十米の赭色砂岩層の臺地あるのみ、而して本線は廣軌單線に屬し修水鐵橋開通後は全線の通行に約三四時間を要し沙井、南昌間は小蒸氣船の連絡に據る。

南潯鐵道は要するに江西鐵道の一部に過ぎず、而して江西鐵道の豫定線と云ふものは未だ確定せざれども、比較線三あり、一は南昌より旰江に沿ひ撫州、建昌を經更に南豐、廣昌、石城を經て福建省汀州に至るもの、二は贛江に沿ひて贛州に至り之より貢水に沿ひ瑞金より大隘嶺を貫きて汀州に至るものにして、前線と共に厦門又は汕頭に達せんとす、三は贛州より章水に沿ひ梅嶺を

横斷し廣東省韶州に出でゝ粵漢鐵道に會せんとするものなり。

江西鐵道は南昌に於て甯湘豫定線と交叉すべく且つ九江の對岸より京漢線との連絡成れる時は大に有望なる線路たるに至らん。

(二)粵漢鐵道

粵漢鐵道は湖北省武昌より湖南廣東二省を經て廣州に出でんとするものなり、千八百九十八年四月の起案にして米國借欵により翌年全線の測量を終了す、千九百二年其支線廣東三水即ち廣三線を起工し千九百四年開通し本線も亦起工する所ありたり、其後白耳義國公司の手に移らんとするに至りて利權回收論盛となり千九百五年香港借欵によりて之を回收し、湖北省は官辨に據りて其七分の一を負擔し湖南は官商合辨、廣東省は商辨に據り各其七分の三を負擔するの制を設けしも出資意の如くならざるを以て再び千九百十一年五月英、米、獨、佛の四國借欵に據るに決し粵漢本線と川漢線とを四段に分ち廣東、宜章間は廣東鐵路公司に據り其他は四國借欵に據る、武昌、宜章間に英人の廣水、宜昌間に獨逸人の、宜昌、夔州線に米人の技師を置き其工事を急けるも革命亂に遭遇し廣東省の百十二哩、湖南省の三十四哩間開通を見たるのみ。

本鐵道は廣東、武昌間七百五十哩にして其通過地は武昌より衡州に至る間は桂林官路に沿ひ衡州、宜章、韶州間は騫嶺路に從ひ、韶州、廣東間は廣東官路に由れり、即ち本鐵道の北端基點は武昌の鮎魚套に起り湖沼の間に起伏する卑陵及臺地を貫きて南行し咸甯に至りて西に折れて蒲圻、

桃林を經て岳州に至る、之より南方に向ひ所謂中大路即ち官路を取りて長沙に至る間は咸甯以北と同樣卑陵又は臺地なり、武昌長沙間二百十四哩にして千九百十三年其測量を終了し武昌、岳州間百四十三哩の工事に着手す、其中武昌咸甯間は將に客車の運轉を見んとし咸甯岳州間は軌條の敷設中にして岳州長沙間は其敷設を終へんとし明年三月頃武昌長沙間の開通を見んと云ふ。

長沙宜章間は長沙より湘江の右岸に沿ひ易家灣洙州を經滦口に於て滦江を衡山の對岸に於て洣水を、衡州の東方に於て耒水を渡る、長沙より玆に至る間は赭土の臺地又は赭色砂岩層の丘陵地を通ずるも耒陽より郴州を經宜章に至る間は崎嶇たる山岳地なり、長沙、洙州、滦口間約三十哩の鐵道竣成す、現に長沙洙州間運轉し洙州に於て洙萍鐵道に連絡す。

宜章廣東間の中宜章樂昌間には摺嶺の難嶮あり粵漢鐵道全線中最も難工事にして大隧道の開鑿を要す、樂昌、韶州間は武水の溪谷に沿ひ韶州、英德及清遠の東方黃口間は北江の大流に沿へるも峽谷にして平地多からず、黃口より北江を離れて軍田、新街、江村を經て廣東の西郊黃沙に達す、其間は臺地又は平地なり、本線路は廣東鐵路公司の經營する所にして千九百五年に起工し千九百十一年に至る間僅に五十哩を架設せるのみ、其後烏石を經て韶州に至る約二十三哩間を架設し目下烏石の北方清風亭隧道の掘鑿中なり、現時開通するは廣東烏石間百二十一哩にして廣軌單線として毎日四回の列車を運轉し兩地間四時間を要す。

本鐵道の支線には廣東より三水に至る廣三線あり、此外本線に連絡するものには廣東より香港の對岸九龍に至る廣九線あり、英國の所有に屬するものとす。

(二)東西幹線

上海より漢口を經、四川省に至る間は揚子江の流路に沿へる天然の交通路にして支那を東西に貫ける大動脈とし、現時專ら水路の交通行はるゝ雖も近年該東西幹線に於ける鐵道の布設計畫は漸次に實行の域に達するに至らんとす、但し本幹線に於ては之を三部に分ち三線の連絡に依りて漸く横斷の實を見んとす、三線とは滬寧、浦信、川漢の三線にして滬寧線は既に開通し其延長百九十三哩、浦信線は工事中にして其延長約三百五十哩、川漢鐵道は中止せるも其延長約八百十四哩と稱し合計千三百五十七哩其中信陽廣水間四十哩は粵漢鐵道に由るものとし延長に於ては揚子江水路又は京漢、粵漢を合せる南北幹線に比して三百哩少なく其通行時間は揚子江水路の現に十二三日を要するに異なり僅に二晝夜を出でざるべしと雖も其開通の何れの日なるや又開通の利益なるや否やは遽に論ずべからず、左に該三線の概要を述べん。

(イ)滬寧鐵道

滬寧鐵道は上海南京間に布設せらるゝものにして滬杭甬線、浦信線と共に千八百九十七年英國之が布設權を得たり、千九百三年に至りて借款を結び千九百四年其工事を起し千九百八年三月其全線の開通を見たり。

本線の延長は上海南京間百九十三哩にして其通過地の主要なるは崑山、蘇州、無錫、常州、鎭江にし上海蘇州間は東西走して平地を通じ蘇州鎭江間は北西に向ひて大運河に沿ひ、鎭江、南京間は南京山地の北麓に沿ひ西走す、而して鎭江に於て延長千三百呎の隧道あるのみにして殆ど全部平地を通じ橋梁は甚だ多きも大なるもの少なし。

本鐵道は廣軌單線なれごも上海蘇州間複線に改めんとす、一日四回の往復列車あり、兩地間の急行は六時間なり。

本鐵道の支線は上海の吳淞鐵道、南京の江濱線即ち市街鐵道なり、南京の對岸浦口との間には小蒸氣船の連絡ありて津浦鐵道との連絡甚だ便利なり。

(ロ)浦信鐵道

浦信鐵道は浦口信陽州間の豫定鐵道にして千八百九十七年滬寧線と共に英國之が布設權を得たり、千九百十三年末英支間に借款成立し千九百十四年其測量を了し千九百十五年浦口廬州間其土工に着手せり。

本線の延長は浦口信陽州間三百五十哩、其通過地は廬州六安、光州、羅山にして浦口廬州間は平地又は赭土の臺地を通じ、廬州六安間は片麻岩の丘陵地を、其他には黃土の臺地を通ずるに至るべし、本鐵道は浦口に於て津浦鐵道に、信陽州に於て京漢鐵道に連絡せんとするものなり。

(ハ)川漢鐵道

川漢鐵道は湖北省漢口、四川省成都間の豫定線にして鄂線と蜀線とより成る、蜀線は四川省民の計畫に係れり、千九百五年其測量を了し千九百七年租股、捐股、購股及阿片稅に據りて千百萬兩を募り千九百九年より工事に着手し千九百十一年革命亂に至りて工事を中止せり、蓋し千九百十一年時の清朝政府は鐵道國有の關係上粵漢鐵道の四國借欵團に據りて蜀線の買收を强行せる爲め四川省民の反感を買ひ遂に四川獨立及武漢の革命を惹起し清朝の滅亡を誘導せる重大なる歷史を有す。

本線の延長は八百十四哩にして漢口宜昌間、宜昌夔州間及夔州、重慶間の三段に分たる。

漢口宜昌間は本線及支線より成り本線は京漢鐵道の漢口より廣水に至り廣水より荆門を經て宜昌に至る、支線は荆門より南方沙市に至り更に東方漢陽に達し京漢線に合するものとす、此間は宜昌夔州間と共に米人の管理に據る、而して未だ着手せられず。

宜昌、夔州間は宜昌より三峽を貫きて香溪口、歸州を經て夔州に至る、千九百九年起工し宜昌小溪塔間約四哩の軌道を布設して開通し宜昌香溪口間約九十哩の工事を終へたるも千九百十一年革命亂に據りて工事を中止す。

夔州重慶間は其後同借欵團に據りて鐵道布設の計畫中に屬す。

本鐵道の通過地中宜昌、漢口又は廣水間は赭色砂岩層の丘陵又は卑濕の平地にして夔州重慶間は巴蜀盆地に於ける赭色砂岩層の丘陵地なるを以て難工事無しとと雖も宜昌夔州間は所謂三

峽の地にして甚だ難工事の地と稱す、蓋し此間にある宜昌峽、巫山峽、瞿唐峽の三峽は石灰岩の絕壁江に迫るの地にして到底江岸に鐵道を通ずる能はず、現に宜昌香溪口間に於て三峽の一なる宜昌峽を貫ける所には鐵道は宜昌より其支流の黃柏河及夏家河に沿ひて峽門を避け隧道を鑿てる後更に香溪水に沿ひて香溪口に至り本流に出づるものとす、將來他の二峽を貫く所多大の難關たるを失はず、但し峽と峽との間には宜昌峽の南沱地方の片麻岩地、香溪以西の赭色砂岩層の如く緩傾斜地ありて鐵道工事に困難すること多からざるべし。

(三)　支線及其他の鐵道線

(甲)中支那の鐵道

(イ)湘萍鐵道

湘萍鐵道は江西省萍鄉縣を距る南東五哩の安源即ち萍鄉炭坑と湖南省湘州との間に布設せられたる運炭鐵道にして千八百九十八年の起工に係り千九百六年開通す、千九百十一年國有に移り交通部の管理に屬す、本線の通過地は安源より萍鄉に至り之より湖南省醴陵を經て湘江畔の湘洲に至る、其間は大體に瀏江の溪谷に沿ひ唯湖南省界には老關と稱する一嶺あるも赭色砂岩層の丘陵地なり(第二圖參照)

本線は其延長六十一哩にして湘州に於て湘江畔に出で、石炭の船積場に達するのみならず又粵漢鐵道と交叉す、以前は兩線連絡を缺けるも近時支線を以て兩線を連結し安源、長沙間に一日

一回の直通列車、安源株州間に一日二回の普通列車を運轉す。

(ロ)大冶鐵道

大冶鐵道は湖北省大冶鐵山の鐵山舖より揚子江畔の石灰窰に至る鐵鑛の運搬鐵道にして漢冶萍煤鐵礦廠公司の所有に係り千八百九十三年の起工及竣成に係れり、其延長二十一哩にして其中下陸、獅子山間の支線二哩を含む、其通過地は石灰窰、下陸、新豐、鐵山舖にして下陸に於て獅子山に至れる支線を分つ、是等の地は石灰岩地の廣き溪谷を通ず、本鐵道は該公司所有の運搬鐵道にして一般の乘客を許さず。

(ハ)江甯線及吳淞線

兩線は滬甯鐵道の支線なり、江滬線は滬甯鐵道の下關より南京城壁に沿ひ其市街の中正街に連結するものにして千九百七年の建設に係り延長七哩ミす、吳淞線は揚子江畔の吳淞ミ黃浦江中の上海ミを連絡するものなり、蓋し本鐵道は千八百六十六年支那に於ける鐵道の嚆矢ミして英商怡和洋行の布設する所なれごも官民の反對に據りて破壞せられ千八百九十八年に至り再び建設せらる、其延長十哩、其通過地は平地なり、現時上海に入るを得ざる外洋大汽船の乘客の乘降あるのみ。

(ニ)滬杭甬鐵道

滬杭甬鐵道は江蘇省上海より浙江省杭州及甯波に至る鐵道にして千八百九十八年滬甯鐵道

ミ共に英國銀公司の布設權を得たるに據るものなるも地方民の反對あり千九百五年江蘇鐵路公司浙江鐵路公司に其布設を許可せり江蘇鐵路公司は上海ミ兩省界の楓涇鎭ミの間に、浙江鐵路公司は楓涇鎭杭州及杭州甯波間に起工す、千九百八年上海杭州間開通し甯波杭州間は甯波より曹峨鎭に至る間開通せるのみ、千九百十三年國有ミなり交通部の管理に移れり。

本鐵道の延長は上海杭州間百二十四哩支線四哩杭州甯波間百哩ミす其通過地は共に平地にして小河流及運河を渡る所甚だ多し上海杭州間は上海南端より松江楓涇鎭を經て浙江省に入り嘉興を經由して杭州の艮山門に至る其間百十七哩艮山門に於て支線を分つ本線は杭州の東に沿ひ淸泰門南星を通過して錢塘江畔の閘口に達し其間約七哩なり支線は艮山より分れて大運河の拱宸橋に至り其延長四六哩ミす。

甯波杭州間の鐵道は上海杭州間の鐵道ミの間錢塘江に隔てらる甯波曹峨間開通し之より紹興を經て杭州の對岸に至る間未だ開通せず。

上海杭州間に急行列車及其外二回の直通列車あり其急行列車は兩地間五時間を要す。

(ホ)甯湘鐵道

甯湘鐵道は江蘇省南京即ち江甯より江西省萍鄉に至り湘萍鐵道に連結し湖南省に達せんとする豫定鐵道にして千九百十四年三月英人之が布設權を得たり本鐵道の延長は南京萍鄉間約六百哩にして其通過地は南京より湖沼地を通じて安徽省甯國に入り玆に蕪湖及廣德に至る安

徽鐵道を分ち之より黃山山脈の東側より南方に迂回して徽州に出で徽州盆地を貫きて婺源より樂安河を經て南昌に至り之より瑞州又は臨江を過ぎて袁江に沿ひ萍鄉に達せんとす。

(乙)南支那の鐵道

(イ)厦漳鐵道

厦漳鐵道は厦門の對岸嵩嶼と漳州との間に布設せらるゝものにして福建海岸鐵道豫定線と共に福建人の計畫及出資に係るものなり、千九百十一年嵩嶼江東橋間十九哩開通し江東橋漳州間十二哩は未だ起工せられず。

本線は九龍江左岸の山麓の平地を走り江東橋に於て將來一大鐵橋を架設する要あり、嵩嶼厦門間海上三哩の連絡は小蒸氣船により江東橋漳州間は小蒸氣船又は石油發動機船による、現時一日朝夕二回列車運轉す。

(ロ)潮汕鐵道

潮汕鐵道は潮州汕頭間に布設せらるゝ鐵道にして廣東人の資本に依り千九百四年起工し千九百六年竣成す、更に千九百八年潮州より北方意溪に延長せり、本線の延長二十六、五哩にして韓江下流の三角洲を通じ河流を横斷する所多きも平地なり、其通過地は汕頭の對岸厦嶺より庵埠、浮洋、潮州に至り更に韓江上流の民船との連絡上潮州の上流二哩の意溪に延長す、蓋し潮州より下流には小蒸氣船通ぜざるなり。

本線は一日三回列車運轉す兩地間約一時間なり。

(六)廣九鐵道

廣九鐵道は廣東九龍間を連ぬる鐵道にして千八百九十九年英國の布設權を得たるものなれども廣東人の反對によりて本線を二分し英國租借地內即ち九龍深圳間二十二四哩は英人の布設により深圳廣東間八十八、七三哩は廣東人の布設する所となる、而して九龍深圳間は千九百六年起工し千九百十一年開通す、廣東深圳間は千九百七年起工し千九百十一年竣成す。

本線は英支兩領のものを加算すれば、其延長百十九、七哩なり、其通過地は廣東の東端大沙頭より東江の左岸を東走し石龍に於て東江及其支流を橫斷し茲に延長八百呎の鐵橋を架す、之より南行すれば赭色砂岩層の臺地又は花崗岩の丘陵地を通じ深圳に至りて英領地に入る、深圳九龍間は花崗岩の山岳を橫斷し隧道五あり、其中一は七千二百呎其他は百五十呎乃至九百二十四呎なり、深圳の南方三、五哩の粉嶺に一支線あり、粉嶺より東方七哩半の沙頭角に輕便鐵道布設せらる、千九百十二年開通せるものとす。

本線は九龍に於て海上一哩の香港と小蒸氣船によりて連絡し廣東に於ては廣三鐵道及粵漢鐵道と小蒸氣船によりて連絡す、廣東九龍間急行列車は一日兩地二回にして約四時半を要す。

(七)廣三鐵道

廣三鐵道は粵漢鐵道の支線にして廣東の對岸石圍塘と三水との間を連ぬるものとし既に粵

漢鐵道の部に述べたる如く粵漢鐵道本線に先んじて千九百二年起工し千九百四年開通す、本線は大略珠江に沿ひ三角洲地を貫き佛山又は西南を經て西江及北江の會流地たる三水に至る其延長三十哩ミす、廣東ミは石圍塘に於て小蒸氣船を以て通じ、三水に於ては北江、西江並に香港及澳門の蒸氣船に連絡す、石圍塘佛山間複線にして其他は單線なり、兩地一日五六回往復す。

(ホ)新甯鐵道

新甯鐵道は廣東省新甯より南方には海岸の三夾海ミ北東方には西江畔の江門ミを連ぬる鐵道にして此地方に於ける華僑の建設する所なり(第六圖參照)、千九百六年起工し千九百八年三夾海公益埠間を竣成し千九百十一年新會に、千九百十三年江門に達す、本線の延長六十二哩にして新甯三夾海間丘陵あるも其他は三角洲なり、而して本線は公益埠に於て新昌江を渡るも鐵橋なく浮船を以て對岸に通ずミ云ひ三夾海に於て海に通じ江門に於て西江の水利に通ず、兩地間一日三回の列車あり。

(ヘ)雲南鐵道

雲南鐵道は滇越鐵道ミ稱し雲南府城ミ佛領東京の海防ミを連ぬる鐵道にして佛國の布設する所なり、千八百九十八年佛國は廣州灣租借ミ共に本線の布設權を得千九百一年海防より起工し千九百四年雲南省界の老開に達す、老開雲南間は千九百四年起工し千九百九年蒙自に、千九百十年四月雲南府に達せり。

本線の延長は海防雲南府間五百二十八哩、老開雲南府間二百八十八哩なり、海防老開間は紅河の溪谷に沿ひ老開雲南府間は老開より紅河の溪谷を去りて雲南省の高原地に入るを以て甚だしき急傾斜地を通じ兩地間千八百米の高低あり、其通過地は芷村、壁蝨寨、阿迷州、宜良等にして阿迷州に於て西江の源流地を横斷し湖沼地の東方を通じて雲南府に達す本線は雲南府老開間に於て客車一日一回、老開海防間一日三回とす。

三　水　路

水路の交通は大汽船、小蒸氣船、民船の航路に分ち又外洋、沿岸、内河に分つ、外洋航路即ち大洋航海に從事する大汽船は三四千噸乃至一二萬噸、沿岸航路には東洋沿岸線、支那沿岸線あり、東洋沿岸線は支那の沿岸並に印度、東印度諸島、日本、浦鹽に至るものを含み、支那沿岸線は支那沿岸諸港の航路なり、東洋沿岸航路には二千噸乃至六千噸の汽船航行す、支那沿岸航路の大汽船は一二千噸にして小蒸氣船は一二百噸とす、此外東洋沿岸及支那沿岸には戎克の航行するものあり、内海航路即ち河流及運河の航行に從事するものは揚子江に於ける大汽船の三千噸乃至六千噸、西江に於ける一二千噸の外は皆小蒸氣船と民船となり（第二十七版參照）

戎克及民船は其種類甚だ多しと雖も戎克の最大は二千擔積とし小なるものに至りては二三百擔を積むに過ぎず。

左に支那の水路交通を述ぶるに當り大汽船の航路、小蒸氣船の航路、民船の航路の三に分たんとす、蓋し船の大小は其水路の廣狹及深淺を示す所の一標準たればなり。

(一) 大汽船航路

(イ)航路の種類

大汽船の航路は香港及上海を中心として之を外洋航路、東洋沿岸航路、支那沿岸航路、内河航路の四種に分つべし。

(い)外洋航路　香港は香港島と九龍との間に介在し東洋第一の海港なり、水深甚だ大にして巨船を入るべく海陸連絡の設備亦間然する所なし、船舶の出入數の多きこと世界第一と稱し一年間の出入船舶五十四萬隻、其噸數三千六百萬噸と稱す、其中外國貿易に從事するもの四萬五千隻、二千三百萬噸なり、蓋し世界的海運の一大中心地たり。

香港は英領に屬する自由港にして歐洲線、濠洲線、北米線、南米線此地より又は此地を通過す、沿岸及内河の大汽船、小蒸氣船、民船の此地に集まるもの又甚だ多し。

上海は海運上より見るときは恰も香港の世界的海運中心地たるに對し之を東洋並に支那の一中心地と見るべし、歐洲、濠洲、北米の如き外洋線此地を通過し又沿岸航路及内河航路の基點となる、然れども上海は河港にして揚子江畔の吳淞より其支流の黄浦江を溯ること十哩の上流に位し八千噸級以上の巨船を入るゝ能はず、現に外洋汽船の大なるものは吳淞に碇泊し貨客は小

蒸氣船又は汽車の便による。

(ろ)沿岸航路　に當れる諸港には上海及香港の外に浙江省の寧波、定海、温州、福建省の福州、厦門、廣東省の汕頭、廣東、澳門、拱北、江門あり、此外福建省三都澳及興化には臨時外洋船舶及沿岸線の大汽船寄港す、是れ移民及茶を積載せんが爲なり、是等の諸港中定海、三都澳、興化、厦門、澳門は海港なれども其他は河港なり、但し南支那に於ける沿岸の小蒸氣船航路に當れる港は河港を爲すもの甚だ多しとす、故に往古民船航行の時代に於て良港に乏しき地方には河港を以て最も安全なる港とし加ふるに上流地との通商の關係上最も便利の地を占むるを以て内地商業上盛大を致したりとは雖も、近年大汽船の航行盛なるに至りては揚子江及西江の如き大河は別とし其他の南支那海岸地方の河港は大汽船を舶する能はず通商上非常なる不便を感ずるに至り茲に主要の港は河港より海岸の海港に移るに至れり。

(は)内河航路　に當れる大汽船航路は揚子江と西江とを擧ぐべし、揚子江に於ては之を二區に分つを得、一は外洋汽船航路、一は内河汽船航路とす、外洋汽船航路は上海漢口間六百哩とす、增水期には吃水二三十呎の船を通じ裕に六千噸乃至一萬噸級の外洋汽船の出入あるも減水期には僅に吃水十二呎の船を通ずるのみ、蓋し減水期には江面に沙洲の現はるゝもの多く其中大なるは蕪湖に近き太平及池州附近と九江漢口間となり、九江漢口間には湖口のオリファント洲、武穴のハンター洲、黄州のコリンソン洲及グラベナー洲等の大洲あり、是等の洲あるが爲めに上海漢口

間は二三千噸の內河汽船の航行を便利ならせり。

次に內河汽船通路には漢口宜昌間、漢口湘潭間、漢口常德間の航路あり、漢口宜昌間は減水期と雖も尙一二千噸の淺吃水船通じ漢口、湘潭及常德との間の航路は洞庭湖を通過して湘江又は沅江に入るものにして減水期には小蒸氣船を通ずるのみなるも增水期には一二千噸の淺吃水船航行す(第六圖參照)而して是等の航路中宜昌線にありては沙市の下流、湘潭線にありては鹿角磊石山間を最も淺所となす、揚子江に於ける大汽船の出入は千八百六十一年以來にして初め漢口、九江、鎭江の三港に寄港するのみなりしも現時は(重慶宜昌、沙市、岳州、長沙、漢口、九江、蕪湖、南京、鎭江、上海を貿易港となし、湖南省常德、湘潭、湖北省武穴、江西省湖口、南昌、吳城、安徽省大通、鎭安慶、江蘇省通州を特別規定によれる貨客の上下地となし、湖南省湘陰、蘆林潭、靖港、湖北省荊河口、新堤、黃州、黃石港、蘄州、江蘇省儀徵、張黃港、江陰には停船し乘客上下の地となせり。

西江に於ける大汽船の航路は三とす、一は香港廣東間にして香港より虎門を經て珠江に入る、二は香港梧州間にして香港及澳門より摩刀門を經て西江に入る、三は香港より橫門を經て西江に入る、一二千噸の淺吃水河船は四時梧州に溯るを得べし(第六圖參照)

(ロ)主要航路の名稱

左に大汽船航路の主要なるものを列擧せん

(い)外洋航路

〔一〕上海を中心とする外洋航路

線名	會社名	期間
一、歐洲線	メサヂェリー、マリタイム	二週一回
	日本郵船	同
	ピー、オー	同
	濠太利ロイド	一箇月一回
二、北米線	日本郵船	一週又は十日一回
	加奈太太平洋鐵道	
	東洋汽船	一週又は十日一回
	太平洋郵船	四箇月一回
	太北汽船	四週一回
	大阪商船會社	四週一回

三、濠洲線—濠洲汽船

〔二〕香港を中心とする外洋汽船

一、濠洲線	會社名	寄港地	期間
終點			
(一)メルボルン、神戸	濠洲汽船		一週一回

(二)香港、シドニー	支那航業	マニラ、木曜島等	同
(三)シドニー、神戸、横濱	獨逸北ロイド	ヤップ、マニラ	四週一回
(四)横濱、メルボルン	日本郵船	マニラ、木曜島	同
二、北米線			
(一)香港、シアトル	日本郵船及太北鐵道	横濱、ビクトリア	同
(二)香港、桑港	東洋汽船及太平洋郵船	布哇	七日及十日一回
(三)香港、バンクーバー	加奈陀太平洋滊船	上海、横濱	三四週一回
(四)香港、タコマ	大阪商船	横濱、ビクトリア	二週一回
(五)香港、ポートランド	バンクライン	バンクーバー	三週一回
三、南米線			
(一)香港、バルバライソ	東洋汽船	横濱、布哇	一年六回
四、歐洲線			
(一)横濱、倫敦、アントワープ	日本郵船	ボートサイド、マルセイユ	二週一回
(二)横濱、漢堡	獨逸北ロイド及漢堡亞米利加	スエズ、ロッテルダム	同
(三)倫敦、横濱	ピー、オー	マルタ、アデン	同
(四)マルセイユ、横濱	メツセーデマリタイム	サイゴン	同

(五)トリエスト、ボンベイ、神戸　墺太利ロイド、　一箇月一回

(六)リバープール　太洋汽船
オリエント
(イ)横濱、香港、アントワープ、リバープール　二週一回　(ロ)横濱、ゼノア、リバープール　一箇月一回
(ハ)横濱、香港、ルハーブル、リバープール　一箇月一回　(ニ)グラスゴー、香港、漢口　一箇月一回

(七)コーペンハーゲン、日本　丁抹、瑞典東亞細亞汽船　香港　一箇月一回

(八)ペトログラード、コーペンハーゲンアントワープ浦鹽港　丁抹東亞細亞汽船　香港上海　三週一回

(ろ)沿岸航路

(一)上海を中心とする沿岸航路

一、支那沿岸航路

(二)上海大連線　南滿洲鐵道會社　西比利亞鐵道　二週一回

(二)上海浦鹽斯德線　露國義勇艦隊　長崎　一週一回

(三)上海青島天津線　漢堡亞米利加會社　二週一回

(四)上海天津線　支那航業(怡和)　芝罘　威海衛　一週一回
印度支那(大古)　秦王島　以上
招商局
開灤　四五日一回

(五)上海牛莊大連線	支那航業	芝罘天津	一週一回	
(六)上海甯波線	甯紹支那航業招商局		毎日一週三回	
(七)上海汕頭線	招商局支那航業		同	
(八)上海香港廣東線	支那航業招商局印度支那		一週又は十日一回	
(九)打狗天津線	大阪商船	基隆、福州、上海、大連	一週二回	
二、東洋沿岸航路			一週一回	
(一)上海横濱線	日本郵船支那航業		十日一回	
(二)上海孟買線	ピー、オー		二週一回	
(三)上海カルカッタ	印度支那		二週一回	
			三週一回	

(二)香港を中心とする沿岸航路

一、支那沿岸航路

(一)香港福州線	ドグラス	汕頭、厦門	一週二回
	大阪商船	同	同
(二)香港淡水線	大阪商船	同	二週一回
(三)廣東香港打狗	同	汕頭、厦門、安平	同
(四)香港天津線	支那航業	威海衛、芝罘	一箇月一回又は二回
(五)廣東香港上海線	同	同	一週二回
(六)廣東香港天津線	印度支那汽船	汕頭北支那	二週一回
(七)香港天津牛莊線	同	汕頭	五日一回
(八)廣東香港上海線	招商局	同	二週一回

二、東洋沿岸航路

(一)厦門香港新嘉坡線	ウキービン汽船	(移民船)	十日一回
(二)香港浦鹽線	漢堡亞米利加	上海、長崎	四週一回
(三)印度支那線			
香港海防廣州線	東京航業		一週一回

香港廣州灣海防	支那航業		二週一回
同	メサヂェリー、マイタイム		同
香港海防線	ゼプセン會社		一週一回
(四)香港盤谷線			
香港盤谷	獨逸北ロイド		一週一回
香港汕頭盤谷			
香港ホイホウ盤谷			
香港汕頭盤谷	支那人汽船		
(五)香港北ボルネオ線			
香港サンダカン	印度支那航業		一箇月一回
香港リダ、サンダカン	獨逸北ロイド		一箇月一回
(六)香港爪哇線			
神戸香港スラバヤ線	南洋航路	門司、新嘉坡、バタビヤ、サマラン	
香港日本爪哇線	同	爪哇、支那、日本	一箇月一回
スラバヤ香港横濱線	同		同
バタビア香港上海線	同		同

バタビヤ香港線	同	大阪商船	【基隆、香港、マニラ、サンダカン、スラバヤ、バタビア、新嘉坡】二週一回
臺灣爪哇新嘉坡線			一箇月一回

(七)香港比律賓線

香港マニラ線		支那航業 比律賓汽船 印度支那汽船	一週一回
香港マニラ、セブ、ロイロ線		支那航業 日本郵船 東洋汽船 太平洋郵船 大阪商船 バンク線 太北汽船	一週一回

(八)日本支那及香港印度線

香港カルカッタ	英國印度汽船		一週一回
神戸香港カルカッタ	同		十日及二週一回

神戸香港ラングン	同		二週一回
神戸香港カルカッタ	日本郵船		同
日本香港孟買	同		同
香港孟買	イタリアナ		一箇月一回
神戸香港孟買	大阪商船		同
上海香港孟買	ピー、オー		二週一回

(は)内海航路

(一)上海漢口線	日清汽船、招商局、支那航業、印度支那航業、獨逸北ロイド、ゲット會社		一週三四回
(二)漢口湘潭線	日清汽船		一週二回
	太古洋行及怡和洋行		四五日乃至七八日一回
(三)漢口常德線	日清汽船		冬季休航
(四)漢口宜昌線	日清汽船及招商局		五日一回
	太古洋行及怡和洋行		一月三回
(五)廣東澳門梧州線			
(一)香港廣東	香港澳門廣東汽船及他二會社		一日二回
(二)香港澳門	同		一日三回

(三)香港梧州　香港澳門廣東汽船　四五日一回
(四)香港江門　一日一回

(二)　小蒸氣船航路

小蒸氣船の航行は支那内河航行章程に從ふものなり、小蒸氣船の航行區域を沿岸航路と内河航路との二とす、沿岸航路に屬する汽船は一二百噸より時に三四百噸に達するも内河航路に屬するは百噸以下のもの多し。

(イ)　航路の種類

(い)沿岸航路

沿岸航路は三區域とす、一は甯波を中心とし、二は廈門を中心とす、三は兩區域間を連絡する溫州廈門の航路なり、香港附近沿岸には大汽船航行するを以て小蒸氣船の航行少なし。

(一)甯波を中心とする小蒸氣船航路

本航路は甯波を中心とし上海甯波間は前述大汽船に連絡するも其中一部のものは甯波より航路を上海に延長するものあり、本航路を分ちて甯海線、海門線、溫州線の三とす。

甯海線は甯波より其河口の鎭海並に穿山を經舟山列島の定海、沈家門(隔航普陀島に寄港す)、象山灣の象山、三門灣の石浦を經て甯海に至るものとす。

海門線は甯波、鎭海、定海、石浦を經て海門に至る、但し海門は臺州府椒江の河口に位する港なり。

温州線は寧波より鎭海、定海、石浦、海門、楚門、石塘を經て温州に至るものこす

(二)厦門を中心こする小蒸氣船航路

本航路を分つて四こす、一は福州線にして厦門より泉州、興化を經て福州に至る外海航路、二は泉州線にして厦門泉州間の外海航路、三は安海線にして厦門、高崎、同安、安海間の内海航路、四は厦門金門嶼間、厦門嵩嶼間鐵道連絡航路、厦門石碼間の九龍江航路こす。

(三)温州厦門航路

本航路は温州、興化、泉州、厦門間を航行し建昌こ稱する五百噸級の小型汽船一艘あるのみ、一箇月二回兩地を航す。

(ろ)内河航路

内河航路を大別して揚子江航路、閩浙諸水航路、西江廣東航路こす。

一、揚子江航路　は更に(一)蜀通航路、(二)湘江航路、(三)漢口航路、(四)贛江航路、(五)鎭江附近の航路、(六)蕪湖附近の航路、(七)上海三角航路に分つ。

二、閩浙諸水航路　は更に(一)錢塘江航路、(二)甬江航路、(三)臺州航路、(四)温州航路、(五)福州航路、(六)潮州航路に分つ。

三、西江廣東航路　は更に(一)東江航路、(二)珠江航路、(三)北江航路、(四)梧州航路、(五)柳州航路、(六)南寧航路に分つ。

〔一〕揚子江の小蒸氣船航路

（一）蜀通航路

宜昌より重慶に至る汽船航路を開きしは千八百九十五年の我下關條約に據る、本航路は三峽諸灘の難處を控へ到底溯江する能はずと謂はれたる所なれども十年間不撓の努力に依りて初めて汽船航行の目的を達せしは實に英人アーキバルド、リットル氏其人なり、同氏は千八百九十八年利川號（長さ五十五呎、幅十呎、吃水三呎六吋）を建造し約三週間を以て宜昌重慶間を航行せり、次で千八百九十七年に至り英國砲艦ウッドラーク號 Woodlark ウッドコック號 Woodcock（共に百十五噸、吃水二呎十吋）の外商船パイオニア號 Pioneer（二百三十一噸、吃水六吋半）はプラント氏により八日間に溯江せり、其後溯江を企てたるは千九百年に獨の商船瑞生號、千九百一年に佛軍艦オルリー號 Orly あり、千九百七年に獨艦ファーターランド號 Vaterland あり、現時は英艦三隻、獨艦二隻、佛艦一隻三峽より上流を航行す、我軍艦は明治四十四年伏見艦の溯江を以て嚆矢とし重慶の上流瀘州に至り、次で大正元年鳥羽艦は叙州に達せり。

商船の定期航行を見るに至れるは千九百九年十一月の蜀通號を嚆矢とす、四川官民は千九百六年佛人の計畫に覺醒し川江輪船公司を組織し千九百八年蜀通號を建造す、蜀通號は機關船と貨客船との二隻より成り或は並走し或は縱列をなし進行す、千九百十年其處女航行を開始し爾來冬季を除く外上航八日、下航二日の割合を以て兩地間三百五十八哩を航行す、蜀通號の積載量

は貨物五十噸、乘客一等十二人、二等七十人とす、其後蜀亨號並に四川鐵路公司の同型小蒸氣船數隻を加へたり、今回英商怡和洋行は聯華號と稱する同型小蒸氣船を上海に於て建造し七月初旬より其航行を開始せり、是を外國客船航行の嚆矢とす、同洋行は上海より重慶に至る通切符又は通船荷證券を發賣すと云ふ。

(二)湘江航路

湘江航路は長沙を基點とし北は洞庭湖を横斷して資江、沅江、澧江に至り南は湘江の上流に至る、其主なる航路は北方に長沙湘陰間、長沙益陽間、長沙常德間、常德桃源間、沅江三星期間、長沙津市間、津市澧州間の航路あり、南方に長沙湘潭間、湘州湘潭間、長沙衡州間の航路あり。

長沙湘陰線は長沙より湘江に沿へり、長沙益陽線は長沙より湘陰を經資江に入ると雖も減水期には湘陰の下流盧林潭を迂回し臨湘口、白馬市を經筦湖口より益陽に至るものとす、(第二圖參照)長沙常德線は益陽線と同樣に臨湘口、筦湖口を經更に新墟口及沅江を通過して大安洲の東側に位する白沙塘に至り之より季節に從ひて大安洲の北を迂回し或は南を迂回して接港口、龍陽を過ぎ常德に達するものとす、大安洲の白沙塘は洞庭湖の目標地として重要なる位置を占む、漢口常德間大汽船航路も亦岳州より洞庭湖に入り蕭婆を經て白沙塘に至り大安洲を迂回して沅江の水路に入るものとす、常德桃源線は沅江小蒸氣航行の終端に達す。

沅江三星期線は沅江流域の沅江より藕地運河の三星期に至るものにして南州を經由す、長沙

津市線は長沙常德線と沅江に於て分れ大安洲の東を北江し安鄉を經由し澧江流域の津市に至るものなり、津市澧州線は津市線より更に澧江の上流に至る。

長沙湘潭線は長沙より湘江に沿ひ其上流十九哩の湘潭に至る、湘潭株州間は湘潭より其上流の株州に至るものなり、株州は現今粵漢線の終點にして且つ株萍線の終點とし萍鄉炭坑の石炭又骸炭は此地に於て船積をなすを以て株州には株州湘潭線の外に漢冶萍公司の所有に係れる曳船日々株州、岳州又は漢口間を航行す。

長沙衡州線は長沙より南方衡州に至る湘江航路にして湘江小蒸氣船航路の終點たること恰も贛江の南昌吉安航路に酷似す、衡州には小蒸氣船往來する外支那砲艦の此地に碇泊するものあり。

湘江の小蒸氣船は、民國三年に於て長沙湘陰間三隻、長沙益陽間五隻、長沙常德間十隻、常德桃源間一隻、沅江三星期間二隻、長沙津市間五隻、津市澧州間一隻、長沙湘潭間十隻、株州湘潭間二隻、長沙衡州間十隻ありたり、民國四年四月長沙常德間に戴生昌汽船局の貨客小蒸氣船八隻の增加を見るに至れり。

(三)漢口附近の航路

漢口附近の內河航路を分ちて武漢渡船、漢江線、咸甯線、湖南線の四とす、是等の中武漢渡船を除けば他は漢江の入口を基點とす。

武漢渡船は武昌漢口間を航行するものにして武昌は北門外に、漢口は租界地の六碼頭を往來す、武漢に於ける揚子江の幅員約一哩にして風波甚だしきことき時は民船及舢板の杜絶することき少なからず、漢江線は府河航路と襄河航路との二とす、(第二圖參照)府河航路とは漢口より漢江を溯り新溝に於て右方に向ひ湖水に入り應城縣の南方府河口及長江埠に至るものにして其寄港地は漢口、蔡甸、新溝、縣河口、劉家口、府河口、道人橋、長江埠とし夏季は長江埠に、冬季は府河口に達し共に應城の民船水利に連絡す。

襄河航路は漢口より漢江に沿ひ溯ること二百六十七支那里の仙桃鎭に至る、其寄港地は漢口、新溝、漢川、擊馬口、城隍港、分水嘴、脈旺司、剄嘴、仙桃鎭とし廣濟公司の汽船三隻航行す。

咸甯線は漢口より揚子江を溯り金口に於て揚子江を距れ湖沼地に入り法泗洲を通過し咸甯に至るものなり。

湖南線は漢口より揚子江を溯り城陵磯、岳州を經、湖南省長沙に至るものにして減水期大汽船の航行せざる時最も盛に往來す、小蒸氣船の數は約六隻にして八十噸乃至百六十噸のものなり、蓋し減水期に於て大汽船は長沙湘潭線並に常德線も共に湘江の入口城陵磯を以て終點とし、之より連絡用小蒸氣船に依らざるべからず、其連絡甚だ不便にして船待の爲め多數の日子を要するを以て初めより小蒸氣船に依りて航行するを便とす、漢口、長沙の航行時間は十五六時間とす。

(四)贛江の航路

贛江の航路には九江を基點とする饒州、瑞洪、南昌の三航路、南昌を基點とする饒州、樟樹鎭、吉安の三航路とあり、(第五圖參照)九江の饒州線及瑞洪線は共に九江より湖口を經、下鄱陽湖及上鄱陽を貫くものなり、饒州線は四百支那里にして約半年間通じ增水期には饒州より昌河に沿ひ景德鎭に至る迄石油發動機船の航行するあり、瑞洪線は最近に開かれたる小蒸氣船航路にして鄱江流域に於ける物資の出荷多き時に限り航行す、九江南昌線は四百二十支那里と稱し九江より湖口、南康を經て吳城鎭に至る迄鄱陽湖を貫き、四時百噸乃至百八十噸の小蒸氣船通ずるも吳城鎭より上流は贛江に入り冬季は二三十噸の小蒸氣船通ずるに過ぎず、但し南潯鐵道の開通近きにあるを以て旅客は鐵道の奪ふ所とならんも貨物は依然として小蒸氣船又は民船によるなるべし、其航行時間は約一晝夜とす。

南昌を基點とする航路中南昌饒州線は百五十支那里にして瑞洪を通じて鄱陽湖に入り增水期に航行するのみ、樟樹鎭線は百八十支那里にして贛江に沿ひ市汊、豐城を過ぎて樟樹鎭に至り、吉安線は三百八十支那里にして南昌より樟樹鎭、新淦峽江、吉水を過ぎ吉安に至り四時淺吃水の定期小蒸氣船通じ更に其上流百九十支那里の萬安に至る間不定期に小蒸氣船の航行することありと云ふ。

以上諸航路の中九江南昌線最も航行多く之に從事するものには祥昌公司に四隻、光漢公司に六隻、福康公司に四隻、泰昌公司に四隻、見我公司に二隻、此外甯紹公司に二隻、怡康公司に二隻、道生

公司に七隻、官輪局に六隻あり、是等は支那船なれども增水期には日清汽船會社、太古洋行各汽船の航行するあり、九江饒州線に見義、仁記の二公司各二三隻の汽船を航し、南昌饒州線に二公司三四隻、九江瑞洪線には日清汽船會社の船舶航行す、南昌樟樹鎭線には二公司四隻、南昌吉安間並に樟樹鎭吉安間に二公司四五隻あり。

(五)蕪湖附近の航路

蕪湖附近の航路に六航路あり、(第三圖參照)一は南京線にして蕪湖より東梁卡の運河に依りて太平に出で、之より揚子江を下りて南京に至る、二は安慶線にして大通鎭に於て支流に入る外全部揚子江を通ず、三は安慶九江線にして揚子江に依りて安慶より九江に至るものなり、四は廬州線にして裕溪口に於て運漕河の運河に入り運漕鎭、巢、巢湖を過ぎ淝水に依りて廬州に通ずるもの、五は其支線は運漕鎭より分れて無爲州に達す、五は甯國線にして蕪湖より揚子江の支流長河に沿ひ甯國府宣城に達するもの、六は南陵線にして蕪湖の上流十哩の魯港より支流に沿ひ南陵に通ずるものとす、是等航路に從事するは戴生昌汽船局(南京線廬州線、安慶線、九江線泰昌輪船公司(南京、廬州、安慶、九江、甯國、南陵の六線)源公司(廬州、安慶、九江三線)並に無爲州商會船局(廬州線の支線、無爲州線)の四公司にして戴生昌は五隻其他は各一隻又は二隻の小蒸氣船を有す、而して各航路に於ける航行期間は上海三角航路の如く四時航行を許さず、廬州線は二三兩月、南陵線は十二月より五月迄、甯國線は一月より五月迄停船し增水期のみ航行すとは雖も亦夏季增水期には堤防

破壞の理由の下に停船を命ぜらるゝこと多し。

(六)鎭江附近の航路

鎭江附近の航路を分ちて四とす、(第三圖參照)一は江南運河航路にして鎭江より丹陽、常州を經、無錫に至り蘇州に通ずるもの約三百六十支那里、二は江蘇運河及邦溝運河航路にして鎭江の對岸瓜洲より大運河に沿ひ淸江浦に於て淮水に至るもの約二百七十支那里、三は襄河航路にして其幹線は揚州より仙女廟、泰州、如皐、白蒲を經通州に至る四百支那里とし、支線は泰州より東臺を經鹽城に至るものと、通州より呂四場又は堀港場に至るものとあり、四は揚州南京航路とす。

(七)上海三角航路

上海三角航路とは上海と蘇州、湖州及杭州とを連ぬる運河の航路なり、即ち太湖より上海附近に至る平地には運河及河流甚だ多く其中小蒸氣船の航行し得るものも亦少なしとせず、就中蘇州より嘉興を經杭州に至る水路は江南運河と稱し大運河の一部にして蘇州、上海間の吳淞江(又は蘇州江)と太湖より平望を經上海に通ずる黃浦江と共に此地方水路交通の骨子を形成し、是等の間を連ぬる運河及分流に據りて吳平野の交通に利する所多し、現時の小蒸氣船航路の數は主要なるもの十、此航路に從事する汽船會社の主なるもの亦十あり(第三圖參照)

左に所謂三角航路に關する主要航路及汽船會社を揭げん。

(イ)航　路

航路	寄港地	里程(支那里)
上海蘇州線	なし	二六〇
上海杭州線	松江、嘉善、嘉興、石門、塘栖、杭州	四五〇
上海湖州線	蘆墟、平望、震澤、南潯	三二六
蘇州杭州線	吳江、北埭、平望、震澤、南潯、湖州、菱湖、雷甸	三四二
上海陝石線	嘉善、嘉興、王店	三〇六
平望菱湖線	盛澤、烏鎮、雙林、菱湖	一五三
上海平湖海鹽線	新埭、平湖、乍浦、海鹽	二六〇
上海無錫線	蘇州、滸關、望亭、新安	三五〇
杭州湖州線	塘栖、新市、雙林、菱湖、荻港、袁家滙	二三〇
上海常熟線	崑山、巴城	二四二
同蕩口支線	崑山、巴城、湘城、蕩江	二六四

(ロ)汽船會社

戴生昌汽船局及招商內河輪船公司を大なりとす、戴生昌汽船局は臺灣人の經營により旅客船九隻貨物船十一隻臨時船五隻を有す、招商內河輪船公司は招商輪船公司に屬し旅客船十隻、荷物船十四隻を有す、其他の公司は皆二隻乃至四隻の旅客船を有するに過ぎず、此外日清汽船は上海

三角航路のみならず鎭江附近の航路に從事したるも大正二年内河航路全部を廢止せり、左に各汽船會社の其航路を示せば左の如し。

會社名	航路	國籍
戴生昌汽船局	上海蘇州線、上海杭州線、上海湖州線、蘇州杭州線、平望菱湖線	日本
泰東輪船局	上海常熟線、上海蕩口線	日本
招商内河輪船公司	上海蘇州線、上海杭州線、上海湖州線、上海青浦線、蘇州杭州線、平望菱湖線	支那
甯興輪船公司	上海湖州線	支那
高慶記輪船局	上海平湖線	支那
立興輪船局	上海湖州線	佛蘭西
老公茂輪船局	上海蘇州線、上海硤石線、蘇州無錫線	英吉利
王升記輪船局	上海平湖線	支那
甯紹輪船公司	杭州湖州線	支那
通利公司	上海常熟線、上海蕩口線	支那

〔二〕閩浙小蒸氣船航路

(一)錢塘江航路

杭州桐廬間百九十支那里には錢塘江輪船公司に屬する定期小蒸氣船二隻あり、富陽に寄港するのみならず杭州の南方臨浦に寄港す、桐廬より上流は嚴州に至る間小蒸氣船を通じ能はざるにあらざるべしと雖も現時は貨客の連絡には快船と稱する民船を用ひ嚴州より更に衢州及金華方面の快船に連絡す、錢塘江航路と上海三角航路とは運河と錢塘江との水準の差に因りて連絡せず、加ふるに杭州は同名の巨灣を控ゆるに拘らず其灣内には著名なる海嘯の現象あり之が爲めに同灣内に於ける航路は危險として顧られず。

(二)甬江航路

寧波附近の小蒸氣船は寧波と其河口の鎭海との間に最も頻繁なり、上流には寧波餘姚間、寧波奉化間に永和、和運、美益三公司の小蒸氣船あり。

(三)臺州航路

椒江の河口海門より其上流の臺州間並に海門、黃巖を航行する小蒸氣船あり。

(四)溫州航路は甌江の河口より溫州に至る間に大汽船を通ずること既に述べたる如し、之より上流には現時小蒸氣船の航行するものなしと雖も青田附近に至る三十哩間は其航行可能なりと云ふ、溫州より塘河によりて飛雲江の瑞安に至り更に平陽に至る間には日々小蒸氣船の航行するものあり。

(五)福州航路

閩江は福建省中最大の河流なれぞも其河口は淺くして大船を入るゝ能はず、福州と其河口にある馬尾の羅星塔抜錨地との間十一哩間は小蒸氣船によりて交通す、福州より上流は洪山橋水口間六十哩には福州輪船公司の小蒸氣船あり、洪山橋は福州の南臺を距る上流五哩にありて石橋の長きを以て著名とし、水口は閩江上流に於ける主要都市なり。

(六)潮州航路

韓江は潮州より下流汕頭に至る間沙洲多きを以て小蒸氣船航路を開始せず、上流に於ては潮州より福建省界に近き大埔に至る間航行し大水時には省界地の石下埧に至ると云ふ。

〔三〕嶺南の小蒸氣船航路

(一)東江航路

東江の小蒸氣船は廣東より石龍を經て惠州に至る約三百哩間に日々二三隻の小蒸氣船航行す、殊に廣東石龍間には此外數隻往復す、但し石龍は廣九鐵道と東江との交叉地に位する都市なり、惠州より上流約百八十哩の河源即ち本流と連平より流下する支流との合流地に至るには二三日間に一回小蒸氣船の溯江するものあり、增水期には河源より上流龍川に溯江すと云ふ。

(二)北江航路

北江航路は三水を起點とし韶州を終點とす、其間百六十哩にして清遠、英德を通過し三水に於

て西江及珠江の大汽船及小蒸氣船航路に聯絡す、現時粵漢鐵道は廣東より韶州の下流八十支那里の烏石に至る迄開通するを以て韶州烏石間には粵漢鐵道に聯結する小蒸氣船ありて小蒸氣船二三隻日々兩地間を往復す、兩地間の航行時間は四時間內外なり

(三)西江及珠江

西江及珠江の汽船航路に關しては既に大汽船航路の部に述べたる如く梧州より下流一二千噸の汽船の航行自由なり、西江、北江珠江間を聯絡する三水附近の汽船航路も亦既に記述せるを以て之を略し茲には主として梧州より上流の小蒸氣船航路に就きて記述する所あるべし、(第六圖參照)

但し廣東、佛山、三水、肇慶、德慶、都城、封川、梧州間には第三十二版甲に示せる小蒸氣船及曳船の航行するもの日々數隻あり。

梧州より上流の小蒸氣航路は本流並に鬱江と柳江との流域に分る、本流に於ては梧州より鬱江及柳江の會流地即ち江口間に通ずるのみにして之より上流には通せず、但し梧州江口間の行程百哩にして五呎吃水船を通じ二公司に各二隻の汽船あり。

柳江流域に於ては江口柳州間約四百哩の柳江航路あるのみ。

鬱江流域に於ては江口南寧間二百六十八哩の鬱江航路あり、潯州、貴縣、橫川、永淳を通過す、該航路中江口潯州間に灘あり又貴縣の上流四十哩に甚だ危險なる灘あり極めて吃水淺き船舶の航

行を許すのみ、故に江口南甯間の航路は貴縣を境とし二航路に分れ梧州江口間の汽船は貴縣に溯るを得ず、梧州より江口を經て貴縣に至るものは南甯に至るを得ず、而して梧州貴縣間には三公司と五隻の小蒸氣船とあり梧州南甯間には三公司と五隻の發動機船、二隻の小蒸氣船とあり。

此外南甯龍州間二百五十哩の麗江に於て並に南甯百色間二百五十九哩の西洋江には三江口歸德、果化、恩隆、奉議、那波を通じ雲南省界に近き百色に至る間に於て增水期に限り梧州南甯間には發動機船は百色に至る迄溯江す。

〔ロ〕小蒸氣船出入數

以上述ぶる所の小蒸氣船航行は內河航行章程に從ふものとし左に千九百四年に於ける各港小蒸氣船の出入を表示せん

上述各航路を航行する汽船の各開港場に於ける出入數は左表に示すが如し但し第一表は外國通商規定に據り第二表は內河航行章程に據るものにして之によりて大汽船と小蒸氣船との區別をなすものなれども第一表には蘇州、杭州、南甯の如く外國通商規定に依れる小蒸氣船の出入數を含めるものとす。

第一表　千九百十四年に於ける大汽船出入數

	宜昌	沙市	長沙	岳州
隻數	六七〇隻	一、〇三二	二、二八三隻	四、三〇六
噸數	四八五、八三二噸	八九二、九二六	五三八、五二五噸	一、八九三、四六八

第二表　千九百十四年に於ける小蒸氣船（內河規則による）出入數

漢口	九江	蕪湖	南京	鎭江	上海	蘇州	杭州	甯波	温州	三都澳	福州
五、二〇八	三、八四九	三、八六〇	五、八一八	四、〇〇二	一四、六四〇	四、〇一二	七、五三九	一、六二六	二五六	三四四	一、一五二
五、四九四、六八二	六、四七三、五二八	六、五六一、一二六	六、七四八、四五四	六、八九〇、六九四	一八、七三三、一六七	二一三、九二〇	三四六、二八二	一、九四一、五六五	一一二、四二六	六、九三〇〇	一、一〇九、九七八
厦門	汕頭	廣東	九龍	拱北	江門	三水	梧州	南甯	瓊州	北海	
一、五九五	二、四二四	一〇、四〇三	七、〇八七	七〇八	二、四四〇	四、三九三	三、五二〇	一、一八八	六八六	二五四	
二、〇七三、八九七	二、七九三、五六六	五、二四二、四一二	一、五九八、四〇六	五三、〇四九	五八六、四二二	一、三九三、四一〇	七七三、九二六	六一、八九八	六四二、九六六	二〇八、七八〇	

重慶	宜昌	沙市	長沙	岳州
一一隻	一、四七六	一、一七八	——	——
二五、七〇七噸	四一、五四四	三〇、四八二	——	——
漢口	九江	蕪湖	南京	鎭江
八、五九九隻	三、九七一	三、五七八	三、三六八	九、八五八
二二七、三七一噸	一九一、六五八	七七、三五〇	七〇、六〇〇	二二二、七六六

上海	九、七九〇	三一九、八〇四	廣東		六〇、六二五	九五二、二一六
「ランチ」出	一、四〇〇	四〇七、三七二	九龍		三、六五六	五一二、七四一
「ランチ」入	一、四〇六	四一〇、〇〇七	拱北		三、九六〇	一六七、四一二
蘇州	一、九一一	三四、〇四八	江門		三、四六三	四三六、六一三
杭州	三、〇五三	六七、二五七	水三		一三、九三四	三八六、九八八
「ランチ」	三、一七二	二二七、八九七	北海		三二	一、一一六
寧波	五、九八七	四九三、三〇五	龍州		九二	三、八三四
温州	一、九六四	四九、五一四	梧州		三、八九四	九八、〇四四
三都澳	六	八二八	南寧		六一〇	二六、九六〇
福州	五三四	八一、五五〇	瓊州		三〇	八八八
厦門	——	——				
汕頭	九、七一二	三一二、七五四				

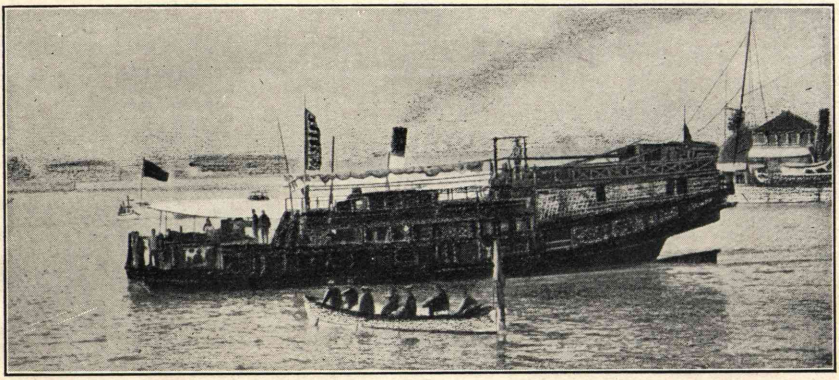
(三) 民船航路

(イ)沿岸戎克航路

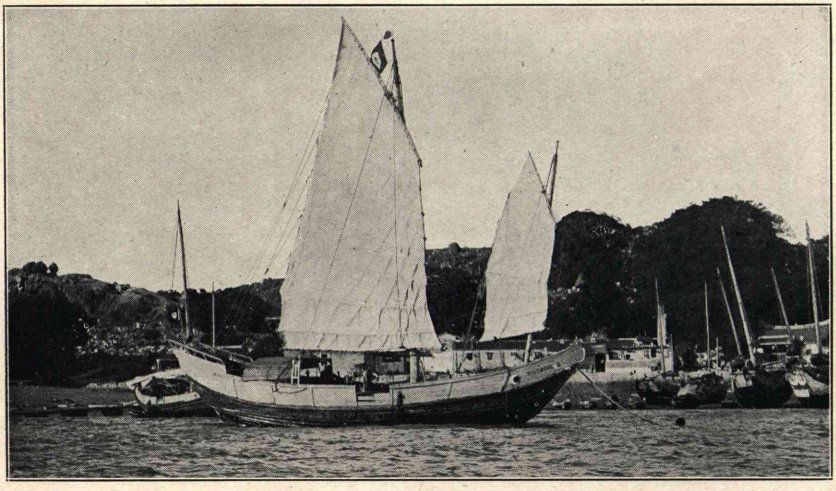
沿岸を航行する民船は戎克と稱する大型民船にして二千擔乃至六千擔積とし小なるは二三百擔積なり、(第三十一版乙參照)而して戎克は浙江省を根據地として航行するもの多く其航行區域は北は山東方面より南は廣東方面に亙り或は海峽を横斷して臺灣との間を航行し或は安南、遲羅方面を往復す、從來汽船の航行なき時に於ては支那の沿岸商業並に外國貿易は全く戎克に

第三十二版

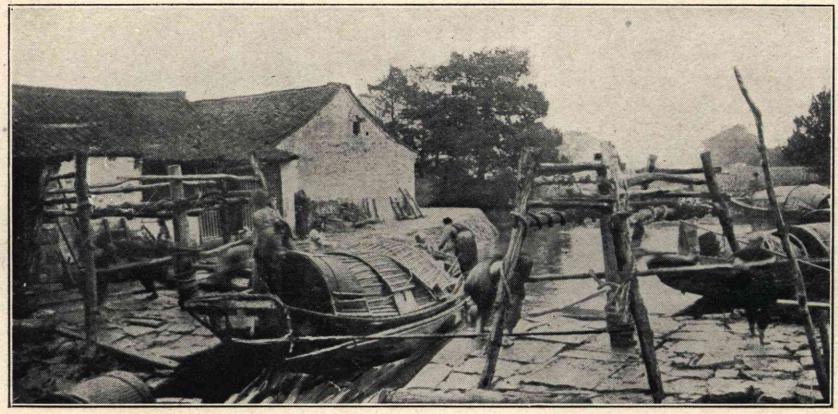
船



（甲）廣東梧州間航行の小蒸氣船



（乙）浙江省甯波の戎克



（丙）浙江省西興運河の壩及民船

より て行はれたるものゝ如し現時と雖も亦之によるもの少なからず福州、溫州地方の主要物資たる木材の如き或は海産物の如きは戎克によりて揚子江沿岸及北支那に運搬せらるゝもの其主要部を占め米、雜貨、石油等の戎克によりて南支那に搬入せらるゝもの亦多額に達す、閩浙海岸を南方に航行するや滿帆に風を孕み殆ど海波に沒せん計りに滿載せる戎克の屢舷前を横切るものに會す、是れ即ち閩浙の木材船なり、是等戎克は揚子江に於ては鎭江、蕪湖方面に溯り北は山東方面に到る、是等の戎克中鎭海、石浦に登錄せらるゝもの甚だ多く之を甯波戎克と稱し其舳頭に魚眼に類する彫刻を有し二百擔乃至六千擔積のもの多し、甯波戎克は山東戎克と共に之を北船と稱し福建戎克、臺船（臺灣戎克は之を南船と稱す、左に千九百十四年海關報告により沿岸地方を航行する戎克の數及其航行地方を列擧せん。

海關通過のもの

	常關通過のもの						航行地
	進口			出口			
	隻	噸	錢	隻	噸	錢	
上海	六、〇二四	三七、七五一	五、二四〇	四、八七〇	三、四六、一〇三〇	五〇九、二〇〇	鎭江、上海、甯波、乍浦、福建、臺灣
甯波	一三六	一九、六六一	四、〇八三	四、〇八八	一、一五五	一三六、五七一	揚州、石島、甯波、乍浦、石浦、溫州、福州、福清、長樂、興化、泉州、汕頭
溫州	五五	五、七五九	一、〇六七	四五九、〇〇〇	四、〇八三	三、八三九、七三七	牛莊、天津、山東、上海、揚子江一帶、浙江、福建、臺灣（及捕魚）
三都澳	二四〇	八、七三〇	四、一五七	一、二七二、一五〇	四、〇八三	三、八三九、七三七	潮州、福州、汴川、南澳、汕頭、溫州、臺灣
福州	四一八	一五、〇七六	三、三一一	四、二八九、二一三	二、八三七		
厦門	二	四	六〇	三三、五〇〇	二	七二〇	

油頭	———	———	一二、二一六	二九、一五七〇	一七、一五〇	三七五、五二四	潮屬一帶、廣東、福建、寧波及浙江一帶
廣東	四五〇	九一、四一九	———	———	———	———	———
九龍	四二、三四八	三、五三一、九六〇	———	八五三	九五、六九二	———	香港、澳門
拱北	一七、三一〇	九八二、三〇五	———	五	七五六	———	澳門、安南、暹羅
三水	一四四	二八、九六八	———	———	———	———	———
江門	一〇四	二〇、二四六	三、八三五	五、八三九、三六	三、八三〇	五、八三四、五三八	陽江、水東、石岐、沙扒、都斛、廣海、新寧、雷州、廣州、斗門、南水、樂會、崖州、瓊州、儋州、北梨、海口、香港、澳門、廣州、德慶、佛山、都城、賀、連灘、關底
梧州	六六六	三七、一〇一	六、八〇八	三、四八四、三八一	九、三三七	三、九五〇、九五六	
瓊州	二	二四六	三、四一九	九六三、二三七	三、四四二	九七二、五五六	雷州、高州、北海、江門、陳村、澳門
北海	———	———	一、三六八	———	一、三六七	———	瓊州、江門、陳村、澳門、安南

（ロ）內河民船航路

〔一〕揚子江の民船航路

（一）上流地の民船航路

宜昌より上流に於ける揚子江本流の民船航路は四川省屏山を以て其終點とす、屏山は小蒸氣船航路の終端たる叙州の上流三十八哩にして巴蜀盆地の西端に位す、屏山より上流揚子江の本流は大河なれども灘多くして舟行を許さず、然るに下流は本流、支流共に大民船通ず、殊に本流は叙州より汽船の航行するものあること既に述べたるが如し、支流の中岷江の舟行區域は叙州江口間百六十七哩にして其中叙州嘉定間九十五哩は大民船通じ小蒸氣船の溯江を許し增水期に

は小民船は成都及灌縣並に支流青衣水に沿ひ雅州に溯ること云ふ。

沱江の舟行區域は瀘州より上流二百哩の焦沙尾を終點とす、蓋し富縣、資州、資陽、簡縣等を聯絡する主要なる水路なり。

嘉陵江の舟行區域は其本流及支流共に甚だ廣し、本流に於ては重慶より陝西省略陽に至る間舟行の便あり、而して廣元より上流は大巴山脈を貫くを以て灘多くして小船通ずるのみなるも、廣元重慶間約千百支那里は巴蜀盆地を貫き特に保寧より下流は緩流なるを以て民船の稍大なるものを通ず、支流中涪江に於ては合流地の合州より綿州の北方中壩に至る五百八十支那里間舟行し、殊に潼川より下流に大船通ず、渠江に於ては合州より廣安、渠三滙塲、綏定に至る間六百五十支那里の間舟行するを得、綏安より大船通ず。

此外綦江河は松坎より、涪陵江は省界の龔灘司より、且つ大水時には貴州省の思南より民船通ず。

四川省の貿易は古來三峽を通過する民船に依る、現時小蒸氣船の航行開始せらること雖も主として旅客の運搬に限られ、豐饒なる四川省内の貨物の輸出並に揚子江下流地方より四川省に入る所の内外貨物の出入に至りては之を民船の運搬に委ねざるべからず、之を以て民船の三峽を通過するもの甚だ多し、今海關に於て取扱ふもの(掛篾船)のみに就きて見るに次表に示す如し

揚子江及西江の帆船及戎克出入表

	帆船		戎克		
重慶	二、一六三	隻	一二〇、二二九	噸	
宜昌	四、七〇六		六六七、〇八九		
沙市	一八四		六、七五四		
長沙	七六		二、二九一		
岳州	一二、四四四		一、〇五五、七〇〇		
漢口	一三八		二〇、一四四		
九江	一九五		一五、七四二		
蕪湖	三四八		二四、九四二		
南京	一、二三四		一一〇、八五六		
鎮江	六、〇六四		二一七、七五一		
上海	一、一九九		二五、一七九		
蘇州	七、五三九		三四六、二八二		
杭州	六六六		三七、一〇一		
梧州	四〇七		一一、六一〇		
南甯	六五五		二、六二〇		
龍州	二、六五三		三、一九八		
蒙自					
			一六、三五五	隻	
			出 三一、八九〇		
			入 四〇、八〇三		
			三九、七九九		
			出 五、三四三		
			入 四、八七〇		
			出 六、八〇八		
			入 九、三三七		
			東京筏 四三八		
			一七、五五四	噸	
			四、六九八、八〇三		
			三、四二二、六六四		
			三、四八四、三八一		
			三、九五〇、九五六		

即ち出入民船は三峽の關門たる宜昌に於て四千七百艘、六十六萬七千噸に達し、重慶に於て約二千百艘、十二萬噸とす、此外海關の管理に屬せざる小民船に至りては甚だしき多數に上るべし、而して四川省に出入する民船は重慶宜昌間の溯江に約一二月を要するも下江には僅に一週間內外にて急走す上下航共に甚だ危險多し、民船は此の如き危險なる三峽諸灘を通過し年々多數の難破船を出すを以て其構造に工風を凝し船首には長櫂を、船尾には大舵を備へ急灘を下江するときの用に供し渦巻く急流を溯江するには曳綱を用ふ、數十人乃至百餘人の曳夫は陸上河岸にありて船中に打つ所の大鼓の信號によりて曳船し其喧噪混雜は到底他の地方に見る能はざる所とす、船の種類は造船せられたる地方によりて種々あり其大さ又區々たりと雖も大なるは千擔乃至二千擔積、小なるは二三百擔とす、但し支流にありても岷江の嘉定地方には八百擔積、嘉陵江の合州には二千擔積、遂甯には千擔積のもの稀ならず、三峽地方には是等民船の外に紅船、砲船と稱するものあり、共に救難を目的とする救生並に警備の小船にして砲を備へ紅船は紅色に塗色し識別し易からしむ、民船の往復日數は宜昌重慶間の溯江は一箇月內外、下江は僅に一週間內外なり。

(二)中流地の民船航路

(イ)揚子江本流　には勿論大民船通ずること特に記するの要なし、本流と漢江並に洞庭湖にある所の數多の分流及び運河も亦水利多しと雖も季節によりて不通の場合少なからず、其中四季

民船の通ずるは便河、太平藕地の三運河とす、便河は又裡河と云ひ其民船航路は沙市に於て揚子江より分れて便河に入り西荊河によりて潜江及沙溝の漢江畔に通じ塞子湖及白鷺湖を貫ける長夏河によりて新灘口に出で或は長夏河より分れて一は漢口に近き沌口に、一は漢江の下流蔡店司に至る、而して沙市沌口間の便河の水程は六百七十支那里にして河幅十間以上水深三尺乃至一丈三尺なり(第六圖參照)太平藕地の二運河の民船航路は揚子江と洞庭湖とを連絡するものにして前者に於ては民船は增水期にのみ沙市の上流太平口より公安を經て澧江に通じ公安、安鄉を經て沅江に至るべく、後者に於ては四時民船通じ石首の藕池口より南州を經て洞庭湖に出で沅江、資江、湘江に至るべし、此外揚子江と漢江との間を連絡する民船航路には潜江沙市間、潜江沔陽漢口間、仙桃鎭新堤間のものを主要とす。

此外揚子江本流に沿ひては嘉魚の上流より崇陽を經通城に至る水路、金口より咸甯に至る水路、大冶、陽新(興國)を通ずる澦源水、富池水等を主要とす。

(ロ)漢江の民船航路　は漢口より陝西省沔に至る水程二千七百七十五支那里の間にして蔡店司、漢川、仙桃鎭、安陸、宜城、樊城、襄陽、老河口、均州、鄖陽、興安、漢中を通過す、老河口より上流七百支那里には漢中、石泉、興安、鄖陽の四地方を除けば概して峽及灘多く舟行危險なり、老河口より下流は河幅廣く且つ沙洲多くして淺所少なからざるも仙桃鎭に至れば水深大にして小蒸氣船を通ずることは前に述べたる所の如し、沔漢口間の下江は半月乃至一箇月、溯江は二ヶ月以上を要すと云ふ。

漢江の支流中民船航路を有するもの三あり、一は老河口の上流蕭江口より丹江に沿ひ河南省の淅川及荊紫關に至る百七十哩の水路こし增水時には其上流の龍駒寨に至るこ云ひ陝西省西安に至る通路に當る、二は樊城より白河及其支流唐河に沿ひ河南省賒旗司及白河の南陽に至る水路にして河南府及開封に至る通路に當れり、三は漢口附近の航路にして數多あり、其中蔡店司、府河口、長江埠を經て應城の北鄉に至るもの並に此水路より分れて雲夢又は孝感地方に通ずるものこし應城よりは石膏を運搬するもの多し。

(六)湘江其他湖南省諸水の民船航路は湘江其首位にあり沅江之に次ぐ。

湘江の民船は其河口の城陵磯より湘潭に至る百十三哩、湘潭より衡州に至る四百二十支那里、衡州より廣西省興安に至る八百五十五支那里の間を通じ更に興安より陡河の運河、灕水及桂江によりて桂林、平樂を經西江の梧州に通ずべし、湘潭より下流に大汽船を、衡州より下流に小蒸氣船を通ずるここ前に述べたるが如くにして大型の民船の往來甚だ多し、衡州より上流に於ては永州附近より下流稍大船通ずるも之より上流並に支流には小船通ずるのみ、而して支流の中民船を通ずるは瀟江こ耒水こなり、瀟江は永州より道州及江華に至る迄舟行するここを得、北江の支流連州江この間に物資の交通多し、耒水は衡州より耒陽、永興を經て郴州に至る五百四十支那里の間舟行するを得るも其中永興、郴州には小船通ずるのみ、郴州より宜章に至る間百二十支那里の摺嶺を通過すれば廣東省武水の水路あり、蓋し本水路は廣東湖南間の主要交通路にして古

來交通盛なること既に陸路に於て述べたるが如し、衡州より下流に於ける支流の民船航路は洣水にありては安仁及酃より、湘江にありては江西省萍鄉より、漣水にありては湘鄉の上流より、瀉水にありては甯鄉の上流より小船を通じ農產物、鐵、石炭等の運搬に資する所甚だ大なり、湖南省の富裕なる蓋し是等の水路の交通に負ふ所大なるものあり。

資江は灘の多きを以て著名なるにより舟行の區域も亦廣からず、殊に大民船は益陽より下流を航行するのみ、益陽寶慶間七百五十支那里の間は灘連續し舟行甚だ危險なりと雖も尙寶慶の毛板船と稱する一二百擔積民船通ず、該民船は石炭を運搬する爲に造られたる特種の淺吃水船にして漢口市場に於て其石炭を賣却すると共に船を解體し木材として賣却せらるゝもの多し、寶慶より上流に於ても小船は武岡水の武岡より、及び夫夷水の廣西省西延より通ず。

沅江の舟行は桃源及常德より下流に小蒸氣船及大汽船を通ずること既に述べたるが如し、然るに上流は資江と同樣に高原地中に峽及灘を形成し危險の箇所多きを以て大船通ぜず、唯小船のみは常德と之より上流千二三百支那里に位する貴州省鎭遠との間を往復す。

要するに中流地に於ける民船の出入地中漢口は本流と漢江との合流地にして商工業並に交通上の一大中心地たるを以て此地に出入する民船の數非常に多く湘江流域の民船亦此地に出入するもの少なからず、故に漢江の河口即ち大別山下の漢口漢陽間に於て民船は其帆檣林の如くに密集す、(口繪參照)千九百十四年稅關報告の記す所に據れば海關の管理に屬する民船のみに

ても一萬二千艘其噸數一萬五千七百噸と稱し此外海關の管理に屬せざるものに至りては之を知る能はざるも亦以て其多數に上るを察することを得(前表參照)

(三)下流地の民船航路

本流の外贛江を重要とす、本流には大民船通ず、殊に蕪湖より下流には沿岸戎克出入す。

贛江に於ける民船航路の狀況は湘江に述べたる所と酷似す、即ち衡州の位置に似たる吉安を境とし之より下流には吉安南昌間四百十五支那里に小蒸氣船航路あること前に述べたる如く、吉安より上流贛州に至る四百六十二支那里間には十八灘と稱し灘多く小蒸氣船通ぜざるも尙大民船通ず。

贛州は其交通上に於ける位置たるや湘江の永州の如く而も尙永州に比して大民船の往來を許すべし、贛州より上流の民船航路三とする、一は贛州南安間二百三十支那里の章水の水路にして南安を以て其終點とす、之より梅嶺を通過すること百二十支那里にて廣東省湞水の南雄に連絡す、二は贛州龍南間約三百二十支那里の桃江水路とし、三は贛州瑞金間四百二十支那里の貢水水路にして瑞金汀州間八十支那里の陸路連絡によりて福建省韓江の水路に通ず、以上三流の民船は共に二三百擔積のもの多し。

以上の外贛江の支流中舟行の便あるものを列擧すれば貢水には寧都雩都間、興國贛州間、萬安龍泉間、吉安と安福、永新又は永豐との間、並に袁江にありては樟樹鎭に近き臨江より袁州に近き

廬溪に至る間にして廬溪と湓江の萍鄉との間に五十支那里の小嶺を介す、南昌附近に於ける盱江に於ては撫州、建昌を經て硝石に至る間舟行し硝石光澤間の杉關に於て八十支那里の陸路を通ずれば福建省閩江上流に至る、錦江に於ける舟行區域は玉山を終端とし之より上流は八十支那里の陸行によりて錢塘江上流常山に通ず、或は玉山の下流河口鎭より陸路福建省崇安に出でて閩江の水路に達す、下流は或は餘干に或は萬年、樂平の運河に或は瑞洪を經て鄱陽湖に、或は同地を經て南昌に通ず、第五圖參照蓋し玉山瑞洪間五百七十支那里と稱す、昌河は饒州より上流に於ては安徽省の祁門に樂安河は婺源に通じ下流に於ては鄱陽湖を經て南昌、九江方面に小蒸氣船航路の存することは前に述べたるが如し、瑞河は瑞州及上高に、修水は義寧州より下流四百六十支那里間小民船通ず、修水の河口に在る吳城鎭は贛江下流に於ける重要都會なり。

九江より安慶に至る間の支流には望江宿松間及安慶より長河に沿ひ太湖又は潛山に至る間に小民船通ず、蕪湖附近の三叉河に沿ひ廬州に至るもの、蕪湖より寧國又は涇に至るもの、並に南京より下流に於て大運河、蘇州上海杭州間の三角航路等に就きては既に小蒸氣船航路の部に述べたれば重ねて記述せず、上述揚子江下流地に於ける民船出入の數は前表に之を記載せり。

〔二〕錢塘江の民船航路

錢塘江は杭州より下流海嘯の爲に舟行困難なりとし上流は杭州より六百二十支那里の常山に至る間民船通ず常山江西省玉山間八十支那里の間一嶺を過ぐれば錦江の水利に通ず。

嚴州に於て錢塘江に合流する新安江に於ては安徽省屯溪に至る間二百九十支那里の間民船通じ安徽茶の運搬路として重要なり、此外桐廬水にありては昌化より浦陽江に於ては諸暨より、曹峨江に於ては新昌より小船通ず、常山及江山より下流並に新安江に於ける民船の大さは三百擔積乃至八百擔積にして時に二千擔積のものを見ることあり。

西興運河即ち杭州より甯波に至る運河の水路は餘姚甯波間に小蒸氣船を通ずるも餘姚以西には壩多くして民船を通ずるのみ、(第三十二版丙參照)即ち杭州の對岸西興より運河に入れる民船は曹峨に至りて壩を下りて曹峨江に入り其下流二支那里の百官に於て壩を上りて再び運河に入る之より餘姚に至る間三壩を通ぜざるべからず。

〔三〕閩浙の民船航路

(一)甌江の民船は温州處州間二百七十支那里は稍大船を通ず、處州より上流の大溪に於ては處州龍泉間三百支那里を、松陰溪に於ては松陽寶定間六十五支那里を、共に極めて小船のみ通ず、現時は處州より上流にも又下流にも二十擔積小民船通ずるのみ。

(二)閩江には福州水口間二百十支那里に小蒸氣船通ずること前に述べたる所なり、水口より上流は富屯溪建溪、沙溪に民船通ず、富屯溪に於ける舟行の終端は光澤にして之より陸路八十支那里の杉關を過ぐれば贛江の支流盱江の水路に通ず、光澤は水口の上流六百五十支那里に位す、水口の上流百九十支那里に劍浦(延平)、劍浦の上流百四十支那里に順昌、三百八十支那里に邵武あり、

建溪に於ける舟行の終端は崇安又は浦城にして閩江、建溪合流地の劍舖より建甯に至る間は百三十支那里ミし建甯より崇安には二百三十支那里、浦城には二百八十支那里ミ云ふ、而して崇安より一嶺を越せば江西省河口鎭に至りて錦江の水路に通じ、浦城より楓嶺を越え浙江省江山に至りて錢塘江の水路に通ず、沙溪に於ける終端は永安にして劍舖永安間二百七十支那里ミし沙溪は其中程に位せる商埠なり。

閩江を上下する民船には二三十擔積のもの、百擔積内外のもの並に三四百擔積のものあり、麻雀船、双子船、鷄公船ミ稱す、麻雀船は最も輕快にして上流を航し其他は貨物を主ミし下流を航す、光澤より福州に至る間下航約一週日なり、但し溯江は急流なる爲め多くの日數を要す。

(三)晉江に於ては泉州より西溪に沿ひて安溪を經湖頭に至る百五十支那里間、並に東溪に沿ひて永春に至る間民船通ず、主に竹紙の運搬船にして之を二帆船、四帆船ミ稱し四帆船は百五十擔積にして增水時に通ずるのみ。

(四)九龍江は北溪、南溪二溪より成り其合流地は江東橋ミ稱す、北溪即ち九龍江本流には江東橋より龍岩に至る三百八十支那里の間民船通ずるも其中江東橋の上流百四十支那里の華封ミ三百四十支那里の雁石に於て各二三十支那里の間嶮岩多くして舟行自由ならず、貨物の積替を要し雁石は今改修中に屬す、華封より下流には大型民船通じ或は小蒸氣船を通じ得ざるにあらず、南溪は上流には大溪、小溪、和溪に分れ大溪には漳溪汎より、小溪には小溪口より、和溪には水潮よ

り小民船通じ小溪大溪の合流地たる山城よりは大民船を、而して漳州よりは發動機船を、石碼よりは小蒸氣船を通ず。

(五)韓江は福建廣東二省を貫く如く其舟行區域も亦二區域に分たれ、其省界は舟を通ぜず、省界地は韓江と永定河との合流地にして韓江に於ては峰市、石下埠二十支那里の間、永定河に於ても亦廬市下埠峯市間二十支那里の間に險岩ありて貨物の積替を要す、福建省内に於ては峯市より上流の汀州に至る三百支那里の間二三百擔積の民船通じ其支流の永定河にも亦坎頭に至る間小船通ず、廣東省内に於ては五六百擔積大船通じ殊に大埔より下流に小蒸氣船の航行するは前に述べたるが如し、且つ支流の梅江に於ても長樂又は興寧より嘉應州を經て小民船通行す。

〔四〕嶺南諸水の民船航路

(一)東江に於ては河源より惠州を經て廣東に至る間小蒸氣船の航行することを述べたり、河源より上流にありては龍川に至る間大民船通じ龍川和平間並に河源連平間小船通ず、惠州龍川間八十六哩、龍川和平間六十三哩、河源連平間七十哩とす。

(二)北江は韶州より下流は小蒸氣船を通ずることは前述の如し、韶州より上流湞水に沿ひては南雄に至る二百六十支那里間民船を通じ南雄より梅嶺を越へ陸路百二十支那里にして南安に至り贛江の支流章水の水路に出づべし、武水に沿ひては湖南省宜章に至る三百十支那里間民船通じ宜章より騮嶺を越へ陸路郴州に至り湘江の支流耒水の水路に出づべし、此兩水路は廣東より

江西及湖南に至る重要の交通路にして省界商業の盛なる所とす。

(三)西江は揚子江及黄河に次げる大河にして其舟楫は黄河に勝り、揚子江に次ぐ蓋し其水路は南支那に於ける重要なる交通路たり、而して流域の廣さに比し其小蒸氣船航路の廣きことは既に前に述べたる所なりと雖も梧州より下流は之を別とし其上流を航行する小蒸氣船は極めて淺吃水のものに限らるゝを以て貨物の運搬は民船の重要なるに如かず、左に西江に於ける民船の主要航路を述べん、西江の本流は源を雲南省に發し貴州省より流下する多くの支流を合するに拘らず峽間の急斜地を流るゝを以て舟楫の利甚だ少なく僅に遷江附近即ち柳江と本流との合流地より少しく上流に舟を通ずるのみ、然るに鬱江は本流と異なり舟楫の區域甚だ長くして梧州南甯間三百六十八哩小蒸氣船を通じ更に南甯より西洋江に沿ひては百色に至る二百五十九哩間、麗江に沿ひては龍州に至る二百五十哩間大民船を通じ增水時に發動機船を通ずることは既に述べたる如し、而して梧州は西江の河口を距る百七八十哩の上流に位するを以て西江の河口より大民船又は發動機船の通ずる範圍は約八百哩とし小民船は更に之より上流に通ず、即ち西洋江に於ては百色より雲南省界の剝隘に、麗江に於ては龍州より安南の區域内に通ず。

柳江に於ては潯州柳州間四百三十支那里に小蒸氣船通じ之より上流は懷遠古州都江を經て貴州省の三脚に至る間約千支那里に民船通ず、其中懷遠長安より上流には小船にして下流には大船なり。

桂江は梧州より昭平平樂を經桂林に至り更に靈川興安を經て運河によりて湘江に通ずることは既に述べたる所なり昭平平樂間に灘多きも桂林より下流は大船を、桂林より上流は小船を通ず但し桂林梧州間六百六十五支那里桂林興安間百三十支那里とす靈川興安間に注ける支流六洞水には大溶江六洞間小民船通じ之より陸路一嶺を越え西延に至り夫夷水の水路に通ず。

此外西江の支流としては劍江にありては藤より容に至る間舟行し陸路南流江の舟埔に至れば水路北海に出ずるを得べし賀江にありては封川より富川縣白沙に至り綏江にありては三水より四會懷集を經梁村に至る四百支那里の間小民船通じ竹筏竹細工を搬出す。

西江を上下する民船は其種類種々あり就中梧州より下流には大なるは一千擔乃至六千擔積柳州より下流には二三千擔積とし南寧又は桂林より下流には千擔積を通じ其他上流には四五百擔更に上流には百擔積以下のものを通ず而して梧州に出入する民船は西江流域の重要なる交通機關にして千九百十四年の統計に據れば帆船の出入六百六十六艘三萬七千百一噸小民船の出入は一萬六千百四十五艘七百四十三萬五千三百三十七擔とす但し是れ梧州より下流地方との出入にして上流のものに就きては之に加算せず下流地方と梧州との交通の中廣州との間最も主要部を占め關底都城連灘之に次ぐ(前表參照)

梧州より上流に於て南寧に出入する帆船は四百七艘龍州に出入するは六百五十五艘とし龍州より東京間を上下する竹筏は四百三十八なり。

第七章　産業

一　商業

商業は支那人の最も得意とする所なり、彼等は厘毫を爭ひて敢て下らず、其の商業上の團結力に至りては實に鞏固なりと云ふべし、且つ地方的團結の色彩甚だ鮮明にして外鄉者に對する結束を堅くし商權の擴張に努む、加ふるに彼等は國家としての力微弱なるに拘らず其隣邦には年年多數の移民を出だし其渡航地に於ける商業の實權を握れる等彼等の商業上の活動に至りては刮目すべきものあり、然るに彼等自國内に於ける殖産工業の發達は甚だ遲々たるを以て輸出の增加せざるに拘らず彼等の日進月歩の生活の向上は著しく外國品輸入の激增を來し其の結果輸入超過の潮流は滔々として深く支那内地に侵入する形勢を示し且つ外國貿易の實權も亦外國人の掌中に歸せんとす。

(甲)内地商

支那には古代より定日定所に於て市又は墟を開き物々交換を成し或は有無相通ずる程の交易行はれたり、市又は墟の地名を存するものは開市地たるものにして今尚ほ支那内地邊僻の地に於ては到る處に墟の開かるゝもの多し。

開墟當日に於ては遠く數十支那里の村落より其地に集合し互市を行ふものにて、交通の便利なる地方にありては開墟を見るのみならず商家は都會地にも村落にも一街地をなして商業に從事す。

元來支那の如き大國にありては各省の位置風土の異るに從ひ各地に生產する物質の相違甚しく互に其生產品を交易するの要多し、例へば中支那の揚子江畔に位する地方は米穀其他農產物に富み又綿絲、生絲を多產し機業盛なるを以て是等を北支那及び南支那方面に搬出す、然るに海產物、果實、紙等に至りては之れを南支那方面に仰がざるを得ず、更に中支那のみに就きて之を見るも機業の中、緞綢は四川、江蘇、浙江に多く、夏布は湖南、江西に多く、土布は江西に多きが如く各一地方に偏在す、故に其の生產地より商品となりて市場に現はるゝ時は自省は勿論外省にありても生產地商人の手によりて賣買せらるゝもの多し、故に商業は其の種類によりて著しく地方的の色彩を帶ぶるものにて、人若し支那內地を旅行し商人の招牌に注意するものは必ずや其商業の種類によりて彼等の生地の閩省なるや將贛商なるや將何省の商人なるやを知るべし、各種商業中地方的色彩の最も顯著なるものは下の如し、即ち江蘇商人の米穀、雜貨業に於ける、甯商の布疋業、徽商の茶業及筆墨業、贛商の瓷業及藥種業、布疋業及錢莊業、湘商の旅宿及運搬業、川商の山產物業、雲貴、四川の土藥業、閩省の煙業、粵商の雜貨殊に團扇、海產物、質商の如きは其の著しきものなり、而して是等地方的色彩を帶べる特種商人は互に省界商業を行ふのみならず更に他省に至

りて其生業を營む者多し、蓋し支那人は商人のみならず職工、勞働者に至るまで他省に至りて生業を營む者多く、彼等は家族制度の關係上其鄕里に家族を殘し一年に一二　鄕里に還るものとす、數代に亙りて外省に有るものは時に其土着人となることあれども尙其の鄕里の念を忘れず、此に於て彼等商人の外省にあるもの並に一省內の他府縣に商業を營むものは移住地に於ける商人との競爭上同鄕人間の團結を要す、都會地に見る所の會館は此の如き目的によりて設立せらるゝものにして江西會館、福建會館、湖廣會館の如き、甯波會館、吉安會館、三山會館の如き即ち是なり、會館は同鄕人の團體なれども更に其中に同業者の團體あり、之を帮と稱し茶業帮、布疋帮の如し、但し同じく茶業帮中にありても地方を異にするものに漢口茶業帮、安徽茶業帮等あり、之を單に漢口帮、安徽帮と稱す、此の外各省の帮より成れる同業組合には公所と稱するものあり、是れ一區域內に於ける商業上重要なる一機關にして主要なる商業的都市には之を見ざる地なし。

省界商業に關する團結は以上述べたる會館及び公所を以て最も有力とし、此外一地方に於て會館公所を網羅せる商業上の團結を商務會とす、商務會は光緒二十九年發布せられたる商會簡明章程により設立せられたるものにして各省城所在地又は最も重要なる商業地に商務總會を置き、縣城所在地又は主なる商業的都市に商務分會を存す、同會の務むる主なる事項は官商間の交涉、商業調査、紛爭の解決、內外商人間の交涉、會社及證券の登錄、資金の貸出及補助、市價調節等なり。

各省間の商業の現狀に就きては統計の徵すべきものなきを以て之を精確に知ることは不可能なり、長髮賊亂以來內地通行の貨物には通行稅即ち厘金を課するに至れるを以て其の課稅額に因りて內地商業の大勢を知るを得る筈なれども、元來厘金は河川を通過する貨物には其通路の關係上監督嚴重なるを得るも、陸上通過の貨物に至りては極めて主要なる線路を通過するものに課し小路を通過するものには課するを得ず、故に陸上に於ては實際厘金局を通過せざるもの多額に達すべしと豫想せらる、抑厘金局は厘金總局、厘金分局、厘金卡局に分れ物資の通過する要地に置かれ之に從價百分の一を課するの制なれども入市、落地、鎭場、出產等の名目を以て之に附加稅を課し百分の二乃至十となる事あり、且つ各省數箇所に於て課するの繁あるを以て近時統捐、認捐並に外國貿易に對する子口半稅等の如く要所の一二箇所に於て課稅を受くの便法を生ずるに至れるも要するに厘金の制は內地商業の發達を阻害する事甚だしと云ふべし。

厘金の制此の如くなるを以て其の課稅は或處に嚴に或處に寬なり、且つ政府も之に關し精確なる統計を發表せず、故に支那內地に於ける物資の出入は之を海關及常關の徵稅に據る所の統計に據る外あるべからず、常關は又鈔關と稱し元の戶部に屬する稅關を踏襲せるものにして內地及沿岸貿易を管理するものとし其中主要なる地方に於ては海關其管理を兼ぬ、故に其貿易の狀況に就きては海關に關する外國貿易と共に記述するを適當とするを以て玆には內地商業として省界に於ける陸上商業の一斑を述ぶるに止めん。

省界商業中揚子江以南に於ける主要なるものを東方より西方に向ひて列擧すれば玉山路、崇安路、杉關路、汀州路、梅嶺路、騮嶺路、桂林路、沅江路に於ける商業こす。

(イ)玉山路の省界商業地は浙江省錢塘江流域こ江西省錦江流域この間に行はれ玉山常山間八十支那里は舟行を許さざれごも車道通じ交通便なるを以て商業盛にして江西省よりは土布、藥材磁器、農產物を出し浙江省よりは海產物殊に兩浙鹽、雜貨、石油等を入る。

(ロ)崇安路の省界商業は江西省錦江こ福建省閩江流域この間に行はるゝものにして鉛山崇安間水路の便なしこ雖も推車の交通盛なるここ玉山路及杉關路こ同じ、此商業地は江西、福建、浙江三省の省界商業の行はるゝ所にして北方玉山路ここの會所に江西四大鎭の一たる河口鎭を控へ南に崇安、建甯の二大都會を有し商業盛大なりしも近年海上及揚子江交通の盛大なるに壓せられ商業稍衰退の兆あり。

(ハ)杉關路の省界商業は江西省中部こ福建省閩江流域こに行はるゝものにして、建昌光澤間百二十支那里は舟行なきも車を通じ北に建昌、南に洋口の都會地を控ゆ而して崇安、杉關兩路共に江西省より米、土布、磁器、藥材、爆竹等、福建省より紙、筆、藍及海產物を出し其取引額各六十萬元なりこ云ふ。

(ニ)汀州路の省界商業は江西省貢水こ福建省韓江ここの間に行はれ瑞金汀州間八十支那里舟行なく車通ぜず、江西省より米、布疋、雜貨、石油を福建省より鹽、紙、煙草等を出す。

(ホ)梅嶺路及騎嶺路の省界商業は廣東省北江流域と江西省贛江又は湖南省耒水流域との間に行はるゝものにして梅嶺路に於ては南雄南安間百二十支那里舟行なし、汽船航路の開けざる以前此兩路商業は廣東方面と揚子江流域との間の通商地として最も重要なりしものにして現時は衰微を呈すと雖も尙相當の取引行はる、韶州は此兩路の會所にある商業地にして贛江には贛州、湘江には衡州を控ゆ、其間に取引せらるゝは廣東方向より來るものに鹽、海産物、團扇其他所謂廣東雜貨あり、江西省より來るものに磁器、土布、紙、煙草あり、湖南省より來るものに茶、油、夏布、鴨子、鴨蛋等あり。

(ヘ)桂林路の省界商業は湖南省湘江と廣西省桂江との間に行はるゝものにして廣西省全州、湖南省永州間に湘江通じ更に湘江の上流興安に於て桂江との間運河あり、之が爲に中支那と南支那とは水路の交通便にして物資は此水路に依る、而して廣東省より廣西省を經て湖南省に入るものは鹽、海産物、雜貨にして湖南省より入るものは米、茶、桐油、藥材なり。

(ト)萍鄉路の省界商業は江西省袁江、湖南省瀏江間に行はるゝものにして瀏江の萍鄉、袁江の廬溪間五十支那里間は水路なきも車を通じ古來湖南江西二省間の重要通路に相當す、江西省より長沙方面に出づるものには夏布、石炭、藥材、江西省方面に出づるものには紙、爆竹、茶、油、石炭あり。

(チ)沅江に沿へる省界商業は貴州省の未開地と湖南省の開明地の間に行はるゝものにして湖南省に出づるものに桐油、藥材、漆、牛皮、木脂あり、貴州省に入るものには布疋、石油、洋傘等あり。

如上省界商業は昔時未だ揚子江及沿岸地方汽船航路の發達せざりし頃に於ては盛大にして其當時商業は主として陸路の交通により廣東に於ける其當時の外國貿易品と雖も亦廣東より梅嶺又は摺嶺を通過して揚子江流域に運搬せられたるを以て省界に於ける商業甚だ殷盛なりしと云ふ、然るに近時沿岸並に揚子江の汽船航路開け更に鐵道の開通するに至りては内地と開港場との連絡益々密接となりたるを以て從來陸上に行はれたる省界商業は汽船又は汽車の便によりて一旦開港場に至り之より隣省の開港場を經由する所の迂回線によりて取引するに至り以て内地商業の狀況に著しき變化を示すに至れり。

(乙)外國貿易は海上貿易と陸路貿易とに分たる

(一)海上貿易　開港場に於ける外國貿易は夙に南支那に開かれたり、而して外國人中貿易の爲に南支那に來れるものに就きては既に住民の部に述べたれば茲には詳しく論ぜず、蓋し中世に於ける南支那の海上外國貿易は福建省厦門附近を中心として行はれたるものにして其當時の貿易港たるザイタムは泉州なりしや漳州なりしや將海澄なりしや之を確むること能はざれども其當時福建省海岸は歐亞及南洋交通の衝に當りマルコポーロは此福建海岸を以て其當時に於ける世界の最大外國貿易場の一として之を歐洲に紹介せり、茲に於て支那を中心とする東亞の寶庫は外人の注意を惹くに至れり、降て葡萄牙人の來航以來支那に於ける海外貿易は福建省海岸より漸次廣東省の廣東、澳門に移り爾來西班牙及和蘭人の貿易の如き英佛人の如き皆廣東省

海岸を根據とするに至れり、西曆千八百四十三年鴉片戰爭の結果は廣東、厦門、福州寧波、上海の五港の開港となり其後外國人との條約によりて開港し或は支那自ら開港せるものも亦甚だ多數に上れり、(第二十七版參照其中既に開港の條約ありて未だ開港せられざるあり、或は開港場にして海關を設置するものとせざるものありと雖も左に中支那及南支那に於ける是等開港場を掲げん括弧は開港の約ありて未だ開港せられざるものなり)

四川省　重慶、(萬縣)

湖北省　宜昌、沙市、漢口

湖南省　岳州、長沙、(湘潭)

江西省　九江

安徽省　蕪湖、(安慶)

江蘇省　南京、鎭江、蕪湖、上海及吳淞

浙江省　寧波、杭州、溫州

福建省　福州、厦門、三都澳

廣東省　廣州、汕頭、九龍、拱北、江門、(甘竹)、三水、肇慶、(德慶)、惠州、北海、瓊州、香港、廣州灣

廣西省　梧州、南寧、龍州、(桂林)

雲南省　蒙自、河口、思茅、騰越

開港場は外國貿易場として重要なる位置を占むるのみならず又支那内地商業地として重要なるもの多く、近年汽車、汽船の交通盛なるに從ひ益其の位置重要を加ふるに至れり、而して開港場には普通海關の設けありて外國貿易の管理に任じ尚ほ其傍ら支那稅關即ち常關(鈔關)の管理をなすものとし外國貿易の整然として秩序を保つもの蓋し海關設置の賜なりと云ふべく支那に於ける諸般統計的機關の備はらざる間に於て外國貿易の消長を知る事を得るもの一に海關の調査に據らずんばあらず、外國貿易の大勢を記述するに先だち外國貿易を管理する海關及び之に附屬する常關に就きて其の大要を記し又其通關收入を列舉して貿易の一斑を知るの要に供せん。

(イ)海關　は千八百五十四年從來の支邦稅關を外人管理の下に置けるに始まり英人ウエード、レーイ、ハート諸氏の畫策によりて其基礎鞏固たるに至りしものにして稅務、港務、敎育、郵便の四部に分れ貨物の檢査、徵稅、航路標識並に港灣の設備、稅關吏の敎育、郵便の管理を行ふ、各海關に稅務司を置き總稅務司之を統轄す、而して海關吏の主要部には外國貿易に密接の關係を有する外人を置き總稅務司は現時英人之に當ることゝなれり。

海關徵稅の種類は進口稅(輸入稅)、出口稅(輸出稅)、復進口稅(沿岸貿易稅)、子口半稅(通過稅)、船鈔(噸稅)、洋藥稅厘ことす、子口半稅及洋藥稅厘は一般貨物又は阿片の厘金にして之によりて內地に於ける厘金を免するものとし、復進口稅は支那生產品に對し開港場間に於ける徵稅なり、稅率は進口、出

口共に從量稅率にして從價百分の五を標準とし復進口稅、子口半稅は共に從價の百分の二半とす、船鈔は百五十噸を標準とし其の以下には一噸に付き一錢を、其以上には一噸に付き四錢を課す、洋藥稅金は一擔に付き三百五十兩を課する規定なるも阿片禁止令あれば徵稅なしと知るべし。

海關の收入は以て外國貿易の大勢を知るの尺度となる今民國三年に於ける支那全體の海關收入を揭ぐれば左の如し(單位は海關兩)

進口稅		一八、二〇二、七四一
出口稅	外國港	八、五三六、二五〇
	支那港	四、五一一、四二〇
復進口稅		二、二五五、七一〇
船鈔		一、四九一、九四九
子口半稅	進口	一、七三六、六一五
	出口	五八四、六二七
洋藥稅厘		一、五九八、二一三
總計		三八、九一七、五二五

內譯

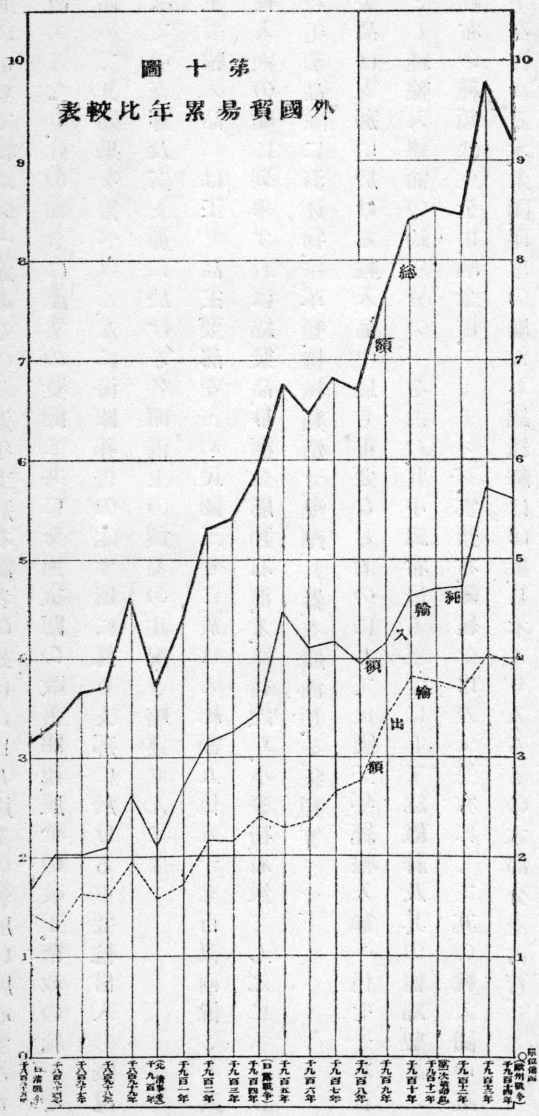
外國貿易　三二、一五〇、三九五

內地商業　六、七六七、一三〇

（八）外國貿易の變遷

支那に於ける外國貿易は日清戰爭當時より著しく增加を示し其當時即ち千八百九十五年（光緒二十一年）に於ける貿易總額約三億千五百萬兩なりしも千八百九十九年より更に急激に增加し四億六千萬兩となれり、（第十圖參照）之を其の前年に比すれば實に一年間九千二百萬兩の增加を示せり、其翌年拳匪亂ありて三億七千萬兩に下り甚しき變化を成せるも之れ一の變兆たるに過ぎず、千九百一年には貿易順調に復し其後の增加年々駸々として進み千九百十年には八億四千萬兩餘となり同十二年は第一次革命戰亂のために多少の影響を蒙りたるも其翌年即ち千九百十三年に於ては未曾有の盛況を呈し九億七千三百萬兩餘となれり、千九百十四年は歐洲の戰亂の影響を受け九億萬兩に下れるのみならず之に續きて支那內地の動亂を生じ外國貿易一時變調を呈するが如きも內外動亂の鎭靜を待ちて更に貿易の活躍を見るや明なりとす、蓋し此の如き貿易の激增は日清戰後外國との接觸密となりたると交通の開かれたる結果とにして外國人は支那に於ける利權の獲得と共に支那に入り込み商業に從事するもの著しく增加し加ふるに日獨兩國の支那に於ける商業の如き刮目して見るべきもの甚だ多し、更に近年殊に千九百年前後より鐵道の布設せらるゝもの甚だしく增加し之が爲に著しく輸出及輸入激增を促せり、而

して支那に於ける外國貿易は別表に示す如く年々異常の增加を示し其の輸出額に至りては最近十年間に約二倍以上の增加をなし輸入額の增加率に比するに遙に優越せる結果を示せりと雖も而も年々輸入超過を現はさゞるなく其超過額一億萬兩に達し甚しきに至りては一億數千萬兩乃至二億萬兩の超過を示せることあり、此の如き年々の輸入超過及歲入の不足は借款に據りて其一時的の彌縫策を講ぜりと雖も經濟上の破綻を眼前に控ゆる支那の前途は之を輸出額



の增進によりて救ふの一途あるのみ、近年支那有識者の玆に注目し產業の發展に腐心するもの蓋し故あるなり、此の如きは產業の奬勵と共に交通機關の改善、關稅、厘金の改正、幣政の統一を待つて始めて其効果を得べけん、左に海關報告の記す所に據り支那に於ける重要輸出入の概況を述べ次で中支那及南支那に於ける各開港上の貿易の現況を略述せんとす。

（ニ）重要輸入品　は工業品主要部を占め民國三年に於ける總額五億五千七百萬兩餘とし其種類を輸入額の順に列擧すれば綿製品、砂糖、金屬類、石油、米、紙、捲煙草、小麥粉、石炭とし之に次ぐは木材、染料、毛製品並に海產物、紙、革類、機械類、燐寸、藥劑、兵器、衣服、酒類、茶、袋類等とす。

綿製品は支那に於ける輸入品中最も重要なるものにして民國三年純輸入額一億七千八百萬兩餘とし純輸入總額の約三分の一を占む、其中綿布最も重要にして綿織絲及其の他綿製品之に次ぐ、綿布の種類は生金巾、晒金巾、シーチング、雲齋布、細綾金巾及天竺布にして其の輸入國中英國其過半を占め日本、米國、印度の順なり、綿織絲は印度、日本より入るもの大部分を占む。

砂糖の輸入年々著しき增加を示し民國三年に於ける純輸入額約六百七十萬擔其の價額三千百萬兩とす、其の種類に赤糖、白糖、精製糖、氷糖あり、爪哇、比律賓、香港及日本より輸入せられ日本の精製糖は近年香港糖を壓するに至れり。

金屬類の民國三年に於ける純輸入額約二千八百四十萬兩にして鐵及銅其の主要部を占め鐵は原料及製品として輸入せられ銅は銅貨鑄造用として日本より輸入せらる。

石油の民國三年に於ける純輸入額約二億二千五百萬ガロン其の價額三千六百萬兩にして米國油其主要部を占む、之に次ぐはスマトラ油、ボルネオ油、露油、日本油にして露油及日本油は年々增加を、其他は多少の減少を示し輸入先きは米國、香港、蘭領印度及新嘉坡なりとす。

米の民國三年に於ける純輸入額六百七十七萬擔餘其價額二千百八十五萬兩にして自國の豐凶によりて輸入額甚しく變化し千九百十年には九百四十萬擔に達せりと云ふ、其の輸入先きは佛領印度地方にして香港を經由して南支那一帶に入るものとす。

紙捲煙草の民國三年に於ける純輸入額千三百萬兩餘にして年々著しく增加す其輸入額の最も多きは英國にして露國、加奈陀、米國之に次ぎ日本よりも少量輸入せらる。

小麥粉の民國三年に於ける純輸入額九百萬兩餘にして米國及香港より輸入せらるゝもの大部分を占む、近年支那內地に於ける製粉事業甚だしく進步し國內の需用を充すを以て其の輸入額は多少の減少を示すと雖も支那產は其の品質外國產に劣るを以て將來外國品の輸入に甚しき減少なかるべし。

以上は重要輸入品中の重要品にして之に次ぐ所の石炭、燐寸、海產物は日本又は香港より輸入せられ、茶は印度、錫蘭、爪哇、日本より磚茶製造用にして輸入せらるゝもの、袋類は穀類、油糟等の包裝用にして用ひらるゝものにして英領印度より香港を經由して輸入せらる、日本、露西亞より輸入するは空袋の再輸入に係る

(ホ)重要輸出品　民國三年に於ける內國品の純輸出總額は三億四千五百萬兩餘にして其重要輸出品は農產品及び其の加工品大部分を占む而して其種類を輸出額の順に列擧すれば蠶絲最も首位に有り之に次ぐは豆及豆粕、茶、絹織物、獸皮、棉花、芝蘇子、錫、植物性油にして此外麥稈眞田、家畜、獸毛、落花生、麻類、肉、柏油、果實等なり。

生絲は支那の輸出品中首位を占む民國三年に於ける輸出額は約六千三百萬兩ニし絹織物は千五百六十萬兩餘之に屑絲を加ふるときは其總額七千八百八十萬兩餘にして輸出總額の四分の一餘を占む生絲の生產地は江蘇浙江、廣東、四川、湖北、山東にして四川省以下のものは黃絲に屬し其他は白絲ニし其輸出先は歐米中殊に佛國、伊國、米國並に印度にして上海、香港より輸出せらる絹織物中綢緞は江蘇、浙江、廣東及四川より、絹紬は山東より產出し香港、上海を經由し歐米、朝鮮に輸出せらる。

豆類の民國三年に於ける輸出額は約二千六百萬兩餘豆粕は約二千百萬兩餘ニし其生產地は北支那を主ニし其輸出先は大豆は英國にして豆粕は日本なり。

茶の民國三年に於ける輸出額は約百五十萬擔其價額三千六百五十萬兩ニす其種類は紅茶、綠茶及磚茶の三種にして紅茶を最も主要ニす其生產地は江西、安徽、福建を主ニし上海、漢口、福州を三大輸出地ニす漢口は紅茶及磚茶の中心地にして上海は綠茶の市場ニし福州は紅綠兩種を出す而して紅茶は英、米、露に、綠茶は佛、米に磚茶は露に出す但し茶は支那に於ける輸出品中生絲に

次ける重要品たりしも近年錫蘭、瓜哇、日本に於ける茶業の壓迫に因りて衰退を示すに至れり。

獸皮の民國三年に於ける輸出額は生皮千七百萬兩其他の皮類三百萬兩餘にして其種類には黃牛皮、水牛皮、山羊皮あり、歐米諸國に輸出せらる。

棉花の民國三年に於ける輸出額は千二百萬兩こし湖北、江蘇、浙江に於ける生產地の外北支那に於ける產額甚だしく增加し河南、陝西產の漢口地方に入るものありこ雖も揚子江沿岸地方に於ける紡績業の發達によりて海外輸出の減少を見るに至れり其主なる輸出地は日本こす。

芝蘇子其他種子類の民國三年に於ける輸出額は千百四十萬兩餘こす、民國二年及三年には千七百萬兩乃至千九百萬兩に上れり、芝蘇子は其大部分を占め民國三年には六七百萬兩なるも其前年には千二百萬兩こす、揚子江中流地方より河南省に亙りて主產し漢口より獨逸、和蘭方面に輸出せらる。

錫の民國三年に於ける輸出額は約十二萬噸、其價額約八百萬兩こし其前年には十三四萬噸、價額千萬兩以上に達せり、其生產地は雲南を主こし湖南、廣西之に次ぎ皆香港を經歐米、日本に輸出せらる。

植物性油の民國三年に於ける輸出額は百四十四萬擔、其價額千二百四十萬兩こす、其種類に桐油、茶油、芝蘇子油、菜子油、落花生油、棉子油、豆油あり、其中輸出品こして重要なるは桐油、豆油、及落花生油にして桐油は米國に、豆油は獨、佛及白耳義に、落花生油は香港に輸出せらる。

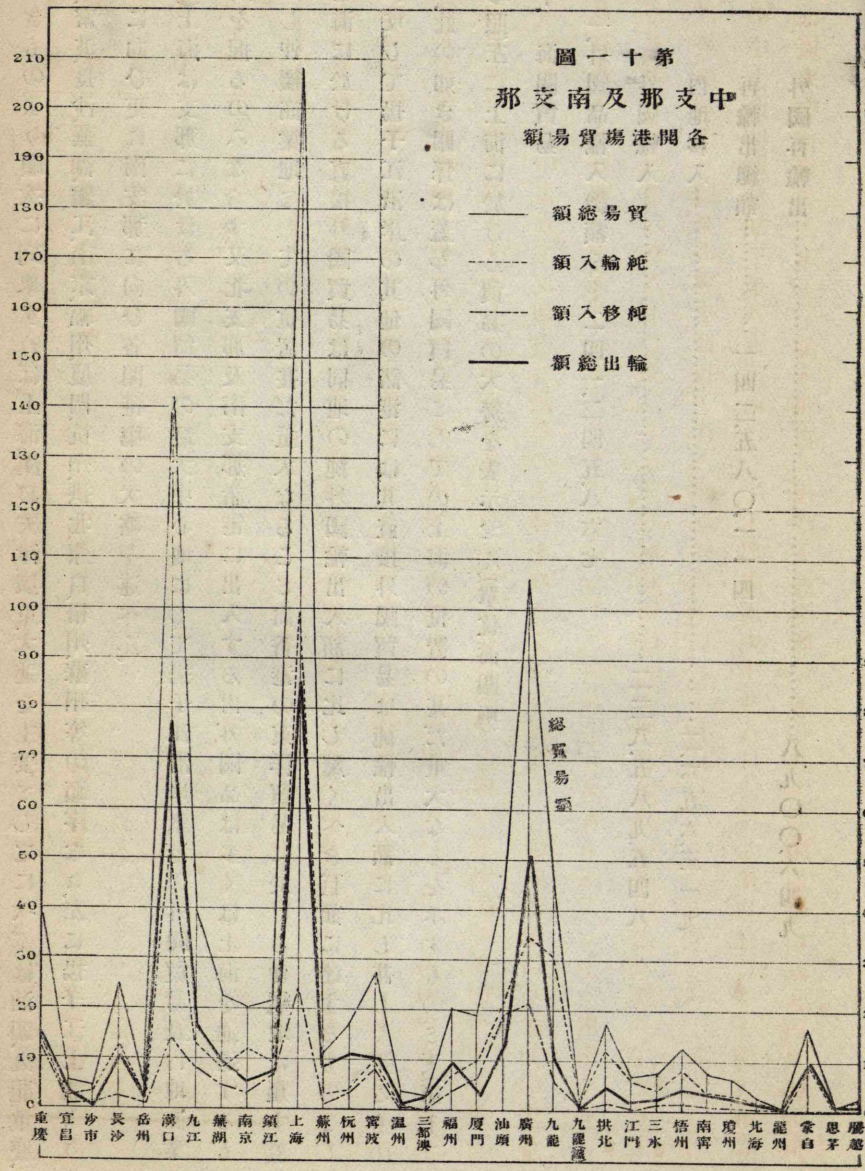
(ヘ)開港場に於ける貿易額　外國貿易品に關しては以上述ぶる所によりて其大要を知るべしと雖も内地生産品の吐出地にして且つ外國品の吸收地たる各開港場に關し其貿易の狀況を知ることは一は之を中心地とする内地商業の一斑を知るに當るを以て左に各開港場に於ける外國貿易の大體を述べん。而して之を述ぶるに先ち左表に各開港場に於ける外國品の純輸入額、内國品の純移入額、輸出總額(内國品の外國及内國諸港輸出額を含む)、並に輸出入總額を掲げ一覽するに便ならしめたり。(單位海關兩)

	純輸入	純移入	輸出	合計
重慶	一二、五一九、六三九	一一、二五三、三八一	一三、八五九、一八五	三七、六三二、二〇八
宜昌	一、七三四、六二一	三九三、三六〇	二、六五四、三四九	四、七八二、三三〇
沙市	三、六四〇、四〇五	四五四、〇四〇	八六四、八四二	四、三五九、二八七
長沙	一二、六八一、九三一	二、〇七九、五五八	九、八〇九、〇七三	二四、五七〇、五六二
岳州	二、六五三、八三八	二五七、七五五	二、〇七七、九七三	四、九八九、五六六
漢口	五一、〇二二、八六七	一三、七〇三、七四六	七六、六〇二、〇六五	一四一、三二八、六七二
九江	一二、八三〇、三八三	八、二七七、六一三	一六、四一五、六七五	三七、五二三、六七一
蕪湖	八、二六二、七一七	四、五二八、〇一五	九、七三九、三〇九	二二、五三〇、〇四一
南京	一一、六八五、七七七	三、〇五八、七三五	五、二六五、九七五	二〇、〇一〇、四八七
鎭江	八、九五三、〇三〇	六、四七二、六二四	六、一〇七、五四三	二一、五三三、一九七

	純輸入	純移入	輸出	合計
上海	九八、六六五、七五三	二四、六四五、四四九	八四、七六三、九三三	二〇八、〇七五、一三五
蘇州	二、六三〇、〇八二	七三七、四七二	八、〇三四、七五九	一一、四〇二、三一三
杭州	三、四九三、九五一	二、八二二、八八八	一〇、八二七、八一九	一七、一四四、七五八
甯波	九、八一三、六三三	七、九一七、〇一二	九、四三六、八九七	二七、一六七、五四二
溫州	一、三六九、七七六	一、一〇三、八七八	一、一四三、三二六	三、六一六、九八〇
三都澳	二五四、五九六	一九五、〇七七	二、一一五、二〇八	二、五六四、八八一
福州	六、九一六、二四二	三、三四四、三二四	八、八一三、〇五一	一九、〇七三、六一七
廈門	九、四六〇、〇二四	六、二六七、〇八七	二、八四四、四一四	一八、五七一、五二五
汕頭	二一、四四〇、〇五九	一九、三〇三、五五八	一二、五〇一、五三六	五三、二四五、一五三
廣州	三四、三九五、九三一	二一、一一七、一九九	四九、七八三、一九三	一〇五、二九六、三二三
九龍	三〇、〇九〇、二七〇	四、九六六、一四八	一〇、二四四、七八四	五、三〇一、二〇二
九龍（鐵）	一、三三七、九五九	——	五〇〇、一一一	一、八三八、〇七〇
拱北	一一、六三三、六八四	七二七、五一九	四、三五四、六三一	一六、七一五、八三四
江門	五、五二五、六四二	二、七九一	一、三五八、五三九	六、八八六、九七二
三水	四、一四〇、九一七	八二四、二〇八	二、〇七六、六六八	七、〇四一、七九三
梧州	七、七四〇、九四四	一、一三一、五三二	三、七三六、四七七	一二、六〇八、九五三
南甯	三、一九二、六五六	八三九、四五七	二、八五七、八九七	六、八九〇、〇一〇

瓊州	二、九八三、二二三	二八七、〇八六	二、五五八、三三八	五、八二八、六四七
北海	一、五一七、七六四	八、二五八	六七四、三九五	二、二〇〇、四一七
龍州	一一二、六三〇	—	一二、二六九	一二四、八九九
蒙自	七、七七三、九三七	—	八、三七九、八三八	一六、一五三、七七五
思茅	二二五、七二八	—	三五、九〇七	二六一、六三五
騰越	二、〇〇九、六八一	—	五六二、八一九	二、五七二、五二五

抑支那全開港場に於ける民國三年の總貿易額(內國品輸入並に內國諸港輸出を含む)は十億五千八百八十萬兩にして其中外國品純輸入額五千四百六十萬兩餘、內國品純移入額一億九千二百萬兩餘にし輸出總額五億千二百四十萬兩の中外國輸出額三億四千五百二十八萬兩、內國移出額一億六千七百萬兩餘にす、蓋し此數字は單に外國貿易に止らず海關を通過する所の內地商業を含むものにし之によりて支那內外貿易の大勢を知るこにを得、而して各開港場貿易總額の中揚子江及錢塘江流域即ち中支那に屬するもの五億八千三百五十五萬五千四百七十一兩、南支那に屬するもの三億四千八百六十三萬二千五百六兩、其他は北支那及滿洲に屬す、之に據りて見るも支那に於ける內外貿易の過半は揚子江及錢塘江流域に於て行はるゝことを知るべし、而して中支那の中上海は貿易額二億八百萬兩にして支那開港場中其首位に位し漢口之に次ぎ南支那に於ては廣東を首位とす(第十一圖參照)但し現時支那全體に通じ其主要開港場に就き貿易額の最


第十一圖
中支那及南支那
各開港場貿易額
貿易總額
純輸入額
純移入額
輸出總額
總貿易量
210
200
190
180
170
160
150
140
130
120
110
100
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
重慶
宜昌
沙市
長沙
岳州
漢口
九江
蕪湖
南京
鎮江
上海
蘇州
杭州
寧波
溫州
三都澳
福州
厦門
汕頭
廣州
九龍
九龍蔴
拱北
江門
三水
梧州
南寧
瓊州
北海
龍州
蒙自
騰越
思茅

も多きものより順次に列擧すれば上海、漢口、天津、廣東、大連を主要ごし之に次ぐは汕頭、九龍、重慶、九江、寧波、長沙、蕪湖、鎭江、南京、福州、厦門、杭州、拱北、蒙自、梧州、蘇州等の順序なり、左に揚子江上流より下流に向ひ更に南支那に向ひ各開港場の大略を述べん。

(い)上海は支那に於ける外國貿易の最大中心地にして揚子江沿岸諸港の外國貿易及內地商業の鍵を握るのみならず又北支那及南支那諸港に出入する內外國品は多くは上海を通過するものごし仲繼商業地ごしての位置甚だ重大なるこご尙香港の東洋貿易に於ける仲繼地に類す、蓋し上海に於ける直接外國貿易は同地の純外國輸出入額に比し驚くべき巨額に達するものごし之に反して揚子江沿岸の其他の諸港には其直接外國貿易は純輸出入額に比し甚しく劣るものあり、此の如き關係は蓋し外國貿易ごしての上海の位置の甚だ重大なるを示すものごす、(第十二圖參照)左に上海に於ける貿易の大勢を表示せん。(單位海關兩)

甲、海關貿易

一、外國品輸入總額……二四一、二四五、八六七

外國輸入……二三八、五八九、五四八

內地移入……二、六五六、三一九

再輸出總額……一四二、五八〇、一一四

外國再輸出……八、九〇〇、六四九

內地再輸出……一三三、六七九、四六五

外國品純輸入……九八、六六五、七五三

二、內國品輸入總額……一七二、六八五、三四七

再輸出總額……一四八、〇三九、八九八

外國再輸出……一一〇、七八七、五八九

內地再輸出……三七、二五二、三〇九

內地品純輸入額……一四、六四五、四四九

三、輸出總額……八四、七六三、九三三

外國輸出額……三六、九〇四、五〇五

移出額……四七、八五九、四二八

四、上海總貿易額……四九八、六九五、一四七

五、上海純輸出入額……二〇八、〇七五、一三五

乙、內地品常關貿易

貿易總額……二六、二二二、〇七一

輸出……一六、六〇一、八四七

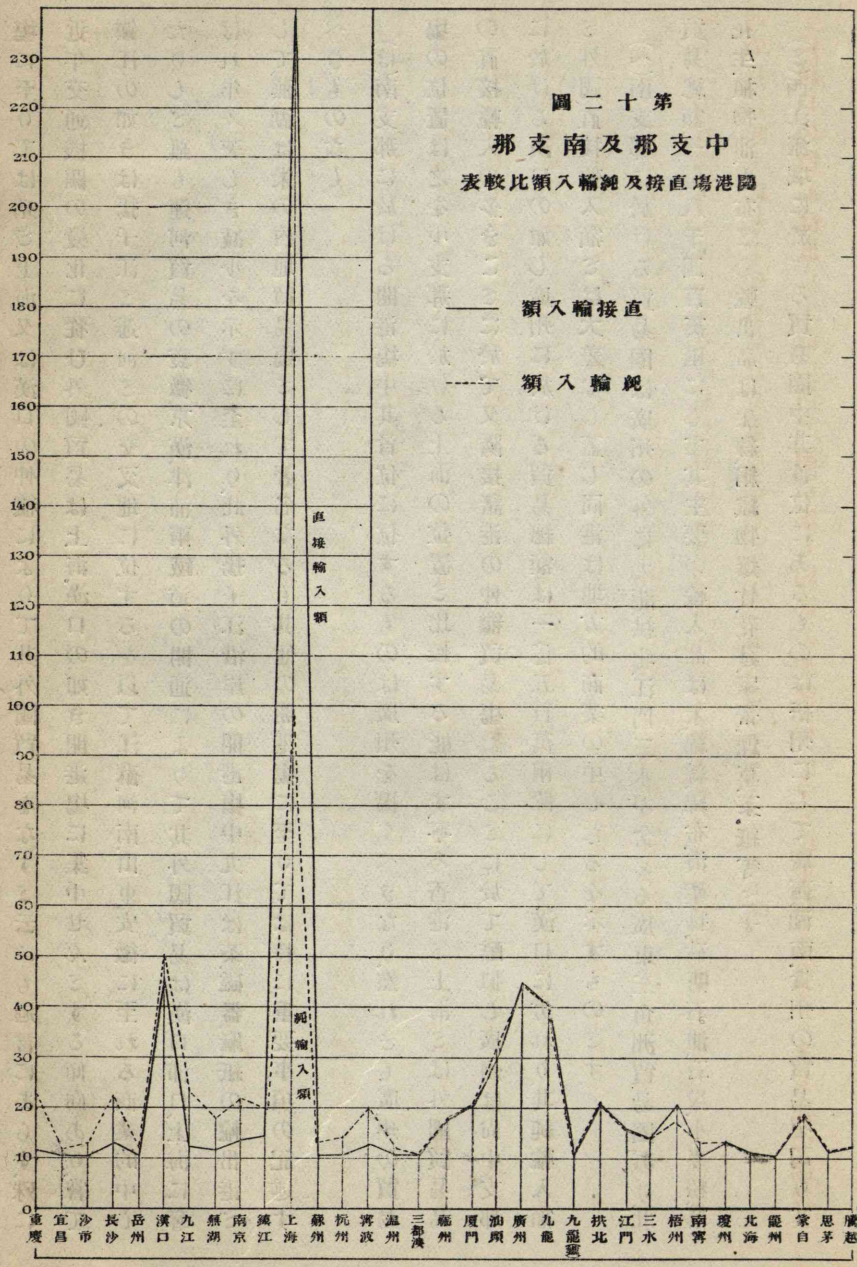
輸入……九、六二〇、二二四

上海に於ける輸出入品の種類を掲ぐるは即ち支那貿易品の全部を列舉するに過ぎざるを以て特に其記述を試みず、一度此地に入りたる外國品は各開港場に分配し各開港場より輸出するものは皆一度此地を經て海外に出づ、左に外國品の直接輸入額と純輸入額との比較表を掲げたればこに據りて各開港場に於ける貿易の狀況を察するを得ん。(第十二圖參照)

(ろ)重慶は千八百七十六年の開港に係り其貿易額三千七百萬兩を有す、此地は四川省の寶庫を控ゆるを以て商業上將來有望の地なるも揚子江中流地との間に三峽の嶮を介在し交通不便なるを以て貿易は開港以來依然として增加せず、重慶より出づるものは鹽、砂糖、白蠟、藥材、漆、絹織物にして入るものに絹布、海產物、石油等あり。

(は)漢口は千八百五十八年の開港に係る、其位置は支那內地の中央に位し揚子江、漢江の流域を控へ湖南省湘江及沅江流域に通ずるを以て商工業は此地を中心として著しき進步を示し殊に近年京漢鐵道の開通に從ひ河南及其他の北支那に於ける貿易品の此地を通過するもの多きを加へたり、將來粵漢鐵道の開通するに至るときは當地に於ける商業益盛況を呈するならん、民國三年に於ける當港の貿易總額一億四千百萬兩なり、但し外國品の直接輸入額は未だ多からず、之を上海の直接貿易に比するに甚だ微少なり、漢口に於ける重要輸入品は綿絲及絹布、茶、砂糖、銅、石油、染料、袋類等にして輸出品は茶、獸皮、油類、煙草、苧麻、生絲等とす。

(に)漢口の貿易は既に上海の貿易圈に屬し同港の仲繼によるもの少なからずとす、其他の開港


第十二圖
中支那及南支那
開港場直接及純輸入額比較表
直接輸入額
純輸入額
直接輸入額
純輸入額
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
110
120
130
140
150
160
170
180
190
200
210
220
230
重慶
宜昌
沙市
長沙
岳州
漢口
九江
蕪湖
南京
鎮江
上海
蘇州
杭州
寧波
溫州
三都澳
福州
厦門
汕頭
廣州
九龍
九龍租借地
拱北
江門
三水
梧州
南寧
慶州
北海
龍州
蒙自
思茅
騰越

場に至りては殆ど上海又は漢口の仲繼によりて其外國貿易をなすと云ふも過言にあらず、殊に近年交通機關の變化に從ひ外國貿易は上海、漢口の如き開港場に集中せんとする傾向あり、嘗て鎭江の如きは揚子江と運河との交叉地に位するを以て江蘇、河南、山東、安徽に至れる商業的中心たりしと雖も運河貿易の衰微、京漢、津浦兩鐵道の開通によりて其外國貿易は漢口、浦口、上海に奪はれ年々著しき減少を示すに至れり、此外揚子江沿岸の開港場中九江は茶、磁器、麻、紙の輸出港として、蕪湖は米の內地貿易場として著名なるも其他の開港場に至りては特に重要事項の記述すべきものなし。

(ほ)南支那に於ける開港場中其首位に位するものは廣州を揭ぐべきなり、然れども廣州の貿易場の位置は之を中支那に於ける上海の位置と比較する能はず、寧ろ香港と上海とは外國貿易品の直接輸入の多きことに於て又隣接諸港の仲繼貿易場たることに於て酷似し廣州は尙中支那に於ける漢口の如し、廣州に於ける貿易總額は一億五百萬兩餘にして漢口に劣れり、其純輸入額と外國直接輸入額とは大差なし蓋し同港は地方的商業の中心たるを示すものとす。

(へ)南支那に於ける貿易圈は廣州の外に九龍、拱北、江門、三水を含める廣東三角洲貿易圈あり、其貿易總額一億八千四百萬兩にして其主要の輸入品は米、綿絲、綿布、海產物、砂糖、石油、石炭、小麥粉、落花生、植物油、土布とし輸出品は生絲、絹織物、爆竹、花莚、家畜、煙草、茶、紙等とす。

(と)西江流域に於ける貿易圈中其首位にあるものは梧州にして廣西、湖南、貴州の貿易を司り其

貿易總額千二百萬兩こし輸出品中主要なるは植物性揮發油、家畜、皮革、米等こす。

(ち)閩浙地方に於ける貿易圈には汕頭、厦門、福州等小中心地多し、其中汕頭を最も盛なりこす、汕頭は廣東、福建二省に跨り韓江の上流に據りて江西省に亙れる一貿易圈の中心地にして生產物に富めるのみならず海外移民の產出地なるを以て貿易盛なり、其貿易總額五千三百萬兩にして厦門、福州を凌駕す、輸出品は砂糖、煙草、紙、土布等こす、厦門及福州は共に貿易總額千八百萬兩こし、厦門は臺灣この貿易に於て、福州は茶の貿易に於て知らるゝも近年衰微の兆あり、而して輸出品は厦門にありては茶、紙、煙草、砂糖を、福州にありては茶、木材、紙、果實を出す。

(ト)外國この貿易關係

支那こ諸外國この貿易關係を表示すれば左の如し(民國三年調單位海關兩)

	輸入	輸出	合計
香港	一六六、四九八、七六三	九三、三九九、七五八	二五九、八九八、五二一
澳門	五、九四〇、二二一	四、二一五、九二一	一〇、一五六、一四二
新嘉坡	七、五五七、三六六	六、九五二、七一六	一四、五一〇、〇八二
安南	五、六一七、七三二	一、八〇七、七八〇	七、四二五、五一二
英領印度	三九、一三四、六一六	六、七七六、八一九	九、五一三、五五〇
爪哇	六、五九一、二一七	二、九二二、三三三	四五、九一一、四三五

英國	一〇四、九三四、三八九	二二、〇一六、五五六	一二六、九五〇、九四五
獨逸	一四、一〇三、九六九	一〇、二七二、八一七	二四、三七六、七八六
佛蘭西	四、九三八、五五七	二二、八六二、三一七	二七、八〇〇、八七四
露ノ西亞	二一、九一六、二六二	四一、四九四、一六八	六六、九〇二、四一四
日本	一二〇、六八七、〇五九	六三、四七六、八五九	一八四、一六三、九一八
米國	四〇、七八二、八五三	三九、八六〇、八七五	八〇、六四三、七二八

諸外國と支那との貿易關係上其首位を占むるは香港なるも香港は自由港にして同地に於ける輸出入貨物の統計を得る能はず、從て其貿易關係の何國たるやを知ること難し、香港に次で最も重要なるは我國にして英、米、露之に次ぐ、之を輸出入に分ちて見るに輸入にありては香港、日本、英吉利、露西亞、獨逸、米國、英領印度、新嘉坡の順にして輸出にありては香港、日本、露西亞、米國、佛蘭西、英吉利、獨逸、和蘭、伊太利の順とす、但し民國三年は歐洲戰爭の影響を受くるを以て平時の順位と異れるあり即ち獨逸の貿易額の著しく變動せるが如し、故に左に參考の爲めに民國二年に於ける貿易の順位を示せん。

輸入　香港、日本、英吉利、英領印度、米國、獨逸、露　亞、海峽植民地

輸出　香港、日本、露西亞、佛蘭西、米國、獨逸、英吉利、和蘭、伊太利

英國との貿易關係は輸出品に茶、大豆、豚毛、植物性油、屑絲、獸皮、麥稈眞田、輸入品に綿製品、紙捲煙

草、鐵道材料、鐵類毛製品あり、其綿製品の多額に達することは既に前々屢述べたる所の如し、蓋し英國本國の支那貿易は從來諸外國の首位にありたれども近年日本の支那貿易の增進に因りて其下風に立つに至り且つ近年は其貿易の增進を示さず、然れども英國本國の外に香港、英領印度、新嘉坡等其屬領地の貿易を加ふるときは尙支那貿易總額の半に達す、英人の商業上重きをなすや偉大なりと云ふべし。

米國との貿易關係は生絲、茶、植物性油、皮革、獸毛、麥稈眞田を輸出し綿布、石油の外小麥粉、木材、鐵類、紙捲煙草を輸入す、其輸出は漸次增加を示すと雖も輸入は增進せず。

露西亞との貿易關係は茶の外豆、穀物、小麥粉、薪材、家畜、肉類、種子類、植物性油を輸出し紙捲煙草、衣服、綿布、石油、袋類、葉煙草を輸入す、而して其貿易額として示せるものは歐露の外西比利亞、浦鹽方面の陸路貿易多く主として北支那との貿易を多しとし中支那よりは輸出品の重要部を占むる茶あるのみ、而して露西亞との貿易は輸出を主要とするものにして近年日進月步の增進を示すに至れり。

英領印度との貿易關係は阿片、綿絲の外棉花、茶、袋類を輸入し、輸出には重要なるものあらず、蓋し印度との貿易は片務貿易にして而も年々著しき增加を示せり。

佛蘭西及獨逸との貿易關係は恰も露西亞及英領印度に對する貿易に類す、即ち佛蘭西との間は輸出貿易を主とし、獨逸との間は輸入貿易を主とす、而して增進の程度は獨逸を大なりとす、而

して佛蘭西に輸出するは主に蠶絲とし麥桿眞田、獸皮、芝蘇、絹紬、茶、落花生之に次ぎ、獨逸より輸入するは染料、鐵道材料、鐵器、毛製品、紙類にして支那より獨逸に輸出するは芝蘇、獸皮及茶なり。

白耳義及和蘭との貿易關係は獨逸と同じく輸入を主とし其輸入品も同樣なり、之に反し伊太利との貿易關係は其輸出を主要とすること並に輸出品種類も共に佛蘭西に類す。

日本との貿易關係は棉花の外豆糟、大豆、麻類、銑鐵及鐵鑛、芝蘇及種子類並に石炭、鷄卵、牛骨を輸出し、綿絲、綿布の外精製糖、銅、石炭、燐寸、木材、海產物、石鹼、藥材、機械、洋傘等を輸入す、抑日本の支那貿易は日清戰爭後急激に增進し日露戰爭後更に顯著なる進步を示すに至れるものにして之を日本對外貿易に比するに近年は既に遙に對歐貿易の上に位し對米貿易をも凌駕するに至れり、而して日支貿易の性質たるや支那より原料品及農產加工品を輸出し、日本よりは加工品を出すの現狀にして、日本國工業の發達するに從ひ益々原料品を支那に仰ぐ必要を生じ、其販路を交通の便利なる支那に仰ぐを最も得策とするを以て將來日支貿易は年と共に增進するに至るべく、更に兩國の密接にして親善なる關係は經濟的共同利益の上に置かるべし。

(二)陸路貿易　は古來支那と西比利亞、印度、緬甸、印度支那方面との間に行はれたるべしと雖も、通商條約に依りて貿易を開始せるは露國との間に於ける千六百八十九年のネルチンスク條約による、露國は其後滿蒙を經て西比利亞沿海州及露本國と通商を開くに至れるも主として北支那との間の貿易にして中支那及南支那とは間接の貿易をなすに過ぎず、

英國との陸路貿易は西藏及緬甸との間に於ける貿易にして西藏とは光緒十二年に、緬甸とは光緒二十年に條約を定む、而して西藏貿易は四川省打箭壚を經由し亞東に入るものにして磚茶（十四萬磅）、綿製品（二萬五千磅）、絹（一萬五千磅）を輸出し麝香（七萬五千磅）、金（二十四萬五千磅）を輸入す、緬甸との貿易關係は雲南省騰越緬甸間の貿易にして純貿易總額三百萬兩とし輸入は輸出の約三倍あり、而して棉花、石油、燐寸、洋傘、寶玉を輸入し麝香、鷄卵、雄黃、蓆類を輸出す。

佛蘭西との陸路貿易は雲南、廣西と東京との間即ち廣西省の龍州、雲南省の蒙自、思茅、河口に於て行はるゝものとす、其貿易額は蒙自の約千六百萬兩を除けば龍州は僅に十萬兩、思茅の二十二萬兩に過ぎず、蒙自には錫の外亞鉛、安質母尼の輸出多くして輸出超過を示すも其他は輸入超過なり。

二　通　貨

何れの國を旅行するものも常に細心注意を怠らざるは通貨の變化に伴ふ所の損得にありとす、然れども世界各國中支那の如く通貨の不統一なるものあらざるべし、支那一國を旅行するは通貨の上より見るときは恰も歐洲諸國を巡るが如し、一省より隣省に至るは尚ほ甲國より乙國に進むが如し、殊に我國の如く金貨本位の制確立し兌換券の信用確實にして不換の憂なく補助貨の價格に何等變動を認めざる國にありては日常の商業、賣買、兩替に際し何等貨幣に關する考

慮を要せずと雖も支那にありては即ち然らず、各省は勿論一縣内にありても地方々々により銅銀より銅錢に至る迄各其日の相場を有し大市街には朝夕に於て相場の變化を示せり、而して各種の通貨は十進法によるを原則とすれども、時價は必ずしも然らず、制錢十文は以て銅元當十のもの一個に對すと限らず、銅元十個は小洋一個に當らず、更に小洋十個は大洋一個に相當することなし、假に小洋二角の買物をなし大洋一元を出すとき其釣錢として小洋十角乃至十一角を得ること少なからず、故に支那の商業は其卸賣買にも小賣買にも其取引勘定に對する通貨の種類を明かにするを要し其種類によりて初めて價格定まるものとす、是を以て支那人の如く其老若男女を問はず通貨に對する注意の細心なるものあらざるべし、彼等は其商業取引に對する金錢の受渡に際し之に使用する通貨の實造なるや否やを檢し、次に正しく使用區域に屬するものなるや否や、其當時の値錢即ち時價の幾何なるやを確むるにあらずんば決して其受渡をなさゞるの習慣なり、茲に一銀行に於て銀元一千元の拂渡を受くるものありとせんか彼は店頭にありて各一枚に就き銀色、打音等によりて實造、純分、大小を鑑識し然る後に其當時の市價を以て授受をなすの例なりとす、其時價たるや地金の價格を以て標準とし、必ずしも其銘價に據るにあらざるを以て時價の變動の盛なるや著しきものあり、且つ通貨の種類に至りては内外國の貨幣雜然として混淆し其複雜なること蓋し諸外國に嘗て見ざる所なり、此の如き貨幣制度の亂雜は直接日常の賣買より内地商業さては外國貿易に至るに從ひ益々影響する所甚だ大なるに至る、故に支

那貿易事業者の注意すべきは商品の取引と共に通貨の市況及銀爲替關係の狀況にあるは人の知る所なり、左に中支那及南支那に於ける通貨の種類、金融機關並に通貨流通區域を略述せん。

(二)通貨の種類

現今支那に流通する通貨中銅貨には銅錢と銅元とあり、銀貨には銀兩、銀元、小銀貨あり、紙幣即ち兌換券には以上の制錢、銅元、銀兩の硬貨に對する官票及私票あり。

(イ)銅錢　現時流通する銅錢中最も主要なるは制錢にして此外古錢、私錢、外國錢の之と混用せらるゝものあれども多からず、又新疆地方に普爾錢と稱し、戶部の鑄造に係れる樣錢あれども中支那及南支那には稀なり、古錢は明朝以前に鑄造せられたるもの又私錢は犯禁して私鑄せるものにして沙穀、風皮、魚眼、灰板等の如き又大平通寶の如き種類あり、外國錢は日本、朝鮮の銅錢にして我國に支那錢の流通する如く支那に於ても亦我國の寬永通寶の流通少なからず。

制錢中現時流通するは主に淸朝の鑄造に係れるものなり、制錢は圓形方孔なること我國に見るものと異なるなく、一個を以て一文とするも元來銅錢鑄造の所は戶部寶泉局、工部寶源局並に各省に於て行はれ其鑄造の時期は順治、康熙、雍正、乾隆、嘉慶等十數回に亙りて行はれたるを以て其大さ及重量一定せず、然れども普通は大錢及小錢として區別せらる、從て其市價は銅錢の種類に據り又所によりて一樣ならず、抑淸朝の制は制錢千個を一串文と稱し銀一兩に該當すべき規定なれども現時は一串三百文乃至一串六百文となり、銀元に對して一串文內外を示せり、但し實

際普通制錢千個は一串文に當らず其大小並に惡錢混入の多少によりて九百八十文に當るもの、九百七十文に當るもの等種々あり、之を九八錢、九七錢、九六錢、九五錢、九四錢等と云ふ、此外中錢と稱するものには四百八十文、五百文に當り、小錢と稱するものには百文乃至百六十文に當るものあり、中支那及南支那に於ては九八錢最も廣く行はるゝも安徽、浙江二省には中錢の行はるゝ地あり、小錢は滿洲方面に於て行はるゝのみ。

（ロ）銅元　銅貨の騰貴するに從ひ銅錢即ち制錢を鎔解するもの多くして銅錢の拂底を告げ又新に鑄造せらるゝ銅錢は其重量を減じたるに拘らず銅錢鑄造に對する收支償はずして之が補充充分に行はれず、益々銅錢の不定を告げたるを以て之が補充の目的を以て光緒二十六年我國の銅貨に倣ひ廣東省に於て銅元の鑄造を開始するに至れり、次で福建、江蘇之に倣ひ其効果顯著なりしかば更に各省に銅元局を設け盛に增鑄を行ひたるを以て銅元俄に國內に充ち其市價下落し物價騰貴したるを以て民國三年愈々鑄造額を制限し且つ財政部自ら造幣廠を管理し天津に其總局を、武昌、南京、廣東、成都、雲南、奉天の六箇所に分廠を設け其他各省の銅元局を全廢するこゝとなれり、但し長沙、安慶の銅元局に於ては最近迄尙其鑄造を繼續せり。

銅元は制錢の代用として鑄造せられたるものにして其一個は十文に相當し制錢一串文は銅元百個に相當するものなれども制錢十個と銅元一個との市價は日々變化ありて一樣ならず。

（ハ）銀兩　支那に於て銀を貨幣とするに至れるは唐宋以後と稱す、清朝に至りては其流通益盛

にして官民共に銀地金を以て貨幣の代用こせり、近時外國銀貨の流入せるもの多きに從ひ支那に於ても亦銀貨幣の鑄造をなすに至れりこ雖も尙依然こして生銀即ち銀地金を使用し之を銀兩こ稱す、但し南支那方面には銀兩の使用甚だ少なし、而して銀兩こして使用する地金の種類には銀條、銀塊、碎片ありこ雖も其中銀條は千兩以上のものにして之を大條銀こ云ふ、銀塊は普通は取扱の便利の爲に鑄造したるものを使用し之を銀錠こ稱す、銀錠には元寶、中錠、小錁の三種あり、元寶は五十兩內外にして馬蹄銀こ稱するもの是なり、中錠は十兩內外のものにして其中小元寶、錁子こは其形の異なれるを云ひ、小錁は五兩內外のもの、碎銀は更に小なる銀粒を云ふ。

銀兩の重量單位は兩にして十分の一每に錢、分、厘の單位あり、兩の標準は中央政府に於ては庫平こ稱し海關に於ては關平こ稱す、此外漕平、司碼平、公砝平、估平、洋例平、市平、錢平あり、但し漕平は漕米平、司碼平は廣東の官平、公砝平は淸朝全國爲替に用ひし公法平、估平は公估局の平、洋例平は外商この取引に用ひし平、市平は地方的に用ひらるゝ平、錢平は銀錢相場の標準こなるへき錢莊の平なり、此の如く平の種類甚だ多きを以て一銀錠を鑄造するこきは平の種類及重量並に標準銀に對する品位を明かにするを要す、之が營業を爲すものを銀爐こ稱し、其鑑定業者を公估局こ稱す、銀爐及公估局に於ては一定の平に據り現實量を計り之を標準銀に比し其成色に據り申水又は去水を加減し以て銀錠の價格こす、上海に於ては更に之に百分の九十八を乘じ之を九八規銀こ稱し通用銀こす、左に現時中支那及南支那に使用する平の重量及値を比較せん。

庫平兩	一〇〇兩に對し	北京公砝平
海關兩		天津行平
上海漕平（申漕平）		漢口漕平
漢口漕平（漢漕平）		廣東司碼平
廣東平（司碼平）		海關兩

五七五、八二	グレーンス
五八一、四七	
五六五、七	
五六二、八七	
五七、九、八四	

一〇一、八〇
一〇一、五八
一〇〇、五〇
九七、五六
八九、七六

兩

標準銀は銀兩の標準的成分を示すものにして有形のものにあらず、大凡現時標準銀として最も廣く行はるゝものに紋銀、二四寶、足銀の三種あり、庫平及海關平は足銀を、上海地方は紋銀を、揚子江一帶は二四寶（又は二七寶）を用ふ、而して是等の標準は古來支那人の唱ふる所によれば紋銀五十兩に申水三兩を加ふべきものを足銀とし、二四寶とは二兩四の申水を加ふべきものにして二四五寶、二五寶、二七寶等は皆此の如き意味に用ゐらるゝものとす、此標準によれば足銀は千位

にして二七寶は九九四位、二四寶は九八八位、紋銀は九四〇位となる譯なり、但し銀爐及印度造幣局の檢定に依れば紋銀は九三二位、二四寶は九八〇位、足銀は九九二位となると云ふ。

(三)銀元　銀元は一弗、一圓又は一元と稱する圓銀にして內外國の鑄造に係るもの數種あり、之を總稱して大洋と稱し、洋銀と支那銀元との二種あり、大洋は支那に於ては流通の際錢莊、銀行等に於て打印せらるゝ習慣あり、打印の爲め傷を受けたるを爛板又爛洋と稱し然らざるを光洋又は花邊と稱す。

(い)洋銀輸入の嚆矢は西班牙弗なり、こす千七百七十三年西班牙人の比律賓を介し支那貿易を開始するや西班牙弗の南支那に入るもの甚多く中支那方面に至る迄流通せり、西班牙弗に次で輸入せられたるは墨西哥弗にして千八百二十四年同政府獨立後盛に之を支那に輸入し今尙支那に於ける通貨の主要部を占む、此外千八百六十六年以來輸入せられたる香港弗(英國貿易銀)、千八百九十五年後の安南弗、米國貿易銀、明治初年より輸入せられたる日本圓銀並に海峽植民地、比律賓蘭領印度のものあり、左に主要なる銀元の品位を列擧せん。

茲に揭ぐる標準品位及重量に據りて墨西哥弗、日本圓銀、香港弗を比較するに我圓銀一千弗に對し墨西哥弗九九五、六五七弗にして香港弗は一〇〇〇、〇三六弗となる。

名稱	支那名	重要（グレーン）	成分（位）	純分（グレーン）
西班牙弗	カロラス弗又ハ本洋	四〇二、五	九〇〇、	三六二、二五
墨西哥弗	鷹洋、英洋	四一七、七四	九〇一、一七	三七六、四四
香港弗	站人、香洋	四一六	九〇〇	三七四、三八
安南弗	ピアストル弗	同	同	
米國貿易銀		四二〇		
日本圓銀	龍洋	四一六	九〇〇	三七四、四
湖北銀元	同	四一四、九三七	八九九	
江南光緒銀元	同	四一三、二〇一	八九五	
江南宣統銀元	同	四一五、〇五	九〇〇	

(ろ)支那銀元は千八百九十九年廣東に於て鑄造せられたるを初めとなす、武昌、南京之に次ぎ其後福州、杭州、安慶、成都、並に奉天、天津に銀元局を設く、就中武昌、南京、天津、廣東に於て鑄造せられたるもの多し、此外民國三年革命記念として鑄造せられたるものあり。

(ほ)小洋は銀元即ち大洋に對する名稱にして小銀貨を云ふ、其單位は角（又は毫）にして一角、二角最も多く又稀に五角、半角あり、千八百九十五年廣東銀元局に於ける鑄造後各銀元局に於て盛に製出せらる、南支那には此外香港小銀貨流通す、左に小銀貨の重量及品位を示さん。

支那	五角	重量庫平	○、三六〇兩	銀八六〇位
	二角同		○、一四四	八二〇
	一角同		○、○七二	同
	半角同		○、○三六	同
香港	五十仙		二〇九、五二グレーン	八〇〇
	二十仙		八三、八一	同
	十仙		四一、九〇	同
	五仙		二〇、九五	同

（ヘ）兌換券　は鈔又は鈔票と云ひ宋、金、元、明各朝に發行せられたることあり、清朝には順治及咸豐の頃銀票及錢票發行せられ光緒末年官錢局、官銀號設立せらるゝに次で大清銀行、交通銀行の興るや盛に紙幣を發行し、更に官商合同の省銀行及私立銀行は制錢、銅元、小銀貨、銀元並に銀兩に對し兌換券の濫發を行へり、是等の兌換券の外に約束手形に相當すべき錢莊及普通商家の發行に係れる莊票、錢票、銀票等あり、革命前後四川、湖南廣東の如き動亂地方に於ては紙幣の濫發殊に甚だしかりしを以て紙幣の價格頓に下落し、民國二年末より三年初めには其極度に達し一元票は四川省に於て其額面の六割九分となり、湖南省にも亦之と大差なく、廣東省に至りては約三角半に下落し殆ど流通不能に陷れるを以て遂に中國銀行に正貨準備の增額を行ひ同銀行兌換券を以て不換紙幣の回收を行ひ徵稅又は鐵道收入に不換紙幣受入を强制する等、あらゆる策を施

して漸く其信用を恢復するに勉めたり。

外國銀行中兌換券を發行せざるものなく兌換券には兩票と弗票との二種あるも弗票を主とす。

(二)　金融機關

(イ)支那從來の金融機關　としては一般商業に關するものに錢莊、銀號、當舖あり、爲替を目的とするものに票莊、票號あり、官金の取扱に從事するものに官銀號あり、銀兩の鑄造に關係せるものに銀爐あり、新式の金融機關としては一般商業に關する商業銀行、爲替を目的とする中國銀行及交通銀行、官金取扱を主とする省銀行等ありて漸次從來の金融機關に代らんとす。

錢莊、錢舖、銀號、銀莊は其名異なれども業務の大小に因りて異なるのみ、當、押、質と稱する當舖即ち質屋も亦之と同營業をなすものなり、營業は預金、莊票發行、貸付、爲替割引、洋銀賣買等にして中支那に於ては上海及漢口に各約七十軒、南支那には八十軒あり。

票莊は票號又は滙兌莊と稱し全國の爲替殊に官金爲替、官金の保管、官吏の預金を取扱ひたるものにして山西票莊二十二軒の獨占たりしも革命後經濟界の擾亂の影響を受け業務を持續する能はず營業を中止し新式銀行之に代るに至れり。

官銀號及び官錢局は其の組織を改めて省立銀行となれり、中支那及南支那に屬するものは左の如し。

四川銀行、湖北官銀錢局、湖南銀行、江西民國銀行、安徽中華銀行、江蘇銀行、浙江銀行、福建銀號、廣東官錢局、廣西銀行、貴州銀行、雲南富滇銀行。

中國銀行は大清銀行の跡を受け民國二年開業せるものにして之を支那の中央銀行とす、其資本金六千萬元と稱し國庫の管理に屬する一切の業務、關稅、鹽稅其他一省の收入を保管するを以て北京に本店を置き各省に支店及代理店を設くること左の如し。

四川省	重　慶
湖北省	漢口、宜昌、沙市
湖南省	常　德
江西省	南　昌
安徽省	安慶、蕪湖、大通、蚌埠
江蘇省	上海、鎭江、南京、清江浦、下關、揚州、無錫、徐州
浙江省	杭州、甯波、蘭谿、溫州、嘉興、湖州、紹興
福建省	福　州
廣東省	廣州、瓊州、汕頭、江門、潮州
廣西及雲南省	未設

交通銀行は元來郵傳部の直轄銀行なりしが民國三年官商合辦に改め其資本金を一千萬元と

し交通部の特別會計を取扱ひ尚内外爲替、兌換券發行並に普通商業銀行の業務を行ふ、北京に本店を置き其支分行所在地は湖北省漢口、湖南省長沙、江西省九江、江蘇省上海、無錫、浦口、揚州、徐州、鎭江、蘇州に在り。

殖邊銀行は資本金二千萬元と稱し邊疆地方の實業に資するにあり、鹽業銀行は資本金五百萬元とし鹽業に投資するにあれども未だ成績の見るべきなし、中國通商銀行は資本金五百萬兩にして外人を聘用し其信用外國銀行に異るなし、上海に本店を、漢口、廣東、香港其他北支那、新嘉坡等に支店を置く、此外勸業銀行、新華儲蓄銀行あり。

(ロ)外國銀行　支那と諸外國との貿易は數百年來行はれたりと雖も從來は片務貿易にして支那よりの輸出品多く外國より貨幣を輸入するを常とせり、支那の開港後輸出入共に增進し玆に爲替の必要を生じ數多の銀行設立せらるゝに至れりと雖も盛衰常なし、現時營業をなすものを擧ぐれば左の如し。

名稱	本店	支店	開業期
喳打銀行(麥加利)	倫敦	天津、上海、漢口、福州、廣東	西曆一八五七
滙豐銀行(香上)	香港	(大連、天津、北京)漢口、上海、厦門、廣東、福州	一八六七
有利銀行	倫敦	上海	一八九三

横濱正金銀行	横濱	滿洲及北支那各地上海、漢口	一八九三
臺灣銀行	臺北	漢口、九江、上海、福州、厦門汕頭、廣東	一九一一
東方滙理銀行(佛蘭西銀行)	巴里	天津、上海、漢口、福州、廣東	一八九八
中法實業銀行			
德華銀行(獨亞銀行)	伯林	北支那、山東各地、漢口、上海、廣東	一八八九
華俄道勝銀行(露西銀行)	ペテルグラード	滿洲、上海	一八九六
花旗銀行	紐育	天津、北京、漢口、上海、厦門廣東	一九〇二
華比銀行(白耳義行)	ブラッセル	天津、上海	一九〇二
晞囑銀行(和蘭銀行)	アムステルダム	上海	一九〇三
荷國安達銀行(蘭領印度商業銀行)			一九〇六

(三) 通貨の流布區域

(イ)制錢は古來支那の法貨にして其流通は洽く支那內地一般に亙るも雖も銅價の騰貴の爲鎔解せられたるもの多く、且つ清末には既に其新鑄造行はざりしを以て著しく其流通額を減ぜり、光緒年間に至り其代用として銅元を鑄造し之を流通せしむるに至りてより銅元の流通顯著なるものあり、然りも雖も制錢は古來久しきに亙りて使用せられたるも極めて小額の賣買に必

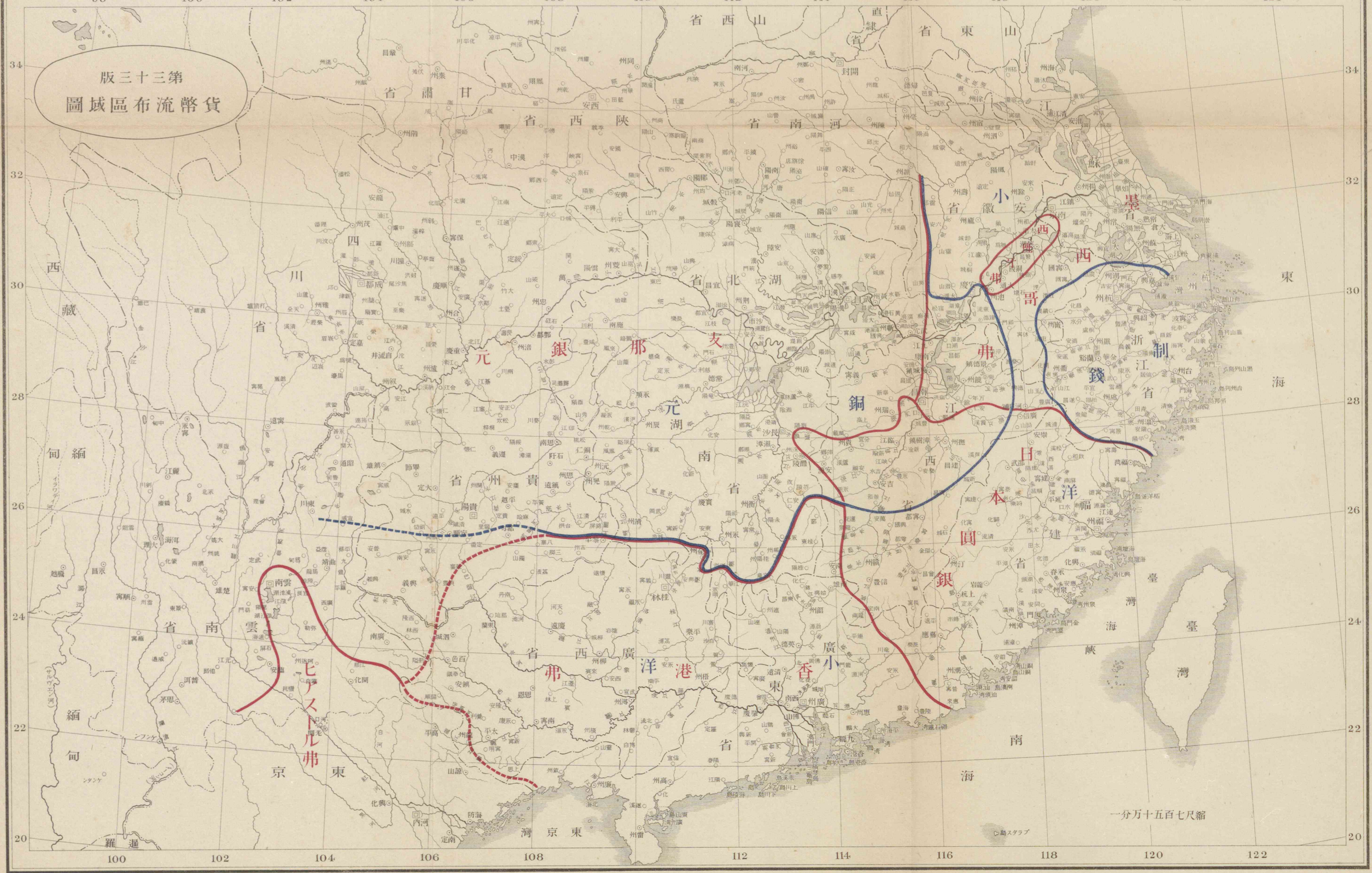
要なるに因り今尚各地に使用せられ殊に山間の僻地に於て生活程度の低級なる地方例へば湖南、廣東兩省界地方の如き所に於て其流通多きを見る、此の如く制錢は各地に其流通を見ざるなきも現時最も流通の盛なるを浙江省の南部とす、(第三十三版參照)

浙江省南部に於ては福建省界地方に至る迄並に錢塘江の支流新安江に於ける安徽省の徽州附近に至る迄制錢の使用最も盛にして是等の地方に於ては鷹洋其他小洋、銅元通ぜざるにあらざれども制錢は恰も本位貨幣の如く且つ此地方に於ては制錢を使用することと最も有利にして銅元一個即ち十文は制錢七文乃至九文、小洋一角は百文、一元は千百文とし浙江省以外の地に比すれば銅元一個に對し既に一文乃至三文の差額を示せり。

(ロ)銅元　は制錢の缺乏を補充する目的により各省に於て鑄造せられたるものなれども濫造の結果各省に充滿し市價頓に下落したるを以て銅元局を廢合し發行額を制限せる程なるにより其流通區域は各省の隅々に行渡れりと雖も現時流通の盛なるは四川、湖北、湖南の三省並に江西省北部、江西安徽兩省界地方とす、第三十三版によりて銅元流通區域の境界線を知るべし。

揚子江中流及上流に屬する上述諸省の銅元流通區域に於ては銅元は實に本位貨幣の如く殆ど總ての商取引は銅元及其の票子を以て行はるゝものとし官金、納稅皆銅元を使用し銀元を使用するは多からず、殊に小銀貨に至りては開港場又は省城に於て使用せらるゝ、外僻地に至れば縣城所在地に於ても其存在を認むる能はざる所多し、之に反して銅元流通區域とせる地方の外

第三十三版
貨幣流布區域圖



即ち揚子江下流並に南支那一帶に於ては一般に銅元の流通甚だ稀にして殊に福建、浙江二省に於ては銅元を使用する地少なし、但し開港場附近に於ては比較的多く流通すと雖も一般に銅元よりも小銀貨を好むの風あり。

(ハ)小洋　の流通盛なるは揚子江下流地及南支那一帶にして第三十四版には小洋と銅元との流通境界線を劃せり、今該境界線を追踪するに揚子江本流に於ては安徽省の安慶より皖北の宿松、黃梅を過ぎて湖北安徽省界の東を走り皖南の祁門、婺源より江西省廣信、鉛山を過ぎ江西、福建省界の分水嶺に沿ひ更に西方に彎曲し贛江の中流なる泰和萬安間並に湖南省茶陵攸間、湖南省南部の桂陽州、道州、を過ぎ全興安間に於て廣西省の北東隅を横切りて再び湖南省新寧、城步に至る、而して之より西方貴州に於ては未だ之を明かにせず、以上述べたる境界線は間接に地理及行政の區劃に關すべきも直接には商業上の影響を受くること最も多かりしを示せり、即ち該境界線と地理及行政區劃との距離の大なるは江西、廣東省界に如くものなし、北江より贛江に亙りて省界を通ずる所の該交通線路は古來揚子江流域と廣東方面との間の商業の盛なりし所にして初め外國貿易も亦此梅嶺街道に於て行はれ江西省は常に廣東方面に對し輸出超過を示すのみならず商業上の勢力は廣東人の掌中にありしを以て小洋を主とする廣東通貨は滔々として江西省南部に進入せるものと考へらる、湖南省南部の商業も亦梅嶺と同樣に摺嶺街道に於て行はれ廣東の通貨は摺嶺の北方に至れり、獨り湖南省永州より廣西省桂林に至る間湘江に沿へる地

方に於ては湖南省の通貨は廣西省全州の西方興安附近に入り込み湖南省内に於ては小銀貨の流通を見ず、是れ湖南省は此地方に於て米、鹽其他雜貨品を廣西省に仰ぎ入超を示すに因らん。

江西省錦江上流の廣信附近に於ては江西省は浙江省に對し出超たること廣東省に對すると同樣なりこと、江西省内に於ては浙江省の小洋の流通を見るべし、然るに江西省は安徽省の祁門及婺源の産茶地に對し入超を示すこと甚だしきを以て安徽省内に江西省の通貨の流通を見るものなるべし。

小洋の流通區域に於ける小洋の種類は地方によりて相違あり、即ち揚子江下流に於ては江南銀元局鑄造のもの最も多く、浙江省南部には江南、福建及廣東のもの、福建省に於ては福建廣東及香港のもの、廣東、廣西省には廣東及香港のもの最も多し而して浙江省には揚子江中流地方の小銀貨の流通なきにあらざるも福建、廣東には之を流通せず。

揚子江の中流及上流地方には主に銅元を流通し小洋少なきも開港場及省城には小洋通ず、其種類は自省のもの多く其他揚子江下流地のものを通ずるも廣東及福建のものを通ぜず。

(二)銀元　の流通は外國銀元に始まりしこと既に述べたる所の如し、而して外國銀元流布の出發點は常に外國貿易の盛なりし南支那にあり、之より漸次中支那及北支那に波及するに至れるものこと、今最初流布を起せる西班牙弗より順次其他の銀元に及び現時に於ける流布區域を述べん。

西班牙弗は初め比律賓を經て廣東地方に入るや一般支那人の歡迎する處となり當時の沿海開港場には到處西班牙弗を見たり、殊に蕪湖の米市場は廣東地方に米を供給せる其商取引の關係より西班牙弗の輸入盛なりしを以て西班牙弗の流通は忽にして揚子江下流地方に蔓延するに至れり、然るに其後墨西哥弗の輸入盛となるや西班牙弗は殆ど其跡を南支那に絶ち僅に廣東、汕頭、厦門の滙豐銀行に於ける通貨の標準價格として使用せらるゝに過ぎず、然るに中支那に於ては今尚蕪湖を中心として南京及安慶に於て流通す（第三十三版參照）

墨西哥弗は西班牙弗と共に比律賓を經由し澳門、廣東、厦門、汕頭に輸入せらるゝもの多額に達し同地商人の內外商取引に使用せられたり、同地方と中支那との內外商業の發展は或は沿海航路に依り或は梅嶺、騮嶺の陸路に依り盛大となり其當時西班牙弗の米取引に使用せられたる如く墨西哥弗は棉花、茶、生絲等雜多の商取引に使用せられたるを以て江蘇、浙江二省に流布し其地盤を固くせり、上海の內外商業地として發達するや墨西哥弗は揚子江沿岸一帶に流布し漸次各省に傳播するに至れり、然るに其後廣東地方の香港弗、福建地方の日本圓銀の流布に依りて墨西哥弗は西班牙弗の轍を踏んで漸く南支那より驅逐せられ又揚子江流域にありては各省鑄造の圓銀の壓迫を受けて流布區域縮小するに至れりと雖も現時尚到處多少とも墨西哥弗の流通せざる地方なし、尚其根據の牢として拔くべからざる地方は江蘇、浙江二省に跨れる南京、鎭江、無錫、上海、蘇州、杭州、寧波、溫州、富陽地方にして之に次ぐるは九江及南昌以東の江西、安徽、浙江界地方と

す。

香港弗は香港を中心とし廣東、福建、廣西方面に流通すと雖も廣東地方を最主要の流通區域とす、蓋し廣東省及廣西省に於ては一般に大洋よりも小洋を使用する場合多く大取引にありても亦小洋及小洋票を使用するを以て都會地以外には大洋の流布比較的に少なし、故に香港弗は廣東との間の商取引には最も必要なる通貨にして此等地方に最も多し、此地を距るに從ひ漸次稀薄となるも其流通區域は甚だ廣くして南支那一帶處として香港弗の流通せざる地なしと云ふも過言にあらざるのみならず福建省内に於て日本圓銀流布區域を侵蝕せんとするの形勢を示せり。

日本圓銀の流布は福建省福州、厦門及廣東省汕頭を中心とす、該福建省沿岸は我臺灣と一葦帶水の地にして古來兩地間の交通及貿易甚だ盛なり、臺灣の我範圖に歸するや臺灣に於ける我圓銀の對岸に流布するもの益々多く今や福建省に於ける本位貨幣は我圓銀に仰ぐの狀況を呈す、福建は古來茶の產地として著名にして其產地たるや其上游山地に位し茶の買出時期に於ては其買出に日本圓銀を用ひ之を其上游地の茶產地に配布するを以て上游地は下游地と共に日本圓銀を通貨とし到處其流布を見ざるの地なし、然るに福建及廣東の上游地は概して茶又は紙の如き物貨を產するのみにして布疋其他日常の雜貨の多くは之を江西省南部に仰ぐものとす、蓋し江西省南部は吉安を中心として土布を多產し其他農業物、藥材、雜貨共に隣省に比し多量なる

を以て之を福建省に移出す、而して此の如き省界商業の取引に依り福建及廣東の通貨殊に日本圓銀は盛に江西省南部に輸入せらるゝものこす、故に樟樹鎭以南並に袁江及錦江流域は日本圓銀の流布甚だ盛なりこす、由來江西省南部に於ける物貨は南方廣東、福建方面に向ひ輸出超過を示し盛に南方通貨たる日本圓銀を吸收するに反し江西省北部は南部に比し遙に粗紙、白紙、夏布、木材、瓜子、黃豆、芝蘇、牛皮等の物資に富み是等は南昌、九江を經て上海方面に輸出せらるゝを以て江西省北部に流入する通貨は主こして上海方面の通貨たる墨西哥弗に屬す、且つ上述物資の買出も亦主こして墨西哥弗に依るを以て景德鎭饒州、樂平、安徽省祁門附近並に南昌附近に於ける通貨の墨西哥弗の占むる所こなるもの、蓋し此の理由に基けり、然るに江西省に於て製出する土布又は綿布の原料たる綿糸は之を上海に仰ぐのみならず其他の輸入の大宗たる綿布、石油、鹽の如き又揚子江流域に仰ぎ年々江西省は上海方面に向ひ輸入超過を示すを以て、其決濟金は江西省南部より流入する所の日本圓銀に依る、而して年々上海方面に流出する日本圓銀は二三百萬元に上るこ稱し是等の上海に流出せる日本圓銀は有傷のものは紋銀に鼓鑄せらるゝものあれごも大部分は茶期に際し茶買出金こして福建省方面に轉流するものこ稱す、此の如く日本圓銀の流通區域は福建、江西及廣東に亙り省界商業關係より循環して流通するが如し。

以上の外國銀元の外、安南、米國貿易銀並に比律賓、海峽植民地、蘭領印度の銀元は南支那方面に流通するものなきにあらざるも極めて少なく獨り安南弗即ちピアストルは之こ接壤する廣西

及雲南の一部に流通すと云ふ。

之を要するに現時支那に於ける銀元流布の狀況を見るに外國銀元中主要なるは墨西哥弗、日本圓銀及香港弗の三種にして墨西哥弗は揚子江下流に、日本圓銀は江西、福建二省に、香港弗は廣東省に最も多く流布し互に鼎立して其勢力を爭へり、然るに是等の三地方以外の地にありては銀元の流通概して多からず、其通貨は主として銅元に依るを以て茲に特に銀元流通區域を詳述するを要せずと雖も銀元は開港場及省城等には流通多く而して其銀元の種類は種々あり、其省に於て鑄造せられたるもの最も勢力を有す、即ち湖北省に於ては湖北銀及江南銀多く湖南省に於ては湖北銀及外國の所謂雜洋多く四川省に於ては四川銀又は湖北銀を主とす。

(ホ)紙幣の流通は銀票と錢票とによりて其流通區域大に異れり、即ち銀票には外國銀行發行に係るものと支那の特種銀行及省立銀行の發行に係るものとあるも要するに是等は開港場又は省城の如き地方に限り流通するものにして一度是等の地を離るゝときは全く流通せず、加ふるに同一銀行と雖も一地方にのみ流通するものを發行し、例へば日本臺灣銀行に於て厦門、福州、汕頭の各地に別々の兌換券を發行し厦門のものは之を福州に於て流通せしむるを得ざるが如し、其他の外國銀行に於けるもの亦之に同じ。

廣東、廣西に於ては小銀貨に對する兌換券を發行し其流通甚だ活躍す。

錢票は制錢又は銅元に對する兌換券にして湖南、湖北に於ては主要の都會地のみならず山間

に於ても之を使用する場合多く江西省にも吉安以北に錢票を見るべし。

三　農　業（第二十四版參照）

農產物中其主要なるものを擧ぐれば食料品としては米、麥類、荳類、嗜好品としては茶、煙草、砂糖、果實、西瓜子、工業用原料としては棉、蔴、繭、絲、漆、搾油用としては茶樹、桐樹、菜種あり、左に是等農業物の地理的分布を述べ其需用供給の一班を示さん。

（甲）食料品

（一）米

米は支那人の常食中最も重要なる糧食たるのみならず酒の醸造に用ひらる、但し下級者は米の外に粟、黍、玉蜀黍、麵を食するもの多し、殊に北支那に於て古來米を食するものは中支那及南支那に比すれば甚だ少なく偶之を食するものにありても其米を中支那に於ける米產地に仰げり、蓋し大運河の開鑿の如き又漕督、粮臺の設置の如き皆海上交通の盛ならざる以前に於ける糧食運搬の必要に基因したるものにして如何に北支那に於ける食糧の中支那に關係の深きかを知るを得ん。

中支那及南支那には殆ど到る處に米を產すと雖も重要なるは揚子江流域の吳平野、贛江流域及湘江流域、湖廣低地、巴蜀盆地とす、南支那には廣東三角洲あり、其他は一般に山岳地なるを以て

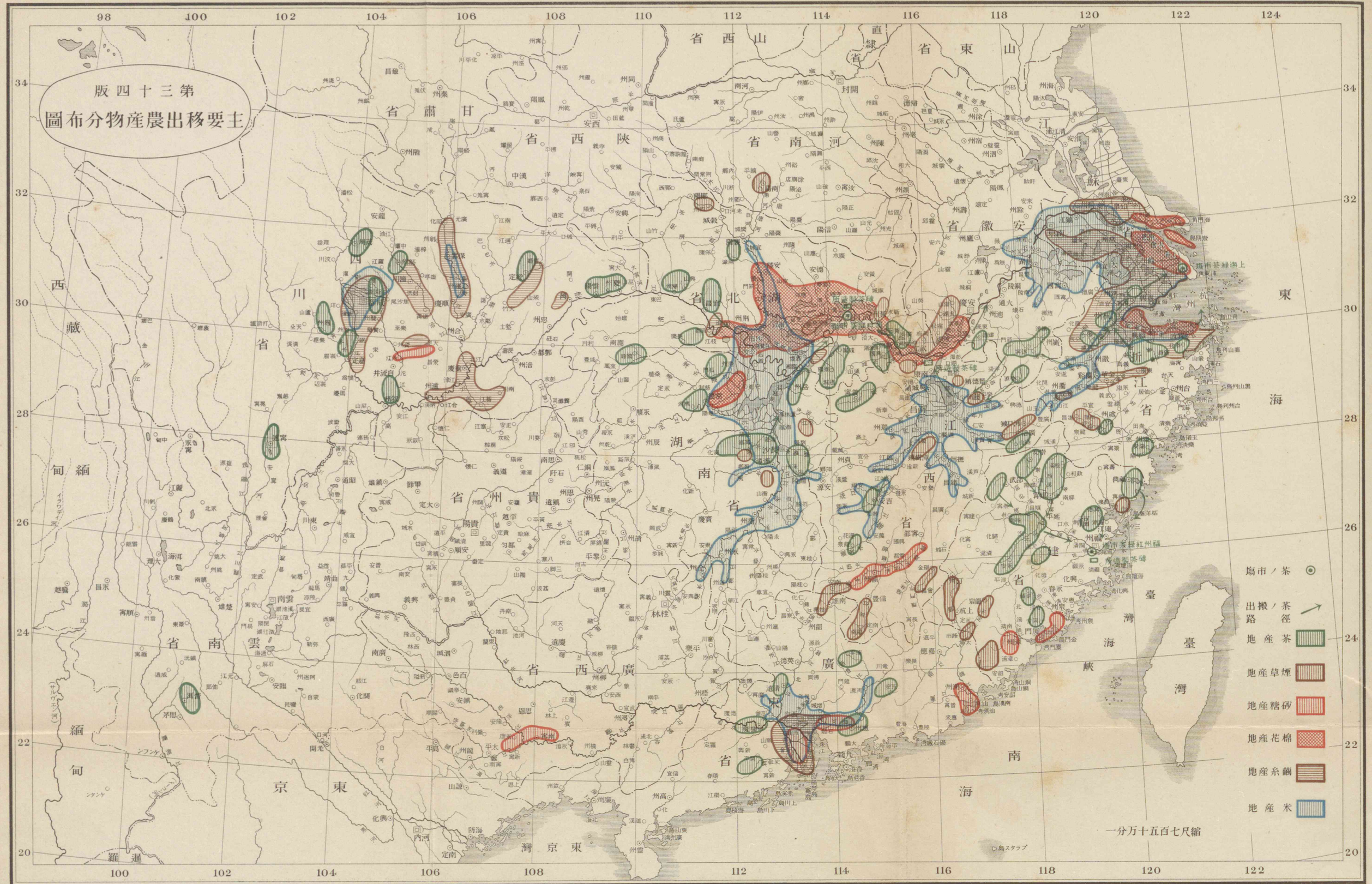
米産多からず、其糧米を中支那及外國に仰ぐの狀況にあり。

揚子江流域の米産地中最主要なるは吳平野即ち太湖を中心として揚子江、錢塘江間に介在する沖積層地にして江蘇省の蘇州府、松江府、大倉府及浙江省の湖州府、嘉興府、杭州府、紹興府に亙り更に西方安徽省の太平府、寧國府並に對岸の廬州府に達す、而して是等の廣域を占むる沖積層の平地には運河並に支流又は分流甚だ多くして灌漑水利の便を有し水田、桑田相交り一望肥沃の美田を形成す蓋し支那第一の農産地なり。

湖廣低地は吳平野に次ける米産地たり、湖北、湖南二省に跨り其面積甚だ廣きも其主要米産地は湖南省にあり、湖北省内には荊州府に多産するのみ、即ち湖北省の内にありては漢陽府、沔陽州附近は揚子江と漢江との間に介在せる卑濕地即ち古の雲夢澤地にして最も湖沼に富める氾濫地となし又德安府下は黃土の臺地廣くして灌漑自在ならざるを以て共に米産多からず、唯該低地の西方に於ては揚子江に沿へる荊州府、漢江に沿へる安陸府及襄陽府に於て多く産す。

湖南省にありては洞庭湖畔及湘江流域を主なる米産地となし、沅江及資江の上流は高原地にして水田少なく米産多からず、洞庭湖附近は所謂九江の會にして湘江、資江、沅江等の大河此地に會流し廣大なる沖積地を形成するを以て其湖畔に水田多し、蓋し洞庭湖は是等の河流の氾濫地なるも減水期には河流の水路を留むるのみにして大部分は平地と化する所多く增水期には水災を被むるもの多きを以て湖畔の水田は堤防を築きて其氾濫を防ぐ故に洞庭湖水面の高低は其

第四十三版
主要移出農産物分布圖



年の豊凶に關する所大なり、湘江流域に於ては長沙府、衡州府、永州府に亙れる間河畔の平地に水田多きのみならず赭色砂岩層の丘陵地に於ても其溪谷に水田を作れる所多し、湖南省に於ては以上に述べたる主要米産地の外資江及沅江流域並に湖南、江西、廣東省界の山地に於ても巧に灌漑水を引用して山腹に至る迄階段狀の水田を作れる地甚だ多し是れ湖南米の品質の良否を別ち其産額の多きもの實に玆に基因するものと云ふべし、(第三十五版甲參照)

吳平野と湖廣低地との米産地間に介在する贛江流域は所謂江西米の産地なり、其主産地は鄱陽湖の南方彭蠡平野にして贛江、盱江、錦江の會流地の沖積地及赭土の臺地を首位とし盱江の溪谷に沿へる撫州府及建昌府の沖積地之に次ぎ贛江に沿へる吉安府附近にも亦水田多し。

巴蜀盆地の米産地は成都平野を成せる沖積地を首位とす、蓋し岷江及沱江は共に多くの分流を出して該平野の水田を灌漑し肥沃の美田を形成す、此外巴蜀盆地を構成する赭色砂岩層の丘陵地も亦一般に開墾せらるゝ所多く殊に嘉陵江以西に於ては山腹に至る迄階段狀の水田を作り以て人口稠密なる盆地内の蒼生を育養す。

南支那の米産地としては廣東省北江、西江、東江の下流の沖積層地即ち所謂廣東三角洲地は吳平野と共に水田及桑田の多き地なれども其廣袤は吳平野に比する能はず、此外西江上流には或は梧州府の賀江及桂江に沿ひ或は南甯附近の沖積地に水田あるも狹小なり、韓江流域に於ける潮州三角洲、嘉應州附近の水田、福建省に於ける九龍江の漳州附近、閩江の溪谷に沿へる狹長なる

沖積地、浙江省の南半に於ける温州及臺州附近の米産地等あるも中支那の米産地に比し猫額大の地たるに過ぎず。

米産地に於ける米の收穫時期は米の種類によりて異るべしと雖も概して南方に早くして北方に遲く廣東地方は三月中頃植附を了し二毛作又は三毛作なり、南支那沿岸地方一般に二毛作多く湖南省及江西省の南部にも二毛作の所少なしとせず、揚子江沿岸地方は一毛作なり。

米の品質は中支那にありては吳平野の産米中上海米即ち江蘇米最も良質にして我日本米に讓らざるものあり、蕪湖米と稱するは上海米に比し遜色なきも安徽米の外に江西米、湖南米をも含むを以て其種類甚だ多し、江西米、四川米、湖南米は相伯仲す、湖南米中南方地方に産するものには紅米と稱し紅色を帶び惡臭を有するものあり、南支那にありては浙江省に紅米多きも福建、廣東産は江西米に比して劣る所あらざるが如し。

米の産額の年によりて甚だしき變化を示すことは我國の如き地方に於て見ざる所とす、何となれば米産地は前にも述べたるが如く卑濕の地にありて水災の被害を受くること甚だ多し、即ち揚子江の水面は平年にありても增水期と減水期との差二三十尺乃至四五十尺にして一たび降雨激烈なるに至らば更に二三十尺の增水を見ること少なからず、此の如きに際して洞庭湖畔、廣東三角洲地は勿論水底に沒するのみならず湘江流域の永州より下流の如き又贛江の下流の如きは殆ど一大湖水に變じ數旬間減水を見ざること少なからざるを以て其農作物に與ふる被

害たる想像の外にあり、故に僅に自省の産米を以て其糧食を自給する地方に於ては多少の災害に遭遇すれば直ちに之を他省に仰がざるを得ず、中支那各省中移出の餘力を有するは江蘇、安徽、江西、湖南の四省にして四川、湖北二省は漸く自給して少量の移出をなし時に他省の補給を仰ぐことあり、南支那にありては浙江省は多少の不足を見るに過ぎざるも、福建、廣東二省は他省米の補給を仰ぐのみならず外國米を輸入すること甚だ多く廣西、雲南、貴州三省は他省及外國米の移輸入に依りて其生靈を養へり、米産額の各省別に就きては之を知るを得ざるも湖南省に於ける米産額は平作五六千萬擔と稱し移出餘力百萬擔乃至百五十萬擔とし江西省の米産額も湖南省と伯仲す、浙江省は二三千萬擔、江蘇省は九千萬擔、廣東省は千萬擔、安徽省は七千萬擔と稱す、廣東省に於ては年々五百萬擔の移輸入を仰がざるべからず。

抑も中支那及南支那に於ける江蘇、安徽、湖南、江西の諸省の如き移出餘力を有する所にありても作況によりては防穀令を發し外省に對する移出を禁止し其調節を計るを以て蕪湖の如き外省米を目的とする米市場に於ては勢其影響を受くること甚だしく時に外米の補給を受くることあり、今中支那及南支那及開港場より移出する米額を見るに民國三年には約三百萬擔(但し民國元年には六百六十萬擔を出したり、是れ民國三年に於ける水災の結果減收を示せるものとす)にして其北支那に搬出せるもの約八十萬擔、外國に出たるもの二萬七千擔にして其他は汕頭、寧波、廣東、上海、漢口、九江等に於て消費せられたり、然るに南支那に於ける粮糧の缺乏は中支那の産

米を以て尙不足を告げ其補充を外國米に仰ぐものこす即ち民國三年に於ける外國輸入米は約六百七十七萬五千擔但し平年は約三百萬擔の輸入こす)にして北支那に輸入せられしもの其中約一割に過ぎず其他は主に南支那に入りしものなり其輸入先は香港澳門佛領印度支那こす。

(二)麥類及麥粉

麥類中大麥は支那に於ては醬油の釀造用以外に需用多からざるを以て產額少なし然るに小麥は米に次で必要なる食料品たるを以て其栽培少なからず蓋し小麥は挽きて麥粉即ち麵粉(flour)こなし之より麵餠饅頭を製して常食こなす麥粉を常食こするは北支那に於て最も多く中支那及南支那には米を多產するを以て之を常食こするもの多からざれごも下級民には之を常食こするもの少なからず。

小麥及大麥の產出地は北支那を主要こし中支那及南支那に多產せるは恰も米の北支那に少なくして中支那及南支那に多產するこ正反對の結果を示す是れ地形及氣候の差異あるに因る而して中支那及南支那には之を產せざるなしこ雖も就中稍多きは四川省及湖北省の如き高原地即ち其地形及氣候の比較的北支那に近き所に稍多く江蘇安徽二省の北方之に次ぎ其他の各省及南支那の各省には甚だ少なく其需用は之を外省又は外國に仰げり。

小麥の移出餘力は民國三年に於ては支那全體こして約二百五十萬擔其中中支那及南支那より出づる者僅に約十六萬擔に過ぎず而して是等は重慶宜昌及漢口並に巢湖より出るものこす。

其中北支那より露領其他海外に輸出するもの百九十萬餘擔を占む、中支那及南支那に於ける需用は之を自國産並に米國濠洲産麥粉に仰げり。

外國産麥粉の輸入額は民國三年に於ける總額約二百二十萬擔にして米國麥粉其大部分を占め香港、澳門、日本を經由するもの亦米國産なりと云ふ、此の如く麥粉の輸入甚だ多きを以て近年外國人及支那人は支那内地に於て製粉事業に從事するもの增加し年々其産出額を增せり、而して各開港場より搬出するもの二百三十八萬擔餘にして其中約二十四萬五千擔は北支那に於て製出し其他の大部分は中支那に於て製出す、就中上海を以て最も主要なる製粉地とし漢口及鎭江之に次げり。

(三) 荳　類

荳類は荳子と稱し其種類多く主要なるは黑荳、青荳、白荳、黃荳にして就中黃荳を最も重要とす、黃荳は我邦の大豆にして其儘食料とするのみならず之より製出する豆腐、荳麵は支那の副食物中最も重要なるものとす、此外黃荳より搾油せる荳油は燈火用又は食料とし荳餠は肥料とし之を自國に於て使用するのみならず又海外に輸出する重要輸出品にして支那輸出品中第三位にあり。

荳類の産地は滿洲其首位にありて北支那之に次ぎ中支那及南支那は遙に劣れり、但し中支那は南支那に比すれば稍産額多く湖北、湖南、江西、江蘇の四省を主産地とし就中湖北、江西二省を最

も主要とす、湖北省に於ては漢口の北方及南方、江西省に於ては鄱陽湖の東畔及南畔地方に多し。

黄荳の各開港場よりの移輸出額は民國三年に約千百萬擔にして其中北支那より出せるもの千萬擔に達し中支那及南支那に於て僅に其一割を出せるのみ、而して千百十萬擔中約八百六十萬擔は露西亞、日本、南洋、其他歐米諸國に輸出せられ其他は支那内地殊に南支那に於て消費せらる、搾油に關しては工業の部に述ぶるも最盛なるは北支那にして中支那には漢口に稍盛なり、南支那に於ては厦門、汕頭地方に於て滿洲産黄荳を輸入し搾油するものあるも微々として振はず、中支那に於ける荳油を他省に出すは漢口にして七萬擔を出し荳餅は漢口より約百九十萬擔上海よりは三十萬擔餘を出し寧波、厦門各十萬内外を出すのみ、中支那及南支那に於ける荳餅の需用は之を北支那に仰ぎ民國三年に於ける移入額三百九十萬擔に達せり。

(乙) 嗜好品

(一) 茶

支那人は茶樹と茶葉とを區別し、茶樹は山茶樹の種類にして其實より搾油し茶葉は嫩葉を摘みて喫食用とするものなり、吾人の茶と稱するは即ち茶葉にして之を茶葉子又は茗と稱す。

支那は印度、日本、瓜哇と共に茶の主産地にして且つ支那及印度は其原産地なり、是等の主産地中支那其首位に居り古來茶の輸出國として著名なり、茶は支那輸出品中第二位を占むるのみならず支那自身も亦著しき茶の消費國なり、支那人は恐らく世界中最も著しき茶の喫用者と稱す

べく上流より下流の社會に至る迄喫茶の習慣を有す、此習慣は我國民も之と同樣なるも之を喫する其程度に至りては我國民の及ぶ所にあらず、上海四馬路に大厦高樓を列ぶる茶館は即ち元來一椀の茶を鬻ぐ廉の喫茶店なり、支那人は玆に一椀の茶を啜りて慰安を求め卓を圍みて商用を談ず、茶館の利用は四馬路に止らず苦夫の群集する碼頭にも更に宿驛村落に至る迄茶館、茶亭の設けあり、唯大小の差あるのみ、支那人の茶を喫用するに際し我國の如く茶瓶を用ふる外先づ茶葉を茶碗に入れ其上に熱湯を灌ぎて蓋をなし蓋の間隙より喫用するもの多しとす。

茶の産地は北支那には甚だ少なきも中支那及南支那には到る處に之を産せざるなく就中湖南、湖北、江西、安徽、浙江、福建を最も主要なる産地とし福建省を除けば中支那に屬する地方に多しとす、蓋し茶は熱帶地方より溫帶地方に亙りて生長するものにして中支那及南支那は茶の生育に適する地とす、而して其生育地は中支那及南支那に於ては山岳の重疊する地方又は平地よりも丘陵地に多し殊に赭色砂岩層の丘陵地を最も主要なる産地とす、赭色砂岩層は四川、湖北、湖南、江西、安徽、浙江等中支那の揚子江流域、錢塘江流域に廣く分布し盆地を形成するもの多し（第三十四版參照）

湖南省湘江流域、湖北省の武昌府、江西省の義寧地方並に吉安地方、安徽省の廣濟、徽州、浙江省の紹興附近の如き主要なる茶の産地は多くは赭色砂岩層の丘陵地なりとす、但し丘陵地にして且つ盆地を形成するは必ずしも赭色砂岩層地に限れるにあらず中生層（二疊三疊紀及レーチック

層即ち夾炭層も亦之と同樣の地形を成す所多く且つ茶の主要産地たる所少なからず、中支那に於ける湖南省寧鄉及安化地方、江西省の廣信地方之に屬し福建省の茶の主要産地は殆ど夾炭層の丘陵地なりと云ふべく鄱武、建寧、沙の地方之に屬し獨り福寧地方は石英斑岩の丘陵地なりとす。

左に支那に於ける茶の主要産地を列擧せん。

湖北省

襄陽府(南障、穀城、黃州府(廣濟、黃梅、蘄水)

武昌府(通城、咸寧、崇陽、蒲圻、通山、嘉魚、興國州)

宜昌府(歸州、興山、鶴峯、長樂、東湖)

湖南省

岳州府(臨湘、巴陵、平江)

長沙府(益陽、安化、湘陰、湘鄉、湘潭、瀏陽、醴陵)

常德府(桃源、武陵)

寶慶府(新化)

澧　州(石門)

江西省

吉安府(吉安、龍泉)

南昌府(武寧)

廣信府(鉛山)

安徽省

徽州府(績溪、歙、祁門、婺源、黟、休寧)

池州府(建德)

浙江省

紹興府(諸暨、新昌、嵊、平水)

杭州府(臨安、錢塘)

嚴州府(桐盧、分水)

嘉興府、寧波府、處州府、溫州府

福建省

建　府(政和、松溪、建安、崇安)

邵武府(邵武、光澤)

延平府(沙、永安、尤溪、順昌)

福寧府(福安、寧德、福鼎)

龍岩州(漳平、寧洋)
泉州府(安溪)
廣東省
肇慶、惠州、鶴山、永安、連平、清遠
四川省　成都府、綿州、茂州、寧遠州、保寧州、叙州府、綏定州、龍安府、嘉定府、雅州府、夔州府
貴州省　貴陽府、思州府、安順府、興義府、都匀府、平越州、石阡府、遵義府
雲南省　昭通府、普洱府

支那に産出する茶は其製品の種類により之を大別して綠茶と紅茶となす、綠茶は浙江省及安徽省に産出多く紅茶は湖北江西福建の諸省に多し但し各省皆兩種の茶を産す。

綠茶及紅茶は又其製出の方法によりて之を綠茶、紅茶、綠磚茶、紅磚茶、粉茶、京磚茶、屑茶等に分たる、磚茶とは紅茶及綠茶を製出する際に生ずる粉末を成型せるものにして普通は煉瓦狀をなし其中板狀のものを特に京磚茶と稱す。

綠茶中にも種類多し綠茶の中心市場たる上海に於ては品質上品なるものを蝦目又は麻珠と稱す、Gunpowderと稱して海外に輸出するもの之に屬す、我國の玉茶に相當す、此外葉の形又製法によりて煎茶に相當するYoung Hyson, Imperial Hysonの二種あり、福州市場には小球、大球、雨前、熙春、屯依の種別あり。

Gunpowder 即ち玉茶は海外輸出品として廢敗を防がん爲めに特に乾燥上に注意を施せる再製茶にして上等綠茶の一種なり、輸出品中江西玉茶は安徽省婺源に、寧波玉茶は又一名平水茶とし浙江省紹興府會稽山に産出するものにして綠茶中最上品と云はる、紅茶は漢口市場に於ては安徽省祁門、江西省義甯州、湖南省安化地方のものを主要とし湖北省鶴峯廳のものは著名なれども産額少なし、品質は祁門茶を最上とし義甯州産之に次ぎ安化産は最下等品なり、而して漢口市場に於ては特に種類を細別せず、福州市場に於ては福建省全部の茶を集散し其品質甚だ種々なるを以て之を細別して工夫、小種、白毫、彩花白毫、橙花白毫、武夷花香、珠蘭、双龍に分ち又産地によりて北領、白淋、板洋、洋口、沙縣、東風糖、水吉、政和、界首、福州土産、粗片茶とす、福州市場に於ては紅茶中特に其製法によりて烏龍茶を分ちて烏龍と包種との二種とす、包種は烏龍に香の好き花を入れて香を着したるものなり、大凡支那人は茶碗に茶葉を入れて喫するを以て茶を喫するに共に外觀の美なるを賞するが如し、香着茶中の香花は茶碗中に於て熱水を灌ぐと共に開花すること我櫻湯に類す、香着に使用する花には玖瑰、桂花、珠蘭、茉莉、茉々等あり。

磚茶の原料は老茶及紅茶又は綠茶の粉末にして一度熱して柔軟とし之を成型するものなり、漢口、九江、福州に磚茶工場あり、磚茶は露西亞人の愛飲するものにして主として露西亞、西比利亞、沿海州方面に輸出せらる、其工場は露西亞人の經營に係れり、漢口は磚茶製造の盛大なる地にして阜昌、新泰、順豐の三洋行の工場あり、茲に使用する原料は湖南、湖北、安徽、江西に仰ぐと雖も近年

印度錫蘭島及爪哇より粉茶を輸入して其不足を補充す。

茶の摘葉時期は頭春(頭茶)は舊三月乃至五月、二春は六月、三春は七月中旬乃至下旬にして三回とし、茶工は老若男女を問はず隨意として茶の生産地に集まり茶の製造に從事す、茲に製出せられたる茶は其品質及種類によりて特種の包裝及商標を附し各特種の茶の市場に搬出せらる、大凡茶の集散地は中支那の漢口、九江、上海、杭州、甯波、南支那の三都澳、福州、厦門、廣東、九龍、拱北、江門を主要とし更に是等の中漢口、上海、福州を以て最大市場となす。

漢口は紅茶と磚茶との最大市場にして湖南、湖北、江西三省の茶を集む、但し湖南産は長沙、岳州を經由せずして直接漢口に入り、湖北産は興國州地方のもの、み九江に出て其他は皆漢口に集まる、而して江西産中綠茶は九江に、紅茶は漢口に、且つ安徽産の徽州茶、中祁門産紅茶は漢口に、婺源産玉茶は九江に入るものとす、民國三年稅關報告に依れば漢口及九江より移輸出せるもの左の如し(單位は擔とす)

	紅茶	綠茶	紅磚茶	綠磚茶	小京磚茶
漢口	三二八、五四五	四五、五〇五	二七二、四七三	一六九、二八五	一一、二六七
九江	九一、八四四	五七、〇五七	三二、八五〇	六八、九五三	一、一九六

上海は綠茶の最大市場にして茲に集まる茶は浙江及安徽産を主要とし江西綠茶は九江を經

由す、浙江茶中紹興府産は大部分寧波を經由するも其一部は杭州を經由し嚴州茶も亦杭州に出づ、安徽省徽州茶は水路の關係上三路を取る、一は祁門及婺源産にして江西省に入り、祁門産は漢口に、婺源玉茶は九江を經て上海に至る、二は休寧、黟産にして屯溪より錢塘江に由りて杭州に出で三は績溪附近より蕪湖を經て上海に出るものとす、是等の杭州及寧波を經由し上海に至る、茶は綠茶を主とし紅茶は微量なり、左に杭州、寧波及上海に集まる綠茶を擧げん(單位は擔とす)

移出地	數量	移出地	數量
杭州	一一三、〇七九	上海	五八三
寧波	一〇三、二五二	蘇州	八、二八八
蕪湖	一、一五九	溫州	二、六六二
南京及鎭江	一四八	計	二三八、〇四一

福州は南支那に於ける紅茶及綠茶の最大市場にして三都澳に集まるものも亦再び福州に入るものあり、福州に集まるものは閩江流域全體の茶にして武彝茶、烏龍茶等著名の茶多し、閩江流域のものは紅茶主にして綠茶を從とし三都澳に集まる福寧府下のものは綠茶を主とし紅茶を從とす、三都澳は蓋し茶の輸出を以て近年開港せられたるものなり、福州及三都澳に集るものは左表の如し(單位は擔とす)

	紅茶	綠茶	紅磚茶	茶末
福州	六八、七四二	四〇、四一五	一二、〇一二	四、五一九
三都澳	三八、二〇〇	七〇、九六六		三、五七三

其他の市場に於て紅茶を產出するものには廈門、廣東、拱北、江門、三水あり其中廣東に於て約一萬八千擔を出せり。

以上述ぶる所の主要市場其他の開港場より出づる茶は如何なる狀況の下に消費せらるゝかと云ふに大略左の如し。

紅茶の總移輸出額は五十八萬七千三百七十三擔(千四百四十三萬七千二百十二兩)にして其中支那內地に消費せらるゝもの僅に約二萬四千擔にして北支那及廈門、汕頭に入り其大部分は外國輸出にして露西亞及露領(二十四萬擔)、英國(十一萬五千擔)、香港(約八萬擔)、米國(七萬擔)を主要の輸出地とす。

支那の輸出茶は千八百八十六年を以て最高額とす、印度、錫蘭島、日本茶の壓迫を受けて其輸出額漸次に減少し、福州は又古來支那第一の茶輸出地なりしも近年漢口に凌駕せらるゝに至れり。

綠茶の總移輸出額四十五萬四千百六十擔(千五百五十八萬三千七百五十二兩)にして其內支那內地消費は其半數以下にして北支那、九江、上海、福州及是等の地を仲繼として消費又は再輸出せ

らる、蓋し外國輸出は總額の過半數を占め米國(九萬九千擔)を首位とし露西亞、佛蘭西、英吉利之に次ぐ。

紅磚茶の總移輸出額は三十一萬七千六百三十七擔、綠磚茶は二十三萬八千二百三十八擔、小京磚茶は一萬二千四百六十三擔にして殆ど全部露西亞本國及露領西比利亞、沿海州等に輸出せらる。

茶末の總移輸出額は十萬六千三百七十擔にして天津、漢口、九江に於て磚茶用に供す。

歐米に支向くる茶の中紅茶は漢口又は福州に於て、綠茶は上海及三都澳に於て外國汽船に載積し露西亞に向くるものは京漢鐵道又は水路に依りて天津に至り之より京奉鐵道及西比利亞鐵道に依り而して露領沿岸に出づるものは鐵道又は水路に依る、蒙古地方に至るものは漢口より漢江に依るものと京漢、京張二鐵道に依りて張家口を經由するものとあり、四川、雲南二省は茶の產地としては重要ならざるも西藏方面に輸出せらるゝは此二省產にして雲南省普洱茶は古來品質の良好なるを以て著名なりと云ふ。

(二) 煙草

煙草は現時各省に之を產せざるの地なしと雖も中支那及南支那に最も多し、煙草は支那に於ては煙葉子と稱し又其葉を菸葉、莖を菸梗と稱し刻めるものを菸絲又は條絲煙と稱す、條絲煙は支那人の煙管及水煙管にて喫用するものなれども近來外國輸入の紙卷煙草を盛に使用し之を

紙煙と稱す。

菸葉の生育する所は概して茶葉と同じく赭色砂岩層又は中生層の丘陵地を最も好適地とするが如し、菸葉の產地として最も著名なるは江西省の瑞昌、廣信、瑞金、南安、龍南等の如き又湖北、湖南、安徽三省の如き福建省の龍岩、上杭、浙江省の處州の、如き皆赭色砂岩層の丘陵地にあらざれば中生層の丘陵地なり但し福建省永定には溪間の水田に產する所あれども此の如きは稀なり。

菸葉の產地中主要なるものは左の如し。

湖北省

均州（並に河南省南陽州、劉州、黃岡、黃梅、廣濟

湖南省

平江、寧鄉、湘潭

江西省

瑞昌、都昌、饒州、廣豐、南安、龍南、廣昌、瑞金

安徽省

宿松、桐城

浙江省

松陽

福建省

龍岩、永定、上杭、汀州、平和、南靖、長泰、同安

廣東省

南雄、始興

支那に於ける菸葉の市場四あり、漢口、上海、厦門、廣東こす、上海市場の菸葉は江西、安徽二省産にして其中安徽省産は宿松を中心地こして湖北省廣濟に至るもの年額約二十萬擔を産す、江西省産は江西省北部のものを主要こし年産額十四五萬擔こす、南部の瑞金産及福建省上杭産は一部は九江に、一部は汕頭又は厦門に至る。

漢口市場の菸葉は湖南、湖北並に河南産の一部を含み厦門市場の菸葉は龍岩及南靖、平和産を主こし永定及上杭産は厦門に集まるものこ汕頭に入るものこあり、此外浙江省松陽産も亦厦門に至るものこす。

廣東市場の菸葉は南雄及始興産の外江西省南安及龍南産を含めり。

民國三年の海關報告に依れば菸葉及菸梗の製出額は約三十四萬擔(二百六十七萬兩)にして殆ご全部を中支那及南支那に産し開港場中最も産出多きを九江(十四萬六千擔)こし漢口(六萬三千八百擔)、廣東(約三萬擔)之に次ぎ厦門、温州各約一萬五千擔なりこす。

菸絲は年額約十六萬六千擔にして其中漢口(五萬三千擔)を首位こし、汕頭及廣東(各三萬四千擔)、

廈門及江門之に次ぐ。

菸葉の總移輸出額は三十四萬擔にして其中支那內地に於て消費するもの二十五萬擔とす、外國輸出は九萬七千擔にして香港、澳門、臺灣在住の支那人に供給するものなり、菸絲も亦大部を內地にて消費し其他は香港及南洋に送れり、此の如く多少の外國輸出も亦在外の支那人に供給するものとす、而して內地に於ては年々多額の外國煙草の輸入を仰げり、蓋し支那煙草は品質劣等にして到底外國人の嗜好に適せず却て支那人にして外國煙草を喫するもの激增せり、茲に於てか英米煙草公司は上海漢口に大工場を設立し商標、海賊(Pirate)及三砲臺(Three Castle)を製出するのみならず土耳其、埃及、馬尼剌等の紙卷、葉卷を盛に輸入す、其輸入額は總額六百十八萬三千九十擔(千三百九十萬三千五百二十兩)とす、蓋し外國人の事業として最も盛大なるは近時英米煙草公司と美孚石油公司の二を推すべく以て其輸入額の如何に多きかを推察すべし。

(三)　砂　糖

南支那は熱帶的風土を有し汕頭地方は回歸線に當り甘蔗、榕樹等熱帶植物に富めり、故に南支那殊に廣東、廣西、福建の沿岸地は一帶に甘蔗の栽培に適す、廣東省惠州、廣東三角洲、西江の上流、南甯地方、海南島、韓江流域、潮州平野、福建省漳州平野、泉州地方を其主要產地とし臺地又は平地に生育するもの多し此外江西省に砂糖の產地あり、贛州府及南安府、一帶即ち雩都、甯都、興國、贛、南康、南安、上猶附近に至る間とす、四川省富順地方亦砂糖產地なり。

甘蔗に竹蔗と蜡蔗との二種あり、竹蔗は節間短くして精糖に使用し、蜡蔗は節間長く果實と同樣に食用とす、蜡蔗は廣東省惠州及廣西省西江流域に多く之を中支那及北支那に搬出す、其年額約二十六萬擔(約二十八萬四千兩)に達す。

甘蔗より砂糖を製するには土法に依り牛を使役して搾汁し之を煮沸す、其粗糖及之より精製せるものに赤糖と白糖とあり、更に之より結晶せしめたるものに冰糖あり。

赤糖は最も主要にして年額五十二萬四千擔(約二百三十萬兩)を出す、汕頭、瓊州を主要産地とし南甯、厦門、廣東之に次ぐ、是等の赤糖は大部分中支那及北支那に搬出せられ其一部は香港十三萬擔に輸出せらる。

白糖は約十三萬八千擔(約九十四萬三千兩)を出し汕頭、南甯地方を主要産地とし漳州、廣東之に次ぐ而して之を漢口、南京其他中北支那に搬出す。

冰糖は其産出多からず、約二萬八千擔(二十七萬兩)にして福建省漳州を主要産地とし厦門を經天津、上海、甯波方面に搬出せらる。

支那に於ける砂糖の需用は到底自國産を以て之を充す能はず、海外の供給に仰げり、民國三年に於ける輸入額六百七十六萬六千五百十擔(三千九十九萬八千四百五十六兩)にして其輸入國は香港を主要とし日本、蘭領印度之に次ぐ、香港には怡和洋行の中華火車糖局、太古洋行の太古精房あり、馬尼剌に工場を有する呂宋精糖會社あり、是等は爪哇、比律賓の赤糖を輸入し更に之を精製

するものにして支那向砂糖の需用を充せりと雖も近年臺灣製糖の發展に隨ひて甚だしき壓迫を受け現時三工場各百萬擔乃至百五十萬擔の製造をなすに過ぎず。

(四)　果實及西瓜子

梨、葡萄、棗は北支那殊に山東、直隷地方の特産にして中支那及南支那には此の如き良質のものを産せず、然るに中支那及南支那は濕氣多く温暖にして殊に南支那沿岸地方は半熱帶の風土に屬するを以て果實の種類甚だ多し即ち柑橘、芭蕉、龍眼肉、荔枝を最も主要とし此外枇杷、楊梅、桃、柿、杏、橄欖等あり。

柑橘類には柑子と橘子とあり、柑子は蜜柑、金柑の類にして其産地として最も著名なるは浙江省温州府下及臺州府下なり就中臺州府黄巖の柑子は所謂温州蜜柑よりも我紀州蜜柑に類し其風味最も佳なるものとす。

福建、廣東二省には蜜柑と雪柑とあり、廣東省新會の蜜柑は古來貢品となれり、中支那にありては江西省袁江流域の臨江府、湖南省長沙府下に多産す。

橘子は橙類、文旦等にして浙江、福建、廣東並に廣西の南部には産せざるところなく就中漳州、汕頭に最も多し、漳州の文旦(柏子)は橘子中最も出色あるものなり。

芭蕉は廣東、福建に多く福建省漳州、泉州附近に芭蕉の大園あり、廣東三角洲地に亦多産す。

檬果(マンゴ)は果物の王と稱せられ廣東三角洲地に産するもの少なからず。

第三十五版

農産物

（甲）湖南省安化縣新開嶺の米田

（乙）廣西省懷集縣良村の荔枝り森林

（丙）福建省福州の荔枝

（丁）浙江省錢塘江下流の桑樹及椿樹

龍眼肉及荔枝は福建、廣東二省を主要の産地とす、殊に福建には荔枝多く(第三十五版乙、丙參照)楊貴妃の故事を以て著名なる如く北京地方に送らるゝは福建地方のものを主とせり、龍眼肉は漳州、潮州、廣東地方の山野到る處にあるも沿岸地方に最も繁生す。

楊梅、枇杷は蘇州、杭州方面を以て著名とし楊梅は我國のものに比し形大にして美味なり。

西瓜子は西瓜の種實にして支那人は落花生を食するが如く西瓜子を愛用す、其色により黑瓜子、紅瓜子の二種あり、西瓜子の産地は江蘇、江西、湖南、湖北に産するもの主要にして南支那には多産せず。

果實の輸出入の狀如何と云ふに柑橘の移輸出額約三十八萬二千擔(約九十二萬兩)汕頭(約二十二萬擔)を最多とし福州、温州、江門之に次ぐ、而して之を上海、天津其他支那の東方諸省に出すのみならず香港、新嘉坡、暹羅に出せり、荔枝龍眼肉其他諸種果實中生果の移輸出額三十一萬五十擔約七十三萬兩其中天津の葡萄、棗約八萬六千擔を占め其他は福建、廣東、諸港より出で大連並に上海、香港、澳門に輸出するもの其主要部なり。

果實は單に生果として輸出せらるゝのみならず砂糖漬とし又は乾燥して輸出するもの多し、棗、密柑類は砂糖漬とし、荔枝、龍眼肉等は乾燥せしむ、其年額九萬擔(約七十七萬八千兩)にして其大部分を天津、香港、新嘉坡、暹羅等に輸出す。

西瓜子の總移出額十七萬七千擔にして九萬擔は北支那に産し其他は中支那に産す、其大部分

は上海其他南支那諸港に、而して約三萬擔は香港に輸出せらる。

(丙) 工業用原料品

(一) 棉花

棉花は輸出品として殊に我國との貿易品として重要なり、大凡棉花は收穫せるものを實棉と稱し實棉を足繰及器械繰にて繰棉と棉子との二に分たる、繰綿即ち普通の棉花は紡績、綿入衣服用等に用ひ棉子は更に工場に於て碎棉花と棉子となり、棉子を搾りて棉實油及棉實粕を製す、大凡實棉中棉實は其三分の二を占め繰綿は三分の一とす。

棉花の生產地は揚子江流域の吳平野、湖廣低地にして湖沼に富める冲積地又は赭土の臺地等の地を多しとす、此外寧波附近並に北支那の河南平野に其栽培地少なからず。

吳平野にありては揚子江河口に近き冲積地に多く江北の通州、海門、崇明島を以て最も主要產地とし此の三地のものを通稱して通州棉と云ふ、江南に於ては上海、大倉最も盛にして此地方のものを上海棉と稱し其中に南市棉と北市棉との二種あり。

湖廣低地の棉の產地は揚子江に沿へる沙市、荊州附近及武昌府、黃州府一圓、漢江に沿へる漢陽府、德安府、安陸府並に洞庭湖畔の常德附近とし皆卑濕の冲積地なり。

棉花の品質は江蘇省吳平野のもの最も良質なり、殊に通州棉を最上とす、此地方の棉花には黑種子と白種子との二種あり、黑種子は纖維長く柔軟にして良質なれども白種子は纖維短く堅硬

にして質悪し。

通州棉の中通州産は黒種子に屬し海門及崇明島産は黒白兩種子なり、上海棉の中北市棉の大倉産は黒種子にして其品質通州産に次ぐと云ふ。

湖廣低地に産する湖北及湖南のものは湖北の雲夢地方のものを除けば皆纖維短く堅硬にして細絲紡績に適せずと云ふ。

支那には棉花の三大市場あり、天津、上海、漢口とす、上海市場は棉花の最大市場にして左表に示す如く上海、大倉、通州、崇明島、海門の棉花此地に集まる、上海及大倉産は年額約八十萬擔、通州、崇明島及海門産は年額約百萬擔を産すと云ふ。

寧波市場に出づるものは杭州寧波間に産し年額僅に約十七萬擔なりと云ひ之を上海に搬出す。

漢口市場は上海に次で重要にして茲に集まるは湖北、湖南、河南産とし其年額約百萬擔なるべしと云ふ、其産出地左の如し。

上海市場の棉花産地

上海棉　江灣、大倉、嘉定、常陰沙、閔行、莊家行、黄姑湯、周浦、大團、山陽

大倉棉　上海縣、金山縣、奉賢縣、南滙縣、川沙縣、嘉定縣、南翔縣
桑園歸、家莊、許浦、浮橋、横瀝、穿山、兵陽子、毛家市、新唐市、儀橋、七子口

通州棉　通州、西鄉、蘆涇口、平潮港、三里廟、沙頭、陳家橋、三十里鎭、通州東鄉、海州、崇明、新開河、海門、崇明縣、南門

寧波棉　寧波縣、餘姚縣、慈溪縣、紹興縣、蕭山縣、上虞縣

漢口市場の棉花産地

湖北棉　漢陽、黃州、黃坡、孝感、沔陽、裡河口、武昌、蔡甸、漢川、沙市、宜昌

湖南棉　常德、沅江、華容、南州、澧州、安鄉

支那に於ける棉花の總移輸出額は民國三年に約七十五萬八千擔にして其中三分の一は天津市場に屬し三分の二は中支那の上海、漢口兩市場の輸出に依る、蓋し民國元年に於ける總移輸出額は百十七萬擔にして之を民國三年のものに比較するに多額の差違ありこす、是れ天津、漢口兩市場に於ける減額によるものにして減收は主こして棉花に最も惡むべき乾燥に基因すべく、反之上海市場に出づるもの稍增額を見たり、是等市場に現はるゝ棉花の支向地は支那內地よりも海外に出づるもの多く支那內地に於ては南支那に多く海外に於ては日本を最も重要こし之に次ぐを米國、獨逸、香港等こす。

碎棉花は棉子即ち棉實より抽出せられたるものにして棉子油工場の多き上海、漢口、寧波に於て製出せらる其輸出額は六萬五千擔にして之を日本、獨逸、白耳義等に輸出す。

（二）蘇

麻は支那に於ては麻布即ち夏布を織るに用ひらるゝのみならず海外にも輸出せらる。麻には火麻或は大麻(Hemp)、黄麻或は黄麻(Jute)、苧麻或は線麻(Ramie)の三種あり、就中苧麻を最も重要とす。

火麻は四川、湖南、廣東に多く、黄麻は北支那及南支那に多くして中支那には少なし、苧麻は湖南、湖北、江西を主要産地とす、但し三種類は共に同一の地方に生じ且つ概して丘陵地に生育するもの多しとす、麻の産地は此の如く北支那、中支那、南支那何れの地にも亙るとは雖も中支那を以て最主要の産地とし就中湖北及江西二省最も著名なり、左に中支那及南支那に於ける産地を掲げん。

四川省　綏定府　大竹縣、達縣
　　重慶府　涪州
湖北省　武昌府、武昌、咸寧、蒲圻、嘉魚、大冶、興國州、通山
　　黄州府　蘄州、黄州
　　漢陽府　孝感
　　安陸府、郧陽府及施南府
湖南省　長沙府　瀏陽、常德、平江、沅江、醴陵
江西省　袁州府　萬載、上高
　　撫州府　宜黄、崇仁、樂安

建昌府及九江府
安徽省　池州府　貴池、銅陵、青陽
和州、寧國府、太平府、滁州府
江蘇省　常州府　陽湖、武進、江陰
鎭江府及江寧府
福建省　漳州、泉州、同安
廣東省　潮州、瓊州
廣西省　南寧

蘇の品質最も良きものは湖北省武昌府興國州に屬する太子廟、漳源口、興國、龍港鎭にして同府の咸寧、蒲圻、嘉魚、江西省の瑞昌、武穴之に次ぐ、江西省界武穴は蘇產地の中心地中最も著名なる所なり。

蘇集散の中心地は九江及長沙にして更に其最大中心地を漢口とす。

九江に集まる蘇は湖北省大冶、興國、江西省武穴、瑞昌、廣信地方のものにし、長沙に集まるは湖南省瀏陽、醴陵及其他湖南一圓のもの及江西省袁州府下のものなり、而して長沙及九江のものは再び漢口に集まる、此外漢口には河南、陝西、四川省のものも來ると云ふ。

蘇の移輸出額を見るに火蘇は約十四萬擔(百三十八萬兩)にして中支那及南支那各港より出で

殊に重慶、宜昌、長沙、杭州、九龍を多しとし其過半は香港、日本等諸外國に出で其他は支那内地に於て使用す、發蘇は僅に五萬三千擔にして殆ど全部を日本及印度支那に輸出す。

苧蘇は約二十四萬七千擔にして其半數は南支那に於て、半數は日本に於て使用せらる。

(三) 繭絲

養蠶業は支那の全省に普及せる重要生産品にして其生産額は世界の首位に位し且つ世界第一の輸出國なり。

養蠶業には家蠶と野蠶との二種あり、野蠶には又柞蠶と樟蠶との二種あり、其中家蠶最も重要部を占め、中支那の四川、湖北、江蘇、浙江に最も多く、南支那の廣東之に次ぐ、北支那に於ては野蠶多し。

家蠶を養ふ所の桑は冲積層の平地、赭土及赭色砂岩層の臺地又は低陵地に栽培せらる、養蠶の最も盛なる江蘇、浙江二省に於ては太湖を圍める江南の平野に廣域を占む、上海より滬寧鐵道又は滬杭鐵道によりて南京又は杭州に至らんか其沿線に於て一望殆ど桑園たらざるなきを見るべし、此地方の桑樹には老樹多く幹上六尺乃至一丈の所に於て伐採せられ之より年々幹上に新枝を發生す、其狀我國の桑樹と異る所あり(第三十五版丙參照)四川省の桑に就きては知る所なきも江蘇地方のものと同じと聞く。

廣東、湖北地方のものには老樹多く枝を伐採せず、該老樹の上に於て摘葉をなすもの多きが如

し、家蠶の作繭は四川、湖北、江蘇、浙江等の中支那には春繭、夏繭の二回に分れ春繭は五月下旬より六月上旬に、南支那の廣東省に於ては六回を普通とするも時に九回乃至十回に達する地方あり、繭の種類には白繭と黃繭とあり、製絲するに當りて座繰と器械繰との二種あり、從來專ら座繰に依りたるも近來は器械繰を行ふもの增加するに至れり、白生絲は江蘇、浙江、廣東地方を主産地とし黃生絲は湖北及四川を主要とす、支那に於ては白黃兩種の座繰のものを白絲又は黃絲と稱し、器械繰を白繰絲又は黃繰絲と稱し、白絲及黃絲の再紡せられたるものを白經絲又は黃經絲と稱す、白經絲中浙江省湖州附近のものを七里絲と稱すと云ふ。

養蠶の最も盛なる江蘇、浙江、廣東、四川、湖北に於て最も多産するは如何なる地方なるかと云ふに即ち左の如し、(南京博覽會出品調査書に據る)

江蘇省

江寧府　江寧、溧水、上元

蘇州府　太湖、吳、崑山、新陽、常熟、吳江、昭文

常州府　無錫、金匱、江陰

鎭江府　溧陽

通　州　如皐、泰興

太倉州　嘉定、寶山

浙江省

杭州府　餘杭、仁和、海寧、富陽、臨安、於潛、新城、昌化、錢塘

嘉興府　嘉興、秀水、嘉善、海鹽、石門、平湖、桐鄉

湖州府　烏程、歸安、長興、德清、武康、安吉、孝豐

寧波府　石浦、鄞、慈谿、奉化、鎮海、象山

紹興府　山陰、會稽、蕭山、諸暨、餘姚、上虞、嵊、新昌

臺州府　黃巖、寧海

金華府　金華、蘭谿、義烏、浦江

衢州府　西安

嚴州府　桐廬

四川省

成都府　成都、華陽、新津

資　州　仁壽

綿　州

保寧府　閬中、蒼溪、南部、廣元、昭化、巴、通化、南江

順慶府　南充、西元、營山、儀隴、隣水

叙州府　高珙
重慶府　巴、綦江、南川、合州、涪州、銅梁、大足、璧山、定遠
夔州府　萬縣
綏定府　達、東鄉、大竹
潼州府　射洪、鹽亭、遂甯
眉州、嘉定府及瀘州
廣東省
廣州府　順德、南海、番禺、新會、東莞
湖北省
武昌府　嘉魚
漢陽府　漢川、沔陽
荆門州　當陽
荆州府　宜都

此外福建省延平府、興化府、邵武府、湖南省長沙府、辰州府、永州府

生絲の内地市場は上海、蘇州、無錫、杭州、湖州、成都、廣東にして江蘇省のものは蘇州、無錫、上海に集まり、浙江省のものは杭州、湖州に、廣東省のものは廣東に、四川省のものは嘉定及順慶を經て成都

に集まる、而して是等の地方に集まるものは各家に於て製出せる座繰其主要部を占め、上海、無錫、蘇州、鎭江、紹興、蕭山、湖州、武昌、成都、重慶、廣東に於ては器械繰を成す工場多し、海外輸出の市場として は上海、廣東最も主要にして就中上海を以て最大輸出市場となす。

民國三年海關報告に據りて生絲、繭類の各港移輸出額を見るに白生絲の中白絲は六千百二十七擔(二百六十五萬三千三百三十九兩)にして蘇州、杭州、廣東より輸出せり、之を民國元年の四萬三百九十三擔に比し甚だしく減少せるは蠶兒發育の不良なりしに因るべし、白經絲は九千八百四十擔(五百七十六萬四千六百四十七兩)白繰絲は五萬四千三百七十九擔(三千七百六十二萬二千四百三十九兩)にして共に上海、蘇州より出せり、黃生絲の中黃絲は一萬四千五百七十一擔(四百二十七萬四千兩)にして重慶及漢口、鄰越より、黃經絲は四十三擔(一萬五千二百十二兩)にして宜昌、漢口より、黃繰絲は二千七百十九擔(百二十三萬四百二十一兩)にして重慶、漢口、南京より出せり。

民國三年に於て海外に輸出せる生絲、繭の總額は二十二萬六千百九十三擔(六千二百九十一萬九千二百四十六兩)にして英、佛、米、伊並に香港、英領印度を主要輸出地とし、繭、屑絲は日本に輸出するものあり、即ち其中白絲は六千四百九十一擔にして主に香港、英國、印度に、白經絲は九千五百八十三擔にして主に米國又佛國に、白繰絲は五萬四千十六擔にして主に香港の外米國、佛國に、黃絲は一萬四千六百五十九擔にして主に印度及佛國に、黃經絲は十八擔にして香港及印度に、黃繰絲は二千七百五十擔にして主に佛國及英國に輸出せり、此外蠶繭の總移輸出額約十二萬四千三百

九十六擔二百九十六萬百九十一兩)にして海外に輸出せるもの約二萬四千擔にし日本、佛、英、米、伊に、亂絲頭即ち繭絲は八萬二千九百六十四擔五百六萬二千四百七十二兩)にして殆ど全部を輸出し、香港、英、佛、米、伊、日本に、爛繭殼即ち屑繭は三萬八千四十一擔百一萬二千五百五十五兩)にして約三分の一を佛、伊、日本等に輸出す。

(丁)　搾油用農産物

搾油用農産物の栽培並に搾油は支那人の副農的産物にして其油は支那に於ける重要輸出品の一なり、其種類は甚だ多しと雖も概して植物の種實より搾油す、種實は單に搾油用たるのみならず又其儘食用に供するもの少なしとせず、荳、落花生、芝麻の如き即ち是なり、且つ搾油せられたる油は或は食料用に、或は工業用に、或は燈火用にも使用せらる、即ち荳、落花生、芝麻即ち胡麻、茶の油は食用に、桐油は工業用に、菜種油は燈火用とす、搾油粕は肥料として使用せらる、而して支那に産出する搾油用農産物の主要なるものを掲れば荳、落花生、芝麻、菜種、棉實、茶、桐の數種あり、荳、棉に關しては前章に述べたるを以て之を省略し其他のものに就きて略述せん。

落花生　支那人は落花生を單に花生と稱し西瓜子と共に之を愛用す、支那の都市村落到る處花生の店頭に現はれざるなし、其主産地は山東省にして直隷省之に次ぎ北支那其重要部を占む、中支那の主産地は江蘇省にして安徽、湖北の二省之に次ぎ主として揚子江以北の平地に産す、此外湖南、江西二省並に廣東省の廣東、潮州地方亦落花生の産地なり、落花生の移輸出額約百五十萬

擔六百萬兩)にして中支那及南支那より出すもの約八十萬擔ニし、上海、鎭江、漢口を以て主要の市場ニす、外國輸出は約四十八萬擔にして佛國、香港の外歐米各國に輸出す、花生油は荳油、茶油、菜油ニ共に支那人の割烹に用ひらる、其生產地は山東を主ニするも中支那にては上海、漢口を最も主要地ニし、之を厦門、汕頭、廣東等南支那諸港に移出す、外國輸出は二三十萬擔にして香港、新嘉坡を主要輸出地ニす、搾油せる花生餠は約十八萬八千擔(約四十一萬五千兩)にして南支那に於て使用せられ海外に出づるもの多からず。

芝蘇　は荳に次で重要なる農產品なり、其產地は北支那の河南省を最ニし中支那の湖北、湖南二省之に次ぎ江蘇、江西二省の產出亦少なからず、而して湖北省に於ては漢江流域、湖南省に於ては洞庭湖附近を主ニす、此外江蘇省の平野、江西省の鄱陽湖附近に於ける平地及臺地に產す、河南省產は漢口を經由し輸出せらる、芝蘇には黃、白、黑の三種あり、黃芝蘇最も多量に產す、其用途は食料及搾油用ニす、移輸出の總額百五十萬擔乃至二百萬擔(七百萬乃至千萬兩)にして其中支那內地消費は三十萬擔內外ニし、大部分は獨逸、和蘭、露西亞、日本其他歐米各國に輸出せらる、芝蘇油は二三萬擔(約三十萬兩)を漢口、鎭江等より出し內地、外國の消費相半す、芝蘇餠は五千擔(一萬兩)にして日本に輸出す。

菜種　の主要產地は江蘇、安徽、浙江三省にして湖北省之に次ぐ、即ち上海より南京、蕪湖並に上海より杭州に亙れる平野を以て最も主要產地ニするものなり、菜種は菜子ニ稱し其儘海外に輸

出せられ内地に於ては搾油して之を燈火用又は食用とし其粕を肥料とす、各港より出づる菜子は八十九萬擔(二百八十萬兩)にして大部分を日本の外佛蘭西、丁抹等に輸出す、菜子油は主に上海及漢口より英國、米國に出す、菜子餅は輸出額約六十二萬擔(約六十三萬兩)にして主に上海、漢口、杭州より日本に輸出す。

茶油　は我國の椿油に相當するものにして其原料となるは山茶樹なり、山茶樹は支那に於ては單に茶樹と稱し茶葉と區別することゝ前に述べたるが如し、搾油せられたる油即ち茶油は主に食用に供するのみならず、又香料として頭髪に塗附し或は煙草の産地に於ては其葉に散布す、其産地は湖南、湖北、江西三省を最も主要とし福建省之に次ぎ四川、江蘇、廣西亦之を産する地少なからず、湖北省に於ては荆州、興國州、湖南省に於ては衡州府、永州府、長沙府地方に最も多し、茶樹の生育する地は概して赭色砂岩層の丘陵地とし湖南省湘江流域の茶陵州、攸縣、醴陵地方の丘陵の如き永州府道州、江華地方の如き最も繁生する地方にして、殊に道州、江華に於ける古來土匪の盛なる地方に於ては鬱蒼たる茶樹の林中に土匪の出没するものあり、以て其繁茂の盛なるを推察するに足る。

茶油は支那内地に於て使用するを以て其産出額の多き割合に海外の輸出盛ならずとす、各港よりの移輸出額は約三萬二千擔(約三十四萬兩)にして其中二萬擔を海外に輸出す、其輸出先は香港、英、獨及日本なり。

桐油　は油桐又は荏桐の實を搾りて製するものなり、該樹は山間の溪谷又は稍急傾斜の丘陵地に生育す、桐油の原料は其種類多きも其製品ニしては黑白の二種あるのみ、而して桐油は山元に於ては土法に依りて搾油せられて市場に現はれ未だ大工場に於て製出せらるゝものあらず、桐油の用途は主に塗料たるにあり、即ち支那に於ては家屋、船體、家具の塗料ニし又油紙、油布、雨傘の塗料ニして使用せられ、外國に輸出せられてはヴァニス又は各種ペイントニす、此外其油煙は支那墨の製造に使用せらるゝもの多し。

桐油の産地は四川、湖北、湖南、廣西、福建の諸省の山地にして四川省にありては其東部、湖北省にありては漢江の上流、湖南省にありては資江、沅江、澧江の上流、廣西省にありては桂江流域、福建省にありては漳州府を以て其主要産地ニす、是等の地方に産出する桐油の最大市場は漢口にして陝西、湖北産は漢江により、四川産は宜昌を經由し、湖南産は常德、岳州を經由し漢口に集るものニす、而して漢口に集り來るものは民國三年には六十三萬三千五百十三擔(五百三十萬八千八百三十九兩)にして支那各地より市場に出づるもの、總額約七十五萬擔中其大部分を占む、而して其五分の二は支那に於て消費せられ五分の三は海外に輸出せらる、其輸出先は米國其大部分を占め、香港、英、獨之に次ぐ。

樹蠟　ニ稱するもの、中には桕油、漆油、蓖麻子油等あり、桕油を最も主要ニす。

桕樹は我國の櫨樹の如く秋季紅葉する樹木にして中支那に最も多く殊に四川、湖北、安徽、江西、

浙江の諸省に産し淮山脈の南側を以て最も主要の産地とす、桕油は桕樹の果實より搾製するものにして該果實の外皮、全部又は仁より製するによりて皮油、木油、梓油、の三種となる、是等は支那蠟燭の製造に用ひ海外に輸出するものは石鹼の原料となる、其移輸出額二十六萬擔の中大部分は漢口に集まり之より散じて支那各地に消費せらるゝのみならず、海外に輸出せらるゝもの約十九萬擔に達し歐米各國之を輸入せざる地なし。

漆及漆油　は漆樹より製す、漆樹の生産地は山田脩作氏の調査(商品陳列館報告第二卷)によれば楚西山地、仙霞嶺山脈、贛西山脈に最も著名なりとす、蓋し楚西山地は湖北、四川、陝西省界地にして漢江の流域に屬し、贛西山地は湖南、江西省界地、仙霞嶺山脈は福建と江西及浙江界の山地なり、概して山岳地の溪谷に多く此外貴州に産す、福州漆器の精巧品は福建産を使用するも其産額多からず、江西産亦少なしと云ふ、獨り湖北、四川、陝西省界地方産は其産額多く建始、施南、毛埧、萬足、大木、平利、鄖陽、竹谿、興安、鎭竿、龍潭、銅仁を主要とし就中漢江流域の興安最も著はる、漆には大木と小木との二種あり、大木は液淡く小木は液濃し、興安産は大木に屬し、湖南省は小木に屬すと云ふ、漆は其産地に因りて大體三ヶ所に集まる、即ち興安及漢江流域のものは老河口に、施南府のものは宜昌に、湖南のものは常德に集まり是等は更に漢口に集り來る、支那各地よりの移輸出額は二萬七千擔餘約千五十七萬兩にして其半は內地に消費せられ、半は日本に輸出せらる、而して日本に輸出するは宜昌を經由する施南産と興安産となり、漆樹は老樹にして實を結ぶもの多きを以て

之より漆油を製するものあり、其産額少なからずと云ふ、之を海外に輸出す。

四　林　業

(一)　木　材

中支那及南支那に在りては北支那の如く空氣の乾燥又は寒氣の凜烈たるなく氣候溫和にして濕氣多く植物の生育に適す、故に到る處鬱蒼たる森林を見るべき地なりと雖も數千年來伐採に伐採を續け何等植林の行はるゝなきを以て山岳及丘陵は裸出し其表皮剝げ岩石の地表に露白するの地甚だ多しとす、故に揚子江沿岸の如き巴蜀盆地の如き又閩浙廣東の沿岸地方の如きは單に山林を認むることと甚だ稀なるのみならず、巴蜀盆地閩浙沿岸には柴薪を得ることと既に困難なれば之を遠く支流の上流地に於て求めざるを得ず、現時森林地と見るべきは所謂南嶺山系とす、即ち西方は貴州の苗嶺より東方は五嶺並に仙霞嶺の脊梁地方なり、蓋し古來交通不便にして且つ蠻民の居住する地方たりしを以て妄りに斧鉞を下さゞりしが如し、現に苗嶺山脈には苗族、五嶺山脈には猺族、仙霞嶺山脈の南方には畲族の居住し伐木を彼等蠻族の生業とす。

支那の木材産出地として著名なるは湖南、福建の二省にして浙江、廣東、江西之に次ぐ、何れも皆其上游地にあるや論なし、湖南省に産出する木材は獨り湖南一省に出づるにあらずして廣西、貴州二省に出づるものも亦此の省に集まる、即ち湘江を流下する木材は廣西、湖南の産にして所謂

瀟湘二水並に其支流より出で、沅江を下るものは貴州及湖南の産にして常德を經由して洞庭に浮ぶ、湘江、沅江並に資江の上流より流下する木材は初め支流より出づるときは小筏なるも漸次本流に至るに從ひて筏の大さを增し沅江の常德、資江の益陽、湘江の衡州及湘潭地方に至れば大筏に組み改め其長きものは時に一二町に亙るものあり、其上に住居を構へ或は畑を作り家畜を養ふものさへあり、悠々流に從ひ長江を下りて漢口又は更に下流地方に至る、揚子江に出づる木材は前述湖南省產のみならず、江西省內に出づるもの少なからず、而して江西、湖南省界地の山地より贛江の支流に由りて贛州、吉安に出で之より贛江を下りて長江に出づ。

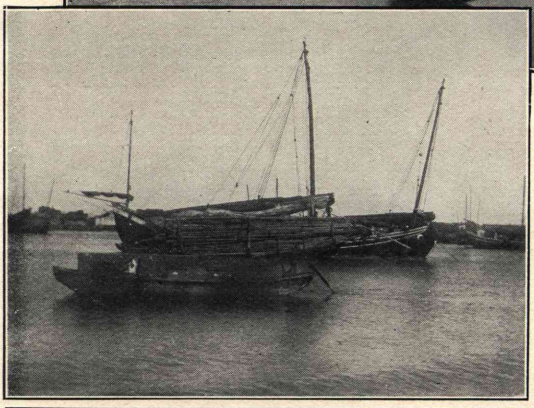
揚子江下流の木材は湖南、江西地方の大筏に依りても尙其需用を充す能はず、浙江、福建地方の木材を民船に載積して揚子江下流地に搬入す。

浙江省にありては甌江上流より溫州に、福建省にありては閩江の上流より福州に集まる、是等は共に仙霞嶺山脈の山岳地に仰ぐものごとす、蓋し福州、溫州地方には支那の他の地方に比し木造家屋の多きは旅行者の注意を惹き其上流地に於ける木材の豐富なるを推察せしむ、溫州及福州に集まれる木材は其筏（第三十六版甲參照）を解體して之を大民船に滿載し支那南海の激浪と戰つて揚子江下流又は北支那に搬出するものごとす、寧波附近の沖合航海中屢〻滿帆風を孕みて舷前を快走する大民船に會すべし、是れ福州、溫州の木材船なり（第三十六版乙參照）其兩舷及船上に木材を滿載し船は殆ど木材の下に沒するの奇觀を呈するもの多し。

第三十六版

林産物

（甲）福建省閩江下流の杉筏



（乙）浙江省甯波の木材船

（丙）廣東省廣甯縣綏江上流の竹の密林

木材の種類は松、栢、杉を主要の材とす、松は南支那沿岸に少なきも其他到る處之を産せざるなく浙江省に於て其最も多きを見る、栢は葉の垂れたるシダレクプレス（Cupressus funebris Endl.）にして主に中支那に産し殊に湖南、江西地方に多し、杉には二種あり、杉樹と溫杉となり、杉樹は其葉は我國の樅に材は杉に類し好香を有す、蓋し中支那及南支那に産し支那に於ける最も主要の木材とす、福建省のものを特に福州杉と稱す、溫杉は又柳杉と稱し浙江省の特産にして溫州附近に多きを以て溫杉と云ふ、最も我國の杉に類するものなれども葉は垂れたるもの多し、木材には巨材と丸太材との二種あり、巨材には又其大小により角材と板材とあり之を重木及輕材と云ひ丸太材は木桿と稱す。

丸太材は中支那及南支那の特産にして大筏となりて出づるものは即ち此丸太材なり、其移出額約二百五十萬根（約四百五十萬兩）にして其中漢口の鸚鵡洲に集まるもの約百萬根福州に集まるもの約九十萬根にして之を揚子江下流地方に供給す、此外福州及其他の南支那より香港、臺灣に輸出せらるゝもの九十餘萬根あり。

角材は中支那には甚だ少く主に北支那の鴨綠江と南支那の西江及閩江の上流地とより出づ、但し年産額十萬兩內外に過ぎず、板材は鴨綠江より出づるもの最も主要部を占め南支那之に次ぎ中支那に於ては其産出額多からず、中支那及南支那より出づるものは年産額約千四百五十萬平方尺（約七十萬兩）にして其中約五百萬平方尺は香港、澳門に輸出せらる。

(二) 竹

竹は木材に次で重要なる林産物にして南支那に最も多く、中支那に於ては揚子江以南に多く以北には少なし、南支那に於ける竹の密林は廣東省北江流域並に西江流域を最多とす、殊に西江の支流綏江の溪谷には鬱蒼たる竹の密林あり、(第三十六版參照)

廣東より北江流域を溯り韶州に至れる粵漢鐵道の沿岸亦綏江に讓らざる密林を有す、但し廣東、廣西二省に於ける竹林は獨り山間に繁生するのみならず、平野にも密林をなし、殊に平野に於ては植林に依れるもの多し、又水田中に散在する人家は竹林を以て生垣となすもの多きを見る、以て竹の發育の盛なるを知るべし。

竹の繁生は廣東、廣西省は勿論之より福建省並に浙江省に亙り南支那一體に普及するのみならず、中支那に於ても湖南省、江西省の南部に密林を見ること少なからず、湖南省資江流域の安化、新化より南方に於ては山上にも溪間にも到る處竹の密生する地方少なからず。

竹の種類は多けれども眞竹、蒙宗竹、棗竹を最も主要とす、南支那には此三種を產し殊に棗竹甚だ多し、棗竹は丹竹と稱し湖南省にては從竹と稱す、棘を有し節間甚だ長く叢生にして極めて密林を形成するものなり、我臺灣にも此種の竹類少なからず、西江流域に鬱蒼たる密林をなすもの即ち是なり、中支那には棗竹甚だ少なく所々に之を見るに過ぎず、其多くは眞竹、蒙宗竹の二種なり、湖南省資江流域には蒙宗竹甚だ多し。

竹は伐採せられたる儘竹桿となし、木材の如く筏に組み之を市場に出すのみならず、廣東、廣西二省に於ては外皮を剝ぎ竹條となして搬出するもの甚だ多し、此外竹器、竹紙となして搬出す。

竹條は竹蓆、竹繩の製造に用ゆるものなり、竹器には家具、筆軸、煙管等あり、湖南省長沙及寶慶は竹器を以て著名なり。

竹紙は外皮を除きたる柔組織より製するものなり、但し竹は支那に於ける製紙原料として最も重要なるものなり、竹紙の主産地は湖南、江西、廣東、福建、廣西の諸省なり、此外尚竹の副産物として重要なるもの一あり、筍即ち筍是なり、筍は支那人の四時膳部に上す所の副食物にして一たび煮沸して之を乾燥せしめたるものなり、湖南、福建二省は産出最も多くして之を北支那及南支那各地に搬出す。

竹及竹製品の産額はこれを明かにし難きも各開港場に出づるものに就きて之を見るに竹及竹器の産額約百萬兩にして其中七十萬兩は香港、澳門、暹羅地方に輸出す、竹紙は約四十八萬擔約四百九十萬兩にして北支那地方に搬出するもの多く其中十五萬擔は香港、澳門、印度支那地方に輸出す、筍は約十四萬七千擔(約九十五萬七千兩)にして上海、漢口、天津其他北及中支那各港並に香港に輸出せらる。

(三) 樟樹

樟樹は福建省を其主産地とす、而して福建省と境を接する江西省にも亦少なからず、此外浙江、

廣東、廣西、湖南の諸省に產す、福建省に於ては古來之を伐採して樟腦を製出したるに拘らず之が植林に努めざりしを以て既に其立木甚だ少なく現時所々に見るものは風水說の迷信に因りて僅に其の伐採を免れたるものなりとす、江西省には贛江上流の南安、贛州、萬安、並に錦江上流に多く南昌、樟樹鎭附近の平地に於ても樟樹の大木を見る所多し、唯福建省の如き良質のものなし。

樟樹は普通は樟腦の製造に用ひらるゝ雖も支那に於ては樟樹を以て家具を造り殊に江西省に於ては船材用として貴ばる、贛州船と稱する七八百擔積民船は多くは樟樹を以て建造せられたるものなり。

樟腦の製造は一は樟樹の亂伐と一は我臺灣に於ける樟腦製造の壓迫を受けたるとに因り其產額著しく減少せり、民國三年に於ける移輸出額僅に二千七百擔(二十萬二千兩)にして其中千九百擔は江西產とす、外國輸出は千八百擔にして大部分は香港に輸出せらる。

五　畜產業

支那人は上海、漢口の如き大都會を除ける其他の地方にありては都會、村落の區別なく農家、商家の別なく其生業の副業として家禽、家畜を飼養して自家食用とするのみならず之を販賣して一の收入となす、就中豚、家鷄は最も多く飼用せられ、車馬交通の盛なる街上にも尙豚の餌を漁りて彷徨するを見る、又山間人家稀なる處尙所々に豚の逍遙するを見るべし。

家鷄豚以外支那人の飼養する者の中家禽には鵝、家鴨あり家畜には緜羊、山羊、黄牛、水牛、馬あり。

鵝の飼養は家鷄、家鴨の如く盛ならず家鴨は鴨子と稱し屋内に飼養せらるゝのみならず安徽、江蘇二省の湖沼多き地方に於ては數百羽乃至數千羽を一時に水中に放ち水草を逐はしめて飼養す、而して南京、蕪湖地方を最も著名なる家鴨の産地とす。

緜羊、山羊は羊毛又は食用として飼養せらる、緜羊は北支那を重要産地とし、山羊は北支那に多し、山羊は或は屋内に、或は山野に放牧し、黄牛、水牛、馬は農耕用として飼養せらるゝものにして、馬は農耕用としても騎乗用としても北支那と反對に甚だ少なく之に代るものは黄牛及水牛なり、黄牛は湖南及湖北二省の西部より四川、貴州、雲南三省に亙れる高原地帶に多く、水牛は是等の地方よりも寧ろ東部に多く到る處之を見ざるの地なし。

家禽及家畜の飼養せらるゝや大規模の牧場に於て養はるゝもの稀にして多くは戸毎に婦女及小兒の副業となす、支那の家畜及家禽は我國のものとは異なり甚だしく能く馴馳す、終日戸外を徘徊する禽獣は日暮に至り、婦女子の一種奇異なる呼聲によりて各自の屋内に集り所定の場所に伏臥す、小兒の水牛を驅るもの、豚、家鷄、狗、山羊等の雜然として餌を求め而も爭はざるもの、家鷄の豚の背上に立ちて嘴むるに拘らず豚の平然として彷徨するが如き此外之に類するもの甚だ多く、人畜相親みて悠々たるの光景は古來支那の畫題に多く見る所の如し、家禽よりは肉、卵子、羽毛を取り或は其儘市場に販賣す、其儘香港、澳門方面に輸送せらるゝものは主に蕪湖より出で

二百三十萬隻に達す、羽毛の中鵝毛最も貴く之を裝飾用となす、鴨毛は品質鵞毛に次ぎ鷄毛は最下等にして之を棉花代用品とす、是等は外國に輸出せらるゝもの約七萬三千擔(百萬兩)にして九龍、蕪湖、上海地方より香港其他歐米各國に輸出す。

卵は鷄蛋又は鴨蛋と稱す、鮮蛋又鹹蛋として移輸出するものは中支那及南支那より二億九千五百萬個、之に北支那移輸出のものを加ふれば四億五千七百萬個となり其海外輸出額三億九千五百萬個(二百八十萬兩)と稱す、日本に輸出するもの約一億二千個にして此外香港、歐米諸國に輸出す、以て其産出額の大なるを知るべし、鷄蛋及鴨蛋は更に歐米の輸出品としては之より蛋白、蛋黄を製し、歐米に於ては菓子原料、染料、藥料となす、其工場は漢口及上海最も盛にして漢口に十四箇所あり、此外江蘇、安徽に多く揚州、亳州、興化、上岡、砂溝、徐州、睢寧等に一二箇所づゝあり、其貿易高は約十三萬擔(二百三十萬兩)にして大部分を英、獨、佛、白耳義、米に輸出す、家畜よりは肉、毛皮、毛、骨、角を取る、其中中支那及南支那に於て最も主要なるを豚即ち豬と牛とす、豬にありては其儘南支那より香港地方に輸出せらるもの二三百萬兩に達し、豬毛は四川、湖南に多産し刷子原料として歐米に輸出せらる、肉は生肉の外に火腿即ちハムとして支那料理の味着けに使用せられ又ソーセージの製造に使用せらる。

牛は北支那に於ては其儘又は肉として沿海州に輸出せらるゝも中支那及南支那には湖南、廣西、貴州の諸省に産するのみにして、遠隔の地に産するものは肉として出すもの少なく黄牛及水

牛共に牛皮、牛骨、牛角として輸出せらる、是等は中支那及南支那各港より輸出せられざるなきも漢口、上海、梧州より出づるもの最も多く漢口を其最大市場とす、是れ四川、湖南、貴州方面より集り來るものなり、此三者の中牛皮は中支那及南支那より三十六萬擔(千百萬兩)を出し之を米國の外歐洲諸國に支向く、蓋し支那輸出品中重要品の一なり。

野禽及野獸中野禽は洞庭湖、鄱陽湖並に湘江、贛江に雁、鵠、鴨の大群來集す、但し生產品としては野獸の毛皮の如く重要ならず、野獸は狐、狸、旱獺、貉獾、貂、黃狼、栗鼠等にして、北支那の如く多產せず、又品質劣れるも陝西、四川、貴州、雲南並に湖北及湖南の西方高原地帶に產し其毛皮は揚子江流域の市場に現はる、其市場の主なるものは漢口及上海とす、南支那は氣候溫暖にして冬季毛皮の衣服を要せざるも習慣として冬季には裏毛を使用するを常とす、而して是等の毛皮は緜羊皮と共に北支那より移入せらるゝもの多く唯だ旱獺、貉獾、黃狼は湖南、湖北、江西に產す此外湖北、福建には虎、豹の類あり其毛皮を出すも產額多からず。

六 水產業

中支那及南支那は支那東海及支那南海に瀕し、海岸線の屈曲甚だしく其內地には揚子江、錢塘江、西江、北江其他數多の大河並に洞庭湖、鄱陽湖、太湖其他湖沼の大なるもの亦甚だ多きを以て海產物及淡水產物に富めり、其重要部を占むるは漁業及製鹽業にして其他貝類、眞珠採取等とす、然

るに漁業は海水、淡水共に其漁場廣きに比して著しく盛大ならざるは一は支那人の習慣として豚肉、鷄肉並に其他野獸肉を嗜好し我國の如く魚肉を副食物の主要部となさゞること、一は其國土廣大にして海岸地方を除ける内地の大部分は新鮮なる海産類の供給を受くる能はず、彼等の食する海水魚は乾魚にあらざれば鹽魚にして既に其美味を失ひ、又淡水魚は到る處捕獲せらるるも海水魚の如く豐富なる能はざるに因らん。

(一) 漁　業

漁業は閩浙より廣東の海岸に至る迄到る處之に從事せざるものなきも其最も盛なるは甯波を中心とする浙江海岸にして福建省及廣東省の海岸之に次ぐ、蓋し浙江海岸の漁業は其地方の需用を充すのみならず揚子江流域に於ける需用に應ずるを以て盛大を致すものとす。

支那海岸に於ける魚類中主として捕獲せらるゝは沙魚(フカ及サメ)、鱔魚(タチウオ)、黃魚(グチ)、小黃魚、銅盆魚(タヒ)、飯魚(カレヒ)、七色魚、紅姑魚(カナガシラ)、大頭魚(タラ)、老虎魚(アカエヒ)、鰲魚等にして沙魚は魚翅と稱し其翅を賞味す、鱔魚及銅盆魚は甚だ多く銅盆魚中には我國の鯛、甘鯛(イトヨリ)等種類多きに拘らず支那人は赤色を有する魚類を好まざるを以て之を捕獲するもの多からず。

其漁獲法は釣及網に依るものにして其種類多し、近年中國漁業公司なるもの英支合辦のトロール會社を香港に設立し遠海漁業に從事せんとす、魚類の外支那の海岸に於ては鮑介、牡蠣、蠔介、赤貝を捕獲す、鮑介は鮑魚と稱し支那の料理に缺くべからざるものとし支那海岸産を以て不足

を告げ之を我國より輸入するもの甚だ多し、支那人は世界中最も火食の習慣を有し肉類に至りては決して生食せず、雖も牡蠣及赤貝は生肉の儘食用に供す、彼等の食する赤貝は其形甚だ小なるものなり、貝類の外蟹及蝦は盛に食用に供せらる。

眞珠は廣東省瓊州地方に於て採取せらるゝ者にして未だ養殖眞珠業の實施せらるゝを聞かず。

支那に於て漁獲せる海產物は海岸地方の需用の外內地に向ひ移出する額甚だ多く、浙江海岸のものは其內地及揚子江流域に、福建省海岸のものは福建內地並に陸路揚子江流域に出で一部は上海を經て揚子江流域に入る、廣東省海岸のものは廣東內地に、並に內地を經て湖南及江西南部又は廣西、貴州、雲南方面に搬出せらるゝもの多し、民國三年の海關報告に依れば移輸出額二十一萬六千擔其價額百七十八萬兩にして鮮魚、乾魚及鹹魚大部分を占め其他鮒、魷魚、墨魚、蝦米、蝦乾、海蜇、魚翅等あり、支那產海產物の外に海外より輸入せらるゝものは年々約百六十萬擔其價格千三百二十五萬兩に達し其種類には乾魚、鹹魚、昆布、海帶、鰾魷魚、乾蝦、海參、乾鮑、貝柱、干貝、鱶鰭、魚翅、寒天ミす、乾魚には乾鱈多く鹹魚には鹽鱒、鹽鰊、鹽鰛、開鱈等あり、是等海產物の輸入國中主要なるは香港、日本、澳門にして海帶は日本より漢口、九江、蕪湖に入るもの主要部を占む、其他の海產物は上海、廣東、九龍、拱北に入るもの多し。

淡水の漁業は揚子江の本流に最も盛にして三峽地方の如き急流地に於ても到る處漁業に從事するものあり、贛江、湘江其他多くの大支流、洞庭湖、鄱陽湖、太湖並に湖廣低地、吳平野に於ける湖

沼地に於ては到る處漁業に從事す、而して是等河流及湖沼には鯉魚、青魚、白魚、鰉魚、藻魚、鱸魚、魚脆、銀魚、石魚、茅花魚、鰻の外鰕、鼈等あり、鱸魚即ち桂魚は松江の鱸と稱し支那人の賞味するものとす、鯉魚、青魚、藻魚等は支那人の常に食するものなり。

淡水魚に於ける漁獲法中河岸に於ては釣をなすもの、手網を用ふるもの、投網をなすもの、四手網を裝置するもの並に簀と稱し魚籠を水中に裝置するもの等あり、水上に於ても釣魚、投網、四手網、引網の外小船又は竹筏に於ける鵜飼等あり、此外魚叉を用ふるものあり。

(二)　製鹽業

支那の如き廣大なる國土にありては日常食用に供する食鹽の如何に供給せらるゝかは實に一大緊要事に屬す、自然の配劑は此の如き大國に天惠を與へ雲貴高原、巴蜀盆地更に山西、陝西の高原に於ては岩鹽及鹽水の地下に埋藏せらるゝあり、又甘肅、蒙古地方の如き更に交通不便の地に於ては鹹湖又は乾湖に食鹽堆積するあり、之を遠く海鹽に仰ぐの要なし、之に反して海岸地方並に海岸を距ること比較的遠からざる地方にありては湖廣低地の一部を除けば食鹽を地下に獲る能はざるより、全部海鹽の供給に仰がざるべからず、岩鹽及鹽水に關しては鑛業の部に於て述べたれば茲に之を省略し、海鹽の生產地及其供給の狀を略述せん。

海鹽の產地は中支那及南支那に屬するものに兩淮、兩浙、福建、廣東の四產地あり。

兩淮鹽の產地は揚子江口より山東省の南端に亙れる江蘇省海岸地方にして淮河及揚子江の

冲積地に屬す、其海岸は泥土より成りて屈曲甚だ少なし、該冲積地には鹽運河と稱して通州より如皐並に東臺、臨城の西を過ぎて阜甯に至れる約二百哩の運河あり之に鹽水を通ず、鹽田は此運河の東に沿ひて連續し鹽田と運河との間に隄を設く、鹽水は隄を貫き運河より鹽田に引用すと云ふ、兩淮の產鹽地は淮河によりて淮北、淮南の二區に分たる其鹽場は淮北に三、淮南に二十あり、淮北鹽は白色にして優良なり、淮南鹽は灰色又は青色を帶ぶ。

兩浙鹽の產地は揚子江以南の江蘇、浙江二省の沿岸地方にして兩淮地方の如く運河內に於て行はるゝにあらずして海濱に鹽場を有す鹽場は三十二にして其中七場は江蘇省內に、五場は浙江省內にありて杭州灣の北岸に位す、其他の二十場は浙江省內殊に杭州灣の南岸及甯波以南の浙江省海岸に散在す、舟山島及松江府內に良鹽を產すと云ふ。

福建鹽の產地は閩江の河口より南西方の海岸地にして鹽場は約十四あり、品質優良ならず。

廣東鹽の產地は廣東省海岸一圓にして唯珠江の江口には鹽場なし、鹽場の數十九なりと云ふ。

以上の產鹽地に於ける製鹽は曬法と煎法とを用ゐ、兩浙鹽には曬法によるもの多し品質は兩淮の淮北鹽を最良とし其他は大同小異なり、其產額は明かならざれども大略左の如し(大村文學士支那政治地理誌による)

兩淮鹽

淮北　三、二三四、〇〇〇擔

淮南	一、三〇六、八〇〇
兩浙鹽	三、二一六、〇〇〇
福建鹽	一、九〇七、五〇〇
廣東鹽	二、五〇〇、〇〇〇

鹽の專賣法は支那に於ては其起源甚だ古く齊の管仲の時にありと云ふ、清朝に至りては官運、民運、商運の三法に依る、官運は政府自ら產鹽地に於て買入れたる鹽を販賣地に運搬し之を賣下ぐるもの、商運は專賣權を有する鹽商に引又は票を下附し之に購入、運搬、販賣を許すもの、民運は票を下附し一般に販賣を許すものなり、官鹽と稱するものは前二者に屬し私鹽と稱するものは後者に屬す、各產鹽地の販賣區域は略一定し之を行銷地と云ふ、交通の便否によりて行銷地互に交叉す、現時行銷區域を見るに其區域の最も廣きを兩淮鹽とし廣東鹽之に次ぎ兩浙鹽、福建鹽は區域狹し。

兩淮鹽の行銷地中淮南鹽は江蘇省南部、湖北、湖南、江西の三省並に安徽省南部とし、淮北鹽は江蘇省北部、安徽省北部、河南省南東部とす、但し江蘇、安徽の北部には山東鹽、江西省の南部には粵鹽東部には兩浙鹽の入るあり、湖北省の東部には四川鹽の入る外其中部の應城附近には同地產山鹽を使用し湖南省南部には粵鹽の入るあるも淮南鹽は沅江に沿ひ遠く貴州省内に入るものとす、兩浙鹽の行銷地は揚子江以南の江蘇、浙江二省並に安徽省の徽州盆地、江西省廣信附近とし共

に錢塘江の水路の便あるによる、福建鹽の行銷地は韓江上流地に位する汀州府を除ける福建一圓にして之を東路、西路、中路の三區に分つ、東路は閩江の下流、西路は其上流地、南路は晉江及九龍江の流域とす、廣東鹽の行銷地は廣東、廣西二省、福建省韓江上流、湖南、江西二省の南部並に西江流域に屬する貴州、雲南の一部とす。

七　工業

支那は國土廣大にして豐富なる物資を擁し人力餘りありて勞銀甚だ廉く、加ふるに數千年の歷史を有し文物燦然たりしに拘らず、工業は機業、窯業の如き工藝に屬する特種工業を除けば其進步發達甚だ幼稚の域を脫せず、古來支那人の營める工業には其種類多々ありと雖も概して農業物に人工を施したる半製品なり、該半製品中大部分は自國の需用を充し其殘餘を工業用原料品として歐米各國に供給するに過ぎず、而も其工業製品たるや殆ど家內工業の製品にして零碎の製品は各地生產地より市場に集まり來りて相當の巨額に達するものとす、若し夫れ器械的工業に至りては振はざること大なり、輓近該工業の發芽は開港場に於ける外人經營の工場に起り着々事業の見るべきものあるに至れり、茲に始めて支那人の利權回收的覺醒となりて或は外人經營の事業を回收し或は外人との合辨、官商合辨或は商辨によりて工場の設立を企畫するもの增加せり、是に於て開港場より主要都市に向ひて事業熱の傳播を起し現に主要都市には平民習

藝所と稱する工業練習所を設立して殖産の奬勵を勉むるもの多く漸次工業發展の機運に向へりと雖も、未だ各種産業殊に鑛業の進歩遲々たると資本並に事業家の缺乏等によりて急速の進歩あるべしと豫期し難し。

半農的加工品に就きては既に各産物を記述するに際して大略其生産の狀況を述べたるを以て之を省略し茲には器械的工業に就き其主要なるものを述べんとす。

器械的工業の中心地と見るべきは中支那にありては上海、漢口、南支那にありては廣東、香港とし、其他の地方に於ては見るべきもの甚だ少なきを以て該工業の中心地に於ける工業の概況を記するときは其一般を知るを得べく、次で全般に亙りて記述する所あらんとす。

（一）上海の工業

上海は支那に於ける貿易の最大中心地たると共に工業の最大中心地にして外人及支那人の經營に拘るもの其種類甚だ多し、就中紡績業を最も盛大とし此外製絲、製粉、搾油、製紙、製材、燐寸、石鹼、造船、造機、電燈、硝子製造、製氷、製革、印刷等あり。

紡績業には工場十七あり、支那全國に於ける三十二工場中上海其過半を占む、内外國人の所有に係るものを國別にすれば左の如し。

	工場の數	錘數
日本	四	二〇七、五六八

英吉利	四	一九九、六六八	
支那	七	一六二、一一二	
獨逸	二	一〇五、〇六六	
計		六七四、四〇四	

其錘數は六十七萬を出で日本人の經營に係れるは內外棉花株式會社、上海紡績有限公司、日本棉花株式會社の三會社四工場にして上海紡績界の最大生產者なり。

生絲の製絲工場は五十九にして其釜數一萬六千百五十六釜と稱す、但し本業の盛衰大なるものあり、製絲業者にして工場を有するは約十分一とし多くは工場を借入れ或は借入れたる工場に於て製絲の請負をなすものなり、其中外人の經營に係るは英獨各一あるのみなるも、日本に屬するものには上海製造絹絲株式會社、小野村精練場あり。

製粉業の工場十五あり、我三井洋行其經營の實權を握れる增裕製粉會社を除けば他は支那人の經營に係るものなり。

搾油業の工場六あり、外人の經理に係るもの二あり、一は英商祥茂洋行の經營に係る立德と三洋行の經營せる華昌となり、其原料は之を上海附近に仰げり。

製紙工場は支那人及露西亞人の經營に係るもの各一工場あれども「パルプ」を得ること困難なるを以て未だ事業進歩せず。

製材及燐寸業の工場三あり、二は外商により一は支那商によれり、而して卵箱、石油箱、煙草箱等に使用する板を製材するも手挽の工賃低廉なるを以て未だ該業の發達大ならず、燐寸業の工場は甕昌及兆民の二あり、共に支那商の經營に係り軸木を日本より輸入して燐寸の製造に從事す、但し日本燐寸輸入の十分の一を出すに過ぎず。

繰綿業の工場は五、器械臺數五百七十三、其中日本人の經營に係るもの一、其他は支那人の會社なり、日商雲龍公司に於て器械數二十二あり、生產高は繰棉約十六萬擔、棉實二十七萬擔とす。

造船及造機業は香港を除けば上海を以て支那第一とす、其工場は耶松船塢廠、上海製造廠、瑞瑢機械廠、求新製造機器輪船廠の四工場を最大とし此外東鐵廠、恒昌祥機器廠、遠昌機器廠、興發機器廠等あり就中耶松船塢廠（The Shanghai Dock and Engineering Co.）は規模最も大にして五個の船渠と造船工場とを有し六七千噸級の汽船建造に從事す、內外汽船、軍艦の修理は殆ど該廠に依ると云ふ、上海製造廠は支那官營に屬し江南船塢機器廠と江南機器局とより成り大小船渠三個及造船工場を有し政府事業の傍ら民有汽船の建造及修理をなす、江南機器局は主として軍器製造に從事し漢陽機器局と共に支那に於ける重要軍器工場たるこゝは第一第二兩度の革命亂に於て官革兩軍の之が爭奪戰をなせるに見るも明かなりとす。

此外印刷業に於ける商務印書館、製革業に於ける上海機器硝皮公司、石鹼及蠟燭製造業に於ける日商瑞寶公司、獨商固本公司及數多の支那商の公司並に硝子製造業、製帽業、釀酒及製氷業、電燈

電車、電話、水道等各種工場あり、左に上海に於ける主要の工場數を擧げん。

紡績會社	一七	製絲會社	五九
繰綿工場	一	製粉會社	一五
製紙會社	二	燐寸會社	二
製革工場	四	水道會社	四
清涼飲料會社	五	靴下工場	一
罐詰工場	一	硝子製造會社	六
造船及造機會社	四	瓦斯會社	一
電車會社	三		

絹絲紡績會社　一
搾油會社　六
煙草製造會社　一
麥酒會社　一
製帽工場　二
製氷會社　二
電燈會社　四

(二) 武漢の工業

武漢の地は支那內地の中央に位し揚子江及漢江の水利と加ふるに該流域に於ける無限の富源とを控ゆるのみならず京漢、粵漢兩鐵道は此地を通じて支那を縱斷せんとす、將來東西、南北の物資此地に集散せられ豫て工業的中心地たらんと期待せらる、現時既に工業の發達大に見るべきものあり、工場は武昌、漢陽、漢口の三箇所に分る、蓋し武漢の地は揚子江と漢江との合流地に鼎立し各特種の工業發達するものとす、即ち武昌は湖北省の首府にして機業、造幣の事業を主要とし官營として建設せられたるもの多きも後合辨となり或は轉借し商辨を以て經營せらる、其主

要なるものを列擧すれば從來紡紗局、織布局、官絲局、製麻局、氈咤廠の如き機業並に製紙廠、造幣局、鍼釘局、硝子製造所及電燈公司等あり、紡紗局には紡績錘數五萬、織布局には紡績の錘數四萬、織布機五百臺、官絲局には繰絲釜三百臺(一臺五錘)あり、製麻局には麻絲、紡績及麻袋製造に從事し紡績機百四臺あり、氈咤廠は粗羅紗の製造に從事せるも近年紡績及織布業には天綠錦紡織廠、漢口第一紡織股份有限公司設立せらる、漢口第一紡織廠のみを以てするも武昌紡紗局及武昌織布局と約同額の產出を見るに至れり、此外織布の小工場に至りては約三十の工場を算すと云ふ、造幣局は銅元局と稱し銅貨を鑄造す、銅は日本產を使用す、硝子製造所及鍼釘局は休業す、電燈公司は最近二公司設立せられたるも一公司のみ事業を開始す。

漢陽には金屬工業と搾油工業とあり、金屬工業には漢陽鐵政局、兵工廠、漢陽鋼鐵廠、搾油工業には天盛油廠、裕豐搾油廠、順貴搾油廠、允豐搾油廠あり此外タオル製造所あり。

鐵政局及兵工廠は官營にして兵器彈藥の製造を成し之を各省に供給するものにして、江南機器局と共に支那に於ける重要なる軍器工場なり、漢陽鋼鐵廠は漢冶萍煤鐵礦廠有限公司の所有にして日本の借欵に據るは人の知る所蓋し支那に於ける最大工場とす、大冶鐵山の鐵鑛、萍鄉炭坑の骸炭を搬入し、銑鐵は日本及米國に輸出し軌條及蹄鐵は支那內地に供給す、油廠は皆荳粕製造所にして允豐搾油廠は日產二千五百枚其他は六百枚內外とす、タオル製造所は六工場あるも自新工藝廠の日產千百打を出す外他は皆極めて小規模なり。

漢口には雜多の工業發達し且つ內外國人の經營に係るもの多し、其中支那人の經營によるものには搾油業に元豐豆粕製造所、興盛豆粕製造所、華昌豆粕製造所、歆生搾油廠あり、製粉業に漢豐麵粉公司、裕隆麵粉製造所、金龍麵粉公司あり、此外漢口水電公司、燮昌燐寸製造所、福華煙草工場、興商製茶公司、揚子機器公司、製紙局、中法公司、釀造工場あり、搾油廠中大なるは元豐、歆生の二廠にして豆粕の日產三千枚とす、燮昌燐寸製造所は日本租界內にあり一年の製出高四萬箱にして湖北湖南、河南一帶に販路を有す、漢口水電公司は水道、電燈兼營をなし我東亞興業の借款による、外國人の經營に係るものには露國人の經營としては阜昌、新泰、順豐の磚茶製造所三あり、阜昌は英租界に其他は露租界に位し支那に於ける磚茶の大部分を製出す、佛國人經營としては、永興蛋廠、亨達利製練所、立興棉花壓搾所あり、獨國人經營としては蛋白製造所、美最時、元亨、禮和の三工場あり、此外漢口機械製造所、美最時、瑞記、禮和の三棉花壓搾所、漢口磚瓦製造所、電燈公司あり、米國人經營としては漢口製氷所、漢豐麵粉製造所、美孚石油糟、英米煙草會社なり、其中美孚石油糟はスタンダード石油會社の經營に係り英米煙草會社と共に外國人經營中最大事業なりとす、日本人經營としては日信洋行製油豆粕所工場二、東亞製粉會社、大正電燈公司あり、英國人經營としては平和搾油廠、和盛蛋白製造所、漢口電力公司、和記冷肉製造所あり、此外丁抹、墺太利、白耳義人の經營に係る製造所及蛋廠各一あり。

要するに外國人の經營に係れる工業中主要なるは米人の石油及煙草業、露國人の磚茶業、日本

人獨人の製粉業、英佛獨人の蛋白業、日英人の搾油業、日、英、獨人の電燈電力業こす。

(三)香港の工業

香港は東洋に於ける貿易の最大中心地にして支那内地は勿論印度支那、南洋、日本並に歐米諸國の物資此地に集散せらるゝもの甚だ多くして一大中繼貿易場たるのみならず又各種物資の茲に加工せらるゝもの多く工業的中心地をなすに至れり、但し惜らくは香港は急傾斜の孤島にして其對岸の九龍にも亦平地甚だ狹小にして工業的設備を成すに困難多く加ふるに生活費勞銀甚だ高價なり、是に於てか支那の工業地こして最も早く開けたるの地たるに拘らず又英人の努力多きに拘らず上海、漢口の如く其進歩著しからず、且つ近年日本工業の發達によりて大なる打撃を受けたり、香港の工業中大規模のものは外國人の經營に係り支那人の經營に係るものは何れも小工業に屬す。

(イ)支那人の經營に係る工業は燐寸業、製紙業、煙草業、莫大小業、金屬業、石鹸業、硝子業、籐細工業、製革業並に釀造、罐詰業こす。

燐寸製造業工場は九龍に隆記公司の經營に係るもの一あり、原料は多く日本に仰ぎ其日産額二三千箱なり。

製紙工場は大成機器造紙有限公司の經營に係るもの一あり、南支那各地より襤褸を集めて製紙す。

煙草工場は元來二十五六箇所ありしも外國煙草の壓迫を受けて十三四に減ず、皆小工場なり、廣東省内の北海、鶴山、新會、南雄の菸葉を集めて條絲煙を製す。

莫大小業の工場は大工場五、小工場十あり、原料は日本に仰ぎ其製品の年額は靴下五六萬打、襯衣十萬打を出し支那、印度支那、南洋に販路を有す。

金屬業は大工場なきも金、銀、銅、錫及鐵器を製造するもの三四百軒あり、此外錫製鍊業に關する工場十五あり、雲南、廣西、新嘉坡産錫を輸入して之を調合し世界の市場に輸出す、此外石鹼製造業の工場は獨逸人の經營に係るもの一、支那人の經營に係るもの一にして石鹼曹達を製出するも振はざるが如し、硝子業には廣生行有限公司、福惠公司の大工場と其他小工場八箇所とあり、新安縣平海の硅砂及硝子屑を用ひて罩蓋(ホヤ)、藥瓶、菓子瓶を製し外國輸入品の杜絶に努む。

(ロ)外國人の經營に係る工業には造船業、精糖業、セメント業、煙草業、紡績業、瓦斯鋼製造業、製氷業、電氣瓦斯業等あり、多くは英人の經營に係るものにして造船業、精糖業を主要とす、造船業は香港に於ける工業の首位にあり、蓋し香港は東洋に於ける航行業及貿易業の最大中心地なるを以て此地を中心地又は寄港地とする航路の甚だ多きこと既に交通の部に述べたるが如し、從つて此地に集まる所の世界各國の船舶の數年々四萬五千隻其噸數二千三百萬噸の巨額に上り之に内地航路の船舶及戎克を加算するときは五十四萬隻其噸數三千六百萬噸と稱す、造船事業の盛大なる蓋し故あるなり、造船業に關するは太古船渠會社、香港黄埔船渠會社、庇利有限公司、麥當路行、飛

輪公司、威積有限公司にして其中飛輪公司の外全部英人の經營に係り、太古、香港、黃埔の二船渠會社を最大とし其他は小なり、此外支那人經營のもの四箇所あるも甚だ小規模のものなり。

香港黃埔船渠會社は千八百六十六年の設立に係り工場三箇所にありて乾船渠六個を有す、太古船渠會社は千九百八年の新設に係り專ら英國海軍の用に供す、而して是等數多の船渠に於ける造船數は年々六十隻乃至七十隻にして其噸數一萬噸內外なり。

精糖業には太古精糖會社、支那精糖會社、呂宋製糖會社の三大會社あるも呂宋製糖會社は本社を香港に置き工場は呂宋にあり、元來香港の糖業は十年前迄は成績大に見るべきものありしも臺灣の製糖會社の壓迫と瓜哇白糖の需用大なる爲めに近年甚だしく其打擊を受け其生產力を縮小せり、太古精糖會社は太古洋行の經營に係り太古糖房と稱す、一日の製出高千五百擔とす、支那精糖會社は渣甸洋行の經營に係り工場は當地及汕頭に三箇所あり、一日の製出高千擔なり。

セメント業には靑洲英坭公司所屬工場三箇所あり香港、澳門、九龍とす、セメントは澳門及九龍に於て製し香港に於ては煉瓦及磚管を製す、本會社は二十年前の設立に係り最盛時に八十萬樽以上を製出し之を支那、日本、比律賓に輸出せしも輸出先に於けるセメント會社の急激の增加及廣東セメント會社の競爭に加ふるに廣東省內に於ける原料の採掘を禁止せられ甚だしき悲境に陷るに至れり。

蘇綱業には英商シユワントームス商會の經營に係る香港蘇欖公司の工場一あり、馬尼剌より

原料を輸入し年額五六百萬封度の葉綱を製出す、支那、日本、印度、海峽植民地、濠洲に其製品を輸出し極めて有望の事業なりとす。

煙草業には廣東南洋煙草公司、東洋煙草會社の二工場あり、廣東南洋煙草公司は本邦歸化廣東人の經營に係る、其原料を米國に仰ぎ一ヶ月千捆(一捆五萬本入)を製出し之を廣東、香港、印度支那地方に輸出す。

電氣及瓦斯業中香港電燈會社は香港に、中華電燈公司は九龍にありて電燈、電力を供給す、香港電車會社は延長十四哩半の香港市内電車を經營し、ピーク電車會社は海岸より高拔千三百呎の山上所謂ピークに至る電車を經營す、其延長四千六百九十呎なり、支那日本電話會社は香港及九龍の電話を經營する獨占事業にして加入者數二千人餘ありと云ふ、香港瓦斯會社は千八百六十二年の設立に係り其後九龍に分工場を設く、蓋し電燈會社設立以前香港に於ける唯一の點燈業たりしなり。

紡績業、製氷業並に麥酒、製粉業は現今衰頽して休業又は廢業するに至れり。

(四) 廣東の工業

廣東即ち廣州は西江、北江、東江を控へ南方香港との間に水運の便あり、其附近廣漠たる廣東三角洲の平地にして生產物に富み工業的中心地たるの素質を有す、現時香港の發達に壓せられて工業的發展に就き未だ見るべきものなしと雖も將來香港の工業を凌駕するに至らん、此地方に

於ける主要の工業こしては製絲及機業を擧ぐべし。

生絲の製絲工場は廣東、西南、佛山、順德に亙りて約二百の工場あり、蓋し生絲は廣東省の主要の輸出品たること既に農業の部に於て述べたり、機業に關しては綿布工場は廣州に四、三水、佛山、西南に各一、清遠に一、新甯及公益埠に各一あり、就中廣州の亞通織造局、黃埔織造社、三水の永新民公司、西南の務新公司を大規模こし日本の豐田式機械を据付け綿ネル、綿織物の製造に從事す、此外タオル業者こしては廣東に巧新織布公司、維新織布公司あり、莫大小業こしては廣東に廣華興織造總公司あり、燐寸業は廣東の郊外西村に一大工場あり、廣東附近に八工場あり。

セメント業には二工場あり、一は官營煉瓦及セメント工場にして一日一萬五千個の煉瓦を製出す、一は英商の設立せるセメント會社にして後陸軍部の管理に屬するに至れり。

硝子業は明新公司に屬する工場の外、廣東附近に三十の小工場あり、專ら硝子屑を再製するものこす。

機械工業こしては兵器及火藥製造所、水道、造幣局、電燈公司あり、此外製紙公司、煙草會社、製革會社並に美孚洋行の石油槽あり。

以上揭ぐる所の各種工業は設立後日尙淺く未だ著しき發達をなさず、將來發展の機運に向はんこす、但し從來廣東に於ける工業の特色は器械的工業にあらずして寧ろ工藝的手工業に在りて存す、廣州を中心こする蓆、爆竹、漆器並に玉器、扇、刺繡の製造は古來支那並に歐米に著名なりこ

謂ふべし。

(五) 主要の工業

上海、漢口、廣東並に香港の工業の大要を記したれば之によりて中支那及南支那に於ける工業の大勢を知るを得べしと雖も尚各省に亙りて特種の工業地なしとせず、左に中支那及南支那全部に亙り主要の工業を列擧せん。

(イ)機業は支那に於ける工業の大宗にして製絲織布及其製品を出し其種類には綿、絹、麻の三種あり、就中綿絲、綿布及綿製品は其需用最も多し、而して自國産綿絲は生産地の家内及紡績工場に於て製出すと雖も到底内地織布原料の需用に充つる能はず、故に之が補充としては英國、英領印度、香港より輸入するもの甚だ多く之を洋紗と稱す、之によりて土布其他諸種の綿布を製出し尚綿布及綿製品を外國に仰ぐもの年々驚くべき巨額に達す、民國三年の統計に據るに其輸入額は綿絲約六千七百四十三萬兩、綿布約三百萬兩、綿製品約一億一千三百萬兩、總計一億八千萬兩に達し該業の前途や實に研究に價するものあり。

支那に於ける綿絲工場の現在は三十三、錘數八十五萬餘と稱す、該工業の最も盛なるは棉花の生産地を控ゆる江蘇、浙江二省にして江蘇省にありては上海に工場十八、無錫に十二、蘇州、大倉、崇明、通州、江陰に各一あり、是等の地は蓋し支那に於ける綿絲工業の中心地なり、浙江省にありては寧波に二、杭州、蕭山に各一、此外湖北省武昌に二工場並に香港に一あり、上海以外の工場は支那人

の經營に係るも上海には英人の工場四、獨人のもの二、日本人のもの三あり、而して是等の紡績工場に使用する原料は殆ど全部支那綿にして普通は二十手以下のものを製出するも二十手以上のものには多少の米綿を混ずと云ふ、而して上海に於ける綿絲の製出高は約千九百九十萬兩に達す、綿布の製出せらるゝ地方も亦上海を中心とする江蘇省を最多とし約二千七百萬兩に達し、之に次ぐを浙江、湖北、廣東江西の諸省とす、生絲の製絲業は江蘇、浙江、四川及廣東の四省を以て主産地とし其工場は江蘇省上海に五十九、廣東省廣東及其附近省内に二百、此外江蘇の蘇州に三、無錫に九、鎭江に二、浙江省杭州、湖州、蕭山に各一工場あり四川省にありては成都に二、重慶に八、潼川に七、中江に一、保寧に二、順慶に一、廣安に二、内江に一、嘉定に一、資州に一工場あり、杭蘇の緞綢、蜀江錦は即ち支那に於ける機業の誇にして支那工藝中顯著なるものなり、而して絹織布の種類には綢、錦、緞、絨、紡、紗、紬、絹、呢等あり、杭蘇綢呢は蘇州、揚州、南京、湖州、杭州、紹興の産なりとす、其機業の盛大なるは杭州を中心とする湖州紹興にして舊式機臺二萬三千臺、新式機臺約二千に達するを以て其一班を知るを得ん。

麻布は夏布と稱す、江西省袁江流域の袁州より湖南省醴陵に至る間瑞河流域並に廣信附近を以て支那に於ける夏布の主産地とす、此外四川省成都、江蘇省蘇州並に安徽、福建に亙りて産出地少なからざるも大工場として織布に從事するもの甚だ少なく何れも家内工業の産物なり。

(ロ)製粉業は支那に於ては紡績業に次で主要なる工業にして滿洲及中支那を最も盛大とす、中

支那に於ては上海を製粉業の中心地とす、上海には既に麥類の部に述べたる如く其工場十五あり、此外江蘇省内には無錫に四、通州、海州、清江浦、高郵、泰州、鎭江に各一あり、鎭江を除けば皆江北に位す、安徽省蕪湖に一、湖北省漢口に四あり、其中外人の經營に係るは上海の增裕公司、漢口の金龍公司のみにして其他は皆支那人の經營に係れり、而して原料は支那産小麥を使用す、其製品は米國製に劣り米國産麵粉の精良品と競爭する能はず、現に米國産麵粉の輸入年額七百萬袋を下らずして支那産は常に其壓迫を受くるを以て支那産麵粉販路の擴張甚だ困難にして生産過剩の憂ありと雖も蓋し支那人經營の工業中成功せるもの一なりとす。

（八）茶、煙草、砂糖業の中茶の市場は漢口、上海、福州なること既に記述したるが如し而して土法によるもの多し、其工場として見るべきは漢口、福州並に九江に於ける露西亞人經營の磚茶製造會社なり、煙草は九江、漢江、厦門、汕頭、上海等其生産地に於て舊式の刻機を使用するもの多しとするも工場を設くるは英美煙公司の上海、漢口の二大工場にして此外香港に廣東南洋煙草會社及南洋煙草會社の二工場あるのみ、砂糖業は香港に太古、支那兩精糖會社の工場あるのみ。

（九）搾油業は油を搾出すると共に油粕即ち油餅を製出するものにして荳子餅、茶餅、棉實餅、菜子餅等の種類あり就中荳子餅最も重要なり、搾油業の中心は漢口及漢陽にして其工場は九あり、此外上海にも六工場あること既に記載せる所の如し、南支那の福建省泉州、漳州、汕頭に於て北支那より大荳を輸入し荳子餅を製造する工場多きも大工場なし。

（ホ）燐寸、製紙、硝子、製革は前述上海、漢口、廣東の工業に就きて記述せられたるが如く其他の地方には之を見ず、或は之あるも甚だ小規模のものあるのみ。

（ヘ）船渠業に關しては上海、香港に於て記述せる外漢陽に一小船渠ありと云ひ、又福建省福州馬尾に海軍用船渠あり、厦門にある新厦門大船塢、厦門機器有限公司の二船渠中、前者はテート商會の經營に係り後者は支那人の出資による、兵器廠は中支那に於ては上海、南京、漢陽、成都及杭州に、南支那に於ては福州、廣東、雲南にあり、造幣廠は中支那の南京、安慶、武昌、長沙、成都及南支那の福州、廣東にあり但し安慶には之を廢す、水道廠は中支那の上海、漢口、成都、南支那の寧波、汕頭、九龍、香港にあり、金屬業は漢陽の製鐵所を以て最大規模とし此外香港、廣東に錫工業者少なからず。

（ト）電氣事業は電燈、電力、電信、電話等あるも電燈、電力を主要とす、都會の發達及工業の進歩に從ひ電力を工業上に使用するもの多きを加へたり、就中上海、漢口、香港、廣東に於て最も盛にして其他の開港場にして其設備なきはなく、近時各省主要都市に之が設備に着手するもの多し、而して支那に於ては地形の關係上水力電氣を得るの地多からず概して火力に據りて電力を求むるもの多し、左に電燈及電力供給の主要地を擧げん。

中支那

上海

工部局電氣所　工場二あり電燈及動力を供給し電力は一萬五千キロワットなり、供給區

域は共同租界とし、供給の種類は家内用電燈、市電街燈、上海電車公司、閘北水電公司、内外棉花其他紡績工場、製粉會社、精米工場、鐵工場なり。

上海電車公司　電車を運轉す其運轉區域は單線七哩にして複線九哩なり、而して電車の數九十六臺とす、外に無軌道電車あり。

上海法商電車電燈公司　電燈及動力を供給す、電力は約五萬キロワットなり、供給の區域及種類は佛租界の電燈、電車及水道なり、電車の運轉區域は十四哩にして電車の數は三十八臺なり。

閘北水電公司　電力を水道に用ふ。

南市電燈公司　電力供給の區域及種類は城南及南市の電燈及動力にして電燈は一萬千燈此外電力二百ボルト。

上海華商電車公司　運轉哩數十一支那里、電車十五臺。

右六會社の中上海電車公司、上海華商電車公司の外は電燈及電力を供給す、約六十萬燈と稱せり。

蘇州

振興電燈公司一あるのみ二十萬燈光を供給す。

南昌

開明電燈公司に五千燈十萬燈光を供給す。

漢口

大正電氣株式會社に千三百燈を供給す。

漢口既濟水電公司に三千燈を供給す。

英國電燈株式會社に八千燈を供給す。

美最時洋行　未詳。

武昌

耀華電氣公司　未詳。

武昌電氣公司　未詳。

長沙

湖南電燈公司に一萬二千燈を供給す

楚舞臺發電所　未詳。

重慶

燭川公司に七千燈を供給す。

杭州及其附近

電燈の部には四公司に左に示す電力を供給す、但し興業公司は吸水瓦斯機關を、其他は蒸

氣機關を使用す。

杭州大有利電燈公司　六百キロワット一萬二千七百燈(三十二燭光)

杭州興業公司　三十二馬力四百五十燈(三十二燭光)

嘉興永明振記電燈公司　百五十馬力。

紹興華光電燈公司　未詳。

此外興武將軍公署用は工事中にして餘姚電燈公司、蘭谿電燈公司、湖州電燈公司は計畫中なり。

動力の部には電力を紡績、精米、燐寸工場に供給す、但し蒸氣機關に依る、其供給の箇所及電力は左の如し。

鼎新紡紗廠　五百五十馬力。

蕭山通惠公紡紗廠　未詳。

精米所　大有豐大生深碾、永州公、永昌、同仁、同益源、惧、裕泰の各碾米廠には各二十馬力の動力を供給す、但し大有豐は五十馬力、同仁は三十馬力とす。

光華火柴公司　未詳。

福州

福州電氣股份有限公司には二萬二千燈、電力千馬力を供給す。

船政局には造船、機械、製罐工場に二百九十馬力を供給す

ジャルマニヤ製材工場

建興合資公司

汕頭

電燈用として汕頭開明電燈公司に於て蒸氣力に依りて十六燭光七千燈を供給す。

廣東及其附近

電燈力としては運轉中のもの二、設計中のもの數多あり、運轉中のものは一は廣東電力有限公司にして南關長堤にあり、官營にして十萬燈を供給す、一は佛山光華公司にして南海縣佛山にあり、八千燈を供給すと云ふ、此外設計中のものには順德縣大良、東莞縣石龍、三水縣西南、海南島海口に設立計畫をなせり。

動力用として電力を供給せるものを擧ぐれば廣東石井の兵器製造所及無煙火藥製造所、西村增步の火藥製造所、廣東セメント工場、廣東製造皮革股份有限公司、廣東水道局、南海縣鹽步の廣東造紙廠並に亞通公司、黃埔織造局外五六箇所の織布工場、靴下工場、四箇所、順德縣下に散在する二百餘の生絲工場とす。

(チ)　窯業　陶磁器は之を總稱して陶と稱し之を燒成するを窯と云ふ、大凡陶には瓦、磚、甎、瓷の種類あり、瓦、磚、及甎は即ち瓦、板瓦、煉瓦、土器にして既に黃帝以前に製出せられたりと云ふ、而して

瓦には素燒瓦並に釉藥を有する琉璃瓦ありて住家、寺院、廟等の葺瓦用ごなる、煉瓦は城壁、寶塔、寺院、住家等各種の建築に使用せらる、蓋し支那人の家屋は既に住家の部に述べたる如く木造家屋少なきを以て從て煉瓦の使用せらるゝもの甚だ多し、而して板瓦及煉瓦は概して灰色なるを常ごするも福建省厦門及泉州に於て燒成せらるゝものは石質にして白色及紅色を呈す、甕は到處沖積土又は赭土を採取して燒成せられ甕、井、鉢等を作りて日常用ごするも瓷に至りては其産出地大凡限定せらる。

瓷即ち陶磁器殊に磁器の燒成は支那を以て嚆矢ごし、歐洲に於ける窯業は即ち支那窯業の輸入によるものにして歐米に於ては磁器を呼ぶに Chinaware なる名稱を用ふるごごは既に人の知る所なり、而して瓷の支那に於ける起原は漢代にありご云ふ、其後製陶所即ち窯の所在地諸方に散在し就中著名なるものを列舉すれば左の如し。

唐代の越州窯は會稽郡即ち今の紹興府にあり、吳越時代の秘色窯も亦越州にありご す、後周の柴窯は其當時の首都たりし汴にあり、降て宋に至りては窯の所在地甚だ多くして北支那より南支那に亙れり、北支那にありては定窯及汝窯は直隸省眞定村に、官窯及修內司官窯は京師に設けられ、均州窯は河南省禹州に、磁州窯は同省彰德府磁州に、山西窯は山西省大原府、平陽府及其他數箇所に置かる、中支那にありては吉州窯は江西省廬陵縣永和鎭に、饒州窯は同省饒州府景德鎭に、此外其附近に湘湖窯、湖田窯、洪州窯、臨川窯、南豐窯等あり、象窯及董窯は浙江省寧波府象山縣にあ

り、南支那にありては龍泉窯及哥窯は浙江省龍泉縣に於て造らる、蓋し其當時一生、章生の兄弟二人同地の窯業に從事し兄のものを哥窯と云ひ弟のものを龍泉窯と稱せりと云ふ、而して建窯と稱するは福建省泉州府德化に置かれたるものにして此外福建の崇安には有名なる崇安窯あり、明代の正德及萬歷年間に盛大なりし宜興窯は江蘇省常州府宜興にあり、葡萄牙人により歐洲に輸出せられたるボツカロは即ち此瓷器なりと、明代の建窯は宋代のものとは異なれども同じく德化產にして白瓷に屬し饒州窯と比肩せり、饒窯は即ち景德鎭燒にして明朝より清朝に至りて盛大となり支那窯業の大中心地を形成せり、然るに長髮賊の兵亂に據りて著しく破壞せられ復昔日の盛況を呈せずと雖も、近年各省間の交通便となり又海外の輸出盛大となれるを以て再び盛況を呈するに至れり、景德鎭の外江西省には明代に廣信府興安に橫峰窯あり。

現時支那に於ける窯業地には景德鎭の外に湖南省醴陵、福建省德化、廣東省廣州、海陽、潮州、高州等あり其中最も盛なるを景德鎭と醴陵とす。

景德鎭は江西省浮梁縣西興鄉にありて昌河に沿へり、其上流は安徽省祁門に通じ下流は饒州に至るべし、此地は宋の景德年間に設置せられたる鎭にして宋窯、元窯を設く、明代の洪武年間に至り官窯としての保護を受け盛大となりたるものにして之が爲に其他の窯は德化を除くの外大部分壓倒せらるゝに至れり、洪武以後洪武窯、永德窯、宣德窯、成化窯、正德窯、嘉靖窯、隆慶窯、萬歷窯あり、萬歷年間は支那窯業に於ける最盛時にして饒窯も亦大に發達し其後康熙及乾隆に於て

亦著しく發達を遂げたり、蓋し饒窯の發達史は即ち支那窯業史を語るものにして景德鎭の支那窯業上に於ける位置たるや重要なるものなりとす、抑景德鎭に於ける瓷器の原料は千板岩系に屬する千板岩の分解せるものにして昔時浮梁新正都麻倉山に採りたるものなれども既に明の萬歷年間には原土竭き、其採取地は爾來吳門に移り近年は安徽省祁門に移るに至り、之を高梁山及開化山に採取せりと云ふ、現時の採取場は祁門の東方六十支那里の東鄕所屬の土坑、坪里、谷口等なり景德鎭には元來官窯、民窯の二種ありて官窯は帝室御料のものを製したるものなり、窯には又柴窯と草窯の二種ありて之に用ふる燃料に差ありとす、而して窯の數約四十八と稱し窯業に從事するもの千六七百戶、職工の數一萬四五千人と稱し年產額は三四百萬元と稱す、瓷商の數は五六十軒にして九江に二十餘軒あり、茲に產出する瓷器は湖北及湖南に出すもの百萬元、廣東には六十萬元、天津に四十萬元、寧波に三十萬元、上海に三十萬元、四川に十萬元、蘭谿、福建、及南京に各十萬元とす。

江西省には萍鄕城內及城を距る四十支那里の上埠に粗製の陶磁器を製す、之を萍鄕瓷業有限公司と稱し光緒三十二年の創立に係る、其原土は湖南省醴陵地方のものと同樣のものならん。

湖南省醴陵には湖南瓷業公司と普利公司との二瓷業公司あり、前者は光緒三十二年の創立に係り湖南省の官營にして瓷業學校を設置す、蓋し本地方の瓷業は時の巡撫端方の企畫に係り日本より技師を聘して湖南省に於ける瓷業の奬勵の爲に設立せられたるものなり、而して普利公

司は民國二年の設立に係る、其原土は花崗岩又は石英斑岩の分解土なるべく、之を醴陵を去る二十五支那里瀉山、老鴉山に主産し此外鄧家渡、茶子山、青泥灣、赤足巔、唐山口に産す、瀉山には陶工六十戸あり三千元の年産額を出すと云ふ、醴陵の湖南瓷業公司には鎭窯と稱する土法窯三臺と洋式窯二臺とあり、茲に製出せらるゝは食器、茶器、置物、花瓶等にして日用品多く、其販路は湖南一省に亙る、其年産額は湖南瓷業公司に於て二十萬元、普利公司に於て十萬元、其他に於て十萬元内外なるべし。

福建省永春州德化縣下には窯場十數箇所あり就中後井、黃洞、南嶺の三窯著名なり、後井は德化城外三支那里に位し窯數五六十ありと云ふ、德化の外甯德縣碗碌村、同安縣鄉村、安溪縣壇坂洋にも窯場あり、碗碌村には年産額三十萬元に上ると云ふ、蓋し德化及其他の窯場に使用する原土は之を其地方に廣く分布する石英斑岩の分解土に仰ぐものなり。

江西省景德鎭より支那内地の各地に移出せらるゝ數量に就きては前に述べたるが如く隣省一圓其供給を受けざるはなし、殊に江西省より廣東に至る梅嶺の如き福建に至る杉關路、崇安路の如き、浙江省に至る玉山路の如き主要交通路に於ては江西省より移出する貨物の主要を占むるは瓷器にあらざれば土布なりとし其移出の多きや知るべし、翻て千九百十四年に於ける支那の各開港場を通過する瓷器を見るに其移輸出額十八萬八千三百八十一擔二百六十七萬二千九百六十四兩とし其中輸出は十二萬二千八百九擔、百七萬五千九百三十三兩にして之を香港、新嘉

坡、暹羅並に安南、米國に出し主として在住支那移民の需用に供するものなり、移出は六萬七千三百四十九擔、百二十四萬六千六百二十三兩にして其移出先は天津、廣東、重慶、芝罘、上海、瓊州の順序なりとす、而して是等の瓷器の移輸出港は九江の六萬六千六百四十九擔、百六十八萬六千八百三十二兩を首位とし其他主要なるものを揭ぐれば汕頭は六萬八千六百四十二擔、四十八萬九百二十兩、廣東は一萬四千八百八十擔、二十六萬八千二百五十六兩、九龍は三萬千五百擔、十八萬三千兩とす。

瓦磚の移輸出額は三十九萬七千八百十四擔、百八十萬九千二百七兩にして其中輸出は三十二萬六千擔、八十六萬二千四百五十兩とし香港、新嘉坡、暹羅、臺灣及澳門に出し、移出は十二萬三千八百六十擔、六十七萬一千兩にして哈爾賓、天津、廣東、芝罘に出し、移輸出港は上海、九龍、汕頭を主要とし拱北、厦門、宜昌、哈爾賓之に次ぐ、移輸入額は瓷器及瓦磚を加算すれば百二萬一千二百十一兩にして主に天津に入り香港及日本より入るもの各其三分の一を占む、而して獨逸、英國及露國之に次ぐ、香港より輸入せらるゝは主に英國品にして支那に於て多年の地盤を有し獨逸品は日本品に對する勁敵なり、日本品には瀨戸燒、多治見燒最も多く有田燒、砥部燒之に次けり。

八　鑛業

唐、宋、明の間に漸次に發達せる支那の鑛業は清朝に入りて其の發展大に期待すべきものあり

しに拘らず清朝は其爲政上特種の鑛山の外其開鑛を禁止し專ら治安の平靜に勉めたる結果其鑛業は大に衰微するに至れり、光緒年間に至りて開鑛の必要を說くもの漸く多く明朝時代の土法に據りて採掘を開始するものも亦著しく增加せるのみならず外人を聘して新式採掘製鍊法を試み或は外人にして支那人と協同し、或は國際的利權上より諸外國人競つて開鑛に從事するに至れる結果產額の稍見るべきものあるに至れり、然るに之が爲めに却て支那人の利權回收熱を惹起し支那政府も亦光緒三十三年礦務章程を發布し其の取締を嚴にするに至れり、清朝倒れて中華民國となるに至り再び鑛業發達の計畫を立て外資輸入の途を開き同三年中華民國鑛業條例の發布を見たり。

此鑛業條例は範を我鑛業法に則りたれば特に之を說明するの要を見ず、唯だ該條例に於て鑛物と認むるものは之を三類に分てり、主要鑛物は第一類に屬し第二類は土石類にして硫化鐵、筆鉛(石墨)、土瀝青、石膏、硫黃等の外未だ該條例により處分せらるゝものなく、第一類に屬する鑛物と雖も舊習の久しきが爲めに正式に條例によりて出願するもの多からず、之が監督の爲めに鑛務監督署を設置したるも幾何もなく財政上の都合によりて之を廢し其監督徵稅は舊によりて各省實業司に於て行ふこゝとなれり、左に鑛業條例による鑛物を列擧せん、但し食鹽、岩鹽、石油は政府の專業に屬するを以て三類以外とす。

第一類

金、銀、銅、鐵、錫、鉛、銻(安質母尼)鑠(ニツケル)、鈷(コバルト)、錳(滿俺)、鋅(亞鉛)、砒、汞、鉍(蒼鉛)、鉑(白金)、鋏(イリヂウム)鉬(水鉛)、鉻(クローム)、鈾(ウラニウム)石炭類、金剛石、寶石類。

第二類

水晶、石綿、雲母、鋼玉、石膏、燐酸石灰、重晶石、硝酸鹽、硫黃、硫化鐵、硼砂、弗石、大理石(裝飾用)、長石、滑石、筆鉛、泥炭、琥珀、土瀝青、柏油、浮石、海泡石、磁土、硅藻土、硅藻板、苦土類、漂白土、顏料石類。

第三類

青石、石灰石、砂石、花崗石、斑石、白雲石、土灰、灰泥石、粘土、火粘土其他採掘より得る建築材料及有用土石類。

清朝時代より中華民國に至りて鑛務章程並に鑛業條例によりて出願せる所によれば其鑛物の種類及產地甚だ多く且つ採鑛に屬するものも亦甚だ多數に上るが如きも其多くは採掘權を獲得し其權利を賣買の具に供するものにして實際に稼行するもの多からず、加之書類の上に於て一地方に多數の鑛山あるが如き塲合には同一の鑛床を採掘するもの又はせんとするものにして彼の湖南省錫鑛山の安質母尼鑛の如き其好例なりとす、吾人は現時に於ける支那の鑛物存在地を知らんとするに際し單に出願書類に現はれたる鑛物產地を列擧したるのみにては其眞相は勿論其一班をも知ること能はざるもの多く、地質上の見地より其分布の狀を知るを要す。

現時中支那及南支那に於て最も普通に採鑛せらるゝものは鐵と石炭とにして錫、安質母尼之

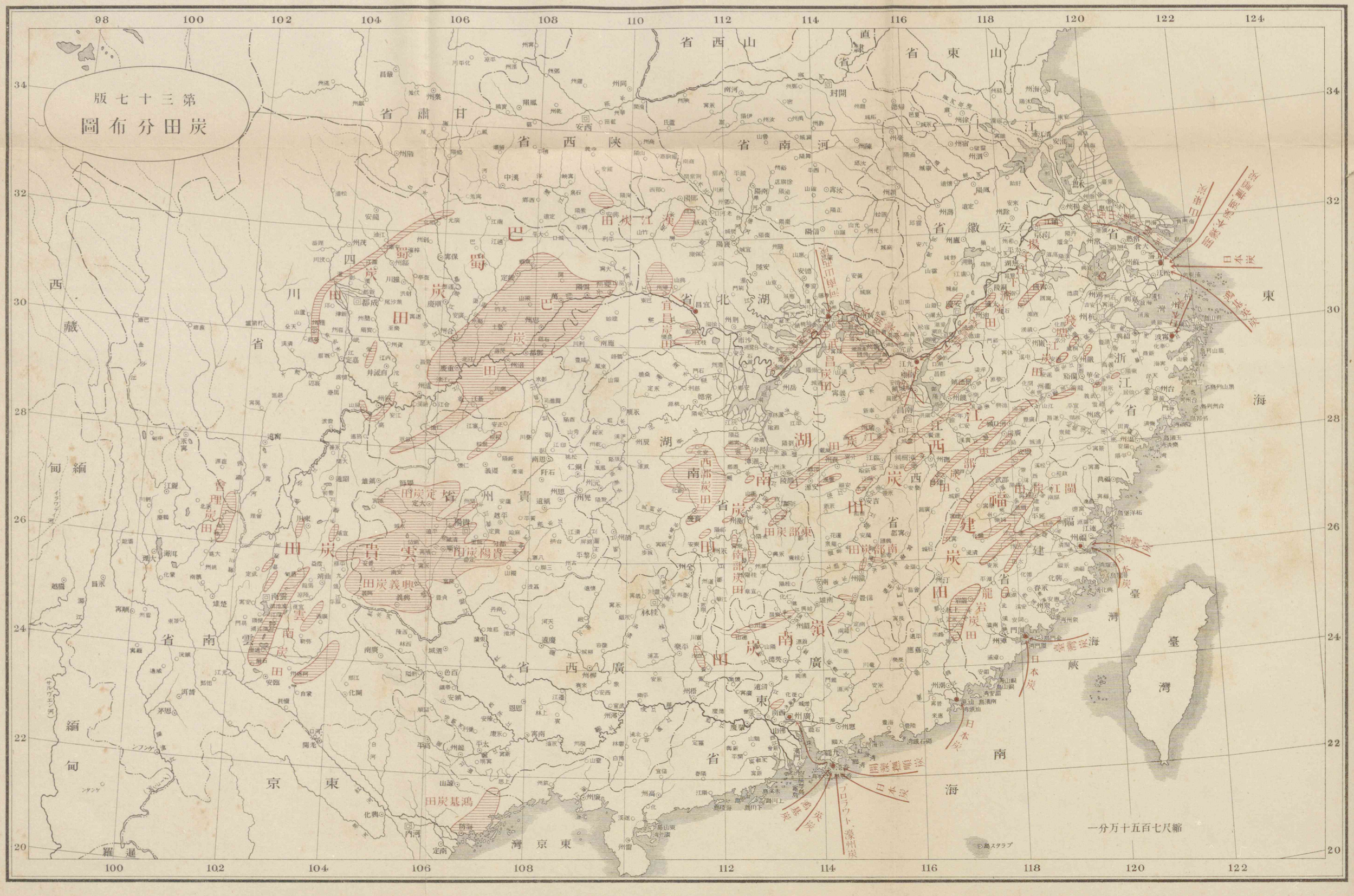
に次ぎ金、銀、銅、亞鉛、滿俺、水銀、砒其他岩鹽、石膏、明礬、石油等あり。

(甲) 石　炭

(1) 石炭の分布

石炭の分布地は各省に亙るも雖も四川、貴州、雲南の如き土地遠隔なる高原地に多くして中支那の湖南、江西、湖北之に次ぎ安徽、江蘇の如き交通至便の地には却て少なし、南支那に屬する浙江、福建、廣東、廣西等の沿海の諸省には福建省に於て最も多きも其大部分は交通不便なる山地にありて海岸地方に絶無なり、蓋し石炭の産出地甚だ廣域に亙るに拘はらず揚子江沿岸及沿海地方の如き交通至便の地に甚だ少なきは斯業發達の遲々たる一因たるべく湖南湖北、江西の炭田のみ稍有利の位置を占む、中支那及南支那の炭田は之を巴蜀炭田、雲貴炭田、漢江炭田、宜昌炭田及武昌炭田、揚子江下流炭田、湖南炭田、江西炭田、錢塘江炭田、福建炭田、嶺南炭田の十一炭田に別たる(第三十七版參照)。

巴蜀炭田　は巴蜀盆地の全域に亙るも雖も其主要部は巴の地方即ち巴の炭田にして蜀の地方即ち蜀の炭田に於ては赭色砂岩層の下に沒し其露出地は盆地の北西邊緣部と盆地中の榮及叙州附近に過ぎず、然るに巴の地方にありては瀘州、合州、渠縣を連ぬる一線より東方には盆地内と云はず邊緣部と云はず炭層の露出する所甚だ多し、石炭は大部分三疊珠羅系に屬し此外石炭系のものは南川に、二疊石炭系のものは朝天に、二疊三疊系のものは重慶の北方にあるも重要な


第三十七版
炭田分布圖
縮尺七百五十万分一
四川省
雲南省
貴州省
廣西省
廣東省
福建省
浙江省
江西省
湖南省
湖北省
河南省
陝西省
甘肅省
山西省
直隸省
山東省
安徽省
江蘇省
臺灣
南海
東海
京東灣
緬甸
西藏
朝鮮
日本炭
開灤・撫順炭
豪州炭
ブロウト
鴻基炭
巴蜀炭田
漢江炭田
宜昌炭田
湘潭炭田
萍鄉炭田
贛西炭田
贛南炭田
閩江炭田
龍岩炭田
雲南炭田
貴陽炭田
興義炭田
雲理炭田
鴻基炭田

らず、巴蜀炭田の石炭は盆地中比較的薪炭缺乏の地にあるのみならず鹽井より汲出せる四川鹽の製出に使用せらるゝを以て交通不便の地に拘らず古來盛に四川一省内に於て採掘使用せらる、然れども外省に向ひては交通不便なるが爲めに搬出せられず。

雲貴炭田　は其廣袤巴蜀炭田を凌駕し巴蜀炭田の如く赭色砂岩層に被覆せらるゝことなきを以て其露出の區域も亦甚廣し、該炭田は雲南、貴州二省の外四川省西部に跨り地質構造上及地形上之を五區域に區別す、一は雲南府より其北方東州府及其南方臨安に亙れる雲南府炭田、二は雲南、貴州に跨れる興義炭田、三は貴陽より東方都匀及黎平の北西方安順に亙れる貴陽炭田、四は大定より威甯に至る大定炭田、五は雲南、四川省界に跨れる會理及大姚の炭田とす。

石炭は巴蜀炭田と同樣に三疊珠羅系のもの主要なれども雲南府炭田には石炭系のもの多く同炭田の東部及興義、貴陽兩炭田間の北盤江に沿ひては二疊三疊系のものあり、又雲南府炭田の南部には第三紀層に屬するものあり、而して是等は家事用として又は雲南に於ては鹽井又は銅鑛製煉用として使用せられ之を外省に搬出するものなし。

漢江炭田　は漢江の襄陽より上流に於て、淅川、房縣、興安、紫陽等に散在するものを總稱す、三疊珠羅系のもの多し、蓋し主要なる炭田を形成せず。

宜昌炭田　は宜昌峽と巫山峽との間にある歸州盆地並に宜昌の南方長陽、宜都等に小炭田を形成し三疊珠羅系のものに屬す、宜昌に供給するは歸州の香溪より搬入するものとす。

武昌炭田　は武昌より南東方大冶、興國州並に江西省瑞昌に亙り更に南西方咸寧に連なる炭田にして交通至便の地にあり、曾て嘱目せられたる炭田なるも未だ發展するに至らず、漢口の北方麻城附近にも産炭地ありと云ふも明かならず、石炭は石炭系、二疊石炭系、二疊三疊系のものとす。

揚子江下流炭田　は九江の下流彭澤より安慶、池州、銅陵並に寧國府、宣城、涇に亙り更に南京及鎮江に至る間約揚子江に沿へる狹長なる炭田にして寧國府の炭田大に嘱望せられたるものとす、炭層は武昌炭田と同樣三種あり。

湖南炭田　は更に東部、西部、南部の三炭田に分たる、西部炭田は資江流域の安化、新化、寶慶の炭田にして高原地にあり、交通稍不便なり、東部炭田は衡州より下流の湘江流域にある炭田にして交通甚だ便利なり、江西省萍鄉炭田も亦地形及交通上より本炭田と密接の關係を有するものなり、南部炭田は衡州より上流に於て湘江、耒水の二炭田に分る、炭層は西部には石炭系のもの、中部及南部には二疊石炭系及二疊三疊系のものあり、要するに湖南炭田は概して交通便利の地に位するを以て其石炭は同地方に於て家事用、石灰用及製煉用として需用多きのみならず漢口方面に搬出せらる。

江西炭田　も亦三炭田となる、一は袁江炭田にして三帶より成り其主帶は豐城より袁州、萍鄉に亙り湖南東部炭田に連亙す、此外瑞河及安福に各一帶の炭田あり、二は東部炭田にして四帶よ

り成り第一帶は浮梁に、第二帶は樂平より餘干、新賢及李家渡に亙り、第三帶は興安、並に廣信、玉山に、第四帶は鉛山より江山に亙るものなり、是等は共に狹長なる盆地を形成す、三は南部炭田にして贛州府の三門灘零都、信豐、龍南に散在す、是等の中西部及東部炭田は揚子江流域に於ける主要の炭田にして湖南炭田と伯仲す、炭層は袁江及東部の炭田には二疊石炭系と三疊珠羅系とのもの共に同一盆地を成し南部炭田には二疊石炭系のものゝみ露はる。

錢塘江炭田　は約三帶をなす、第一帶は杭州より錢塘江に沿ひ桐廬、嚴州に、第二帶は衢州より南西方江山を經て江西省東部炭田に連なり北東方は金華、義烏方面に潛在するが如し、第三帶は江蘇省太湖にあり、其大部分は湖中に沒し露はれず、炭層は二疊石炭系、二疊三疊系、三疊珠羅系の三種あり。

福建炭田　は南北の二部より成る一は閩江炭田にして三帶より成り第一帶の邵武帶は邵武より北東崇安に南西方甯化方面に亙り、第二帶建甯帶は建甯、南平、歸化方面に、第三帶尤溪帶は北東古田に南西方永安及大田に亙る、他は龍岩炭田にして永定、龍岩、漳平並に安溪に亙る、岩層は龍岩炭田には二疊三疊系なれども其他に於ては三疊珠羅系のものに屬す。

嶺南炭田　は大庾嶺山脈より南方山地に賦存する炭田にして北江流域に於ける韶州より北東方仁化、南西方連州に亙るものを主要とし此外英德、花縣、廣西省賀縣等に散在す、石炭は二疊石炭系のものに屬す。

（ロ）石炭の需用供給

支那に於ける石炭の採掘は其起原甚だ古く古來薪炭の代りに家事用こせるのみならず鐵、銅其他冶金用こして使用せらるゝこと今尚變る所なく到る處多少なりこも之が採掘を行はざる所なし、近時內河航業の發達に從ひ石炭の需用頓に增加し鐵道の延長、電燈、製造工業、鑛業の進歩に從ひ石炭の需用を增進するに至り石炭の開坑に從事するもの漸次に多きを加へたり、然りこ雖も未だ鑛業幼稚なるこ一は支那石炭の特性こして良質を得る能はざるこにより外國炭の輸入を仰ぐ所甚だ多し、而して中支那及南支那に於て其消費の首位を占むるものは家事用炭にして汽船用之に次ぎ鐵道用、工業用は最下位にあるべし。

家事用炭は殆ご全域に亙りて使用するも大庾嶺山脈には薪材甚だ豐富なるのみならず石炭の賦存少なきを以て石炭を使用する地少なし、嶺南地方並に閩浙の沿岸も亦石炭を缺き假令福建省の如く其上流地に炭田なきにあらざるも交通不便なるを以て燃料は之を其上中流地方の薪炭に仰げり。

家事用炭こして最も多量の石炭を消費するは四川及湖南にして江西之に次ぎ貴州、雲南亦之に讓らざるべし、湖北省は宜昌、武昌地方に消費多きも其他の地方には多からず、安徽、江蘇に於ては揚子江沿岸に於いて使用せらるゝのみ、而して家事用炭こして支那人の最も好むものは所謂無煙炭即ち半無煙炭及び半瀝青炭の一部にして支那には此種の石炭多く且つ多くは粉炭なる

を以て之に泥土を混じて方板、圓板狀の煉炭となし家事用とす、四川省に於ては此種の石炭を缺き粘結性に富める低度並に高度の瀝青炭を主とするを以て之より骸炭を製して家事用に使用す。

汽船用として石炭の需用最も多きは揚子江流域となし海岸地方、西江流域、錢塘江流域に之に次ぐ、蓋し北支那には石炭の需用は鐵道に多く沿海航路の外內河航路に使用するもの多からず、然るに中支那には河流に於ける航業甚だ盛にして南支那には沿海航路多く共に汽船用として使用する石炭甚だ巨額に上るも鐵道用として使用するもの甚だ少額なり。

揚子江流域に於て汽船用石炭の需用を分つて二とす、一は長江汽船にして他は內河小蒸氣船とす、長江航路の汽船には一千噸乃至四千噸の大汽船航行し時々外洋汽船の出入するあり、主要なるは日、英、支那三國の汽船にして此外米、獨、佛、露の汽船の外各國軍艦の溯江し來るものあり、是等に要する石炭は殆ど大部分日本炭、開灤炭、撫順炭に仰ぎ中支那に於ては萍鄉炭の一部を之に供給することあるのみ。

內河航路の小蒸氣船の最も盛に航行するは上海を中心地とする江蘇、浙江の運河航路にして約八十艘の小蒸氣船あり、其燃料は長江航路と同樣外國炭並に北支那炭に仰げり、九江を中心とする內河航路に於ては江西省東部炭田の石炭を使用するもの多し、漢口を中心地とし湖南省及漢江に亙れる內河航路に於ては湖南省東部炭田の石炭を使用するもの甚だ多く袁江流域の石

炭は便宜上此兩航路に於て使用せらる。

宜昌より上流蜀通航路の汽船は其數多からざるも重慶附近の石炭を使用す。

閩浙沿岸航行汽船は日本炭及北支那炭を用ふ、香港を中心とする外洋、沿岸、内河の航路には石炭の需用甚だ大なり、其大部分を外國炭に仰ぎ支那炭は北支那炭の少量使用せらるゝのみ、粵漢鐵道又は江西鐵道貫通の曉には中支那石炭の此地方に使用せらるゝもの少なからざるに至るべし、現時香港に集まる石炭には日本炭の外北支那の開灤炭、撫順炭、濠洲炭、ボルネオ炭(ブロラウト炭)東京炭(鴻基炭)にして汽船用となるは日本炭と北支那炭とあるのみ。(第三十七版參照)

以上述ぶる所の如く現今汽船用たるものは江西、湖南、四川のものを主要とし是等は其炭質惡しゝと云ふにあらざれども日本炭に比して粉炭に成り易く且つ灰分甚だ多きを短所とするを以て萍鄉炭の如き骸炭用として最も適當なるものあるに拘らず汽船用としては日本炭を混用するの狀況を示せり。

鐵道用としての石炭は其需用甚だ少なし、中支那は内河航路により南支那は沿岸航路によりて其交通を助けられ强て鐵道の交通を要せざりしと雖も近時外國の利權扶植に關聯して鐵道の布敷計畫せらるゝもの增加せり、現時運轉するものは中支那に京漢、滬寧、株萍、南潯、滬杭甬の諸鐵道あり、南支那に廈漳、汕潮、粵漢廣九、廣三、新會、雲南の諸鐵道あるも其開通距離甚だ短く之に使用する石炭の量多からず、且つ株萍鐵道の湖南炭、京漢線の河南及山西炭、雲南鐵道の雲南炭を使

用する外大部分之を外國炭に仰ぐものとす。

骸炭用及燈火瓦斯用の石炭中骸炭用としては三疊珠羅系のもの最も之に適するも未だ多く使用せられず、江西東部炭田の福建省界より福建炭田に亙るものは變質せるを以て之に適せずと雖も江西省袁江炭田の萍鄉附近、四川、雲貴の炭田に於ける三疊珠羅系のものは現に盛に土法により骸炭に製造せられ之を冶金用、家事用炭とす、此外雲南府炭田の石炭紀石炭、三疊紀石炭、湖南省東部炭田の二疊石炭紀石炭、安徽省宣城の二疊三疊紀石炭も亦骸炭の製造に供せらる、蓋し支那の是等の石炭は骸炭用として揮發物過度ならず最も理想的のものとし其品質に於て我九州炭、北海道炭を凌駕せり、蓋し萍鄉炭の冶金用に盛名ある故なきなり、然るに此長所は反て燈火瓦斯用としては短所たらざるを得ず、普通に瀝青質の多き石炭と雖も百分中揮發物二十内外にして三十に達するものは極めて異數と稱すべし。

鑛業及工業用としては未だ斯業の發達遲々たるを以て需用多からざるも漢陽製鐵所は萍鄉炭の骸炭を用ひ湖南省中部及南部に於ける安質母尼、亞鉛等の製煉には湖南省中部及南部炭田の二疊石炭紀及二疊三疊紀の半無煙炭又は半瀝青炭を、四川省の製鹽には同省産高度又は低度の瀝青炭を、雲南の製錫並に製鹽には同省産三疊珠羅紀又は石炭紀の高度瀝青炭及半瀝青炭を使用す。

一般に工場用石炭は隨所之を得ること難からずと雖も未だ工業幼稚にして上海、漢口、香港の

如き外國人の經營に係れる工場を除けば各省首府又は開港場こ雖も未だ多くの工場を見ず、而して上海、漢口、香港に於ては外國炭を使用するもの多しこす。

（八）　産出額及消費額

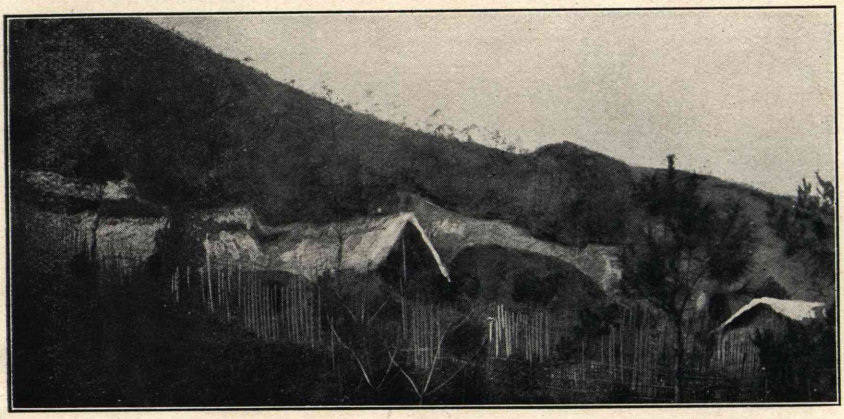
支那の石炭産出額の果して幾何に達するやは之を測定するここ甚だ難し、且つ大規模に稼行するもの、多くは北支那にありて中支那には江西省萍鄉炭坑の一炭坑あるのみ、湖北省の炭山灣、馬鞍山、安徽省宣城及廣西省賀縣西灣に新式採掘法を試み日額二百噸の出炭を見たるここあるも未だ振はず、其他に至りては土法によりて採掘し排水坑をも有せざるもの多く排水の困難を生ずる時は直ちに廢坑こなして其地點を轉換するもの比々皆然らざるはなし、故に實際家事用炭こして採掘するの地少なからざるに拘らず其産額を舉ぐるは殆ご不可能事に屬す（第三十八版甲參照）

リード氏は支那年鑑に於て支那の炭産額を測定して二百萬噸乃至千五百萬噸、平均約千三百萬噸こす、其中中支那及南支那に於ける産額約二百二十一萬噸にして其内譯は四川省五十萬噸、貴州省二十五萬噸、雲南省三十萬噸、浙江省一萬噸、江西省七十萬噸、湖南省二十萬噸、廣東省五萬噸、廣西省十萬噸、其他十萬噸こせり。

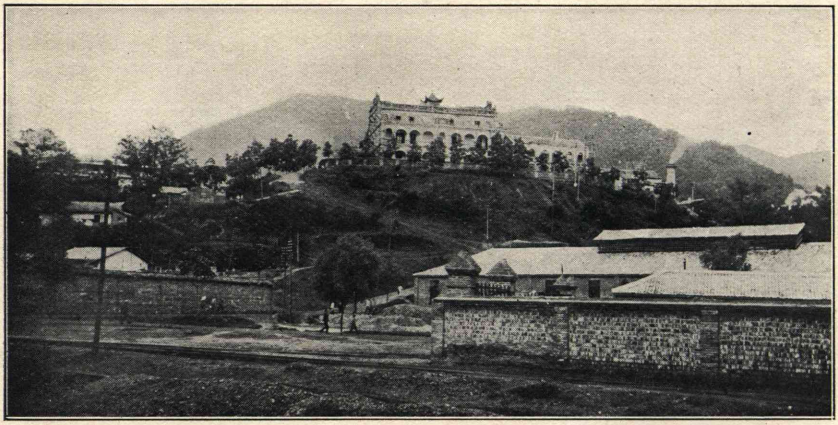
地質調査所長井上理學士は支那石炭産額を約千六百萬噸こす、其中中支那及南支那に於けるは約六百五十九萬噸にして其内譯は江蘇省三萬噸、安徽省六萬噸、浙江省五萬噸、湖北省二十萬噸、

第三十八版

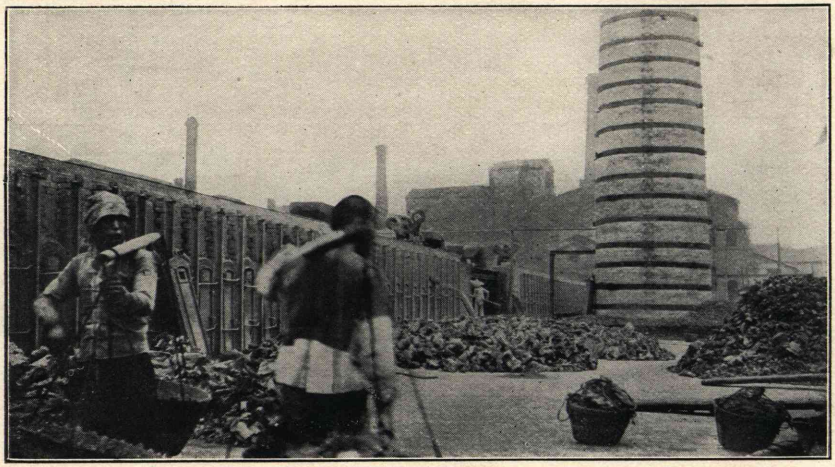
炭坑



（甲）湖南省甯鄉縣谷塘坡炭坑（土法採掘）



（乙）江西省萍鄉縣安源萍鄉炭坑（洋式採掘）



（丙）萍鄉炭坑骸炭爐

福建省十萬噸、江西省百萬噸、湖南省四百萬噸、四川省百萬噸、貴州省五萬噸、廣東省十萬噸ㇾせり。

惟ふに中支那及南支那に於て石炭の產額の多きは江西、湖南、四川の三省にして湖北、貴州、雲南の三省之に次ぎ互に伯仲するが如く、江蘇、安徽、福建、浙江、廣東、廣西の諸省は多からず。

試に比較的產出額の知り易き地方の產額を査察するに、江西省にありては湖南省に近き萍鄉より袁州附近に亙るもの最も多し、萍鄉附近のものは水路のみならず鐵路湖南省に出すを便ㇾするを以て其地方に於ける需用以外は湘口又は長沙を經由し揚子江に搬出せらる、而して萍鄉炭坑第三十八版乙及丙參照)に於ては日產二千五百噸即ち年產七八十萬噸にして其中四分の三は骸炭製造に使用せらる、萍鄉縣城附近に於て土法によりて採掘せらる、石炭中鐵道に據り長沙に出すものは年額六七萬噸にして、其地方需用のものを加算する時は十萬噸を下らざるべし、袁州に於ては二三萬噸を產し其中一萬噸を南昌方面に搬出す、分宜、新喻、豐城、瑞州、安福等の產額は各一萬噸を出でざるべし、江西省東部炭田に於ては餘干、樂平を主ㇾし各二三萬噸の出炭あるべく、廣信附近亦二三萬噸を下らず、此外南部に散在する石炭の產出額を加算する時は江西省全部より產出する石炭は蓋し百萬噸を降らざるべし。

湖南省には江西省の如き一炭坑を以て多額の石炭を產出するものなしㇾ雖も、一般の產業大に發達するを以て家事用の外小蒸氣船製造工業、製鍊業等に使用するもの少なからず、其石炭は全部自省のものに仰ぎ更に漢口方面に搬出せらるゝもの六七萬噸ありㇾ云ふ、湖南省に於ける

石炭の主産地は湘江流域にありては瀟水の寧鄉、漣江の醴陵附近、攸水の攸及茶陵、耒水の耒陽、永興、本流の湘潭、衡州、祁陽並に資江流域の新化及寶慶、沅江流域の辰谿附近なり、醴陵附近に於て既に七八萬噸の産額あり、衡州並に新化附近の石炭にして漢口に搬出せらるゝのみにても各二三萬噸を下らず、又各地方に於ける産額は各十萬噸を下らざるを以て湖南省に於ける産出額は少くとも七八十萬噸より百萬噸に至るべし。

四川省に於ては重慶に近き龍王洞炭坑に於て年産額三萬噸あり、重慶に於ける各種工業並に小蒸氣船の燃料に使用す、四川省に於ける重要産物たる製鹽の燃料に使用する石炭亦甚だ多し、加ふるに四川省の赭色盆地には樹木甚だ少なく家事用炭として使用せらるゝもの巨額に達すべし、四川省に於ける石炭は主に自省の需用を充すのみにして之を外省に搬出することなく又交通上の關係より外省より搬入せらるゝことなし、同省一省内に於ける産出額は勿論之を明にし難きも恐らく湖南省に伯仲すべし。

湖北省に於ては炭山灣炭坑に於て年産額六七萬噸を出す、此外黄石港、蘄州、興國州に於て採炭する者あり、是等を合算するも二十萬噸を出でざるべく雲南、貴州二省に於ては家事用炭の外冶金用、製鹽用として使用するもの多く其産出額湖北省に劣らざるべし。

其他の諸省中福建省稍多く十萬噸と推定せらるゝも他は五萬噸内外ならん、故に江西、湖南、四川三省を各百萬噸、湖北、雲南、貴州三省を二十萬噸、福建省を十萬噸其他を五萬と見積る時は中支

那及南支那に於ける石炭の産出額は約四百萬噸となる。

中支那及南支那に採掘せらるゝ是等の石炭は主に支那内地に於て使用せらるゝ、開港場に於ける工場用、暖房用並に船舶、汽車に於て使用する石炭は大部分之を日本炭、開灤炭、安南炭に仰ぎ其大部分は上海、香港を經由して搬入せらるゝ、左に千九百十四年に於ける外國炭の開港場に於ける純輸入額を表示せん(單位は噸とす)

	石炭	骸炭		石炭	骸炭
宜昌	三四〇		杭州	一〇、五九五	
沙市	二三六		甯波	一四、二八六	三六
長沙	一二五		温州	—	
岳州	三〇		福州	一二、四一五	一
漢口	一三四、三七七		厦門	一〇、九二二	
九江	三、四〇五		汕頭	七四、六四五	
蕪湖	二、九二六		九龍	二〇八、四二八	一、三三三
南京	二、四五〇		九龍(鐵道)	一、四五〇	二六
鎭江	二四、六四三	三〇	廣州	一三七、二七三	一七三
蘇州	九、四四九		三水	五六五	
上海	六〇〇、七五六	二、〇一〇	江門	—	

拱北	四二、四七九	八六三	瓊州	二三六	
梧州	九、〇四三		北海	四一八	
南寧	二六九		蒙自	六、五二八	
龍州	一二		計	一、三〇八、二八五	四、四七二

右表に據れば香港及澳門に消費せらるゝものを除き中支那及南支那に輸入せらるゝ石炭の總額百三十萬八千二百八十五噸にして、中支那には約八十萬噸、南支那には約五十萬噸を輸入す、但し香港及澳門より再輸出せらるゝものを含めり、而して其輸入國は日本を最も主要とし香港、東京之に次ぐものとす、以上述ぶる所は直接外國より輸入するものなれども此外北支那及滿洲より移入する石炭あり、上海に於て約五十二萬噸、漢口に於て河南炭二萬噸(內一萬噸は上海に於て消費せらる)とす、故に中支那及南支那に於て消費せらるゝ石炭は北支那より五十三萬噸、外國(香港に於ける北支那炭を含む)より百三十一萬噸、小計百八十四萬噸之に內地產四百萬噸を加算すれば總計約五百八十四萬噸となる、此外香港に於ては船舶用として又は工場用として使用せらるゝもの甚だ多く其總輸入額百二十六萬四千六百二噸、支那沿岸に再輸出するもの二十五萬九千二百五十七噸なるを以て差引香港に於ける消費高は百萬噸に達す、抑中支那及南支那に於て消費する約七百萬噸の石炭中、四百萬噸は內地に產出するも其餘の三百萬噸は左表に示す如く、外國及北支那より輸入せらるゝものにして、中支那に於ては上海に、南支那にありては香港に

輸入せられ之より各開港場に配布し更に各消費地に散布するものこす(第十五版參照)

移輸入炭産地別	上海	香港
日本炭	八〇三、八二四噸	一、〇〇七、九八四噸
撫順炭	五七、一二四	八五、八九〇
開灤炭	三八八、五一一	二三九、〇〇五
萍鄉炭	一六、八二一	
其他の支那炭(本溪湖、山東、山西河南、臺灣)	七三、六九九	三七、五九七
東京炭	四八、九五九	一四九、八九〇
其他の外國炭(英、濠洲)	一一、四三六	九二、八九六
計	一、四〇二、六七二	一、六一三、一一二
總計	三、〇一五、七八四	

各開港場石炭輸出入表(單位は噸)

	輸入		輸出	
	石炭	骸炭	石炭	骸炭
宜昌			一五、六四〇(內海關扱二、〇四七萍鄉炭二八、〇二〇)	二〇九、〇四七
長沙				

漢口	一九六、九二二	一八六、七四四	三六、七六九	
九江			四、七四九	
蕪湖	九、一四九		一〇、三一八	
南京	一一五			
英炭	二、三三五			
日本炭	二〇、一六六	四		
支那炭				
鎮江	二四、六四三			
外國炭	三八、七八四			
支那炭				
上海	五六二、七九九			
日本炭	四二、一五四			
東京炭	五六二、一〇七	六、一〇三	一三四、三八二	
支那炭				
蘇州	九、四四九			
寧波	四四、七七八			
福州	二三、八五五			
厦門	一四、四六八			
汕頭	七四、六四五			
廣東	二三六、九六五			
九龍	二〇八、四二八			
拱北	四二、四七九			
南寧	二六九			
計	二、一二四、五一〇	一九二、九〇八	四一九、八七八	二〇九、〇四七

前表には上海及香港に於ける輸入炭の類別を擧げ次で各開港場に於ける外國炭及內地炭

の輸出入を表示し內地に於ける消費の狀況を示せり、是に由りて之を觀るに開港場の純輸入石炭の總額卽ち消費額は外國炭及支那炭を合算すれば約二百十二萬噸、骸炭十九萬噸にして其中是等の開港場附近より產出するものは石炭約四十二萬噸、骸炭二十萬噸なり、故に是等開港場のみに輸入する外國炭及北支那炭は約百七十萬噸にし是等輸入炭の殆ど大部分は開港場に於て消費せられ之より內地に普及せざるものとす。

(乙) 鐵　鑛

(イ) 鐵鑛の分布

鐵鑛は各省に亙り產す、其中主要地域は(い)巴蜀盆地內の榮經縣、夔州(ろ)湖南省湘江に沿へる攸縣、茶陵縣、湘鄉縣、江華縣、資江に沿へる安化縣、新化縣、寶慶縣、新寧縣及之に接近する江西省の萍鄉縣、宜春縣、分宜縣に亙れる地域(は)湖北省の武昌縣、大冶縣、興國州より安徽省の太湖縣、銅陵縣、繁昌縣、當塗縣、江蘇省の鎭江に亙れる揚子江沿岸地域(に)浙江省の嚴州附近の遂昌(ほ)福建省の龍岩州、長汀縣、安溪縣、永安縣、大田縣、古田縣、政和縣(へ)嶺南地方の廣西省全州、廣東省連山縣、(と)雲貴高原地に於ける四川省の南川縣、綦江縣、貴州省の威寧縣、水城縣、雲南省の東川府內、臨安縣とす、此外產地少なからざるも其產出の狀況を詳にする能はざるもの多し、以上の產地中最も主要なるは湖北省安徽省、江蘇省に亙れる揚子江沿岸地域にして大冶鐵山及之に附屬する漢陽製鐵所最も著名にして安徽省繁昌縣の桃沖鐵山今や大規模の稼行に着手せんとす、福建省鐵山多少の產額あり、

更に將來採掘せらるゝの機運に到達すべく、雲貴省界地古來鐵を出せり

（ロ）鐵鑛の種類

鐵鑛は其成因によりて之を四種に分類するを得べし、即ち(一)寒武利亞系乃至三疊珠羅紀層中に胚胎する鐵鑛にして之を貫ける花崗岩及石英斑岩の誘導によりて生成せるものと思惟せらる、而して火成岩の接觸部に胚胎せるものは磁鐵鑛及赤鐵鑛にして接觸鑛物を伴ひ概して大なる鑛塊をなす、然るに接觸部に遠きものは赤鐵鑛又は褐鐵鑛に屬し、概して接觸鑛物少なく層狀又は脈狀をなせり、又鑛床の胚胎する母岩は主に石灰岩なれども三疊珠羅系には砂岩中に胚胎す、而して其分布地は各省に亙れり(二)は三疊珠羅紀の夾炭層中に層狀をなして介在する鐵鑛にして前述の鑛床に比すれば概して大なるもの少なきも比較的整然として賦存すること並に石炭に隨伴するの利あり、鑛石は赤鐵鑛褐鐵鑛及菱鐵鑛なり、本種に屬するは四川、雲南、貴州、江西地方に廣く分布す(三)は花崗岩及石英斑岩中の鐵鑛にして或は鑛塊となり或は脈狀となり其形甚だ大なるものあり、鑛石は磁鐵鑛又は赤鐵鑛にして或は兩鑛共に現はれ接觸鑛物を隨伴するもの少なからず、其分布地は高原地帶を除ける其他の地方なり(四)は片麻岩及花崗岩地方の冲積地に賦存する磁鐵砂及赭土の中に團塊をなせる褐鐵鑛にして共に極めて小規模に採取せらる。

（ハ）鐵の需用供給

鐵は支那人日用の農具炊事用釜鍋、又物として必要缺く可からざるを以て鐵鑛の賦存する所

には砂鐵、赭土中の團塊の如きに至る迄之を採取し土法によりて鐵を製する地少なからず、此外鐵鍋は四川、雲南、湖北の鹽井、沿海地方の產鹽地並に江西、福建、廣東地方の製糖地方に需用多く湖南、四川、雲南、福建、浙江諸省の如く鐵、錫、銅、水銀等冶金業の比較的發達せる地方にありては熔爐の建造上鐵の需用多かりしを以て所々に小規模の製鐵行はれたるも其需用を充すに足らず之を海外の輸入に仰けり、又近年諸工業の發達に伴ひ或は鐵道、造船の企業益々多く鐵の輸入益々增加するに至れり。

現今鐵の產出の稍多きは土法によるものに湖南、貴州、雲南、福建の諸省あり、洋式によるものには湖北省漢陽製鐵所あり(口繪參照)

(い)土法による熔鑛爐(第三十九版甲參照)は錫の製鍊に用ふるものと同樣に多くは粘土製にして鐵枠を有し上下の二部より成り共に稍上方に廣がれる圓筒にして直徑二三尺高さ三四尺あり、上部のものは裝入用にして底なく、下部のものは底を有す、下部のものには其一面に吹子穴あり、他面には鍰又は鈹を流出せしむる孔各一箇あり、普通は先づ鐵鑛を薪材又は石炭と共に焙燒し其燒鑛を木炭又は石炭と共に熔解せしむるものとす、裝入量は燒鑛千斤乃至千八百斤なり、茲に製出する銑鑛は銑鐵又は銑磚と稱し八寸、五寸、二寸の板狀をなす更に之を木炭にて精製す、其精製鐵は生鐵又は鋼と稱し、圓柱又は册子狀の棒鐵なり。

土法による鐵の產出は湖南省に最も多く其產地は資江流域の安化、新化、寶慶、新寧と湘江流域

の茶陵攸の地方こにして是等の鐵は寶慶及湘潭の兩市場に集まり、其地方に於ける農具、鍋釜、及物釘の製造に用ゐるのみならず長沙及岳州を經て漢口に搬出せらる、千九百十四年海關報告に據るに同年の移出高は長沙より七萬三千五百斤、岳州より八千斤なり、寶慶市場に於ける鐵に三種あり、寶興鐵、老興鐵、煤興鐵こ稱し其製出地によりて名稱を異にするものなり、寶慶に於ける一年の取扱量三千噸を下らずこ云ひ攸縣下の產出量二十萬元(但し山元代價七十斤乃至百斤に付三串五百文にして一元は一串二三百文こす)こす。

福建省には汀州、龍岩、安溪、大田、古田、永安等に木炭爐を設けて鐵を製し且つ之より鍋を製して臺灣に輸出せるここあるも固より產額多からず。

(ろ)洋式による製鐵は湖北省漢陽に於ける漢冶萍公司の漢陽製鐵所あるのみ、同製鐵所の鐵鑛は大冶鐵山に、燃料用骸炭は之を湖南省萍鄉坑に仰ぐものにして近時大冶鐵山に於て銑鑛を製出するの計畫あり、同公司に於て千九百十四年に產出せるは銑鑛百二十萬一千四百七十三擔、軌條二十九萬七百四十三擔、鐵鑛四百九十五萬九百六十擔なりこす。

抑鐵鑛の產地及鐵の製出地は前述せる如く其數少なしこせざるも大冶鐵山及其漢陽製鐵所を除けば其產額甚だ微々たり、然るに中支那及南支那に於ては諸種工業の發達に隨ひて鐵の需用甚だ多く之を外國の輸入に仰ぐものこす而して輸出に於ては漢冶萍公司より日本に向ひ銑鐵九十一萬九千八百擔、鐵鑛四十九萬五千九百二十四擔を出し輸入に於ては南支那に入るは鐵

及鋼三十六萬七千二百五十三擔鋼器八千四百六十三擔中支那に入るものは鐵及鋼七十三萬六千九百九擔鋼器三萬六千五百九十四擔とす其中支那産銑鐵即ち漢陽製鍊所産として上海に入るは十二萬六千七百九十擔廣東に入るは七千五十六擔あるのみ。

(丙) 錻 鑛(安質母尼鑛)

(イ) 錻鑛の分布

安質母尼鑛は支那に於て錻鑛と稱す其分布は中支那及南支那には其西方の高原地帶に多く東方に甚だ少なし主要産地は(一)湖南省資江流域の新化縣錫鑛山寶慶縣龍山新甯縣藍廟市安化縣馬轡市益陽縣板溪(二)沅江流域の辰谿溆浦廳の懷化市鳳凰廳の杜望永順縣(三)四川省酉陽州秀山縣(四)廣西省鬱江上流の泗城奉議隆恩(五)廣西省柳江上流の河池天河並に桂江上流の義甯雲南省蒙自の東方開化(七)廣東省欽州より東京に至る間(八)浙江省嚴州府於潛縣及遂安縣とす就中最も主要なるは湖南省資江流域となす。

(ロ) 錻鑛床の種類

錻鑛を胚胎する母岩に(一)千枚岩系(二)下部古生層(三)下部古生層以後二疊三疊紀以前に至る地層の三種あり千枚岩系のものは綠色千枚岩中に下部古生層中のものは粘板岩又は硅岩中に胚胎し共に石英脈をなす下部古生層以後の地層中のものは主に石灰岩中に又稀に粘板岩中に胚胎し石英脈をなすものと方解石脈をなすものとあり。

湖南省沅江流域の銻鑛は方解石脈をなし之に辰砂を伴ふもの多く其他のものは石英脈をなす、而して是等の銻鑛脈の成因は火成岩の噴出に關係ありやと云ふに概して銻鑛脈の賦存地には火成岩の露出せるもの甚だ少なく花崗岩又は石英斑岩の時に之に隨伴するものなきにあらざるも未だ其關係の密接なるを見ず。

銻鑛の鑛脈には細脈多し、湖南省の資江流域の錫鑛山には細脈相集まり一大鑛床を形成し、廣東省韶州に於ては鑛染に因るものあり、鑛石は輝安鑛なり、錫鑛山の長龍には輝安鑛の外黄安華あり、廣西省奉議の銻鑛は王氏によれば主に方安鑛及其變質物にして輝安鑛を伴ふと云ふ。

（八）銻の需用供給

銻即ち安質母尼は古來支那人の主要視せざりしものにして天工開物、三才圖會等にも之を記載せず、又支那の銻鑛中最首位を占むる新化縣錫鑛山に關しても同治十年發刊の新化縣志に石炭の記事あるも銻鑛に關するものなく恐らく光緒二十年前後の開坑に係ると云ふ、但し陶器の顔料として輝安鑛の用ひられたるものあらんと云ふも極めて少量なりしならん、從つて之を含める銻鑛の採掘せらるゝに至れるも亦比較的近年にして外國に輸出せらるゝに至りて、漸く盛大となれり。

銻鑛の產地は前に擧げたる如く其數甚だ多く且つ廣域に亙れりと雖も銻を產出するは湖南省を主とし其他は多からず。

(い)湖南省には資江流域及沅江流域に銻鑛を產出するも資江流域を最も主要とし其中新化縣錫鑛山を最も重要とし安化縣馬轡市及寶慶縣龍山之に次ぐ。

新化縣錫鑛山(第三十九版乙參照)に於ける銻鑛の採掘は光緒二十年前後にして同二十二年湖南鑛務分局の設立を見るに至れり、同地には鑛務分局の外約八十の公司あり各採掘許可を有すとは雖も是等は前記約三千米に亙れる一大鑛床の中に開坑するものにして陶塘長龍間約千米の間に蜂窩の如くに坑口を開き坑口の數二百を下らずと云ふ、蓋し時に一定の鑛區を有せず任意に露天掘をなし或は他の公司の所有に係る坑口に接近して開坑す、而して坑口より不規則に交叉せる鑛脈に沿ひ掘下するもの多く其深きは三百尺に達し坑內に於ては互に同一採掘場に於て其採掘を爭ふもの多しとは雖も官憲の取締なし、彼等は自營上銻業公會を組織して之に警吏を置き紛爭の調停治安の取締に任ず。

銻鑛山に於ける八十有餘の公司中事業の稍見るべきものを鑛務局、疇富、天生和、長和富、順緣、天九城、三益、華貴の七公司とす。

是等數多の公司より採掘する鑛石は手選鑛をなせる上鑛石の儘資江の水路によりて長沙に搬出せられ製鍊に附せられたり、然るに近年是等の公司は鑛石の儘賣却するの不利にして其附近の石炭を使用し山元に於て製鍊するの利あるを知り茲に各公司合資の下に製鍊所の設立を見るに至れり、製鍊所の始めて設立せられたるは光緒三十三年の公益鍊廠なり、中華民國二年以

後漸次に增加し同三年には現在の五鍊廠となれり、即ち長龍に祥利、公益保善あり、潭蒙沖に集益あり錫鑛山を距る南方三十支那里資江の連水江に鑛務局鍊廠あり。

是等の鍊廠に於て製出するは皆生銻(Crude Antimony)にして純銻(Regulus)は長沙の華昌公司に於て製鍊せらるゝのみ。

生銻の製鍊に用ゆる鍊爐は煉瓦製にして一基の長さ十六尺、高さ五尺、幅は下部には四尺、上部には一尺二寸とし階段狀をなし中央の壁によりて二區に分れ各區は又二室に分る、而して各室には二個の土製坩堝あり、其大さは高さ一尺二寸、口徑七寸五分、中央部の徑一尺二寸なり、二個の中一は鑛石裝入器にして其底に小孔あり、一は受器にして其側面に裝入器を塡入する大孔あり、兩坩堝を組合せて煉爐中に裝置し裝入器の口は煉爐の正面に、受器は其背面にあり、爐內に於ては石炭を燃燒して裝入器を熱し受器より生銻を汲み出すものとす。

中華民國三年錫鑛山に於ける鍊爐は左に示す如く七十六臺三百五十口數あり。

爐	坩堝口數
祥利 十四	五十六
公益 三十一	百二十四
保善 十四	五十六
集益 十八	七十二

概して一爐に付一晝夜一噸の鑛石を處理し〇、五乃至〇、六噸の生銻を製出するものとす、然るに其當時最も多く出せるは集益鍊廠の年額四千噸にして鑛務局は休業し其他は增設中にして未だ竣成せざりしを以て錫鑛山全體の產出額は六七千噸と云ひ或は九千五百噸と稱す。

長沙に鍊廠の建設せられたるは千八百九十七年にして其以前は外國商館に鑛石を販賣するに過ぎざりしも同年大成公司設立せられ十年間の獨占權を以て官民合同の鍊鑛を建設し千九百一年に至りて更に諸湘公司の鍊廠を設立す、其後千九百十二年には純銻を製出する華昌鍊廠と生銻を製出する七鍊廠とに增加せるも新化の錫鑛山に鍊廠設立せらるゝや其壓迫を受け華昌鍊廠、保利鍊廠(二十基)集成鍊廠(十基)殘存するのみ、此外鍊廠を有するは寶慶縣龍山の建珍鍊廠(十六基)承洞鍊廠(十二基)なり、長沙の兩鍊廠に於ては安化縣馬轡市附近のもの(千五百噸)漵浦附近のもの(五百噸)其他銅仁縣、新寧、武岡州のもの(五百噸)を製出し龍山に於ては約二千五百噸を製出す、而して其總額は概算一萬四千噸なりとす。

純銻の製鍊は千九百八年長沙に設立せられたる華昌公司鍊廠の獨占にして同鍊廠はヘレンホーフェル式バッグハウス法の製鍊爐を設置し生銻を酸化したる後曹達にて還元し純銻を得るものとし一ケ月の製出能力は百五十噸より二百五十噸となり現時は四百噸なり。

湖南省より產出する銻及銻鑛は殆ど全部海外に輸出せられ自國內に消費するもの多からず、

其輸出額は海關報告に據れば左の如し(千九百十四年調)

	純錻	生錻	錻砂	其他
長沙	四五、九四八擔	二四七、五八五	一五六、九七九	四二、八九〇
岳州	—	七、五六〇	—	一

(ろ)廣西省の錻は梧州、南甯の二箇所より輸出せらる、梧州より出づるものゝ原鑛は柳江の上流天河、河池並に桂江の上流義甯方面に於て採掘せらるゝ云ひ是等の鑛石は梧州の寶泰公司鍊廠に於て製鍊せらる、蓋し廣西省に於て千九百六年始めて官務局に於て梧州に鍊廠を建設し千九百九年一時中止せるも改めて同公司の設立せらるゝに至れるなり。

南甯より出づる錻は南甯に於て製鍊せらるゝや否やを明にせざるも其鑛石は泗城、奉議、隆恩、賓地方に於て採掘せらるゝものにして生錻として南甯より輸出せらる但し其產出は多からず。

(は)雲南省には光緒十七年頃華昌公司獨占權を以て錻の製鍊に從事し宣統二年寶華公司之を讓受くるに至れり、現時蒙自より輸出せらるゝ錻は開化府の蔓皷、茅山、都比、格朶塔連塘等に於て採掘せらる、蔓皷、茅山、都比に於て採掘せられたるものは蒙自を距る八哩の停車場所在地芷村に於て其他は廣西州に於て共に純錻に製鍊せらる、其品位九割七分內外なりと云ふ、爐は四基なりしも現今二基增設せりと云ふ、錻は芷村又廣西州に於て販賣せらるゝも大部分は蒙自を經て輸出せらるゝものゝごし千九百十三年に於ける輸出額は生錻七千百八十一擔なり。

(に)廣東省に於ける錻鑞の發見は千八百九十六年とす、同年より千八百九十年に至る迄採掘せり、千九百年に至りて採掘を禁止せられたるも翌年より官行によりて採掘を開始せり、千九百十一年華昌公司製錬の獨占を得事業を開始せるも不成功に終り千九百十二年其獨占權を解くに至れり。

近時四川省天全縣蒙地に錻鑞を採掘するものあり、之を製錬する爲め重慶に錬廠を設け一日一噸の製錻を出すと云ふ。

之を要するに支那に於ける錻及錻鑞の產出地は高原地帶の湖南、廣西、雲南の三省を主とし其中湖南省最も多量の產出あり、而して是等の地方より產出するものは約世界の錻產出額の四分の三を占むるものにして參考の爲め諸外國の產出額を併せ揭載せん。(單位は佛噸)

	一九一一年	一九一二年	一九一三年	一九一四年
墺太利	—	一三	—	—
支那	六、九八六	一三、五三一	一三、〇三二	一九、六四五
佛蘭西	四、七七五	五、四〇六	—	—
匈牙利	八九二	八五九	一、〇三八	—
伊太利	—	—	七六	一三八
日本	九七	八〇	—	—

右に掲ぐるが如く千九百十三年以後産出額の著しく增加せるは歐洲戰亂の持續によりて安質母尼の需用益々增加せるに因るものにして其價額の如きも純錻一噸六十兩を普通とせるものも千九百十四年九月には七八十兩となり、十月には百二三十兩、十一月には二百四五十兩の高値を呼び、千九百十五年に入りては三百十九兩を呼ぶに至れり、純錻は千九百十二年には九十七兩なりしものも千九百十三年には二百二十兩、千九百十四年には二百四十兩、千九百十五年には七百十兩となり支那の安質母尼鑛業は著しき活躍を示せり。

(丁) 錫鑛

(イ) 錫鑛の分布

錫は支那の鑛產物中錻に次で主要なり、其產地は南支那に最も多くして中支那には甚だ稀なり、即ち(一)雲南省個舊地方(二)廣西省賀及湖南省江華地方(三)湖南省臨武地方(四)廣東省惠州及香港地方なり、就中雲南省個舊地方に最も多產し且賀及江華地方之に次ぎ其他には多からず、往古は廣西省丹州及河池州に多產せりと云ふも現今產出するや否やを知らず。

(ロ) 錫鑛床の種類

錫鑛は石灰岩と花崗岩と接觸する地方に現はる、石灰岩地に賦存する錫鑛中其成因によりて二種の別あり、一は石灰岩を貫ける花崗岩の接觸鑛床にして石灰岩中に脈狀をなし一は石灰岩を貫ける花崗岩に鑛脈又鑛染狀をなせる鑛床にして其花崗岩の霉爛によりて母岩より分離し

花崗岩地及石灰岩地に砂鑛床をなすものこす、而して砂鑛床にも亦砂礫及粘土こ共に石灰岩の裂罅又は石灰洞を充塡するもの、石灰岩の地表を被覆するもの並に石灰岩地及花崗岩地の河床に堆積するもの、三種あり、石灰岩の裂罅又は石灰洞を充塡する砂錫を最も重要なりこす。

（八）錫の需用供給

支那に於て錫は古來種々の合金こして使用せらる、更に錫の需用の最も廣きに亙れるは紙箔、錫箔、錫器こす、紙箔は禮拜紙及紙銀に用ひらる、支那には神前に於て禮拜するに際し錫箔を塗附せる紙を燒く習慣あり、大さは四五寸平方又は長方形にして表面に金色又は銀色の箔を塗す、銀色は錫箔にして金色は黃銅箔なりこす、此外節分に錫箔紙にて作れる馬蹄銀を裝るの風習あり、而して禮拜紙及紙銀の需用は支那全般に亙るのみならず支那人の植民せる諸外國に輸出せらるゝものこす、其民國三年の輸出額は十二萬六百二十五擔其價額二百十二萬八千四百三十三兩なり、其產出地は南支那に多くして汕頭を最高こし廈門、九龍、福州、寧波之に次ぐ、而して其輸出先は中支那及北支那を主こし天津、芝罘、漢口に多し、外國領地には香港、澳門の外新嘉坡、暹羅、瓜哇、安南を主こす。

錫箔は支那重要輸出品たる茶包の裝用こなす、民國三年の其移輸出額三千二百五十三擔、二十四萬千百八兩にして廈門、汕頭地方に最も多產し、瓊州、天津、上海及香港方面に出せり。

錫器は婚禮の際に用ふる燭臺、酒壺即ち酒瓶こして缺くべからざるのみならず日用の酒壺、茶

壺にも之を使用す、湖南省永州道州、江華は錫器原産地として著名なり、其産額は明かならず。

現今錫の産出の多きは雲南省個舊にして湖南廣西省界地方之に次ぐ。

(い)雲南省個舊の錫は湖南廣西省界地方の如く大古より知られざりしが如く其發見は二百四五十年前にして商品として廣東方面に輸出せらるゝに至りしは百二三十年前なり、而して回教徒及周雲祥の亂には甚だしき打撃を蒙むれりと云ふ、採掘地は個舊を中心とし延長二三十哩、幅員十哩に亙る、雲南官商錫務有限公司を除くの外は極めて舊式の採掘法によるものにして土民自己の所有地に於て任意に採掘するものに係り未だ鑛區の制定せらるゝものあらざるなり、土民の坑主と稱するものは其數千人以上ありて之を辨廠と稱し其大部分は自己の所有地に採掘するものとす。

雲南官商錫務有限公司は錫務公司の後を受け宣統元年に設立せられしものにして其際增資して百五十萬弗の資本を擁す、其採掘地は馬啦喀及藍蛇洞にして探鑛中に屬す、二十支那里の鐵索を架設して鑛石を紅河畔に搬出し茲に選鑛機及熔鑛爐六基を設置し新式方法によりて一日約二十七噸の錫を製出せんとする大規模の計畫をなさんとす。

採掘に二種あり、石灰岩の上を被へる表土を露天掘にして採掘するを打草皮と稱し石灰岩の裂罅を充塡せる砂錫を坑內掘にて採掘するを打洞と稱す、而して打洞は採掘の主要部を占むと云ふ。

坑道は裂罅に從ひ其屈曲する儘に掘進し其延長は千尺より時に七千尺に達するものありと云ふ。

採掘夫は砂丁と稱し臨安方面より來るもの多く現時十五萬人ありと稱す、砂丁は舊二三月頃より舊十月、十一月頃に至る迄採掘又は洗鑛をなし冬季は貯水涸渇するを以て操業する能はず休業し歸鄉すと云ふ。

砂錫の洗鑛及製鍊は湖南省及廣西省のものと大差なきも個舊に於ては木炭の代りに石炭を用ひ之を雲南府地方より搬入すと云ふ。

個舊地方に於て採掘及洗鑛せられたる砂錫は爐戶と稱する熔鑛爐所有者の買收する所となる而して爐戶の數は約三百戶あり、砂錫一斤五十仙內外の價格に買入れ製鍊に付す、其製錫は雲廣幫と稱する雲南及廣東商人の手に賣渡さる、雲廣幫は以前蒙自にありて個舊の錫を買集めたるも十年前より個舊に於て營業を開始せり、而して現時雲廣幫の數三十餘ありと云ふ。

個舊に於ける錫の產出額は民國三年には十一萬二千二百五十三擔價額七百六十四萬八千十兩とし壁蠻寨停車場及河內、海防を經て廣東及香港に輸出せらるゝ者とす、而して其運搬費は個舊壁蠻寨間駄馬により三十二仙、壁蠻寨海防間汽車により二弗三十三仙、海防香港間汽船により積込賃共三十五仙此外通關七仙を合算し七弗七仙となる。

(ろ)湖南、廣西省界地方の錫鑛は江華縣城より河路口を經湖南省白沙及八步街に至る間約二百

支那里に亙り江華、富川、賀の三縣に跨る、此地方に於ける錫鑛の採掘及製錬は往古より連綿として土民の手によりて小規模に行はれたるものなり、獨り江華縣城附近のものは十年前の發見に係ると云ふ、而して廣西省に於ては光緒三十四年始めて富賀官鑛局を設置し土民の採掘せる砂錫を買收し一手に製錬をなし土民の製錬を許さず、湖南省に於ては民國元年鑛務支局を設置して採掘に從事すると共に土民の採取せる砂錫をも併せ製錬するも尙民行鑛山の稼行製錬を許せり。

湖南廣西省界に於ける採掘及製錬は兩省共に同樣の方法によるものとす、採掘に二種あり、岩窿及明窿と稱す、岩窿は坑內掘にして石灰洞に沿ひ坑道を開き其中に充塡せる砂錫を採掘するものなり、明窿は露天掘にして山上の窪地、山麓の臺地及河床の堆積層を地表より竪坑又は掘割にして採掘するものとす(第三十九版內參照)

岩窿又は明窿にて採掘せらるゝ砂錫中砂礫と共に產するものは直ちに附近の水邊に運搬して淘汰す、粘土又は赭土と共に產するものは天日の下に乾燥せしめ然る後に水邊に運搬して淘汰す、淘汰法は採掘所附近の溪流又は貯水池に於ては長約六尺、幅四尺ある樋狀の木製洗槽に原鑛を入れ之に絕へず流水を通じ鍬にて攪拌淘汰し錫石を採集し之を粗鑛とす、殊に貯水池に於ては水の節約上水車子と稱する水揚樋を以て水を揚げ淘汰に用ひたるものを再び貯水池に送り用水を循環せしむるの設備を有す、粗鑛は民家又は製錬所に於て再三淘汰せらるゝものとす、

第三十九版

鑛山

（甲）福建省龍岩縣三坑の鐵爐

（乙）湖南省新化縣錫鑛山の安質母尼鑛採掘地

（丙）湖南省江華縣江華砂錫採取地

即ち其法に二あり、一は前述の方法を繰返すに過ぎざるも水槽、砂槽、單槽の三部より成り砂槽には粗鑛を入れ水槽より灌げる流水を以て淘汰し土砂は單槽に送られ砂錫は砂槽に殘留するものとす、一は前法によれる半精鑛を竹笊中にて我國の笊上法を用ひて選鑛し之を精鑛となす。

原鑛の含錫品位は百分中四乃至七と稱し上岩坪には一、井頭山には六、四あり、精鑛の含錫品位は百分中六十乃至七十と稱するも三十乃至六十のもの多きが如く產地又は淘汰の巧拙により變化多し、一般に錫石の粒の大なるものには精鑛の品位優良なるも粒の微小なるものには劣等にして磁鐵鑛、石英の外褐鐵鑛、長石、雲母を含めり。

製鍊は土法の木炭爐により爐は粘土製にして鐵枠を有し西洋樽の形狀をなし上下の二部より成る其高約五尺、中央部の長徑三尺、上下に於ける短徑二尺五寸とす、一晝夜の裝入鑛石約千四百斤にして製錫の實收は百斤に對し六十八斤內外なりと云ひ型錫の大さは一尺四寸、六寸二分、一寸五分にして重量四十斤を普通とし其含錫品位百分中九十九、五にして品質優良なりとす。

錫の產出額は淘汰用の水の供給、寒暑によりて消長あり、但し此地方に於ては雲南省個舊附近の如く冬季に於て水の乾涸することなく甚だしからず、却て夏季に於て涸るゝことあり、且つ酷暑の候を避くるもの多きを以て出鑛は一月四月間及九月十一月間に多しと云ふ、錫の年產額に就きては元より精確の數字を知ることを能はずと雖も湖南省內に百萬斤、廣西省に於ては六十萬斤と稱す、而して一地方に就きては河路口附近に於て最も多產するものとす。

湖南廣西兩省に產出する錫の中廣西省のものは全部八步街、梧州を經て香港に輸出し、湖南省のものは其一部を長沙、漢口方面に一部を廣西省產と同樣に香港に移出す。

香港方面に產する錫は西灣總局又は八步街に集まる、八步街には廣東及香港の錫商あり錫の買入に從事す、而して運搬は河路口八步街間九十支那里は坂路にして百斤に付一元二十仙、西灣梧州間は五百十支那里にして賀江の民船により百斤に付二元十仙、梧州香港間は西江の汽船により百斤に付二十仙とす。

(は其他の地方に於ける錫產額は明かならざれども湖南省香花嶺附近には多少の產額あり、玆には錫石は毒砂中に含まるゝを以て之を焙燒したる後河路口地方と同樣の方法によりて製錬せらる、香花嶺には鎭湘公司、百鍊公司の二鍊廠公司あり、鎭湘公司は數百擔、百鍊公司は百擔を出せり、南甯、北海、福州より多少の錫の輸出せらるゝあれども何處の鑛山に產出するやを知らず。

抑支那產錫の產額は雲南、湖南廣西三省に出づるものを主とし是等の產地の產額は殆ど其大部分を占むるものとす、而して其產額の精確なる數字を知るは甚だ困難なり。

海關報告の報ずる所に據れば民國三年の錫移出額は十二萬二千百二擔價額八百七萬七千六百九兩なり、其中雲南產として蒙自より十一萬二千二百五十三擔を出し湖南省及廣西省產中梧州及廣東より出づるものは五千六百六十五擔にして長沙及漢口より出づるものは四千七十二擔とす、此外福州、拱北、南甯、北海より少量の錫を出す、其輸出先は香港最も多くして十一萬七千七

百八十七擔に達す、蓋し外國總輸出額は十一萬九千二百二十五擔にして香港其大部分を占め、佛蘭西(千百九十擔)安南(百五十二擔)日本(六十二擔)之に次ぐ。

香港に集まる錫は前述雲南錫、廣西錫(湖南省を含む)の外新嘉坡錫あり、其年額十萬乃至十二三萬擔にして雲南錫其大部分を占む、新嘉坡錫は時に二三萬擔の輸入あるも市價によりて甚だしき變化あり、香港には錫取扱商約十五軒あり、其六軒は製錬所を有し各地の錫を調合して百分中九十九乃至五十の品位の錫を製出し以て輸出先又は需用者の求に應じて適當の品位のものを輸出するものとす、其輸出先は日本、倫敦、桑港、紐育とす。

(戊) 其他の金屬鑛物

(一) 金鑛

金鑛は北支那に產出する地少なからざるも中支那及南支那には甚だ少なし、其產地としては四川省、雲南省、湖北省、湖南省の四省に過ぎず、四川省及雲南省にありては揚子江本流の源流地より重慶附近に亙る間に、支流地に於ては甯遠、打箭爐、茂州附近に產出し湖南省にありては沅江の靖州、沅州、辰州附近並に資江の益陽、湘江の平江、湖北省にありては沙市附近とす、是等の地方に於ける金鑛の大部分は砂金にして元來如何なる狀態に胚胎せるや明かならざるもの多く金銀鑛脈は石英脈にして片麻岩及花崗岩中、千枚岩系及下部古生層中及石英斑岩中に胚胎す。

四川省甯遠の北西方約五十哩麻哈山に金山あり、片麻岩又は花崗岩中の鑛脈より採取したり

ㇾ云ふ、打箭爐の萬石坪に於て採取する砂金は片麻岩又は花崗岩中に胚胎せるものなるべく五百名の洗金夫あり一年約五十萬元の收得ありㇾ云ふ。

四川雲南二省に亙れる金沙江は古來著名の砂金地ㇾ云はれ又巴蜀盆地の叙州より重慶に亙る間には所々に砂金の採取せらるゝ地ありㇾ云ひ且つ四川盆地の北西方綿地方に採取せらるㇾ云はる、其砂金の那邊より來るものなるや明かならずㇾ雖も揚子江の本流に沿へる砂金は四川、西藏に亙れる片麻岩又は花崗岩地より流下するものㇾ云はれ綿地方のもの亦大巴山脈中の片麻岩地より來るものㇾ稱す、此外湖北省沙市の南方に位する揚子江中の洲に砂金を採取するものあり、一人一日二三百文の收益あるに過ぎずㇾ云ふ、該砂金は或は宜昌地方の片麻岩地より流下するにあらざるか。

湖南省平江金鑛は湖南省官營に係り茲には金塘、芙蓉窩其他二三箇所に於て古生層の粘板岩中に含金石英胚胎し層狀鑛脈をなすㇾ云ふ、民國元年外人を聘し且つ新式淘汰器を購入せるも事業を中止せり、但し此地方の河床に於ける砂金は一箇月四五百ォンスの採取ありㇾ云ふ。

湖南省益陽附近資江の河床に採取せらるゝ砂金は千枚岩系中に胚胎する金鑛に仰ぎ、辰州府沅陵縣馬娘洞にも粘板岩中の層狀含金石英脈を稼行するものあり、水車によりて打搗し淘汰板の上に於て洗鑛す。

浙江省奉化には石英斑岩中に含金銀石英脈の薄脈あり、銀山岡の金鑛ㇾ稱す、嘗て試掘せられ

たるも未だ稼行せられず、石英斑岩の分布は浙江及福建二省に廣域を領すれば將來或は其中に此種の金銀鑛の發見なしとも云ふべからず。

湖南省沅江の流域には辰州、沅州、靖州、會同、綏甯等の地に砂金を產す、而して會同縣漢濱には湖南省鑛務局支局を設け採金す、是等の地方は石灰岩地にして砂金其中に胚胎せる鑛床に其源を仰ぐならんも鑛床は果して如何なる狀態をなして胚胎せるか明かならず。

以上の產地に於ける產金年額を知る能はざれども平江には官鑛に於て十二貫、民鑛に於て八貫、會同に於ては官鑛十七貫、民鑛十二貫、沅陵縣に於ては民鑛四五十貫と稱せらる。

(二) 銀鉛亞鉛鑛

方鉛鑛と閃亞鉛鑛とは共に同一の鑛床を構成し且つ其中に銀を含むを以て支那に於ては古來此種の鑛床より銀及鉛を採取せるのみならず閃亞鉛鑛より變化せる異極鑛は又亞鉛の製鍊に使用せられたり、故に銀鉛亞鉛鑛の產地の知られたるもの甚だ多く且つ廣域に亙りて散在す、其主なる產地は湖南省及雲南省にして福建省、浙江省、湖北省等之に次ぐと雖も現今稼行するもの稀なり。

是等の地方に於ける鉛亞鉛鑛は片麻岩系、千板岩系、下部古生層、上部古生層、中生層、花崗岩、石英斑岩に胚胎す、其中花崗岩の噴出に隨伴し生成せる所謂接觸鑛床を主とし、此外石英斑岩及石灰岩中に鑛脈をなすものあるも主要ならず。

銀鉛亞鉛鑛の採取せらるゝ地は現今甚だ少なく湖南省水口山、雲南省東川を主要産出地とす。

水口山は衡州府常寧縣に屬し湘江畔の松柏市を距る南方十二支那里にあり、而して松柏市は衡州の南方七十支那里に位し松柏市水口山間に輕便軌道布設せらる、本山は光緒二十二年以來湖南省鑛務局の官營となる、平江金山の打揚機其他新式器械を茲に移し以て大規模の稼行をなすに至れり、鑛石は閃亞鉛鑛を主とし此外方鉛鑛及黃鐵鑛を含むを以て松柏市の製鍊所に於て選鑛し其大部分を外國に輸出し其一部を製鍊す、民國三年に於て長沙を經て輸出せられたるものは鉛鑛六六、二五一擔、亞鉛鑛二一一、六三〇擔にして同年には鉛及亞鉛の輸出なしと雖も其前年民國二年には亞鉛二百擔を輸出せり。

雲南東川府下の鉛亞鉛鑛は土法により製鍊せらるゝものにして其產地少なからず、其產出額は明かならざれども此地方より重慶又は蒙自を經由し輸出せらるゝもの左の如し(民國三年調)

	鉛	亞鉛
重慶	一、三七一擔	—
蒙自	三、八一九擔	五、一一七擔

(三)銅鑛

銅鑛の主なる產地は雲南省東部、四川省北西部、湖北省の北西部及南東部、浙江省北東部にして四川雲南二省を主要とす。

銅鑛を胚胎するは片麻岩、下部古生層、上部古生層、中生層並に是等を貫ける花崗岩、石英斑岩、輝緑岩にして銅鑛は其中に接觸鑛床又は鑛脈を形成す。

銅鑛中稼行せらるゝは四川省、雲南省及湖北省なりと雖も産額固より多からず、其中四川及雲南二省は古來支那に於ける産銅地として著名なり、四川省彭縣の白水河には馬松嶺、花梯子、飛水岩の三銅山あり、土法によりて製錬し其年産額二十萬斤内外とす、其銅は主に四川省一圓に消費せらるゝが如し。

雲南省の銅の年産額は約一萬九千擔と稱し其産出地は東川府内に最も多くタンダン、勒勸、大水、鐵廠、ムールの五箇所を主要とす就中タンダンを以て最も主要の銅産地とす、是等は東川を距る二百支那里乃至二百五十支那里の距離にあり、是等の製銅は大部分雲南及其隣省に於て消費せられ其一部は宜昌及蒙自を經由し輸出せらる、民國三年には兩地の輸出少なく僅に宜昌より三十七擔を出せるのみなりと雖も宜昌よりは民國元年に約六千五百擔を蒙自よりは民國元年及二年に約三百擔を出せり。

湖北省の産銅地は南漳、竹山地方にして其産額は明かならざれども其中漢口より輸出せらるるもの年額三四千擔とす。

要するに支那に於て銅の産地は必ずしも少なからざるも其産出額は極めて微量なり、雲南及四川二省産は古來支那に於ける貨幣の鑄造に使用せられたるものとす、近年支那に於ける銅の

需用は成都、武昌、長沙、南京、安慶、廣東の銅元局に於て銅貨の鑄造に使用するもの多く重慶は自省及雲南産を使用し輸入を仰がず、武昌に於ては漢口に入る所の湖北産を以て足れりとせず、其他の銅元局に於ては大部分を輸入に仰げり、此外近年電氣事業の發達に從ひ銅線の需用漸次に增加せり、民國三年に於ける中支那及南支那の銅輸入額は二十四萬一千四百十擔にして其大部分を我邦に仰げるものとす。

(四)　水銀鑛

水銀鑛は湖南省辰州府、鳳凰廳より貴州省銅仁縣に亙れる沅江流域に產す、其產狀は既に安質母尼鑛の章に述べたる如く上部古生層の石灰岩中に胚胎せる鑛脈なり、鑛脈は概して方解石脈の細脈にして其中に辰砂及少量の石英を含み同鑛脈は其上部に或は安質母尼鑛を隨伴し或は安質母尼鑛のみより成る、辰砂とは硫化水銀にして辰州より產する鑛石即ち砂と云ふ意なり、辰砂は又硃砂と稱し朱を製する鑛石なり。

鳳凰廳猴子坪に湖南鑛務局の硃砂廠あり、其他土民の硃砂を採取し又製錬するもの少なからず、是等の地方に採取せらるゝ硃砂の美品は裝飾用とせられ品質優良のものは朱の製造に用ゐらる、品質劣等のものを蒸餾して水銀を製出す、硃砂は專ら支那に於て使用せらる、其產出額は明かならざれども沙市より二三十擔、岳州より四五百擔を出し之を支那諸地方に出す、水銀は專ら外國に輸出す、民國三年に於ける其輸出額は重慶百七擔、長沙五十一擔、岳州二百二十八擔、漢口八

百四十六擔、上海十八擔、寧波三十六擔にして、貴州省産は重慶、沙市、岳州を經由し、湖南省産は岳州、長沙、漢口を經由して海外に輸出せらる、開港場より出づる總額は千二百八十七擔にして、其中支那各地に使用せらるゝもの二百六十三擔、外國輸出九百八十六擔にして、日本及香港を主要輸出地とす。

(已) 其他の非金屬鑛物

(一) 明礬

明礬は支那に於て白礬と稱す、其産地は浙江省温州府平陽縣赤溪を主要とす、赤溪には明礬石の細脈甚だ多く網狀を成して胚胎すと云ふ、母岩は同地方に廣く分布する石英斑岩ならん、同地に採掘せられたる明礬石は焙燒したる後破碎して水に浸し、其溶液を煮沸して明礬を結晶せしむ、其明礬製造所二十四あり、一日の製額各二十擔乃至四十擔にして、年産總額二十萬擔ならんと云ふ、温州及寧波より輸出せらるゝ明礬は赤溪産のものなり。

支那に於ける明礬の需用は主として濁水の清澄用なり、故に其需用の區域は支那全體に亙る、其産出額を知るを得ざるも各開港場より出づるもの民國三年には九萬千五百九十一擔、價額十七萬二千七百七兩にして、殆ど全部は南支那にあり、而して温州より五萬六千八百六十九擔、寧波より二萬百擔を出す、是れ平陽縣赤溪産なり、巢湖より五千八百九十三擔、九龍より七千三百九十五擔を出すも何れに産するものなるや明かならず、其搬出先の主なる地は天津を首位とし、廣東、

上海、漢口之に次ぎ外國領地に於ては香港を首位とす。

（二）砒鑛

砒鑛の産地は湖南省桂陽州、彬州を主要とす、砒鑛は花崗岩と接觸せる石灰岩中の接觸鑛床を形成し黄鐵鑛、黄銅鑛、錫石又は方鉛鑛、閃亞鉛鑛と共に現はる、鑛石は毒砂即ち砒硫鐵鑛なり、之を焙燒して砒素を製す、支那に於ては本製品を信石又は砒石と稱す、其製品は毒砂を土法の密閉せる石爐中に於て焙燒して信灰を製し、信灰を更に鐵鍋を以て被へる爐中にて精製し、之を煉信と稱す、煉信には白色を帶ぶるものと黄色を帶ぶるものとあり、信石を産出するは桂陽州香花嶺に鎭湘公司、百練公司あり、白沙附近に黄伯窪、信鑛處、鴨綠灘鍊信廠あり、此地方に製出せる信石は耕地の肥料として使用せらるゝもの最も多く又鼠取用として各都市、村落に於て販賣せらる、支那各開港場より輸出する信石は民國三年に於て一萬五千七百三十六擔價額十六萬六千十八兩）にして殆ど全部を中支那及南支那より出す、其中長沙より二千八百五十一擔、漢口より一萬一千三百八十五擔、廣東より千三百二擔なり、是等の信石は支那及香港に於て全部消費せらる。

（三）岩鹽、石膏及石油

岩鹽、鹽水、石膏、石油、瓦斯は相伴ひて産出し其中鹽水最も多きを以て之を含鹽層とせん、含鹽層の賦存地は四川省及雲南省に最も多く湖北省にも之あり。

四川省の産鹽地は二區に分る、一は巴蜀盆地にして一は鴉龍江の鹽源地方とす。

巴蜀盆地の産鹽地は其盆地の全域に亙るとは雖も其中最も主要なるは貢井及自流井より射洪及鹽亭に亙る一帶にして此外嘉定の井研及五通橋より成都の東方簡陽及中江に至る一帶、石油溝の一帶並に雲陽及夔州の一帶とす。

雲南省産の鹽地は四川省鹽源地方に亙りて一大産鹽地を形成す、其主要産地は南北に亙れる三帶を成す、一は雲南府に近き安寧より北方元謀及黑鹽井に、南は元江及鹽安に亙る、二は楚雄より北は白鹽井並に鹽源方面に、南は景東、鎭沅、普洱に至り三は麗江及雲龍井附近とす。

湖北省の産鹽地は應城縣の西鄉及北鄉とす。

産鹽地の地層は雲南に於てはレーチック夾炭層の下部に位する二疊三疊系にして四川省に於てはレーチック夾炭層よりも上部に位する赭色砂岩層なり、湖北省に於ては黃土に被はるゝを以て明かならざれども四川省のものと同樣ならん、而して含鹽層は二疊三疊系にも又赭色砂岩層にも共に砂岩及頁岩より成り薄き石灰岩を夾め、砂岩及頁岩には赭色のもの多きも亦灰白色、黃色、綠色等のものあり、但し湖北省には綠色頁岩甚だ厚く石灰岩を見ず、含鹽層中の鹽は岩鹽又は鹽水となりて存す、岩鹽は概して背斜層の軸部に厚く之を距るに從ひ薄しと云ひ、四川省には貢井、雲南省には普洱、石膏井の磨黑鑛山に産す、鹽水は含鹽層の背斜層を成せる所に多く向斜層を形成する所には甚だ少なし、而して四川省の自流井、石油溝に於ては背斜層の軸部に於て鹽水に石油及瓦斯を隨伴することありと云ふ、鹽水は元來岩鹽の地下水の爲めに溶解したるも

のに外ならざるべし、貢水に於ては鹽井の岩鹽層に會するや地表より水を注入し然る後之を汲上ぐるものあり、以て鹽水の由來する所を察すべし。

石膏は四川省自流井に多少あり又雲南省麗江、雲龍井、普洱、石膏井に產するも最も多產するを湖北省應城縣とす。

鹽井の深さは所によりて異なり自流井附近に於ては二三千尺其他に於ては二三百尺より九百尺に至る、鹽井より出づる鹽水には黑水と白水とあり、含鹽量多きは黑水にして少なきは白水なり、白水は白色にあらず黃色にして色淡きを以て白水と稱す。

鹽井の鹽水は四川省に於ては機械掘により、雲南及湖北に於ては主に手掘によりて掘鑿す、井底の鹽水はポンプを以て汲上げ鐵鍋中にて煮沸し以て食鹽を製す、燃料は含鹽層中又は產鹽地附近に產する石炭を用ひ自流井附近には鹽井より出づる瓦斯を使用するもの少なからず。

鹽井より採掘する食鹽の年產額は四川盆地に於て五六百萬擔、湖北省に於て七八萬擔と稱す、而して石膏は湖北省應城縣に於て產出するもの四五十萬擔とす。

四川省の鹽は自省に消費して尙餘りあり之を隣省に輸出す、宜昌を經て漢口方面に出づるもの年額八十七萬一千六百九擔とす。

石膏の需用は支那に於ては豆腐製造の際ニガリ代用とするを以て支那各省各地方到處の村落に於て石膏即ち石羔を販賣せざる地なし、其石膏の殆ど全部は之を湖北省應城縣に仰ぎ民國

三年の全移輸出額四十七萬四千百八擔の中應城縣產四十七萬擔(二十五萬千二百二十兩)を占む、而して支那內地に消費せらるゝ額は三十五萬五千八百十一擔なり、此外外國に輸出するものは九萬三千五十擔にして輸出先は香港(六萬七千六百十七擔)日本(二萬四千六十七擔)を主要としセメント製造の際に使用せらるゝものとす。

石油は四川省の產鹽地に產するも未だ多量に採油せられず、將來の探求を期待するのみ、近時陝西省に於ける米國スタンダード會社の採油權獲得と共に四川省石油に就きては益々世の注目する所となれり。

中支那及南支那に於ては石油の產出額殆ど皆無なるに係らず支那人の石油を燈用とするもの都會地より漸次村落に普及す、但し都會地に於ては近年電燈の使用增加し燈油を壓するものありと雖も村落に於ける燈油の使用量は著しき增加を示せり、スタンダート會社即ち美孚洋行は米國油を、亞細亞石油會社は緬甸、スマトラ油を盛に輸入す、露油は蕪湖に輸入せらるゝのみ、日本油は民國三年に至りて始めて臺灣を經て三都澳に輸入せらるゝに至れり、而して支那に於ける其輸入總額は二億二千五百四十六萬四千二百一ガロンにして其中中支那及南支那に入るもの一億三千七百五十五萬九千五百五十四ガロンにして米油七割二分五厘、スマトラ油一割八分、ボルネオ油九分二厘とす、之を以て觀るに支那に於ける石油需用の著大にして而も自國內に產出するの要求如何に大なるかを知らん。

中支那及南支那 終

大正六年二月二十二日印刷
大正六年二月二十四日發行

中支那及南支那
定價金六圓

著作者兼發行者
東京市京橋區西紺屋町十九番地
東京地學協會

右代表者
東京地學協會理事
福地信世

印刷人
東京市日本橋區兜町二番地
清水松之助

印刷所
東京市日本橋區兜町二番地
東京印刷株式會社

支那調査報告書及地圖　定價金八十圓

中支那及南支那地質總圖（縮尺七百五十萬分一銅版大サ竪一尺横一尺三寸紙巾）一枚

中支那及南支那旅行線路地形圖及地質圖（縮尺四十萬分一銅版大サ竪一尺八寸横二尺六寸紙巾）十七枚

計三十四枚　大正六年五月印刷ノ豫定

四川省旅行線路地形圖及地質圖（縮尺二十萬分ノ一寫眞版大サ竪一尺八寸横二尺六寸紙巾）十八枚

計十八枚　大正六年二月印刷ノ豫定

報告書第一（浙江省　福建省　安徽省　江西省　湖北省　湖南省　廣東省　廣西省）ニ於ケル旅行

報告書第二（浙江省　福建省　江西省　湖南省　陝西省　四川省　廣東省）ニ於ケル旅行

報告書第三　化石　大正六年三月及四月印刷ノ豫定

詳細ハ大正六年二月發行地學雜誌ニ在リ

東京地學協會

正誤表

頁數	行數	字數	誤	正
五	一三及一四		江南東道及江南西道は一字下げる	江南東道及江南西道は一字下げる
六	一一及二		山南東道及山南西道は一字下げる	山南東道及山南西道は一字下げる（最近に省長を置く）第一圖巴蜀盆地保甯附近の山岳地は平地の誤
一二	一	六	最近に省長を置く	
三五	五	二二	欠字	以
三六	六	二二	欠字	岩
同	一〇	五	同	祁
四八	八	一二	欠字	ェ
五一	一〇	一一	イ	瞿唐
五四	一一	一	欠字	第九版乙
五八	二	三	第九版甲	第九版甲
六九	三	六	第九版乙	第十一版乙
七〇	六	四〇	第十一版甲	第十一版甲
九一	一二	一三	第三	其三
一〇三	一五	第三欄	四三五	四三、五
一〇四	一	同	二九五	二九、五
一三〇	一三	一九		廣東の二字削る
一五三	一四	一	陜	抑
一五三	一六	一	欠字	陜
一五八	五	九	第百五十八頁	第百六十三頁
同	五	一八	第七版	第二十五版
一九六	一二	二〇	欠字	羅馬字ノ〇
二一〇	一三	一	欠字	流
二二三	九	一五	江滬	江寗
二五六	一四	九	第三十一版	第三十二版
二七二	一三	六	欠字	業
二七四	二	三三	欠字	回
二八〇	一	一	欠字	（イ）
同	八	二	（イ）	（ロ）
三一五	四	三一	第三十四版	第三十三版
三二一	二		第二十四版	第三十四版
三九七	欄外		第八章鑛業	第七章產業
三九九	同		同	第三十七版
四一三	一	三二	第十五版	